

---

## 2次戦鋼の乙女その後の軌跡

鍾馗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

2次戦鋼の乙女その後の軌跡

### 【Nコード】

N27400

### 【作者名】

鍾馗

### 【あらすじ】

この話は、太平洋戦線でアメリカが日本に停戦を勧告し、日本とアメリカが停戦。

その後鋼の乙女を筆頭に和平交渉を行い、欧州戦線の各国が停戦勧告を承諾。事実上戦争が終結した後の話です。

実際の史実から大きく掛け離れる+自己解釈なので、注意してください。

序章第1話 導入（前書き）

ドイツ第三帝国に協力したとある狂った科学者のその後。

## 序章第1話 導入

時は19xx年。

第二次世界大戦が終了してから半月後。

生き残った鋼の乙女は荒廃した祖国の再建に従事していた。

そんな中、ドイツ第三帝国の鋼の乙女は協力をした例の狂った天才科学者の捕縛に成功。

科学者は、太平洋戦線終結から二日後、欧州戦線でドイツ軍に最強の鋼の乙女を投入。

和平交渉に来た日本の鋼の乙女も連合軍と共闘した。

激闘の末、最強の鋼の乙女は機能停止。戦意喪失のドイツ軍は停戦を承諾。だが、科学者は逃亡した。

後日、連合軍はドイツ軍に科学者の捕縛を命じ、今に至った。

「ずいぶん手こずらせやがったな。」

「だが、任務はまだ終わったわけではないぞ。」

「そんなこと分かってるって。」

捕縛した科学者の前にはミハエルとフェイ。

「正直なところ、ブツ飛ばしたい気分だが、連合軍の命令だからなあ。」

「それに、あの二人を元通りにしてもらわないとならないからな。」

「そうとなりゃ、早くコイツを連れていこうぜ。」

ミハエルとフエイは科学者を護送車に入れて、護送車と共にドイツに向かった。

## 序章第1話 導入（後書き）

表現の誤り、誤字・脱字があれば教えてください。

## 序章第2話 総統官邸にて（前書き）

読者には説明のような文章ばかりでつまらないと思います。

しかし、後の話をするのに必要なので、どうかお付き合い願います。

## 序章第2話 総統官邸にて

護送車は程なくドイツの総統官邸に到着した。

この総統官邸地下に独自の研究所があり、最強の鋼の乙女のアインとツウ、アイを生み出し、さらに未完成のダークフォース（以下DF）技術を完成させた。

（ちなみにドイツ軍停戦前、ドイツ軍総統は最強の鋼の乙女がやられたのを内部から確認した後、自殺した。）

現在、研究所は連合軍が抑えてあり、連合軍ならばDF改造された鋼の乙女を戻すことは可能だが、なぜこの科学者を捕らえたのか？

理由は単純明快

『DF技術をどのようにして開発したのか』だ。

この科学者は元々アメリカの鋼の乙女開発チームの一員だったが、チーム内で対立し、自らチームから脱退、行方をくらました。

科学者は

総統官邸内のある一室に連れて来られた。

科学者の目の前には

連合軍鋼の乙女司令官。



右側にアメリカの鋼の乙女のルリ、ネコ、クレア、エイミー、ライ  
トニング姉妹。

イギリスの鋼の乙女のマチルダ、マーリン、フェアリー。

左側にドイツの鋼の乙女のフェイ、ミハエル、ルーデル、ウィル  
ヘルム。

ソ連の鋼の乙女のスターリナ、リーリヤがいた。

他にも、鋼の乙女開発チームや高官が多数いた。

「では、今回の件だが…」

司令官が科学者に問い掛けはじめた。

「DF技術は、鋼の乙女の基本性能を最大に引き上げると同時に、  
代償として性格に支障をきたすという報告は本当かね。」

「……………はい。」

科学者は小さく答えた。

「では、DF技術をどのようにして開発したのか詳しく話してもら  
おう。」

科学者は淡々とDF技術のことを話し始めた。

序章第2話 総統官邸にて（後書き）

分かりにくい部分があったら遠慮なく教えてください。

元ネタ知ってる方は

ifストーリーだと分かっているとと思いますが、念の為。

序章第3話 DFその1(前書き)

DFの説明を探したらすぐ長くなったので、とりあえず

DF技術開発編〜ソ連編まで

### 序章第3話

### DFその1

科学者

「DF技術は戦争が始まる前、鋼の乙女が開発されて数日後に俺が開発した技術だ。」

ルリ

「何ですって!?!」

フェイ

「私たちが生まれた後だと…!」

他の鋼の乙女も驚きを隠せないでいる。

科学者はお構いなしに続ける。

「鋼の乙女は本来通常兵器の発展型だ。兵器は元々戦争に勝つための道具として使われる。

だから俺はただ純粹に兵器としての性能を上げようと開発しただけだ。

どの国も他国よりも有利に立つ為により優れた兵器を開発・改良を続けていったように。

…DF技術もそのひとつにすぎん。」

スターリナ

「なるほど。確かにこの男の言うとおり、我々も様々な兵器を大量に生産してきた。」

葉巻をくわえたまま話す。

「俺はそれを基にして一人の鋼の乙女を作った。それがあいつだ。」

科学者は一人の鋼の乙女を見た。

その視線の先には……………

エイミー

「えっ！？嘘でしょ……」

クレア

「こっ、コイツが!？」

ルーデル

「でも…どう見たってレンちゃんやエリちゃんのようには見えないけどねえ……」

ミハエル

「やっぱり見た目で判断出来ねえってことか？」

鋼の乙女達が一斉に目を向けた先には……………

「ニヤ？どうしてみんなニヤーを見ているニヤー？」

何のことだか理解できていないネコだった。

科学者は続けて言った。

「開発当初はこんな感じではなく、無表情で冷酷な性格だった。」

ルリ

「つまり、貴方がネコの開発者ということですね。」

ルリも心底驚いているが、すぐに切り替えて科学者に問い返した。

「そういうことになる。だが、俺もまだその技術を極めていないから、不完全だったかな。」

フエイ

「それが本当ならば合点は付く。」

フエイがネコを見る。

フエイ

「私が鋼の乙女養成所『とらのあな』時代で戦った当時のキャット・ザ・グレートは、確かに機械のように冷酷だった。」

スターリナ

「どつりで』とらのあな』一位の実力が化け物みたいに強かった訳か。」

科学者

「キャット・ザ・グレート……。懐かしい名だ。」

フエイ

「その名前もお前がつけたのか？」

科学者

「確かに。ただ最強の鋼の乙女にさせる為に常に一位になりつづけるように命令していた。だが、卒業前の最後の演習でお前に倒されたかな。」

フエイは改めて自分の頬に傷をつけたキャット・ザ・グレートの強さの秘密を思い知った。

科学者

「俺はそのことに激怒し、俺は最強で無くなったネコをスクラップ送りにしようとした。」

「「「っ?!?!?」「」」

今の発言に驚かない乙女はいなかった。

一度負けた時点でスクラップ送りされるのはたまったものではない。

科学者

「しかし、チームの仲間は反対した。当時リーダーであったトムも含めてな。『鋼の乙女はただの兵器とは違う』と言ってきた。だから仕方なくネコに一度チャンスを与えた。」

フエイ

「チャンスというത്?」

科学者

「簡単に言えば、初出撃だ。その時の任務は中国上空で日本軍の戦闘機から中国軍の戦闘機を護衛することだった。その時はアメリカ軍ということを見せて、義勇軍として参加させた。だが、任務は失敗した。」

クレア

「おいおい、あんな弱いヤツラに負けたのか?」

科学者

「相手はただの戦闘機。鋼の乙女が負けることは有り得ない。だが、護衛に失敗していた。」

ルリ

「それはどういうことですか？」

科学者

「報告だと、敵戦闘機を撃墜した際、一機が街に墮ちるところをネコが下から支えて街への墜落を防いだらしい。その間に中国軍の戦闘機は全滅。任務は失敗した。」

クレア

「なるほどな。いいことじゃねえか。」

科学者

「俺はネコに失望し、今度こそスクラップ送りにしようとした。それでもチームは全員反対した。そして、ネコはトムのじじいに引き渡された。じじいから何を教わったか知らないが、ネコとはそれっきりだ。じじいのせいですっかり変わったもんだ。」

すると自分の事なのにまだ理解できてないネコが突然、

「トムじいさんはニヤーにいろんな事を教えてくれたいい人だニヤー！むしろお前が悪いんだニヤー！トムじいさんの悪口を言うなニヤー！」

と反論。すると、

科学者

「だまれ！あのじじいは俺のDF技術を否定したあげく、研究をやめろとまで言いやがった！俺の技術はあいつらと同じ鋼の乙女を強



化するものとして対等に評価すべきなのを誰も評価しなかった！だから俺はチームを脱退した！こんなところではいつまでたってもDF技術は完成しないと思ってるな！」

と声を荒げた。

少し間をおいてまた話し出す。

科学者

「そして俺は一人ドイツに潜伏しながらDF技術を研究した。俺は一時期ソ連にも派遣され、そこで試作状態のDF改造を行った。幸いにも、ソ連は量産型の鋼の乙女を作っていたから都合がよかった。ソ連の高官に許可をもらって、DF改造を行った。」

するとリーリヤが、

「ごっ…御主人様……」

と消え入りそうな程の声で言って、スターリナの手を握った。

リーリヤは普通そのようなことはしないし、スターリナも普通なら振り払うのだが、そうしなかった。

リーリヤは蛇に睨まれた蛙の如く震えていた。

科学者の言う改造を行った鋼の乙女はまさに自分と同じ姿をした姉妹の事だと知っているからだ。

スターリナはそのことを知っていて、今回の尋問には一人で行くつもりだったが、リーリヤがどうしても確かめたいと志願し、ついて

来た。

科学者

「だが、結局は暴走し、同じソ連の鋼の乙女によって全滅したと報告された。」

スターリナ

「それはロジーナがやったことだ。」

ミハエル

「あいつが！？じゃあロジーナは暴走した味方を全滅させたってことか？」

スターリナ

「私は当時その場にいなかったから、報告しか聞いていないが。ロジーナも本気を出してまで戦ったから、生き残った兵士はロジーナに対して怯えていたらしい。おかげでリーリヤとカチューシャには辛い思いをさせた。」

ミハエル

「まあ、あいつは別の意味で恐ろしいからな。生き残った兵士が恐れるのも分かるな。」

リーリヤ

「でっ…でも、あいつはあいつなりに暴走した姉妹を止めようとしてくれた…だから…あいつがいなければ…ワタシやカチューシャはここにいなかった。うん。」

先程まで震えていたリーリヤは勇気を振り絞ってロジーナの正当性

を訴えた。

科学者

「ソ連とも戦争を始めて俺はドイツに戻ったが、報告を聞いた俺はまだ不十分だと思い、さらなるDF技術の向上を研究した。」

序章第3話 DFその1(後書き)

早く説明を終わらしたい。

それだけです。

序章第4話 DFその2(前書き)

DFについて

アインとツウ、アイ編、燕改造編です。

正直実際のストーリーからかなり離れています。

8割創造(想像)で作りました。

少し長い話ですが面白くないです。

すみません…

ここまで話すのにすでに一時間が経過した。

一度反論したネコは再び理解できない話をされて、声は出さないものの、あたりをキョロキョロ見渡していた。

そのたびにルリとクレアに小声で注意された。

科学者

「ドイツ軍の戦況が徐々に悪化していく中で、ある日、ドイツ軍総統補佐が私が住んでいた家に訪れ、秘密研究所の用意を条件について来るように頼んできた。」

マーリン

「それで連れて来られたのが総統官邸地下…。」

科学者

「そうだ。そこに行く以前にドイツ軍からは援助があつてさっきのようにソ連にも派遣された。」

『バルバロッサ攻略』作戦の時にドイツ軍の鋼の乙女のDF改造が失敗し、俺はそれをDFのデータ解析不足と判断した。そのとき例の補佐が極秘にしている鋼の乙女を提供してきた。」

マチルダ

「それが例の黒豆で？」

科学者

「いや、その時点では普通のベローチェだった。コイツらがイタリ

アの鋼の乙女であったことと量産型だったことで、DF改造に支障はないと思い、例の研究所で改造した。」

エイミー

「それでアインとツウ、アイが誕生したってわけね。」

科学者

「アインとツウ、アイはドイツ軍にとっても最後の切り札となった。同時にDF改造は完全に機能。ドイツ軍の要望で、二人のコピーとなるDFベローチエを次々と作った。」

フェイ

「なるほど。総統がベルリンから少し離れた位置での守備を任せたのは、例のベローチエ起動の時間稼ぎだった訳か。」

科学者

「ただ、お前達は一つ勘違いをしている。」

フェイ

「勘違いだと…?」

鋼の乙女全員が一斉に科学者を見る。

科学者

「DFベローチエの起動は確かにその時だった。だが、アインとツウ、アイはドイツ軍の北アフリカ撤退から三ヶ月前に完成していた。」

全員

「なっ…何だっ…!!!!」

科学者

「あの程度の強さにする為にはすでに存在させなければならなかったからな。」

フェアリー

「確かに…一理はありますわね。」

マチルダ

「あれほどの強さでありながらも、何故ドイツ軍にも知られずに改造を？」

クラレンス

「僕たちの調査団が研究所の構造を調べていたら、一部だけ核兵器レベルでも耐えられる部屋があつて、そこで実践的な改造をした跡があつたんだつて。」

アリス

「だから、あの黒豆の主砲でも外に振動が漏れることなく改造できたわけ。」

科学者

「その双子の言う通り、ドイツ軍が各地で敗北を繰り返していき、ドイツ軍はすぐにも強力な鋼の乙女を要求してきた。その為に作った部屋がそれだ。無論当時これを知っているのはごくわずかな研究員だけだかな。」

クレア

「あれだけ気性の悪いヤツらをどうやって外にでないよう見張ったんだ？」



科学者

「簡単なことだ。実験以外では常に機能停止状態にするだけだ。実験時に万が一暴走しても一定時間で強制的に機能停止する装置をつけてうまく制御した。」

ルリ

「そうしてドイツ軍の裏で研究を続けていた訳ですね。」

科学者

「だが、俺はそれだけでは何か不十分だと考えはじめた。いくら最強であっても回復できなければ意味がない。ソ連での一戦で判明した問題だったからな。…そこでとある医学の再生論に目をつけて、その理論を応用して作ったのがあの『相互瞬間再生装置』だ。」

エイミー

「アインとツウ、アイが持っていたあのフォークのことね。」

科学者

「この理論自体内容としてはまさにノーベル賞クラスであった。それを応用して装置を作るには相当時間がかかった。」

DF技術にも再生能力は付いていたが、最強の鋼の乙女にするために理論は必要だった。

装置はできる限りの誤差を修正し、連合軍がベルリン到達前に総統判断で戦線に投入した。」

マチルダ

「だとすれば、あの黒豆の装備も改造と同時平行で作られたのですね。」

科学者

「そつだ。本来ならDFベローチェのように普通の砲弾でも良かったが、当時すでに補給が困難な状態だったから、急遽補給の必要がないエネルギー弾の装備に変えた。」

アインとツウ、アイはまさに俺の理想的な鋼の乙女となった。」

エイミー

「だけどあいつら、ドイツ軍にも攻撃したじゃない。それって結局は暴走したのと同じで失敗だったんじゃないの？」

科学者

「ドイツ軍にも攻撃したのは予想範囲内だ。お前達に短時間で破壊されたことだけが範囲外だった。」

エイミー

「当たり前でしょ！あんな訳の分からないやつらなんか世界征服されたらせつかくの和平交渉が台なしになるでしょ！誰でも本気で止めるに決まってるじゃない！」

科学者

「俺はアインとツウ、アイが破壊される前に、ドイツから逃亡した各国の小規模の研究所を経由しながらだったかな。」

俺にとつて最後のDF改造をしたのは中国の鋼の乙女、燕だった。

向こうから俺を捜し当て志願したことには驚いた。」

エイミー

「やっぱり……燕は自分からしたの…あのばか…」

…だったらどうして……どうして燕の体内に自滅カプセルなんか埋め込んだのよ……！」

エイミーにとって燕は窮地を救ってくれた恩人でもあり、大切な仲間でもある。愛情表現は少し行き過ぎていたけどそれでも楽しかった。

そんな燕の命を奪った科学者が目の前にいる。  
科学者に対するエイミーの怒りは計り知れない。

本当ならこの場で科学者に主砲を撃ち込みたい気分でもあるが、尋問中である以上手出しはできない。

正直に言えば、燕の話は聞きたくなかった。これに参加しなくてもよかった。

でも、燕もDF改造の犠牲者であり、何故この科学者に頼ったのかを知りたかった。

燕本人が死ぬ間際に頼った理由は聞いている。

だが本当にそれだけなのか？

他にも理由はないのか？

そう思うといってもたつてもいられなかった。

科学者

「燕は、戦争終結後に再び始まった中国の争いを止める為に力を手に入れたかったらしい。一人で広大な中国を守るには仕方がないと割り切っていた。」

ルリ

「その話なら、本人から聞きましたわよ…」

エイミー

「そうよ…燕もわたしに一言言ってくれば相談してあげれたのに

……」

エイミーは怒りと悲しみが混ざり合い、精神的に苦痛な状態だった。ただ正式な場所であることからか、涙だけは流すまいとこらえていた。

科学者

「だが、俺はDF改造をする代わりに条件をつけた。」

クレア

「それがあのカプセルってわけか。クソッ、燕もよくこんな胸くそ悪い条件をのんだな！」

科学者

「俺も正直断ると思った。だが、燕は何の迷いもなく承諾した。自分の意思でな。」

エイミー

「どっして……」

科学者

「燕は自分が最強になれば、誰にも屈せず、連合軍も頼りにしてくれる。そうすればエイミーともっと仲良くできるだろう。そう言っていた。」

エイミー

「……えっ……」

エイミーは自分を抑えることに集中して聞き逃すところだったが、同時に燕は自分の為に行ったことだと知った。

どうしてわたしの為なんかに？

わたしはそんなことは全く望んでいない。もちろんみんなもそう思ってる。

燕は燕なりに連合軍として頑張ったじゃない。

力不足ならいつでも頼ればいいのに……

そうすれば一緒に頑張れたのに……

どうして……

そして一つ思い浮かぶ。

燕もまた、チハと同じ境遇だったのではないか？

燕には同じ仲間が誰もいない。常に孤独だった。

だから戦時中フリーの鋼の乙女として連合軍に助っ人として参加してきた。

でも、性能も力も劣っている。本当はエイミーや連合軍の足手まといになりたくないと思っていたのでは？

事実、エイミーを助けたとはいえ、奇襲に近い形であり、エイミーと共に戦ったのはほんのわずか。

だからこそ簡単に強くなる為にDF改造を……

次々考えていくと涙が出そうになる。まだこらえているが、もう限界なのは誰が見ても明らかだった。

エイミー

「……ほんつとに……ひつく……馬鹿なんだから……ぐすっ……」

エイミーの目から大粒の涙がこぼれ落ちていく。

序章第4話 DFその2（後書き）

まだ終わらない……

なかなか難しいですね。

司令官（独）

「無理を押し通してこそドイツ軍人と思わんかね！」

いや、多分場違いだと思いますよ、司令官……

序章第5話 DFの逆転技術(前書き)

ずいぶん長い会話が続きます。

そしてこれから先は完全に想像です。



## 序章第5話

### DFの逆転技術

その後、エイミーはルリ、クレア、ネコと共に一時退室。

静かな時が訪れた。

30分後

エイミーは3人と一緒に戻ってきた

この尋問は参加した鋼の乙女に全てを聞いてもらいたいが故、エイミーが戻るまで誰一人として話をしなかった。科学者も尋問前にそのことを通告されていた。

再び話し始める。

科学者

「言うておくが、俺はまだDF技術は進化すると思ってる。ここで捕まらなければ研究を続けていた。研究所はまだ複数あるからな。」

クラレンス

「それは無理だと思うけどね。」

突然、クラレンスの意味深な発言に科学者も鋼の乙女も注目した。

科学者

「どっ…どっいうことだ？」

クラレンス

「だって君の研究所はすでに僕たち諜報部が全て把握しているからさ。」

アリス

「つまり、ミハエルとフェイとかいう鋼の乙女に捕まらなくても、研究所に到着した時点で捕まえることができたの。」

二人はクスクス笑いながら話す。

クレア

「戦闘ではほとんどサボってるくせに、こつゆつ仕事だけは早いよな。」

クラレンス

「何言ってるんだい？クレア。僕たちは別にサボってる訳じゃないんだよ？」

アリス

「それに、指令系統が違うから、わざわざ戦う必要なんかないわよ。ほんとクレアはバカよね。クスッ。」

クレア

「なっ…何だと〜!!！」

ルリ

「クレア、落ち着きなさい。双子の挑発に乗らない。それに、双子も場をわきまえなさい。今は尋問中です。」

クラレンス

「まっ、僕たちはただ報告をしに来ただけで、別に科学者の話を全て聞く必要ないんだけどな。」

アリス

「ついでに、研究所のDF技術についての資料はすでに諜報部が回収させてもらったわ。」

クラレンス

「だからさ、後はそこにいる鋼の乙女開発チームから聞けばいいよ。多分諜報部から解析したデータの報告を受けているから。」

アリス

「だから、私たちもうここにいらなくてもいいよねえ、司令官。」

司令官

「……………」

クラレンス

「まっ、そういう訳だから。でも最後にエイミーのぶざまな姿を見れたのは面白かったね。」

エイミー

「なっ、何ですって!!!!!!」

アリス

「姉さん、エイミーが怒りだしたわよ。」

クラレンス

「アハハ、怖い、怖い。じゃあ行こっか、アリス。」

アリス

「そうね。姉さん。クスッ。」

エイミー

「ちょ…待ちなさい！」

双子はエイミーを挑発して、クスクス笑いながら部屋を出た。

エイミー

「まったく、あのバカ双子！次に会ったらとっちめてやるんだから！」

クレア

「俺もそれには全面賛成だ。俺のこともバカにしゃがって！」

ルリ

「落ち着きなさい。二人とも。双子はもう去ったんですから、後で  
どっこい言っても無駄です。」

ネコ

「そうだニャー。ニャーもクレアちゃんの気持ち分かるニャー。  
でも今はルリちゃんの言う通りにするニャー。」

ミハエル

「おいおい、あいつらも仲間なんだろう？」

エイミー

「正直、戦時中にやられればいいって何回思ったことか！それぐらい私たちはあの双子が嫌いよ！味方を後ろから平気で撃つ奴らなんだから！」

フエイ

「確かに、私も東部戦線であの双子と戦ったが、ロジーナとは別の意味でおかしかったからな。」

リーリヤ

「あんなやりとりでも見てたら誰でもそう思うわ。うん。」

マーリン

「ですが、一つ気になることが……」

エイミー

「気になること？」

マーリン

「あの双子はどうやって研究所を全て把握したのでしょうか？」

マチルダ

「確かに、あなたたち諜報部が優秀でも、大戦中に各国にある全ての研究所を把握するのは難しいはずでは？」

司令官

「それに関しては、イギリスの鋼の乙女の協力でライティング姉妹を含む我々の諜報部は全ての研究所を把握できた。」

マチルダ

「私たちの協力のおかげ？」

ここにいるイギリスの鋼の乙女にはよく分からないだろう。  
しかし、

スターリナ

「その鋼の乙女とやら、もしかしてシスターのことか？」

リーリヤ

「確かに、シスターはDFについて結構詳しかった。たしか、国家機密とか言っただけで教えてくれなかったけど、その科学者の情報を集めていたわ。うん。」

司令官

「その通り。彼女とライトニング姉妹にどのような交渉があったのかまでは知らないが、結果として諜報部に情報提供してくれた。」

???

「そうですね。」

全員

「「「!?!?」「」」

突然部屋の外から聞こえた声。

全員が扉に注目すると、そこにはボロボロの修道服を着たイギリスの鋼の乙女、シスターがいた。

シスター

「私もあの子たちから何か邪悪なものを感じとって提供するのに迷いました。でも、ちょうど例のアインとツウ、アイが起動したと聞いて、私の知ってる範囲で教えました。」

エイミー

「そうだったの。じゃあ、アインとツウ、アイの『相互瞬間再生装置』をあの双子に教えたのが貴方ってこと？」

シスター

「はい。その通りです。そして、DF技術について新しい報告をしにここに参りました。…と言ってもあの双子はすでに知っていますけどね。」

エイミー

「DF技術の新しい報告？」

ルリ

「そういえば、あの双子、諜報部の報告をその鋼の乙女開発チームに報告してあるって言うってたわね。」

シスター

「それでしたら、今から報告することは同じことですよ。簡単に言えば、DF技術の逆転技術です。」

クレア

「DF技術の逆転技術？なんだそりゃ？」

シスター

「つまり、DF技術を強化でない使い方をするのです。」

エイミー

「えっと……それってどういう意味？」

他の鋼の乙女もよく理解できない。

シスター

「DF技術は本来鋼の乙女の基本性能を最大にする代償として、精神的に異常を与えます。ですが、私たちが目をつけたのは、DF技術の再生能力です。」

ミハエル

「確かに少々の傷とかには再生能力で全く気にしなくてもよかったですな。」

シスター

「ですから、DF技術の再生能力を特化させることで、新たな技術が生まれます。その代わりに強化に関しては0になりますが、精神異常を発生させず、素晴らしい修復技術になりえます。もともとDF技術は鋼の乙女の為の技術ですから、成功確率は大いにあります。」

「

エイミー

「確かにそれは嬉しいことだけど、それだけなの？」

シスター

「いいえ、この技術によって鋼の乙女を再生、つまり、すでにいない鋼の乙女を復活させられるかもしれないんです。」

全員

「なっ……何だっ……！！！！？」





序章第5話 DFの逆転技術（後書き）

ライティング姉妹が出ている小説ってありませんかね？

補足

DFの犠牲者はドイツ軍と燕とベローチエ以外にもう一人いました。

その子は一人前に認めてもらえないが故に……

序章第6話 一度きりの再生技術（前書き）

久しぶりの投稿です。

オリジナルになるとなかなか話の展開が難しいです。

乙女の話し方もなんか違うような気がして……

でも楽しく読んでもらえれば幸いです。

## 序章第6話 一度きりの再生技術

### D F 技術

鋼の乙女の基本性能を最大に引き上げる強化技術。代償に精神的に異常を引き起こす。（性格残虐化、感情欠落、精神不安定など）

同時に一定時間で回復する再生能力も付加される。

鋼の乙女にとっては忌まわしい両刃の刃である。

そんなD F 技術で、鋼の乙女を復活させられる。

誰もが耳を疑う発言をしたのは、イギリスの鋼の乙女のシスターだった。

シスター

「あの〜、皆さん大丈夫ですか〜？」

シスターの呼びかけにいち早く我に戻ったのはルリだった。

ルリ

「ちょっと待ってください！すでにいない鋼の乙女を復活させることは、ほぼ不可能と言われているのではないんですか!？」

シスター

「ですから、DF技術を応用することで可能になるのです。」

スターリナ

「つまり、我々が例え何回やられても復活できるといふことか？」

シスター

「いえ、そういうことではありません。」

マチルダ

「それじゃ、一体どういふことですか？」

シスター

「確かに鋼の乙女を復活させることはできますが、無限にというわけにはいきません。ただし、鋼の乙女の修復・回復としてなら、何回でも使えます。」

エイミー

「じゃあ、復活にはそれなりに部品がなければできないってこと？」

シスター

「その事なら心配はありません。必要なのは司令官が管理している鋼の乙女のデータベースだけです。」

クレア

「たったそんだけで復活できるのか？」

シスター

「そうです。データベースには鋼の乙女の性能・能力・戦闘力の他、身体つきや特徴・性格など鋼の乙女のありとあらゆるデータが自動で書き込まれているので、これだけでも十分です。」

フェアリー

「そういうことでしたら、どうして私たちは何度も復活できないのですか？」

シスター

「それは……この技術は完全になり得ないという点です。ですので、私たち鋼の乙女がこれを使って復活できるのは……一回だけです。」

マーリン

「そうですね。となれば、あくまでも我々にとっては切り札ということですね。」

シスター

「そういうことです。そして今、すでにこの技術を使って、燕さんを復活させようとしています。」

エイミー

「えっ！？……いつ、今燕を復活させてる！？」

シスター

「そうですね。今のところ良好ですが、あと五日は掛かります。」

エイミー

「そうなんだ……。でも、どうして燕を？」

シスター

「例の科学者の研究所から燕さんのデータベースが見つかった、というのドイツの鋼の乙女から聞いていますよね。私たちはそのデ

「データベースを燕さんの死亡後に借りて試してみたいです。」

フエイ

「そうか、あの時私たちが回収した燕のデータベースを借りたのはその為だったのか。」

クレア

「俺はそんなことより、シスターがどうして平然とドイツの鋼の乙女と接触できるのかを知りたいんだけどな。」

すると、イギリスの鋼の乙女がいる位置から、アメリカの鋼の乙女の方へ歩み寄ってから

シスター

「宗教に国境はありませんから。なので、アメリカの鋼の乙女たちもどうですか？宗教に興味がある方は今なら無料サンプルを……」

と布教を始めたので、

ルリ

「布教なら他所でやってください。ここはそういう場所ではありませんから。」

とすぐさま拒否。ところが、

「ねえ、ねえ、その宗教にかわいい女の子は何人ぐらい入っているの？」

と反応したのはルーデル。

シスター

「かわいい女の子ですか？もちろんいますよ。ヨーロッパからアメリカ、南アジアや東南アジア、様々な国のかわいい女の子も入りますよ。」

ルーデル

「それ本当！？まさにパラダイス！だったらお姉さんも入っちゃおうかしら」

無論仲間は制止する。

フエイ

「なつ…まつ、待て！ルー！今すぐやめろ！」

ミハエル

「そうだ！第一、何の宗教かも分からないのに、そんな理由で怪しい宗教に入ろうとするな！」

ウヰイルヘルム

「そつ、そつだぞ！ルーがどこかに行ったらさみしくなっちゃうぞ！ウヰイルはそんなのいやだぞ！」

リーリヤ

「た、確かにそれはやめたほうがいいと思う。うん。」

ルーデル

「ちよ、ちよつと！みんなだけでなくリーリヤちゃんまでそんなこと言っの？リーリヤちゃんも私がいなくなると寂しいわけ？」



その瞬間、リーリヤの背筋に悪寒が走った。

リーリヤ

「あつ、いや、そういことじゃなくて……」

ルーデル

「まあ、リーリヤちゃんがそう思ってるんだったら仕方ないわね。」

リーリヤ

「いや、だからそういことじゃないって……」

ルーデル

「もう、リーリヤちゃんもかわいいわねえ。お姉さんと離れて寂しいなら、素直に言えばいいのに。」

リーリヤ

「だから違つてば……。 (泣) 」

實にくだらな話が終わり、元の話に戻る

エイミー

「で、司令。話すことは全部話したんじゃないの？」

司令官

「いや、最後に一つある提案がある。」



「ニヤーも賛成だニヤ」

エイミー

「ちよ、ちよっと待って！あの子早めに亡くなったからそれ以降データも更新されてないでしょ！それに今エイミーを復活させたら足手まといになっちゃうわ！」

クレア

「なんかその言い方、どこかで聞いたことあるような……」

ルリ

「確か、チハにも似たような事を言っていましたね。」

司令官

「戦争が終わり、チ八君が祖国、日本の再建に帰ってからここ最近何かと気分が落ち込んでいるように見えてね。」

エイミー

「それがエイミー復活とどう関係あるんですか。」

司令官

「エイミー君のデータを調べ直したら、エイミー君がチ八君とほとんど同じ性格であったから、エイミー君がいれば気分が落ち着くかなと思っただけ。」

それに、エイミー君も君の期待に応えたかったのだから？ならばそのチャンスをもう一度与えるという事でどうかね。」

君はチ八君の教官役をしてチ八君を強くしていった。だからエイミー君も同じように鍛えられるはずだ。」

エイミー

「きゅ…、急にそんなこと言われても……。それに、戦争は終わってるし、今更復活させなくてもいいじゃない。」

クレア

「おいおい、自分の妹だろ？そんな言い方は無いだろ。」

エイミー

「でっ、でも……………」

マチルダ

「そついつことですよのなら、私も賛成ですわ。」

エイミー

「マッ、マチルダさん!？」

マチルダ

「貴方とのチハのようなコンビのおかげでこの世界を守れたのですから、同じようなコンビとして頑張ればよろしいのでは?」

エイミー

「……………」

エイミーは少しだけうつむき、そして

エイミー

「わっ、分かったわよ!エイミーもチハのようにパーフェクトソルジャーに育ててあげるんだから!」



序章第6話 一度きりの再生技術(後書き)

どうでもいい戦争雑学

アメリカ軍の戦闘機

戦闘機とは、英語のファイター(Fighter)の訳語であり、頭文字の『F』を戦闘機に使っているのはアメリカ海軍で、『F4F』ワイルドキャット』などがあります。

これに対し、アメリカ陸軍は『P』を使います。

『P』は追撃機(パーシュート・プレーン/Pursuit plane)の頭文字で、『P38』ライトニング』などがあります。

**序章第7話 再生技術に思わぬ提案（前書き）**

表現がうまく書けませんでした。

一応尋問編は終了しますが、序章はあと二話あります。

## 序章第7話 再生技術に思わぬ提案

エイミーの承諾によってエイミーの復活が決まった。

エイミーも正直チハと別れてから何かと自分が落ち込んでいるように思っていた。

エイミー

（相変わらずの策士ね、うちの司令は。）

でも本当は嬉しかった。

大戦中に自分の不注意と状況判断不足で目の前で妹がドイツ軍の地雷で亡くなったことで『地雷恐怖症』という戦車タイプ鋼の乙女にはあまりにも致命的すぎるトラウマに陥り、大戦序盤では正式採用が見送りにされていた。

その後、ライトニング姉妹がフィリピンでチハを保護（本人たちは拾ったと主張）し、その後の処置としてエイミーが教官役となり、チハと行動していくことで『地雷恐怖症』を克服した。

この提案も司令官からだった。

司令官

「さて、エイミー君に関しては以上だが、もう一つ提案がある。しかし、軍上層部はほとんど反対しているのだが。」

ルリ

「軍上層部が反対しているのなら、よほどの提案ですね。」





エイミー

「そりゃ驚くわよ！敵国（チハは別）の鋼の乙女を復活させるなんて！

………って、あれ？日本の鋼の乙女って誰か亡くなったっけ？」

エイミーが首を傾げる。

それもそのはず。

エイミーは欧州戦線で戦い、日本の鋼の乙女に関する情報はチハからしか聞いていない。チハも全てを知っていたわけではない。

ルリ

「司令官の言う日本の鋼の乙女の復活は、『あかぎ』と『いちこさん』の二人のことですね……」

司令官

「その通り。二人は我が軍が撃墜したものだ。」

マールン

「待ってください！アメリカ軍が撃墜した鋼の乙女を復活させることに、一体何の意味があるのですか！」

エイミー

「そうよ！確かに日本は太平洋戦線で私たちに勝利したけど、そこまでしなくてもいいじゃない！」

ルリ

「今の私なら…司令官の考えが…分かります。」

エイミー

「へっ!？」

ルリ

「エイミー、あなたは今まで欧州戦線で戦っていましたが、日本の鋼の乙女に関してはハワイ島の援軍で来た時しか認識がありませんよね。」

エイミー

「はい…。確か、チハを除けば6人いましたね。」

ルリ

「先程の話で分かっていると思いますが、日本海軍に元々8人いました。」

エイミー

「じゃあ、二人は何処で？」

ルリ

「『いちごさん』は日本へ帰還途中、ライティング姉妹にやられました。」

エイミー

「……あの双子に狙われたなら仕方ないと言っしかないわ……」

ルリ

「そして、『あかぎ』はミッドウェーで沈没させました。」

エイミー

「でも、それが作戦だったんでしょ？」

ルリ

「その通りです。『あかぎ』を沈没させるよう指揮したのは私でした。しかし、私たちは敗北しました。」

エイミー

「嘘……！作戦が成功したのに敗北！？」

ルリ

「エイミー、ハワイ島での戦いで、日本の爆撃機の鋼の乙女『ふがく』を見ましたよね？」

エイミー

「ええっと……、胸が大きくて、スリットの入った服を着ていた人ですよね？」

ルリ

「そうです。あの鋼の乙女の介入により、バランスが崩壊し、日本が優勢になりました。」

エイミー

「あの乙女がですか……あつ、あれ、なんか話が逸れているような……」

「確か、司令の言っていることが分かるということを知りたいのですけど。」

ルリ

「結論から言えば、彼女たちのおかげで日本の鋼の乙女、そして私たち鋼の乙女の考えを平和へと導きました。」

エイミー  
「？」

ルリ

「『あかぎ』は元々戦争の早期終結を願い、鋼の乙女で唯一の平和主義者でした。彼女の強い想いが日本の鋼の乙女を平和へ動かしたと思っわ。でも……………」

エイミー

「でも？」

ルリ

「それを知ったのは、二回目のミッドウエー戦、『あかぎ』がクレアを助けた時です。」

これは現場にいないエイミーが理解できるのは至難であった。

エイミー

「どういうこと？亡くなった乙女がクレア先輩を？」

クレア

「あゝ、あの時のか。俺はレイと一緒に捨て身覚悟で海に急降下していったんだつたな。正直生きていたのにビビったけど、そいつのおかげで命拾いしたのは事実だし、仲間とそいつの想いを共有できたのも事実だ。エイミーもチハとそうなただろ？」

エイミー

「確か、馬鹿げた戦争を終わらすために協力しようって言ってきたわね。大賛成したけど。」

ルリ

「ですけど、私は合衆国を信じて、最後まで抵抗しました。自分の行いが許せず、仲間にも伝えられないことで一人最後まで。」

クスツ。今思えば馬鹿なことをしたと思っていますわ。」「

エイミー

「そうですね……じゃあ、ルリ先輩は司令の提案には賛成ですか？」

ルリ

「もちろんです。これからまた少し衝突するかもしれませんが、せめてもの償いの意味で賛成します。」「

クレア

「まっ、俺も命を助けてくれたからな。賛成するぜ、司令官。」「

ネコ

「ニヤーも賛成だニヤー。きっとハイネちゃんも賛成すると思うニヤー。」「

司令官

「他の者たちはどうする？」「

マチルダ

「まあ、あまり日本とはつながりがないですが、皆さんがそうおっしゃるなら、私も賛成いたしますわ。」「

ミハエル

「でもな、なんか複雑だな。」「

フエイ

「どうした？ミハエル？」

ミハエル

「同じ枢軸国なのに、日本だけ勝利したってのがなんか腑に落ちないというか。」

フエイ

「仕方ないだろ。戦場が違う上に、共同して太平洋まで戦いに行っただけでないのだから。」

ミハエル

「そんなものかな？」

フエイ

「そういう事だ。負けたのは我々の力不足であっただけだ。それに、同志である以上反対する必要もないだろ。」

こんな感じで進み、賛成多数となり、二人の日本の鋼の乙女の復活が決まった。

エイミー

「あの、司令官？」

司令官

「どうしたかね。」

エイミー

「日本の鋼の乙女も」ここで復活させるんですか？」

司令官

「研究所はまだ十分な設備が残っている以上ここでしか復活できない。」

エイミー

「日本の鋼の乙女は復活後、日本に帰らせますよね？誰が向こうに説明するんですか？」

?????

「それなら心配する必要はない。」

全員

「「「!!!?」「」」

突然外からの声

部屋に入ってきたのは……………

レント

「待たせたな。」

ミハエル

「れっ…レン!?お前、もう大丈夫なのか!？」

レント



「ああ。私もエリも無事にDFを取り除いた。」

フェイ

「そうか。これでドイツの鋼の乙女は全員揃ったな。」

ルーデル

「で、レンちゃん、エリちゃんはどつしたの？」

レント

「まあ、わかるだろ。」

フェイ

「どっかの店で一人食べているのか。」

レント

「相変わらずだ。まったく。途中まではついてきたんだがな……」

エイミー

「あの〜、すみませんけど……」

レント

「DFの再生技術ならすでに話は聞いている。日本への輸送は我々に任せてもらおう。」

エイミー

「どつしてですか？」

司令官

「私からの命令だ。」

エイミー

「しっ、司令官から!？」

司令官

「一応ドイツ国内であるので、現地の鋼の乙女なら輸送機もすぐ到手配できると思ってな。」

クレア

「もしかして、チハに会いたかったとか？」

すると急に顔を赤くするエイミー。

エイミー

「ちっ…、違います!私はべっ…、別にチハが心配とか、会いたいとかじゃなくて、ちゃんと他人に迷惑になってないかどうか少し気になってるだけです!」

クレア

「そんな心配することじゃないって。チハもちゃんと和解したんだから、仲良くしてると思っせ。」

エイミー

「そっだといいのだけれども……」

ルリ

「クレアの言う通りですよ。エイミー、チハも一人前ですから、心配しなくてもいいですよ。」

エイミー

「……わかりました。」

なんだかんだ言っても司令官がすでに決めたことだから諦めざるを得なかった。

スターリナ

「それで、この科学者はどうするつもりだ？」

スターリナが少し空気になっていた科学者について尋ねる。

司令官

「今の時点では具体的な処分は決まっていない。判断が下るまで、身元は我々と上層部で預かる。」

ミハエル

「こんな奴、野放しにするよりとっとと死刑にしたほうがよくないか？」

スターリナ

「同意だ。こいつは我々鋼の乙女の絆を断ち切るうとしたからな。」

司令官

「とにかく、尋問はこれにて終了とする。諸君、これからの鋼の乙女は、戦うのではなく、守る、ということを忘れずに。」

こうして長い尋問が終了した。

序章第7話 再生技術に思わぬ提案（後書き）

どうでもいい戦争雑学2

日本の兵器編

旧日本軍の兵器はよく〃九七式〃など〃〇〇式〃とありますが、これは皇紀の下二桁をとった名称です。

皇紀とは、紀元前660年に神武天皇が即位してから数え、西暦1940年がちょうど2600年となり、零式艦上戦闘機（零戦）が生産された。

ちなみに、〃零式〃は海軍のみで、陸軍は〃一〇〇式〃とつけていたそうです。。

現在は西暦の下二桁を使用しています。（74式戦車など）

余談ですが、今年2010年は皇紀2670年となります。

序章第8話 動き出す世界の歪み（前書き）

やっと場面が変わります。

長かった……………

萌え現代戦が発売されるようですが、

萌え現代戦・二次戦とまったく関係ない

あるメイドロイドが気になります。

表はメイドのように接するが、裏は最強の戦闘ロボット……………

詳細キーワードは

「ヤンデレ」です。

無駄話をしてすみません。

## 序章第8話 動き出す世界の歪み

ここは太平洋にある名も無き無人島。

かつて日本の鋼の乙女とライトニング姉妹が初めてぶつかった場所。

その誰もいないはずの島に、突如として謎の一軍が現れる。

その一軍は島の海岸線すべてをコンクリートと鋼鉄で固める計画を進めようとしていた。

ドイツ軍が優勢時にノルウェーからスペイン国境までに至る海岸線に巨大な防壁要塞を作ったかのように。

実際この防壁は主要港湾を優先した防壁で、結局連合軍は頭脳戦を駆使し、ドイツ軍を翻弄、連合軍の優位となったところで『オーバーロード作戦』を発令、ノルマンディーに上陸した。

話を戻すが、WW2終結から3ヶ月後のことだ。

クラレンス

「なんか暇だね。アリス。」

アリス

「そうね、姉さん。」

例の島に近づいているのはライトニング姉妹。

諜報部から地図に載っていない島を今のうちに探してほしいという任務を受け、ここに至る。

クラレンス

「やっぱりさ、戦争がないと暇だね。武器の命中率とか下がるし。」

アリス

「本当よね。一緒にいられるのはいいけど、やっぱり刺激が足りないわね。」

クラレンス

「あっ。なんか面白いもの見つけた。」

アリス

「ホントね。何してるのかしら。」

視線の先には例の島。

クラレンス

「あの島は……確か戦時中に日本の鋼の乙女が先に来ていた島だね。」

「

アリス

「あの弱い鋼の乙女をいじめたのは楽しかったわね。」

クラレンス

「そうそう、軽くからかっただけで泣いちゃったもんね。」

アリス

「結局、仲間が助けにきてつまらなくなっただけだね。」

クラレンス

「アハハ。ホント、司令官もあんな弱い奴の復活を認めるなんてね。」

「

アリス

「日本の弱い鋼の乙女なんて復活させても無駄なのに。クスッ。」

双子が話をしている間も下の島は作業を続けている。

クラレンス

「この作業を見ている限りでは、海岸線をコンクリートで埋めているようだね。」

アリス

「あんな小さな島になんか無駄なことをしているわね。一体どこの国かしらねえ？」

クラレンス

「あの重機にマークがついているけど……国旗ではないね。」

アリス

「二本の剣が交差しているマークね。」



クラレンス

「まっ、とりあえずカメラに収めて戻ろうか。」

アリス

「そうね。姉さん。」

パシャ。　　パシャ。

海岸線をコンクリートで埋めようとしている島全体やマークつきの重機などをカメラに収め、その場からいなくなった。

その様子を島からずっと見ていた女性がいた。

ライトニング姉妹がいたのは高度1500m付近。普通なら気付かないはずだが、この女性だけはライトニング姉妹が島に近づいてきた時から気付いていた。

???

「少し厄介になるわね……………」

そう言って、再び視線を島に戻す。

序章第8話 動き出す世界の歪み（後書き）

どうでもいい戦争雑学  
特別編

マリオ・ツイッパーマイヤー博士

ドイツの変わった発明家

この博士が考えた兵器はあまりにも非現実的なものだった。

対空砲として開発したのがウゝイルベルウゝイント・カノネ（旋風砲）とトゥルブレンド・カノネ（竜巻砲）と、空気力で爆撃機を迎撃するものだった。

また、石炭粉を空中で爆発させる歩兵砲「パンドラ」や空飛ぶ円盤「レパルシン」などを開発しようとした。

前者は実際、反独反乱の鎮圧に成功している。

1940年代に今でも近未来な兵器を作ろうとしたドイツの底力でもあるだろう。

もしかしたら設定を変えて本編に出すかも……

**序章最終話**

**高高度領域からの……？（前書き）**

序章最後です。

前半説明ばかりでわからなかったかもしれない。

正直投稿する暇がこの時期もうな……

## 序章最終話 高高度領域からの……？

場所は変わり、ここはソ連東部の上空<sup>シベリア</sup>12000m。

この時代ではアメリカの「超空の要塞」(スーパーフォートレス)が到達できる高高度の領域であり、並の航空機ではまず到達できない。

そこに二機の戦闘機のような機体があった。形は新旧戦闘機とはまったく違う。全体的に円錐の形に近い。

円錐の底辺辺りにロケットの噴射口を小型にしたようなエンジンが4基ついている。

二機のうち片方に男性が乗っているが、もう片方は無人飛行である。その男性も操作しているわけではなく、自動操縦状態である。

男性は白を基調とした簡素な軍服を着ている。勲章があるのでそれなりの地位はあるようだ。

ビーツ！！ ビーツ！！

突如機体から警報がなり、高度が急激に下がり始める。

男性は身をガバツと起こし、急いで計器を確認する。

「燃料切れか！……いや、まだある……ならば攻撃されたか？……いや、それもない……エンジンか！！！」

見ると4基のうち1基が停止し、それでバランスが崩れ、急激に降下していた。

「長時間飛行で負荷がかかったか！？まずい……。今は確かシベリア上空……！！！」

外を見ると、もう一機も降下していた。こちらもエンジン停止によるバランス崩壊が原因だ。

この機体は攻撃されない限りでは壊れないほどの強度と自動修復が搭載されているが、極寒の地ではシステムが停止し、自身の命さえ危うい。

まだ雲の上で、地上の様子が見れない。

（とにかく、少しでも機体を前に動かそう。極寒の地での墜落はなんとしても避けなければ……。！！私の命令を待つ遠征部隊の同志たちのためにも……。！！）

高度はみるみるうちに下がっていく。

残りのエンジンで降下しながらもなんとか前には進んでいく。

やがて雲の中に二機とも突っ込む形となり、消えていった。

**設定変更に関する極秘報告書 1 (前書き)**

現存する鋼の乙女の設定変更。時系列に合わない設定になっている鋼の乙女もいるので、注意。

## 設定変更に関する極秘報告書 1

チハ

チハは初め南方ビルマ戦線で戦っていた。

その後はやぶさとひえんに出会い、南方を有利に進める。

ふがくが介入したとき、大本営からフィリピンへの援軍を通達。フィリピンへ。

フィリピンで敵の奇襲に近い反撃で気を失う。

その間にライトニング姉妹に連れていかれる。

その後エイミーとともに欧州戦線でドイツ軍と戦う。

ノルマンディー上陸作戦成功後、アメリカ海軍の援軍要請でハワイのオアフ島へ

日本の鋼の乙女と和解。

太平洋戦線終結。

再び欧州戦線に戻り、ドイツ軍アインとツウ、アイをエイミーとともに撃破。

戦争終結後、日本に帰る。

ふがく

初めに南方ビルマ戦線に援軍として介入。

戦線終結（連合軍総撤退）後、日本に帰国、補給してからミッドウェイに向かう。

その後海軍に移籍、そのままあらゆる場面で勝利を重ねる。

その後、仲間とともに鋼の乙女たちを説得。  
太平洋戦線終結。

いちこさん

ライトニング姉妹に撃墜されて、その後ふがくへの補給や情報などを輸送する船に発見、保護される。

ビルマ戦線終結でふがくが研究所に寄り、いちこさんと会う。

ミッドウェーにふがくが先に向かい、後から来るはずだったが、ふがくの離陸ポイントをアメリカ軍に探知され、中国大陸からB-17を発進。

研究所が破壊され、出撃前にいちこさんは亡くなる。

スチュアート

初めに北アフリカ戦線、その後、南方ビルマ戦線で戦う。チハがフイリピンへ行ったのと同時期にソ連に派遣。ソ連が終わるとまた南方ビルマ戦線へ。



シスター

初めは北アフリカ戦線、一時ソ連に派遣され、終結後はまた北アフリカ戦線へ。

はやぶさ、ひえん

南方ビルマ戦線で戦い、終結後、一時帰国。

その後B-17、B-29などの迎撃を主に本土防衛または東南アジア（ガタルカナル島など）の支援。

海軍が勝利し、太平洋戦線終結後、日本に戻り、海軍の鋼の乙女と交渉に協力する。

**設定変更に関する極秘報告書1（後書き）**

本編の途中でまた挟むかもしれない……

第1章1話 帰還（前書き）

遂に本編です。

ドイツ地下研究所から。

## 第1章1話 帰還

ここは、ドイツの地下研究所。

DFの再生技術によって4人の鋼の乙女が復活を遂げようとしている。

彼女たちは生前とまったく変わらない姿で、再生技術は最終段階に入った。

シスター

「まさかここまで順調にいくとは……でも喜ばしいことですね。」

シスターも最初は不安だったが、その結果に満足していた。

数日後、先に目を覚ましたのは燕だった。

尋問に来ていた他の鋼の乙女にはシスターが連絡したが、諸事情で来れない乙女もいた。

今いるのは、ルリ、エイミー、マチルダ、シスター、フェイ、レントだ。

燕は簡易なベッド台にいた。

燕

「……………うつつ……………うつつ……………ここは……………何処……………アルか……………？」

エイミー

「燕！よかった……。目を覚まして……。」

燕

「エイミー……アルか？ここは…何処アルか？私は……確か死んだはずアルよ……。」

シスター

「どうやら成功したようですね。ですが、燕さんはカプセルの影響でまだ万全ではないようです。もう少し休めば万全になると思いますよ。」

フエイ

「どうやら技術は本物らしいな。」

マチルダ

「そのようですね。」

レント

「だが、燕の場合は体内から破壊されたが……。残りの3人は大丈夫なのか？」

シスター

「心配ありません。向こうも数日後に目が覚めると思います。」

ルリ

「よかったですわね、エイミー。」

エイミー

「はい。本当に……生き返って……よかった……。」

燕

「エイミー……？泣いている……アルか？私の為に……泣いているアルか？」

エイミー

「なっ、泣いてなんかいないわよ！ただ……燕が生き返るかどうか心配だったから……。」

燕

「エイミー……。私は……うつつ！」

エイミー

「燕！？駄目よ！まだ安静にして！」

シスター

「燕さん！まだ身体は万全ではありません！安静にしてください！」

燕

「シスター……アルか？私は……本当に……生き返ったアルね……。」

エイミー

「そうよ！だから、まだ安静にして……。」

燕

「エイミー……私はエイミーにまだ言いたい事がアルね……。」

エイミー

「分かってるわよ！祖国だけでなく、私の為にも強くなりたかったんでしょ！」

燕

「！……どうしてそれを……！？」

エイミー

「あなたの命を奪った科学者から聞いたわよ！死ぬ前にも言ったかもしれないけど、どうして一言相談してくれなかったのよ！私たちは仲間でしょ！」

ルリ

「エイミー！」

と、ルリがエイミーの肩を掴む。

ルリ

「少し落ち着きなさい。感情的になってはなりません。」

エイミー

「あ……」

ルリに言われて少し落ち着くエイミー。

エイミー

「ごっ、ごめんね、燕。まだ体調が優れてないのに……」

燕

「大丈夫アルよ。……死ぬ前もそうやって叱ってくれた事が……嬉しかったアル。」

エイミー

「燕……。」

すると、

ガコン、プシュー

と何かが開く音がした。

その音に一同が注目する。見ると奥の扉が開いている。

マチルダ

「なっ、なんですの……?」

と身構えると、シスターは慌てて皆を落ち着かせる。

シスター

「皆さん、心配しないでください！あれは復活が完了すると自動的に開くシステムなので。」

フェイ

「そうか。ならば誰か復活し終わったのか。」

シスター

「そういう事です。」

扉から出てきたのは、

ここが何処だかわからず、怯えながら扉から出てきた胸ぺたのツイ



ンテールの乙女

エイミー

「えっ、エイミー!?!」

そう呼ばれた乙女が振り返り、エイミーを見た瞬間、

エイミー

「おっ、お姉ちゃんーん!?!?!?!」

と駆け出す。

エイミー

「エイミー!?!」

エイミーも駆け出す。

研究所はあまりにも狭いから駆け出すのは危険なのだが、二人はお構い無しだった。

そして瓜二つの乙女が抱き合う。

エイミー

「お姉ちゃんだ!本物のお姉ちゃんだ!」

エイミー

「そうよ!エイミー!あなたは帰ってきたのよ!ずっと会いたかった……!」

エイミー

「私もすごく会いたかったよ!お姉ちゃん!」

エイミー

「本当に……よかった……。」

感動の再会を果たしたエイミーとエイミー。

シスター

「仲の良い双子ですね。」

レント

「なっ……何と云うか……。本当に瓜二つだな。」

フエイ

「そっくり過ぎるな……。」

マチルダ

「そんな細かいこと気にしない方がいいですね。せつかくの感動が台なしになりますわ。」

ルリ

「それもそうですね。今は見守っておきましょう。」

燕

「……エイミーも復活したアルか……。」

燕は首だけを動かしてその様子を見ていた。その表情はどこか嬉しそうで、少し羨ましかった。

しばらくして二人が皆のところに戻る。エイミーは皆が見ていたのを知ると、顔が赤くなった。

エイミー

「ちよつと……恥ずかしいところ……見られちゃったかな？」

ルリ

「そんなこと無いですわよ、エイミー。感動の再会ですから、気にする必要はありませんわ。」

エイミー

「あつ、ありがとうございます……。ルリ先輩。」

エイミー

「ルリさん、お久しぶりです！」

ルリ

「久しぶりね、エイミー。3年振りかしら。」

エイミー

「そんなに経ってたんですか！？……で、こちらの方たちは……？」

エイミー

「ちよつとエイミー！まず自己紹介してから聞きなさいよ！」

エイミー

「あつ、ごめんなさい、お姉ちゃん！……えつと、M26パーシンのグのエイミーです。よろしくお願いします！」

マチルダ



エミリー

「じゃあ、これからはお姉ちゃんはずっと一緒にいられるの？」

エミリー

「そういうことになるけど……。その代わり、基地に帰ったら特訓だからね！」

エミリー

「ええー！ー！！特訓はいやー！ー！！」

エミリー

「いやじゃないの！当然でしょ。あんたはまだ弱いんだから。」

エミリー

「ううー……。泣」

燕

「本当に……。仲の良い双子アルね。」

燕の消え入りそうな声がエミリーに聞こえた。

エミリー

「あつ、燕さん。燕さんも復活したんですね。でも……。どうして寝たままなんですか？向こうではたくさん動いていたのに……。」

燕

「死ぬ前に使われた……。カプセルの……。影響アルよ。エミリーのよ  
うに……。まだ万全でないアルよ。」

エミリー

「そうだったんですか……。」

ガチャ。

研究所の入口が開く。

入ってきたのは司令官。

ルリ

「司令官、どうなさいましたか？」

司令官

「復活技術が成功したと聞いて飛んできた。」

ルリ

「そうでしたか。」

エミリー

「あっ、司令官殿！」

司令官

「やあ、エミリー君。復活成功おめでとう。君もこれではれて我がアメリカ軍の鋼の乙女だ。エイミー君と共に頑張りたまえ。」

エミリー

「あっ、ありがとうございます！」

エイミー

「でも司令、わざわざここまで来たのって別の意味でもあるわよね。」

司令官

「ははっ、さすがはエイミー君。」

エイミー

「？……どういふこと？」

司令官

「実は燕君に話がある。」

エイミー

「燕に……ですか？」

司令官

「形式的ではあるが、アメリカ軍の鋼の乙女の訓練への参加を認めることになってね。」

エイミー

「えっ！？それって……。」

司令官

「もちろん、監督としてエイミー君についてもらおうと思っているのだが……。」

エイミー

「じゃあ、燕もアメリカの鋼の乙女になるってこと？」

司令官

「いや、国籍はそのままにするが、DFの犠牲者でもあるから、同じ道を歩ませないようにという事だ。」

エイミー

「そうですね。燕、よかったわね。」

燕

「じゃあ……これからエイミーと……一緒にいれる……事アルか？」

エイミー

「そうよ、燕。あなたはもう一人じゃないのよ！」

ルリ

「それなら、私も手伝いますわよ。」

エイミー

「ルリ先輩……。司令官、ありがとうございます。」

司令官

「訓練に参加できるように体調を整えたまえ。」

燕

「ありがとうアル……。」

司令官が入口から出る前に、シスターを呼んで、何やら小声で話す。

司令官

「日本の鋼の乙女は？」

シスター

「あと数日後の計算です。」



司令官

「分かった。」

そして退出した。

第1章2話 日本鋼の乙女復活…でもやっぱりマイペース（前書き）

11月初投稿です。

携帯の受信が5億バイトを越えていて驚いた。

鋼の乙女の自己紹介について

最初は兵器名も言いますが、二回目からは名前のみです。  
なので、兵器名を言う人と言わない人が混ざっています。

## 第1章2話

### 日本の鋼の乙女復活…でもやっぱりマイペース

燕とエミリーが目覚めてから次の日には燕が回復。

祖国の心配もあり、エイミーたちに一言言ってから中国へ戻った。

そして三日後、

あかぎ

「うーん……。」

いちごさん

「ふわぁ〜。」

二人の鋼の乙女が目覚める。

あかぎ

「うう〜ん……いちご、そこにいるの?」

いちごさん

「あかぎ? いちごさんはここですよ。」

二人が身を起こし、お互いを確認してから、薄暗い部屋を見回した。

あかぎ

「本当に生き返ったみたいわね〜。」

いちごさん

「でも、ここは何処でしょうか？」

復活しても相変わらずマイペースな二人である。

シスター

「目を覚ましたみたいですね。」

そこへ、シスターが部屋に入って来た。

あかぎ

「あら、かわいい女の子ね。」

シスター

「かつ、かわいい…ですか？」

いちこさん

「そうですね。生き返って早速かわいい女の子に出会えるなんていちこさんは嬉しいのです。」

シスター

(データベースの通りですが……やっぱり関わりづらいつか…  
…。)

ルーデル

「あっ！あかぎ！目を覚ましたのね。」

と急に部屋に入るルーデル。

あかぎ

「あら、ルーちゃん、久しぶりね。」

ちなみにあかぎとルーデルは共通の趣味（かわいい女の子が好き）ということに意気投合（？）、戦時中はペンフレンドだった。

太平洋戦線終結後、欧州戦線に大西洋を渡って先に送られたアメリカ軍のルリに、ミッドウエーで沈んだあかぎの敵として特攻したこともあるほど仲がいい。勿論、いちこさんともあかぎを介してだが、仲はいい。

ルーデル

「本当に生き返ってよかったわ。」

あかぎ

「も〜、ルーちゃんったら、心配しなくても大丈夫よ。」

いちこさん

「ところで、ここは何処ですか〜？」

シスター

「ここはドイツにある地下研究所です。」

いちこさん

「どっ、ドイツなのですか〜!?!?いちこさんとあかぎはドイツで生き返ったんですか〜!?!?...どっりでレイちゃんたちがいない訳です〜。(泣)」

あかぎ

「だったら、私たちはどうやって日本に帰れるのかしらね〜?」

レント

「おっ、もう目が覚めたのか。」

エーリヒ

「ヤッホ〜。」

ルーデルに遅れてレントとエーリヒが入る。

あかぎ

「あら、エーリヒちゃんトラック島以来ね〜。」

いちこさん

「こんにちは、なのです。」

エーリヒ

「あっ、そういえば技術交換で行ったんだっけ。」

レント

「そうなのか？」

ルーデル

「エリちゃんずる〜い。自分だけ行くなんて〜。」

エーリヒ

「あれ、司令官から言われたんだけどな〜。」

あかぎ

「そういえばいちこは面識がないわね〜。」

いちこさん

「そうなんですよ〜。その時いちこさんは東南アジアで任務をして

いた頃なんですよ。」

エーリヒ

「じゃあ、改めて、Bf109のエーリヒだよ。」

レント

「私の場合は二人とも知らないんだよ……。」

あかぎ

「私はルーちゃんの送った写真を見たけど？」

レント

「そつ、そうなのか。……って、ちょっと待て！ルー！お前勝手に写真送ったのか！？」

ルーデル

「大丈夫よ。敵に盗られることなく日本に着いたんだから。」

レント

「よくない！」

いちこさん

「ずいぶん厳しいですね。」

レント

「……！すまなかった。見苦しいところを見せてしまった……。」

あかぎ

「気にしないわよ。私たちのところもそんな感じだから。」

ゴホンと咳ばらい、

レント

「自己紹介が遅れた。私はレント。ドイツの鋼の乙女の指揮官だ。」

あかぎ

「日本の空母のあかぎよ〜。向こうでは副官だったわ。よろしくね、レンちゃん。」

いちごさん

「一式陸上攻撃機のいちごさんです〜。レンちゃんよろしく〜。」

レント

「一応初対面なのにいきなりルーの呼び方をされるとはな……。」

あかぎ

「だって、かわいい女の子じゃない。」

いちごさん

「そうですよ〜。」

レント

「そっ…そうかな…?」

少し顔を赤くするレント。しかし、仲間がいるのですぐに切り替える。

レント

「はっ、危なかった……。……それと言い忘れていたが、我々が二人を日本に送るよう連合軍の司令官から受けている。」



あかぎ

「えっ、ドイツの司令官じゃなくて？」

レント

「日本は勝ったかもしれないが、我々ドイツとイタリアは敗戦国だ。」

「

いちこさん

「そうだったんですか？」

エーリヒ

「でもこれで良かったんだよね。」

あかぎ

「DFのことでしょう。」

レント

「そうだ。連合軍が抑えなければ戦争は続いていただろうな。」

……って待て！なぜDFを知っている！？

あかぎ

「それは、あの世からずっと見守っていたからよ。」

エーリヒ

「なんかサラッとすごいこと言ったね……。」

いちこさん

「そういえば、レイちゃんたちはいちこさんたちが生き返った事を伝えてあるの？」

シスター

「それは私の役目ですが……。」

あかぎ

「そういえば、名前聞いていなかったわね。」

シスター

「イギリスの鋼の乙女のシスターと言います。」

いちごさん

「よろしくなのです。」

あかぎ

「あの、シスターちゃん、私たちが生き返ったのをレイちゃんたちに伝えないでくれるかな？後、向こうの司令官にも。」

シスター

「どうしてですか？日本に帰るんですから、報告しておかないといけないのでは？」

いちごさん

「みんなをビックリさせるのです。」

あかぎ

「あゝ、私の台詞とった。」（泣）」

シスター

「……………」

ルーデル

「それいいわね。あの娘たちの反応見てみたいし。ああ、なんかお姉さん楽しみになってきたわ」

エーリヒ

「その発言、ホント、エロ親父だよ、ルー。」

レント

「まっただ……。」

二人同時にため息。

三人（あかぎ、いちこさん、ルーデル）でどうやってレイたちをビツクリさせるかを話していると、

ウヰルヘルム

「みんな、輸送機の準備が終わったぞ。」

ウヰルヘルムが部屋に入る。そしてウヰルヘルムに災難が訪れる。

いちこさん

「きゃ~~~~!!かわいい~~~~!!」

ウヰルヘルム

「えっ?えっ?うっ、うわっ!?!な、なんだ?!?」

いちこさんがウヰルヘルムを見た瞬間、素早く近づき、持ち上げ

て抱き着く。

本来なら高射砲を背負っているのだが、地下なので入らなかった。

いちごさん

「ドイツにもこんな小さなかわいい子がいるなんて〜！久しぶりの癒しです〜」

あかぎ

「あ〜、いちごずるい〜。お姉さんにも抱かせてよ〜。」

ウヰルヘルム

「むぐぐ……………」

ウヰルヘルムの体型は日本のチハに負けず劣らず小さい。だから、いちごさんの豊満な胸に顔がうずくまり、うまく息ができない。

ルーデル

「ちよつとあかぎ、いちごちゃん、ウヰルは私たちの鋼の乙女よ。」

「

あかぎ

「いいじゃない〜、少しくらいなら〜。私も抱きたいし〜。」

ソレント

「……………あ〜どのくらいかかると思っつか?」

シスター

「そあ〜……………」

エーリヒ

「ルーちゃんに負けず劣らず……。」「

その後あかぎにも抱かれたウヰルヘルムはようやく解放された。

ウヰルヘルム

「ウヰルは……。あやうく死ぬところだったぞ!？」

あかぎ

「ごめんなさいね。つい、いつも通りにしちゃって。」「

シスター

「本当にマイペースな方たちですね……。」「

レント

「あの、もういいか？輸送機も準備できているからこれ以上延ばす訳には……。ほら、エルとフェイが待っているから。」「

いちごさん

「あつ、ごめんなさいなのです、レンちゃん。」「

レント

「日本も世話が焼ける……。」「

とりあえず地上に出ると、

ミハエル

「よう、ずいぶん遅かったな。」

フエイ

「地下で何をしていたんだ……。」

ベローチエ

「おー、あれが日本の鋼の乙女かー。えーなー、胸がぱっつんぱっつんや。」

クラウディア

「ほんまやな。えらい軽装やなー。」

輸送機三機の側に四人がいた。

レント

「なっ!?!なぜ二人がここにいる!?!」

ベローチエ

「それってウチラのことかー?」

クラウディア

「ホンマつれないなー、レントはん。」

フエイ

「こいつらは、我々の司令官に言われて来たと言っていたが……。」

あかぎ

「もしかして、みんな日本に来るの？そうしたら日本に枢軸国の鋼の乙女が集結しちゃうわね。」

いちこさん

「でも、基地が狭いからみんな入るかしら？レイちゃんたちもいるし。」

エーリヒ

「えっとね、復活したことについて説明しないといけないからさ。」

ルーデル

「だから、私たちが直接行って説明するように言われたのよ。」

あかぎ

「でも、そうしたらドイツとイタリアの鋼の乙女がいなくなるんじゃないかしら？」

レント

「説明が終われば我々はすぐに帰還する。まあ、戦争が終わっているから、顔を会わせてはどうかということでもある。」

あかぎ

「そうなの。じゃあ、帰りましょうか。」

こうしてあかぎといちこさんに乗せた輸送機を含め、三機と三人の鋼の乙女（レント、ルーデル、クラウディア）は日本へ向けて空へ飛ぶ。

ちなみに輸送機の一つは鉄工などの資材。もう一つは食料であるが、  
エーリヒが飛んでいないので、この食料がどうなるかはあきらかだ  
あるだろう。



## 第1章2話 日本鋼の乙女復活…でもやっぱりマイペース（後書き）

どうでもいい戦争雑学

日本の対戦車ロケット砲

その一

日本陸軍は1940年6月に開発中の四七ミリ砲が駄載（兵が持てる）可能な三七ミリ砲かで論争を展開。

結果三七ミリ砲を威力増大させるが、米軍のM3軽戦車に効果が無かった。

陸軍は急遽四七ミリ砲を開発し、一式四七ミリ砲が完成するが、すでに戦況は悪化していた。

硫黄島では約60門が配備され、火砲の集中射撃で米軍の戦車連隊第一波、56両の半数を擱座、炎上させた。

また、フィリピンのルソン島ではリングエン湾に舞い戻ったマツカ―サー元帥率いる米軍第六軍がM4中戦車を先頭に内陸進出時に効果を上げたのは九七式中戦車改の四七ミリ砲と一式四七ミリ砲であった。

敵前70mまで接近しないと効力は無かったが、米軍が一式四七ミリ砲を鹵獲すると、前線で使用した。

米軍が日本の兵器を使うという、きわめて例のないことがあるほど頼りがいのある武器だったらしい。

**第1章3話 南は関東、北は北海道（前書き）**

17 になつての初投稿であり、久しぶりの投稿です。

ついに日本です。

タイトルどおり関東と北海道での会話みたいな話です。

### 第1章3話 南は関東、北は北海道

戦後、枢軸国唯一の戦勝国、日本。

鋼の乙女の平和への想いによって正しい方向へ進みはじめた。

そんな日本で、鋼の乙女は復興作業に明け暮れる毎日だった。

戦勝国といえども、戦時中に破壊された都市や工場は資材不足の日本にとって復興に時間がかかる。

また、戦争で勝ったにもかかわらず世間は平和主義を求めた。そのほとんどが空襲で家族を失った者だ。鋼の乙女も同意し、戦争支持者はいなくなった。

アメリカ軍は日本が平和を維持させるには根本から思想を変える必要があるとGHQを派遣、大日本帝国憲法の改善や教育の改善など、日本政府とともに現代に近くなるような政策を行った。

今日本にいる鋼の乙女はレイ、ナナ、てんざん、やまと、ゆきかぜ、ふがく、チハ、はやぶさ、ひえん。

海軍と陸軍は統一され、一つの組織となったが、海軍の司令官と陸軍の司令官の仲の悪さは戦前から目立ち、うまく機能するか心配された。

復興作業は、やまとゆきかぜ以外はそれぞれに担当地域を任せられた。

全員まずは関東地方を復興。その後レイ、ナナ、てんざんは関東から北、ふがく、はやぶさ、ひえん、チハは西に順番に復興作業を始めた。

やまとゆきかぜはアメリカからの資材を積んだ船の護衛兼荷物の出し入れである。

やまと

「よし、何事もなく港に到着だぜ！」

ゆきかぜ

「よかったですね、やまとさん。」

ちょうど横浜港に資材船が到着した。

やまと

「よし、荷物を下ろすぞ、ゆきかぜ。」

ゆきかぜ

「……………はい！」

やまとゆきかぜは船に積まれた資材を用意されたトラックに積みしていく。

作業は30分も経たないうちに終わった。

運転手

「いつもありがとうございます。おかげで時間も短くて済みます。」

やまと

「いいってことよ。それじゃ、レイたちにちゃんと届けてこいな。」

運転手

「わかりました。お任せください。」

ゆきかぜ

「お願いします。」

運転手はトラックに乗り込み、内陸で手伝っている鋼の乙女へ資材を運びにいった。

やまと

「今日はこの船で最後だな。明日も頑張ろうな、ゆきかぜ。」

ゆきかぜ

「はい、やまとさん。」

やまと

「……………なあ、ゆきかぜ。」

ゆきかぜ

「? ……どこかしましたか?」

やまと

「いや、今ふっと思ったんだが……………」

ゆきかぜ

「？」

やまと

「……………あかぎといちは今も……………おれ達を見守ってるかな……………？」

ゆきかぜ

「……………。」

やまと

「すまん、合わない話だった。忘れてく（ゆきかぜ）……………きつと……………見守っていると思います……………。」

やまと

「……………そうだよな……………。」

ゆきかぜ

「私たちに未来まで生きて欲しいと伝えていたから……………必ずどこかで見守っていると思います。」

やまと

「ゆきかぜも随分言えるようになったな。」

ゆきかぜ

「いつ、いえ！私なんかまだ……………。」

やまと

「おいおい、もっと自信を持ってよ、ゆきかぜ。確かにまだ暗いイメージがあるけどよ、戦争が終わったんだから、もっと明るく振る舞えよ。」

ゆきかぜ

「でっ、でも……。」

やまと

「あのなあ、ゆきかぜ。おれがゆきかぜに返事や感謝の仕方を教えて、ちゃんとできただろ？だから、今回もおれからの課題だ。」

ゆきかぜ

「……わかりました。」

やまと

「うむ、それでいい。……っと今日は司令官のところに行くんだっ  
たな。行くぞ、ゆきかぜ。」

ゆきかぜ

「……はい！」

訓練ではないが、久しぶりのやまとの指導に、この日のゆきかぜの表情はどこか嬉しそうだった。

場所は変わって北海道。

たった三人にもかかわらず、予定よりも復興作業を短縮できた。

三人の航空機の鋼の乙女が中間地点から資材を一気に現地に運び、元帝国海軍の整備士や技術者の協力と連携によって、ついに北海道の復興作業に到達した。

以外に知られていないが、北海道も大規模な空襲を受けている。

しかし、都市部はすでに終わり、地方への物資輸送が主流となっていた。

ナナ

「ねえ、てんちゃん、大丈夫？少し持とうか？」

てんざん

「だっ、大丈夫ですよ、ナナお姉さま。ぜえ、ぜえ。」

笑顔でナナに伝えるてんざん。しかし、小さい身体で支えるのが難しいのか、少しフラフラした飛行をしている。

ナナ

「無理しなくてもいいんだよ！？途中で休憩したほうが（てんざん）

「まだ、ぜえ、ぜえ、……私は行けます！」

ナナ

「あっ、てんちゃん、高度上げて！」

てんざん

「えっ？」

てんざんの目の前に連なる山脈が。

てんざん



「あわわわわー！！た、助けて下さい！ナナお姉さまー！持ち上がれませぬー！」

ナナ

「しっかりして、てんちゃん！ほら、落ち着いて！」

下から物資を支えるようにしててんざんのバランスを補正、そのまま高度を上げて難を逃れた。

そのまま村に到着。

ナナ

「だから言ったのに。」

てんざん

「あう〜。もっ、申し訳ありませんでした、ナナお姉さま……。」「

ナナ

「まあ、無事に着いたから、そんなに落ち込まなくていいよ。それに、てんちゃんのおかげで一回の輸送で済んだから。」「

てんざん

「っ、次こそは頑張ります！」

伝令

「ナナ殿、てんざん殿、物資輸送が終わりました。」「

ナナ

「うん、分かった。てんちゃん、戻るよ。」「

てんざん

「はい、ナナお姉さま。」

ナナとてんざんは北海道の物資集積場兼休憩施設に戻っていった。

その途中で……

ナナ

「あれっ?」

山脈を抜けて、下に森が広がる場所で何か人工物を見つける。

てんざん

「どうしましたか、ナナお姉さま?」

ナナ

「てんちゃん、あそこに白い物が見える?」

てんざん

「はい、見えます。でも、あれは自然な物ではありませんね。」

ナナ

「ぼくもそう思ったんだけど……。ちょっと様子見てこない?」

そして、二人は白い物体の側で着陸。

ナナ

「何だろう、これ？二つあるみたいだけど……。」

てんざん

「後ろにエンジンが隙間から見えますし、機銃台もありますから戦闘機だと思いますが……。」

ナナ

「そうなんだけど……だとしたら、変な形だよね。何と言うか……全体的に円錐のように見えるし……。」

てんざん

「片方の先端部分の操縦席の窓が開いていますので、誰かここで降りたのでしょうか？」

ナナ

「まあ、とりあえず報告してあとで詳しく調べようか。場所も休憩施設からそう遠くないし。」

てんざん

「そうですね、ナナお姉さま。」

二人がその場を後にしようとした時、

二人

「……!!?」

後ろで音が聞こえた。振り返ると……

ナナ

「いつ、今……なんか音が聞こえたよね……?」

てんざん

「でっ、でもさっきと変わっていませんが……?」

確かに謎の物体は先程と同じようであった

はずだった。

てんざん

「あっ、あわわー！なっ、ナナお姉さま、操縦席の窓が閉まっています!」

ナナ

「あっ、本当だ!でも、誰も乗っていないよ!？」

ゴォーン、ゴォーン

物体の後ろ、エンジン部分から低い稼働音がした。

てんざん

「なっ、何なんですか!？こっ、怖いです、ナナお姉さま!」

ナナ

「てんちゃん!飛ぶ準備できた?」

てんざん

「はっ、はい!」

ナナ

「少し離れて様子を見よう！」

二人が空に上がり、二つの戦闘機を確認すると、二つとも空に上がり、先端を二人に向けていた。

てんざん

「何なんですか！？私たちを見ているように見えますが……！」

ナナ

「てんちゃん！気をつけて！」

二人が機銃を構え、応戦体勢をとると、

ズバババババツ

先端部分から青色の細かい粒子弾を二人に放つ。

ナナ

「うわっ！危ない！」

とっさに横に避けて機銃で反撃。しかし、

てんざん

「ナナお姉さま、装甲が硬くて効きません！」

ナナ

「だっ、大丈夫だよ！てんちゃん！うまく後ろに回り込んでエンジンを狙って！」

だが、二つの戦闘機はその場を動かずに機体だけを回して常に二人

を正面を捉える。

正面に捉えては攻撃をする。とはいえ、速度はさほど速くはないし、一直線だから避けられるが、弱点を守るようにして二人を後ろに回り込ませない。

ナナ

「どっ、どうすれば……。」

もしレイがいれば簡単に破壊できただろう。しかし、ここにはいない。自分たちでやるしかないのだ。

ナナ

「……………あれっ?」

ナナは気づいた。二機は二人を狙っているのではなく、一機が一人を狙っていることに。

試しにてんざんの避ける方向と逆に避けた。

すると、一機はてんざんだけに、もう一機はナナだけに向いていた。

ナナ

「てんちゃん!」

てんざん

「なっ、何でしょうか!」

ナナ

「ぼくの避ける方向と逆に回り込んで!」

てんざん

「わっ、わかりました！」

てんざんがナナと逆方向に避けると、てんざんを狙う一機が回り、ちょうどナナにエンジン部分を見せた。

ナナ

「いっけー！！」

ナナは自分を狙う戦闘機の攻撃を避けて、てんざんを狙う戦闘機のエンジン部分に機銃を放つ。

ダダダッ      ドカーン

思惑通り、エンジン部分に当たり、爆発、機体はバラバラに砕けた。

ナナ

「てんちゃん！今のうちに、こっちの戦闘機のエンジン部分を狙って！」

てんざん

「わかりました！」

そして、戦闘機を二人で挟む形をとり、てんざんがすかさずエンジン部分を狙う。

てんざん

「当たってください！」

と機銃を放つ。

ドカーン

もう一機も撃破した。

ナナ

「はあ、はあ、てんちゃん、大丈夫？」

てんざん

「ぜえ、ぜえ、お姉さまこそ大丈夫ですか？」

ナナ

「うん、なんとかね。」

てんざん

「私も大丈夫です。」

二人は地面に降りて少し休憩した。

ナナ

「それにしても何だったんだろう、今の。」

てんざん

「なんか、青色の弾のような攻撃でしたし。それに、その場を動かずに回ることができる戦闘機ってありませんよね？」

ナナ

「いくらなんでもあんなの無理だよ。多分どの国も見ただことないと思う。」



と話しているよ、

てんざん

「なっ、ナナお姉さま！向こうに人が倒れています！」

ナナ

「ほっ、ホントだ！」

二人は倒れている人に近寄る。白い服の男性だった。

ナナ

「でも……どうしてこんなところに？人が通るルートじゃないし……」

てんざん

「そういえば、あの戦闘機の一つが開いていましたよね。もしかしたら……。」

ナナ

「そうかもしれないね。ちょっと起こしてみようか。」

ナナはそっと男性に触れる。

### 第1章3話 南は関東、北は北海道（後書き）

どうでもいい戦争雑学

日本の対戦車ロケット砲

二

対戦車ロケット砲の代表はバズーカであるが、弾は成形炸薬弾という漏斗状に成形すると爆発力が中空になった空間に集束されて厚い装甲板でも貫通できるノイマン効果（モンロー効果）を発揮する。

開発したのはスイスの発明家である。しかし、法外な特許料でアメリカ以外は商談は成立しなかった。

ノイマン効果の実用化成功を知った各国は独自で小銃から発射するてきだん擲弾を開発。

日本はドイツが東部戦線で小銃用擲弾がある程度の成果をあげたことで、弾が楕円形であることで楕円弾と表現し、「ダ」が「タ」に変じて「タ弾」となったが、自力で開発するには至らなかった。

ドイツは小銃用擲弾は放物線弾道で発射することによる照準の難しさと同口径増大が不可能なことから、成形炸薬の投射をロケット砲に頼ることになった。

しかし、日本だけは成形炸薬とロケット技術による対戦車ロケット砲のアイディアに気づかず、ドイツから図面をもらうまで開発をしなかった。

「一発必中主義」の日本は命中精度の悪いロケット砲を日陰者扱い

にしたためか、四三年に直径二センチ及び四センチの「噴進砲（弾）」を制式化され、陸軍の資料提供で海軍もロケット爆弾を開発するなど急にロケット砲の研究を推進され、十分に優秀な技術者をあてることができなかつたためかは不明である。

一九四三年四月にアメリカとドイツのバズーカ砲の図面が提供された。ロケットと夕弾を結び付け「ロタ弾」という秘匿名称で開発を開始する。

完成したのは一九四四年夏、砲身長一五センチ、口径七四ミリのロタ砲こと「四式七センチ噴進砲」と「四式七センチ噴進穿甲弾」終戦までに三千数百門生産されたが、これは計画数量であり、実際に生産・配備されたのはごくわずかだったと伝えられている。硫黄島や沖縄に配備されず、ロタ砲で破壊された米戦車は一両もない。

前線の将兵にとっては「間に合わなかった兵器」であった。

**第1章4話      なんだかんだですごい指揮官！？（前書き）**

ついに別ゲームネタが入ります。

原作については活動報告に書いてあるので知りたい人はチェックしてください。

第1章4話 なんだかんだですごい指揮官!?

男は意識を取り戻す。

「うつ……………」

ナナ

「あつ、目覚めました。」

てんざん

「あの〜、大丈夫ですか？」

男

「なんとか……………」

男の目の焦点が合っていないのか、二人を無視して辺りをキョロキョロしている。

男

「ここは…………シベリアでない…………?」

そして、二人の女の子がこちらを心配している様子で見ていることに気がついた。

てんざん

「あの〜、本当に大丈夫ですか？」

男

「…………すまなかった。私は大丈夫だ。君達は…………?」

ナナ

「ぼくたちは人が倒れていたから助けよう……。」

男

「そうだったのか、すまない。」

男はその場を立つ。

男

「私のことは心配なくていい。君達は家に帰りなさい。」

ナナ

「助けてあげたのになに、その態度！第一こんな場所で何をするつもりなの？人のいない森の中で！」

てんざん

「なっ、ナナお姉さま、落ち着いてください！」

男

「ここから帰るだけだ。そうだ、君達に聞きたいことがある。」

てんざん

「な、何でしょうか？」

男

「近くに二つの……円錐の形をした……戦闘機を見なかったか？」

二人

「へっ！？」

男 「!?!?.....どっ、どうした?」

急に声が八モる二人に少し驚いた男。

てんざん

「あっ.....あの〜.....。」

ナナ

「じつ.....実は.....ぼくたち.....その.....戦闘機.....」っ、壊しち  
やっただけど.....。」

男

「そうか。.....って、えええっ!?!?!?」

てんざん

「べっ、別に悪気があって壊したんじゃないんです!」

ナナ

「そっ、そう!その戦闘機が急にぼくたちに攻撃してきたから.....。」

「

男

「.....そうか、ならば仕方ない。」

ナナ

「えっ!?!?ぼっ、ぼくたちを叱らないの.....?」

男

「多分墜落の衝撃で迎撃システムが作動したんだろう.....。」

てんぞん

「つ、墜落ですか?!?!?」

ナナ

「あの、おじさん何処から来たの?」

男

「おっ、おじさん……。これでもまだ二十代後半だぞ!せめてお兄さんとか……。」

ナナ

「あっ、ああっ、ごっ、ごめんなさい。」

男

「……………まあ、いいだろう。私はシベリア上空でトラブルが発生し、ここに墜落した。」

てんぞん

「しっ、シベリアからですか!?!」

男

「ところで……………ここは何処だ?」

ナナ

「ここは北海道。日本だけだ。」

男

「そうか。とにかく君達が私を見つけたおかげで助かったが、戦闘機『アロー・ヘッド』がないから帰還できな……。」



ふと気づく。彼女たちはどうやってアロー・ヘッドを破壊したのか？

ナナ

「さっきの『アロー・ヘッド』って言うんだ。」

てんざん

「聞いたことがありませんね、ナナお姉さま。」

男

「君達が戦闘機を破壊したんだよな。どうやって破壊した？」

ナナ

「えっ、えっと…後ろに回り込んでエンジン部分を射撃したけど。」

男

(……ありえん。彼女たちはどう見ても13〜17ぐらいの少女。

そもそも何故武器を所有している？だが今は……)

「通信機があれば……。」

ナナ

「通信機？確か休憩施設にあったよね、てんちゃん？」

てんざん

「えっと、確か第3施設にありました。」

男

「そうなのか！君達、できればでいいのなら案内してくれるか？通信機で予備隊から戦闘機を派遣してくれるはずだ。」

ナナ

「ま、こんなところで話しても仕方ないし。とりあえず休憩施設に連れていくよ。まだ話も聞きたいし。」

男

「そうか、恩に着る。」

ナナ

「別に、人助けみたいなものだし。じゃあ、てんちゃん、右手持って。ぼくは左手持つから。」

てんざん

「わかりました、ナナお姉さま。」

と男の両腕を掴む二人。

ナナ

「ちょっと寒いけどすぐだから我慢してね。」

男

「なっ、何を？……って、おわっ!?!?」

男の疑問を無視して飛び立つ二人。無論、少女二人が飛ぶなんて想像できるわけもなく、単身で初めての飛行。二人に両腕を掴まれているので、ほとんどぶら下がっている状態だった。

3分後、休憩施設に到着。

レイ

「遅いぞ、二人とも！」

帰ってきた矢先、休憩施設の前で待っていたレイに叱られる。

レイ

「今日の分の輸送は終わったかもしれないが、まだ物資の足りない場所がある。だからこそ素早く戻ることが大切なのに！」

ナナ

「じっ、じめん、レイ……。」

てんざん

「申し訳ありません、レイお姉さま……。」

レイ

「まったく……。ところで、その人は誰だ？」

ナナ

「えっと、帰る途中、森の中で倒れていたから連れてきたんだけど……。」

てんざん

「通信機を利用したいと言っていたので……。」

レイ

「森の中で倒れていたから連れてきたのはいいが、部外者に通信機を使わせるにはいけない。」

ナナ

「レイ、この人は帰る為に通信機を使いたいらしいんだ。」

レイ

「ダメだ。第一見ず知らずの人に通信機を使わせるのは違反だ。何をしでかすか分かったもんじゃない。」

てんざん

「レイお姉さま！この人は悪い人ではありません！」

男

「いや、もういいんだ。」

ナナ

「えっ！？でも、帰れないんじゃないの？」

男

「その心配は無い。」

二人

「えっ？」

男が顔を上げて空を見上げる。その動作にナナ、てんざん、遅れてレイが続く。

上空から一機の飛行物体が近づいていた。

レイ

「敵か！？」

レイが近づくと飛行物体に対して戦闘態勢をとろうとすると、

男

「心配しないでくれ。私がいるから安全だ。」

三人

「!!!?」

男の発言に驚く三人。

やがて飛行物体は男の目の前まで来ると、ホバリングして着地した。

先程の戦闘機『アロー・ヘッド』と違い、胴体の上部に上から見れば円形をした部分があり、アンテナのようなものが埋め込まれている少し小型のものだった。

ナナ

「これは？」

男

「偵察機『アウル・ライト』。偵察機だけに速度はあるが、武装はバルカンのみだ。」

ナナ

「バルカンって…ぼくたちに攻撃してきた時の青色の弾のこと？」

男

「そつだ。正確には粒子弾だな。」

てんざん

「でも、私たちは初めて見ます。」

男

「それはお互い様だ。私も君達が単身で空を飛んでいるのは初めて見た。いや、君達のような存在を初めて知ったと言うべきか。」

レイ

「私たちのことを知らないのか？」

男

「なぜなら私の生まれた地球とは昔の地球に私がいるのだから。」

三人

「……………??？」

男

「つまり、時空間を抜けてここに来た。簡単に言えば、宇宙から来たということだ。」

三人

「……………えっ、ええっ——！！！！？」

男

「ようやく理解してくれたかな？」

レイ

「っ、つまり、……………あなたは……………宇宙人！？」

男

「ここは未来からやって来た指揮官としてもらいたいな。」

ナナ

「どっちにしても驚くよー！」

てんざん

「あ、あの〜、すごいことは分かったのですが……指揮官とは？」

ナナ

「何でてんちゃんは普通に聞けるの……？」

男

「自己紹介が遅れていたな。私はアレン・F・ソフト。特別遠征隊の総長及び最高指揮官。皆からは提督と呼ばれていたが、アレン指揮官と呼んでも構わない。」

三人

「さっ、最高指揮官!？」

ナナ

「階級だけだったらぼくたちよりもずっと上じゃん！」

てんざん

「もしかしたら司令官よりも上かも知れませんか!？」

レイ

「部外者とはいえ、ここまで階級が上とは……。アレン指揮官殿、失礼致しました！」

ナナ

「って、レイ!いきなり敬語に切り替えないでよ!」

レイ

「あっ、いや、でも……。」

アレン

(何故私が宇宙から来たことよりも階級に驚いているんだ？ひよつとすると彼女たちは……)

「と、とりあえず先程のような対応で構わないのだが……。私も少しきつい言い方をしていたし……。」

とりあえずレイたちと和解したアレンは休憩施設に泊まることにした。無論、個室にだが。



## 第1章4話 なんだかんだですごい指揮官！？（後書き）

どうでもいい戦争雑学

二次戦中の世界のロケット砲

前回少し触れましたが、今度は世界版。

ロケット砲開発のきっかけはアメリカが買い取った成形炸薬弾を使用する為の時。

アメリカも他国同様小銃用擲弾のM10を開発していたが、発射には重過ぎて倉庫入りになった。これを歩兵用の軽便火器として肩射ちロケット砲を研究してきたアバディーン武器実験場のスキンナー大佐の目に止まり、ロケット砲で試したところ、初弾から命中した。成形炸薬弾は低速のロケット砲で発射するのが理想的となった。

そして、一九四二年四月に試作設計命令が出され、完成したのは二三六インチ（六センチ）の『M1ロケットランチャー』後にバズーカと愛称された。

ドイツはそれまで成形炸薬弾付き小型無反動砲『ファウストパトローネ』、別名『パンツァーパトローネ』を使用していたが、ソ連に送られるアメリカのバズーカを鹵獲し、バズーカより大きい八八ミリ口径のロケット砲『ラケットンパンツァーブクゼ』、別名『パンツァーシュレック』を開発し、前線に送る。

しかし、イギリスはこの二つを使用せずに、独自のロケット砲を使用していた。『PIAT』と呼ばれる二つのロケット砲と異なるロケット砲を使用。PIATは二つのロケット砲より早く開発された

が、重量一四・四キロで兵士には好評でなかった。その重量のため二人で行動し（一人は砲弾携行）、砲弾は後ろから入れるのではなく、先込め式であった。二つのロケット砲と比べれば、使い勝手は悪かったのに、PIATは完全に開発されず、それどころか英軍の頑固さから朝鮮戦争まで使われた。

第1章5話 北海道の寒さに身を委ねて（前書き）

なんかレイのキャラが変わったような……

でも、こういうレイも実際あったかもしれない。

仲間に心配かけたくないから？

だからって一人で苦しむのはどうなの？

第1章5話 北海道の寒さに身を委ねて

アレンが救助(?)されて休憩施設で泊まることになった日の夜8時。

アレンが乗っていた戦闘機『アロー・ヘッド』墜落現場に二人の影があった。

「やっぱり何も無いじゃない。」

「レーダーに『アロー・ヘッド』及び『アウル・ライト』を感知…」

「それ4時間前でしょ？大体、島から場所が遠すぎるし、もう出発したんじゃないの？」

「……そうすればレーダーに反応する……。」

「じゃあ、どうしてないの？」

「……不明。」

「……とりあえず將軍に報告しに帰りましょ。」

「……任務断念。」

「なんで私に向かって言っつものよ……。」

「……遅れたのは事実。」

「だったら貴方一人飛んで先に行けば間に合っただんじやないの？私みたいなずっと船で移動するより。」

「……任務内容は絶対。」

「……分かってるけど……。」

（確かに戦闘機の回収なら私のようなのも必要だけど……將軍は何を考えて…？）

二人は闇夜に紛れ込むようにその場を離れた。

朝5時、アレンは休憩施設から外に出ようとした。目的は第3施設の通信機。

一機だけだがアウル・ライトが来たので、本隊が近く（地球の近く）にいるのではない、通信機で本隊の場所を聞き出し、アウル・ライトに乗って合流するつもりだった。

前日にてんざんから休憩施設の全体を聞いていた。アレンが泊まったのは第2施設。そこから真っ直ぐ行くと訓練場があり、そこを右に曲がって真っ直ぐ行けば第3施設である。

と言っていたが、休憩施設とはもともとは住まなくなったアパート群を借りていて、訓練場はいわゆるマンションにある小さな公園のような広場である。

ちなみに集積場はいわゆる駐車場のことである。

通信機は第3施設の101号室。

アレンはできる限り人目を避けるために早く起きていた。

外に出るとまだまだ薄暗く、寒さが容赦なく襲う。雪こそは降っていないもの、気温は氷点下2度。コートは着ているが、さすがは北海道である。

そして、訓練場と言われた公園のような広場に着くと、

「はあっ!」

と力強い声!?

見ると、そこにレイがいた。

レイ

「……………むっ……………」

レイは気配を感じ取り、後ろを向けば、首を伸ばして見ていたアレンと目が合った。

レイ

「あっ、アレン指揮官殿!?!このような時間に何をしているのですか?」

アレン

(ぎくっ!?!まずい……………、まさかここで鉢合わせするとは……………!)

「きつ、君こそ、こつ、ここで何を、していたんだ？」

愛刀の主翼切を鞘に納めてから、

レイ

「私ですか？私は訓練をしていただけですが。」

アレン

「こつ、こんな時間から!？」

レイ

「いえ、4時半からいます。」

アレン

(うおおーい!!ここまで予想できなかった!いや、むしろ無理だろ!早過ぎるだろ!)

思い切り出鼻をくじかれたアレン。しかもこんな早い時間であることが裏目に出た。

怪し過ぎる!

まさに八方塞がりであった。

レイ

「それで、指揮官殿は朝早くから何を？」

アレン

「え、え〜つと……。ちよつと……」

思い付いたのが、

「……メンテナンスを……。」

レイ

「メンテナンス？」

アレン

「ほら、私の元に一機の偵察機が来ただろ？帰るときに何かしら欠点があれば本隊に合流できないからさ、今のうちにメンテナンスを……。」

レイ

「メンテナンスなら明るくなってからでも間に合いますけど？」

アレン

「いや、その……。」

レイ

「まさか……黙って飛んで本隊と合流するのですか？」

アレン

「まっ、まあ、私はもともとここにいる必要は無いと思って。」

レイ

「確かにそうかも知れませんが……。」

アレン

「それに、私はこれでも任務の途中であるし、私の帰還を待っている部下も心配しているだろう。」

レイ



「……………わかりました。ですけど、まだ暗いですよ。大丈夫ですか？」

アレン

「あの偵察機は一応索敵範囲が広いから。それに、もともと宇宙で戦える設計だ。暗闇には慣れている。」

レイ

「そうでしたか。では気をつけてください。ナナとてんざんには私から伝えておきます。」

アレン

「ありがとうございます。」

なんであれで納得したのか？上官だから？

とりあえずレイを説得してその場を凌いだアレン。

（とりあえず私への警戒は解けるだろう。）

そして、レイに気付かれないように第3施設に向かった。

第3施設の101号室に着いたアレン。早速てんざんからひそかに借りた鍵でドアを開けて中に入る。

しかし、通信機は何処にもなかった。

( 妙に変だ。確かここのはずだが……。 )

通信機以外の機器も部屋にあったが、肝心のものは無かった。

( やはりない！もしかして違うのか？ )

と何気なく机にあったファイルを開けると、

「 なっ、何だつて〜！！！！！？ 」

思わず声に出したそのファイルには『通信機故障の件について。十日に予備の要請するも、まだ届いていない。二月十二日、著』

現在二月十九日。要請してから九日も経っている！？

( これでは本隊と連絡して位置を掴むことができない！ )

と、そこに、

レイ

「 なっ、何事だ！？ 」

勢いよくドアを開けて中に入るレイ。

そういえば第3施設と訓練場の距離は50m前後。あれだけでかい声出せば気付かれるわ。

不本意ながら本日二回目の遭遇。

レイ

「 アレン指揮官殿！？帰ったはずでは！？ 」

アレン

「あっ……、ええっと……。」

もはや言い逃れがないと思ったのか、本当の事を話し出す。

アレン

「じつ、実は……、本隊の位置がわからないから……通信機で場所を聞こうと思って……。でも、君は頑なに拒んでいたから……仕方なく……。」

レイ

「……………」

レイの冷たい視線が突き刺さる。もう終わった……。先程の訓練の様子を見ていて、彼女の強さは分かる。私はここで終わる。そう思った。

レイは懐から何かを取り出し、アレンに渡した。  
四角い黒色の物体。

アレン

「これは……？」

レイ

「常備用の通信機。」

アレン

「なぜ……………」

レイ

「通信機を使わなければ帰れないと言いましたから。」

アレン

「……………」

レイの意外な行動に啞然するばかりである。

そのまま抜刀されて斬られて死ぬことも考えていた。

レイ

「それに…………、貴方を待つ人たちの為にも帰ってほしいと思ったから。私たちには…………大切な姉がいました。戦時中でも私たちを支えてくれて…………、私たちの出勤には無事に帰ってくれるように祈りながら待っていました…………。でも、今はもういない…………守れなかった…………。」

でも、貴方にはまだ仲間が待っている。だからこそ、彼らに私たちのような苦しみをしてもらいたくないのです…………。さっきの訓練場で仲間が待っているのを聞いて考えたんです。

だからこそ…………指揮官殿が戻れるように協力します。」

アレン

「レイ……………」

彼女は私の部下を自分たちに例えて言ったのだらう。

今の言葉からは、レイも当時姉が亡くなった事に責任を少なからず

持っていたのだろう。そして辛かったのだろう。しかし、レイは真面目だ。決して表に出さなかっただろう。仲間に心配かけまいと。

なんでこう思えたのかは、過去にこういふ部下がいたことを知っているからだ。

薄暗くてよく見えなかったが、レイは最後まで俯いたままで、表情はどこか辛く寂しい様子だった。

レイが去った後、厳しい寒さが入ってくる薄暗い部屋の中で、アレはある決意する。

第1章6話 アメリカ軍、要塞島前の出会い（前書き）

話の進行の都合でまとめたので長くなりました。

また、台詞の間を詰めたので、見にくいから前のやり方がいいという方は、感想に書いてください。

普通の感想も受け付けますが。

オリキャラが出ます。

第1章6話 アメリカ軍、要塞島前の出会い

レイたちがアレンと初めて出会った日、アメリカではハワイのオアフ島にある基地の司令室（新築）にアメリカの鋼の乙女が集合していた。双子を除いて。

ルリ

「緊急を要する集合だなんて……、一体何を？」

クレア

「司令官も急だよな！。おれたちに集まってくて。」

ネコ

「自分から呼んだくせに遅いのニヤー。」

ハイネ

「まだ詳細な情報を整理できていないのでは？」

フランシス

「ルリさんにこれほどまで待たせるとは……、よほど重要なことなんでしょうね。」

スチュアート

「ああ、まだ来ないのか？どっか行っていいか？」

エイミー

「スチュアート！勝手に出て行こうとしない！」

エミリー

「でも、本当に遅いよ、お姉ちゃん。」

それぞれが愚痴るのも無理はない。呼び出されて司令室に集まっただけからすでに15分が経過していた。

ガチャ。

扉が開き、ようやく司令官が入ってきた。手には写真やら地図やらいろいろ持っていた。

司令官

「すまない、いろいろ資料が混ざってな。」

クレア

「遅えよ！司令官！」

ルリ

「クレア、落ち着きなさい。ですが司令官、ちゃんと説明していただけですか？私たちを待たせた理由を。」

司令官

「まあ、口で言うよりこれらを見てもらいたい。」

司令官は手に持っていたものを机の上に広げて置く。

エイミー

「写真に……地図？」

ルリ

「写真には島が写っていますわね。」

ハイネ

「これが自分たちを待たせた理由ですか？」

フランシス

「これだけルリさんを待たせて、しょうもないことだったら許しませんよ！」

司令官

「今回のことがどれくらいのことなのかは君達が決めることだ。」  
ルリ

「と言いますと？」

司令官

「まず、写真なのだが、三ヶ月前にライティング姉妹が撮影したも



のだ。」

全員

「!!!?」

エミリー

「三ヶ月前だったら私まだ生き返ってないよ!？」

エイミー

「というか、二週間前でしょ、生き返ったの。」

ハイネ

「なぜ三ヶ月前の写真を？」

司令官

「実は、写真が撮られてから何回か調査部隊を送ったのだが……」

クレア

「もしかしてこの島から攻撃されたとか!？」

司令官

「いや、皆無事に帰ってきているが、誰一人写真やビデオを持ち帰っていないのだ。」

ネコ

「ええ〜と、どういうことニヤ〜？」

ルリ

「つまり、写真はこれだけしかないということですか。」

司令官

「その通りだ。だが、調査部隊からは話だけは聞いている。」

スチュアート

「んん〜? 二二二二?」

ハイネ

「自分も見たことが無い島ですね。」

司令官

「この島は戦時中地図に無かったことから『名もなき島』と言われている。地図にないことで戦略的に好都合ということで諜報部がライトニング姉妹を送ったが、日本の鋼の乙女に先を越されたらしい。」

「  
エミリー

「へえ、そうだったんですか。日本もやるんですね。」

エミリー

「エミリー、今の発言、戦時中なら許されないわよ。」

エミリー

「ふええええ！！ごっつ、ごめんなさい！」

エミリー

「いつ、今はいいのよ！だから謝らなくてもいいのよ。」

エミリー

「そっ、そうなの？」

エミリー

「あー、もうっ！ホント誰かさんに似てるんだから！」

クレア

「顔赤くしながら言うなって」

エミリー

「なっ、あっ、赤くしてないわよ！」

司令官

「……話を進めてもいいかな？」

エミリー

「あっ、すみません……。」

フランス

「で、調査部隊から何を聞いたんですか？」

司令官

「私自身驚いた。今から四ヶ月前、島に何者かが侵入し、占拠した  
そうだ。」

ハイネ

「せっ、占拠でありますか？」

クレア

「じゃあ、そいつらは軍隊なのか？」

司令官

「确实とっていいだろう。しかし、その軍隊から……。」

ルリ  
「軍隊から？」

司令官

「鋼の乙女を確認したそうだ。」

全員

「なっ、何だって~~~~~!!!!!!!!!!!!!!?」  
ルリ

「鋼の乙女が一介の軍隊に!？」

エイミー

「それどういう意味!？」

司令官

「調査部隊からの報告だから、ほぼ确实だろう。」

クレア

「おい、それってどんな奴だったんだ？」

スチュアート

「あたしも興味ある〜」

司令官

「報告では航空機タイプの鋼の乙女で、黄土色に近い軍服と帽子を着ていて、左腕にプロペラ、右腕に武装していたらしい。」

エミリー

「武装つてどんなのですか？」

司令官

「航空機タイプには信じ難いが、戦車の砲塔をつけていたそうさ。」

エミリー

「せつ、戦車の砲塔！？」

ルリ

「ならば爆撃機タイプでしょうか？いずれにしても私や陸軍には脅威ですね。」

フランス

「心配することはありません、ルリさん！ルリさんには指一本触れさせません！」

ルリ

「その言葉、心強いですわ、フランス。」

フランス

「！！、るっ、ルリさんが褒めてくださった……！！光栄であります！」

ネコ

「でもなんで太平洋の真ん中なのに戦車の装備をしているニヤ？」

司令官

「そこまではまだ分かっていない。我々は一種の自信と信じている。」

ハイネ

「自信でありますか。」

クレア

「まっ、俺らだったら簡単に避けられるだろ。」

ネコ

「そっだニヤ。相手はバカなんだニヤ。」

司令官

「それともう一つ。彼女がその軍隊の指揮官であり、総大将である

らしい。」

エイミー

「総大将！？だったらすごく強いんじゃないの？」

司令官

「肩書きだけならそうかもしれないが、詳しいことはよく分かっていない。」

エイミー

「じゃあ、私たちが呼ばれた理由って……。」

司令官

「察しの通り、君達に調査してもらいたい。」

スチュアート

「でもさ、こちら戦車だよ？」

司令官

「小型の輸送艦に乗ってもらう。」

「つまり、島への上陸も考えているのですね。」

司令官

「しかし、上陸は不可能と考えている。」

エイミー

「!?!?……どうして!?!?」

司令官

「写真を見てもらえば分かるのだが、重機が海岸線で作業している。これらはすべて海岸線をコンクリートと鉄材で固め、上陸を不可能にしようとしている。」

クレア

「じゃあ、空からなら問題ねーじゃん。」

司令官

「それも簡単にはいかない。」

ハイネ

「なぜでありますか？」

司令官

「コンクリートで固めれば、上に対空装備の兵器を備え付けられる。

「  
ルリ

「海上だから船か航空機。しかし、コンクリートで固めて直接な上陸は不可。加えて対空装備で対策も万端。敵もまんざらではありませぬね。」

司令官

「写真を撮ってから三ヶ月以上経過しているから、ほとんどが機能すると思われる。君達でも厳しい条件だが。」

ルリ

「いいですわ。受けて立ちましょう。」

ネコ

「そうだニヤー アメリカを怒らせるとどうなるか思い知らせてやるニヤー！」

フランシス

「ルリさんを邪魔する輩は片っ端から潰すわよ！」

エイミー

「エイミー、スチュアート、行くわよ！」

スチュアート

「あいあい」

エイミー

「スチュアートさん、なんでこの時だけ素直に聞いていられたんだらう？」

そして、アメリカの鋼の乙女はその名も無き島へ向かう。だが、島を陥落させるのはそんなに甘くはなかった。

名も無き島西側。

島で唯一砂浜がある場所で、かつて日本の鋼の乙女もここから上陸した。しかし、海に続くことはなく、コンクリートでできた要塞級の壁で囲まれていた。

もはや島全体が固められ、上陸が困難なことを示していた。

午後4時、コンクリート要塞壁から海側に、一隻の輸送艦が出航しようとしていた。

???

「サクヤ、ツツ、気をつけて。」

サクヤ

「……諒解。」

オオツツ

「將軍、間に合いますか？ここから北海道だなんて。」

話し方で気付いたと思うが、4時間後に北海道に来た二人である。

???

「さあ？」

オオツツ

「……それでいいんですか？」

???

「何かあればレーダーが反応するから大丈夫だって。」

サクヤ

「……承知。……出航。」

輸送艦は出航し、北海道を目指す。

????

「ふう、これで戦闘機を回収できるといいんだけど……。」

そう言っつて砂浜に建てていた仮住居のようなプレハブに入った。

プレハブにはいくつかパソコンが置いてあり、パソコンごとに島の画面が映し出されている。無論、警備用の監視カメラの映像である。

????

「ここまで防御を固められたのはいいけど……、やっぱり材料不足になるわね。ツツとサクヤがうまく回収して、欧州に派遣した三人も何か持ち帰ってくれば、安心なんだけど……。」

ウウウウーッ!!!

島全体に警報が鳴り響く。通信機から、

「警戒警備区域に侵入者！アメリカの部隊です！」

またか……。

女性はため息をついた。

三ヶ月前にライトニング姉妹に写真を撮られてから何回もアメリカの調査部隊がやってきた。そのたびに自分が出撃してカメラやビデオなどを最優先に回収してきた。これ以上情報を漏らさないためである。

しかし、船を沈めてしまつと大事になるので、脅しと威嚇に近い形で追い払った。

女性はトランクから戦闘機の翼とプロペラを取り出し、翼を背中、プロペラを左腕に装着し、右腕には従来のよりも一回り小さい戦車



の砲塔を装備し、島東側から侵入者のもとに向かった。

ルリ

「あの島ですね。」

ハイネ

「まるで要塞のようであります。」

エイミー

「確かにあれじゃあ上陸は無理ね。」

彼女たちは島から2Km離れたところから島を観察している。

ルリ

「では、作戦を確認しますが、私とフランシスは戦艦3隻を率いてコンクリート部分に集中砲火をします。その間、敵の迎撃を予想されますから、クレア、ネコ、ハイネと数機の戦闘機で迎撃してください。ある程度コンクリートを破壊できたら、輸送艦を誘導し、エイミー、エイミー、スチュアートで内陸に侵入、対空装備を優先して破壊してください。」

エイミー

「!!!、るっ、ルリさん！敵が来ました！」

ルリ

「!?!?」

ルリの確認を聞いていた全員が島を見ると、島から戦闘機が出撃していた。

ルリ

「もう気づかれましたか。仕方ありません！クリア、ネコ、ハイネ！行きなさい！」

クリア

「おっしゃー！任せとけ！」

ネコ

「ニヤーが全部撃ち落としてやるニヤー！」

ハイネ

「了解であります！」

戦闘機は30機。やや多めだったが、三人にとって準備運動でしかなかった。

クリア

「何だよ、張り合いのねえ奴らだな。」

ネコ

「こんなポンコツに負けるはずがないニヤー」

ハイネ

「しかし、これだけでしょうか？」

ルリ

「ハイネの言う通りです。注意してください。」

すると、島から3機の戦闘機が出撃したが、

ネコ

「ニヤー！？あの戦闘機、プロペラがないニヤー！？」

ルリ

「くっ、ジェット戦闘機ですか。」

ハイネ

「しかもかなり速いです！」

それもそのはず、現代の最新鋭戦闘機である。もちろん彼女たちが知っているはずがない。

クレア

「とにかく、撃ち落としてやる！」

しかし、戦闘機は乙女たちの攻撃を簡単に避け、追尾ミサイルを発射する。

1機が水面ぎりぎりを伝ってルリに近づく。

ルリ

「！、これでは……、回避が間に合わない！」

フランス

「ルリさんに近づくなー！！」

フランススが全砲門を開いて攻撃、そのうち数発が命中、そのまま海に突っ込んで大破した。

他の戦闘機も、三人のフォーメーションと戦艦三隻と輸送艦からの対空射撃で撃破した。

クレア

「なんだあ、今の！？スゲー速いし、攻撃を簡単に避けちまっし！」

ネコ

「ニヤアの2倍は速かったニヤア！？」

ハイネ

「輸送艦の三人は大丈夫でありますか？」

エイミー

「ええ、こっちの被害は0だわ。」

エミリー

「ちよつと怖かったけど……。」

ルリ

「どうやら全員無事のようですね。フランシス、先程はありがとうございます。」

フランシス

「いつ、いえ、滅相ありません！私はルリさんの護衛艦なんですから！」

ルリ

「しかし、侮れませんね。たかだか小島でありながらあれほどとは……。まるで日本のようですね。」

????

「だったらここで撤退してくれば助かるんだけど？」

全員

「!?!?」

全員が声のしたところを向くと、一人の女性もとい鋼の乙女がいた。

????

「こんにちは、アメリカの鋼の乙女の皆さん。……と言ってもすでに日が傾いていますけどね。」

ルリ

「貴方は……、報告で聞いた乙女ですわね。」

クレア

「じゃあ、コイツが総大将!？」

????

「そこまで知られてるとは……。やっぱり調査部隊の船、沈めた方がよかつたかな？でも、結局そのまま帰してあげただけ。」

少し含み笑いを浮かべた表情をした。

彼女の右腕には、チハがつけていたような、見た目だけなら外しやすいような砲塔だった。色は灰色だ。

????

「まっ、初対面だから、まずは自己紹介しましょうか。私はルル。貴方たちが聞いている通り、あの島の軍総大将。部下からは將軍と呼ばれているけど。」

ルリ

「ならば話が早いですね。あの島は我々のものです。早急に撤退してください。」

ルル

「返事を分かっておきながら聞くの?」

クレア

「あー、めんどくせえ！撤退する気がねえなら、無理矢理でも撤退させてやる!」

クレアが単身突撃する。

ルリ

「なっ、クレア！戻りなさい!」

ネコ

「クレアちゃん!」

クレア

「アメリカに喧嘩を売ったこと、後悔させてやる!クロスラッシュヤ  
ー!!!」

爆弾を両手に抱えて手前1mのところまで、

クレア

「くらいやが……なっ!?!」

ハイネ

「きつ、消えたであります!?!」

ルリ

「クレア、後ろ!?!」

ルリが叫ぶと同時に

ドンッ、ドカン!

クレア

「ぐあっ!?!」

クレアの背後に戦車砲が命中。クレアはそのまま海に降下する。

ルリ

「クレア! くっ、ネコ! ハイネ!」

ネコ

「分かってるニャー!」

ハイネ

「クレアさん! 今助けるであります!」

ルリ

「フランシス! 私と二人で牽制を!」

フランシス

「了解です! ルリさん!」

ルル

「……別に救助には手出ししないから、援護しなくてもいいけど。」  
ルリ

「誰が信じますか!」

しかし、ルルの言う通り、クレアを輸送艦にまで運ぶ間、一切その

場から動かなかつた。いや、正確にはルリとフランススの攻撃を避けていた。クレアの救助後、

ルリ

「……なぜ手出ししなかつたんですか？」

ルリ

「私は別に貴方たちに危害を加えるつもりはありませんから。」

ルリ

「……そうですね。では、もうひとつ。なぜあの島を占拠するのですか？」

ルリ

「一時的にこの場所は中立だったから、拠点にはちょうど良かったんです。それに、要塞化しておかないと、取られるでしょ？ 敵の拠点を占拠した時に拠点を奪い返されないようにすることと同じよ。」

ルリ

「……では、貴方の目的は何ですか？」

ルリ

「簡単に言えば……兵器の残骸回収と資源の確保。安心して。手出ししなければ私たちも何もしないし、目的を達成すればこの島から撤退する。だから、この島は臨時の拠点。理解できたかしら、ルリさん。」

ルリ

「ですが、貴方たちのしていることは不法占拠です。ですので、今すぐ撤退してください！」

ルリ

「目の前でわざわざ見せてあげたのに……。今の貴方たちに私には勝てないわよ。なんなら、貴方たちの輸送艦と戦艦を2秒で沈めましょうか？」

ルリ

「くっ……。」

確かにクレアへのあまりにも早過ぎる攻撃とそれを可能にする実力を持っているルルには明らかかな戦力差がある。

ルリ

「……………わかりました。撤退します。」

ネコ

「ルリちゃん！？どうしてニャー！？？」

ハイネ

「そうですね、ルリさん！全員で集中攻撃すれば……………！」

ルリ

「まずはクレアの治療が先決です！ですが、私たちはまだ諦めたわけではありませんわよ。これは警告です！次に来るときまでに撤退しなさい！」

ルル

「別に目的さえ達成すれば撤退するから放っておいても……………。あつ、撤退する前に教えておきたいことがあるんだけど？」

ルリ

「……………何ですか？」

ルル

「今ね、私の部下が欧州に三人、日本に二人いるわ。勿論、全員貴方たちの知らない鋼の乙女。」

全員

「!?!？」

ルル

「もうひとつは、私は鋼の乙女ではない。」

全員

「!?!?!?!?!？」

ルリ

「貴方……………何者？」



ルル  
「人間。もともとは技術者であり、現役の軍人。私がつけているのは、鋼の乙女装備三型」。この世界の鋼の乙女の技術に私の技術力で独自に再現したの。」

ルリ

「ありえませんか……。」

ルル

「不可能を可能に変える。その技術を習得した私だからこそ……この世界に来れたの。さっきのプロペラ無しの戦闘機……、貴方たちの未来に造られたものを再現したものよ。」

確か…… F - 15…… だったかな？それと、部下の鋼の乙女、五人のうち二人は私が開発したの。」

ルリ

「……… 言いたい事はそれだけですか？」

ルル

「？……… まあ、そうだけど………！！！」

ルルがポケットから通信機を取り出した。すぐにしまい込み、

ルル

「こちらも用事ができました。それではアメリカの鋼の乙女の皆さん、我々の邪魔をしないように……。」

ルリ

「………！！？」

ルリには最後まで脅しのように聞こえた。ルルは島に引き返した。

ルリ

「……… 全員撤退してください。」  
フランシス

「ルリさん……。」

アメリカ軍も後にこの場を去った。

## 第1章6話 アメリカ軍、要塞島前の出会い（後書き）

どうでもいい戦争雑学

近接信管（VT）

Variable Time Fuse

原作「萌え二次」1の日本軍シナリオ通常ストーリーでルリに支給された、砲弾が目標に近づくと起爆する、という兵器のことである。2では戦史紹介に名前だけ出してある。

近接信管は米国の一科学者が開発したもので「近接信管付砲弾」として使用されている。

近接信管には一種のミニ・レーダー装置が砲弾の弾頭部に搭載されていて、目標に接近すると電子信管が目標を感知して砲弾を起爆させる。

この砲弾は壕や陣地に潜む兵士たちの頭上で爆発し、多数の破片を撒き散らす榴弾効果で広範囲に兵士たちを殺傷するという最大効果を発揮した。

アメリカでは一九四一年八月に英国の光電管を用いる近接信管が極秘裏に化学使節団によって米国へもたらされ、一九四二年から二年間ワシントンのカーネギー研究所とバルチモア付近のジョン・ホプキンス大学の応用物理研究所で研究開発、実験もすべて成功した。近接信管は原子爆弾開発と同様の高い機密レベルに隠された極秘兵器で、製造に関わった作業員は自分が何を生産しているのかさえ知らなかった。

しかし、当初、英米の高官たちは近接信管の戦場での鹵獲を恐れ、不発弾を発生させないように水中に落下させないという条件下で使用を決定した。

だが、無愛想な態度で知られる国防省地上軍統括官ベン・レアー中将の使用制限撤廃要求が連合軍統合参謀本部参謀たちに支持され、一九四四年十二月十六日からいかなる地上戦でも使用できるとする通達が出された。

実は通達が出された同じ日に、ドイツ軍が反撃に転じ、ベルギーのアントワープ港を目標とする「ラインの守り作戦（米側：バルジの戦い）」が開始された日でもあった。

近接信管は「ラインの守り作戦」のドイツ軍をはじめ、欧州・太平洋戦線で「変な信管付砲弾（米第3軍指揮官ジョージ・パットン中将が送った書簡から）」として大いに効果を発揮した。

**第1章7話 北海道でこたこたな会話（前書き）**

後半オリキャラ同士の会話が入って来ます。

ーから説明する難しさを実感しました。

## 第1章7話 北海道でこたごたな会話

二月十八日。

日本では、アレン指揮官が救助され、アメリカでは要塞島とある謎の軍と接触した。

次の日の朝、日本の北海道で、アレンとレイのやり取りの後、アレンは偵察機『アウル・ライト』に乗り、レイの見送る中遙か上空へ飛び立った。

レイ

（これで良かったのか？いや、もともとはこの世界にいたわけではないのだから……。）

しかし、こうして別れると何だか寂しくなる。そう思った。

レイにとってアレンは自分の内の想いを受け止めてくれた人だった。実は第3施設でのやり取りの後、急に恥ずかしくなったのだ。その為なのか、その後の訓練になにかと集中が切れるとアレンの事を考えていた。そのたびに喝を入れ直して訓練を再開した。

ちなみに、朝4時半から訓練していたのは、親友であり、ライバル（主に胸の大きさ比べ）である、はやぶさの影響である。はやぶさ達日本陸軍は関東から西方に復興作業をしている。現在は中国・四国にいと聞いている。

朝の訓練を終え、食堂に行ったレイ。すでにナナとてんざんがいた。

ナナ

「レイ？どうしたの？いつもの時間に来ないなんて。」

てんざん

「訓練を長くされたのですか？」

レイ

「いや、いつも通りだが……。」

本来なら7時に来ていたのだが、時計は7時半を指していた。

ナナ

「ふ〜ん、ならいいんだけど……。あつ、そうだ、レイ、アレン指揮官見なかった？食堂来る前に部屋を見たんだけどいなくてさ。」

レイ

「……。」

てんざん

「？、どうしたのですか、レイお姉さま？」

レイ

「……実は……。」

レイは朝のやり取りを二人に話し出す。

ナナ

「ふ〜ん、そっかあ、帰っちゃんだ。」

てんざん

「残念ですね。せつかく仲良くなったのですから。」

ナナ

「レイはそれでよかったの？」

レイ

「ああ、確かにもっと話をしたかったと思ったが、仕方ないことだ。」

「

ナナ

「ふん……。」「

レイ

「？、なつ、ナナ？」「

ナナ

「ねえ、レイさ、アレン指揮官のことが……」

「……好きなの？」「

レイ

「！？、なつ、ナナ！いきなり何を言い出すんだ！？」

ナナはなんかニヤツとした目つきをしている。

ナナ

「だって、訓練中にも心配して考えてこんだんでしょう」「

レイ

「た、確かにそうだが、そういうことじゃなくて……。」「

てんざん

「も、もしかして……レイお姉さまは……アレン指揮官のことが……」

「……ポツ。」「

レイ

「て、てんざんまで何を言い出すんだ！そして、てんざん！なぜ顔が赤い！」「

ナナ

「そういうレイも顔真っ赤。かわいい。」「



レイ

「かつ、かわつ…！ええい、ナナ！そこに直れ！刀のさびにしてくれる！」

ナナ

「アハハ、また顔真っ赤にして怒ってる、怖い」

レイ

「あつ、こら、待てー！ナナあー！！！」

てんざん

「あわわわ、れっ、レイお姉さま！ナナお姉さま！危ないですよ！」

てんざんの注意も聞かず、食堂を出て、いつもの追いかけてが始まる。

勿論抜刀済み。

30分後、走り疲れた二人は訓練場もとい公園で仰向けに倒れていた。朝日が二人を包む。

ナナ

「疲れたー。もう…いつもこうなんだから……。」

レイ

「お前が…変なこと言うからだろ……。てんざんまで…影響受けていたし……。」

ナナ

「だって、事実じゃん……。」

レイ

「また抜刀されたいか……？」

ナナ

「もう無理だって……。レイってば戦時中とちっとも変わらないん

だから……。今は戦時中じゃないんだから……少しくらいならいいと思うけど……。認めなよ、レイ……。」「

レイ  
「だから違う……。少し心配しただけだと言ってるだろ……。」「

てんざん  
「レイお姉さま、ナナお姉さま！」

ナナ

「てんちゃん？どうしたの……？」「

てんざん  
「司令官から通信です。」「

臨時に建てたテント内に、通信機が置いてある。三人は通信機の前に立ち、レイが取る。

レイ

「司令官殿ですか？」

司令官（日海）

「レイくんか！久しぶりに声を聞いて安心したよ。いや、良かった。」「

レイ

「それで、用件は何ですか？」

司令官（日海）

「レイくん……。久しぶりの私と何か話したいという気は無いのかね？」「

レイ

「ありません。まだ任務が終わってませんので。」「

司令官（日海）

「そ、そうか。レイくんも相変わらず真面目にしてるんだな。それでこそ日本の鋼の乙女のか、おわっ！？」

レイ

「？、し、司令官殿？」「

急に声が途絶え、後に、

やまと

「レイか？おれだ、やまとだ。久しぶりだな。」  
ゆきかぜ

「レイさん、お久しぶりです……。」

レイ

「やまとにゆきかぜ！そつちも元気そうだな。」

ナナ

「えっ！？やまとにゆきかぜ！？」

やまと

「おっ、ナナも近くに居るのか。」

レイ

「あと、てんざんもいるぞ。」

てんざん

「やまとお姉さま、ゆきかぜお姉さま、お久しぶりです。」

やまと

「そつちも元気そうだな。」

久しぶりの仲間との会話に熱中した乙女たち。

お互いの状況やたわいのない世間話を楽しんだ。

しばらくして、

レイ

「そういえば、司令官殿は？」

やまと

「あ、そうだった。じゃあ、代わるぜ。」

司令官（日海）

「はあ、まったく、やまとくんも強引だな。」

レイ

「で、司令官殿、用件は何ですか？」

司令官（日海）

「私にだけその態度か……。まあ、簡単に言えば、ドイツが資材を提供してくれるそうだと。で、資材を運ぶ大型輸送ヘリがレイくんたちのもとに着陸するらしい。」

レイ

「私たちのもとにですか？」

司令官（日海）

「今、北海道で資材や生活用品といった物資を運んでいるだろう？しかし、やはり広いからね、少しでも楽になるように私から向こうの司令官をお願いしたわけだ。内陸からの量ではまだかかりそうだからな。」

レイ

「そうでしたか。お気遣い感謝します。」

司令官（日海）

「まあ、これも仕事だからね。少しでも君達が任務を早く終わらせて戻ってきてもらいたいと思ってるからな。そしてその後は……むふふっ……。」

ナナ

「司令、戦時中からちっとも変わってないよね。ホント引いちゃうよ。」

司令官（日海）

「な、ナナくん？これでも少しは変わっているのだよ……？」

ナナ

「で、それだけなの？」

司令官（日海）

「あ、ああ。それと、その大型輸送ヘリにドイツとイタリアの鋼の乙女も便乗している。」

三人

「え、ええっー!?」

ナナ

「それ、ホントなの!?!」

てんざん

「な、何故ですか!?!」

司令官(日海)

「いや、私にもよく分からないのだが……。向こうは戦争が終わったから枢軸国同士、一度鋼の乙女に会いたいと言っていたが……。」

レイ

「そういう事なら別に構わないが……。」

ナナ

「まあ、いいんじゃないの? 枢軸国同士が集まるなんて滅多にない事だからさ。」

てんざん

「わ、私も賛成です。」

司令官(日海)

「そうか。確か午後3時に到着予定だそうだ。では後は頼んだぞ。」

レイ

「了解しました。」

通信機を置くレイ。

時計は午前9時を過ぎていた。

ナナ

「ねえ、レイ。」

レイ

「どうした、ナナ?」

ナナ

「……言わなくて良かったの?」

レイ

「何の事だ？」

てんざん

「アレン指揮官のことですよ。」

レイ

「信じてもらえるか分からないし、第一部外者だ。」

ナナ

「確かにそうだけどなおさら報告した方が…。」

レイ

「特別邪魔をしたわけではないだろう。道に倒れていたのを助けて、一泊して帰っていった。それだけだ。」

てんざん

「そうなのですが…。」

レイ

「それよりも今やるべき事をしようじゃないか。例の輸送ヘリが来る前に集積場の物資を運ぶぞ。」

ナナ

「……分かったよ…。」

ナナはそれでも納得がいかなかった。

関東から北への復興作業の指揮はレイに任せてある以上、従わざるを得なかった。

それから、三人はいつも通り物資輸送を開始した。

それまでの会話と通信を山から盗聴していた二人の鋼の乙女がいた。

オオツツ

「いいなあ、欧州の三人はずいぶん楽になるのか。」

望遠鏡で覗きながら独り言を漏らす。

このオオツツという鋼の乙女は作業服のような服装で、色はルルと同じ黄土色に近い。

身長はやまとやフェイとほぼ同じ。

茶髪に近い髪はショートで、黄土色の帽子を被っている。

両腕に武装はないが、ヴィルヘルムのような四角いリュックを背負っている、戦車タイプの鋼の乙女。

ちなみに装甲（胸）はそれなりにある。

オオツツ

「ねえ、サクヤさん。」

と振り返ると、

オオツツ

「…あ、あれ？」

あるのは非常用テントだけで、先程までいたもう一人の鋼の乙女がいなかった。

すると、そのテントからちょうど少女が出てきた。

サクヤ

「……何。」

オオツツ

「テントで何してたの？」

サクヤ

「……將軍から通信。……貴方とも話したいって。」

オオツツ

「えっ？私にも？」

サクヤ

「…………早く。…………後は私が観察する。」

オオツツ

「わ、分かったわよ…。」

渋々といった感じで望遠鏡を渡し、テントに入る。

サクヤは航空機タイプの鋼の乙女。身長はレイやナナとほぼ同じ少女なみ。オオツツより小さいが、階級はルルの次、ナンバー2である。

服装はサイズの大きい厚手の長袖Ｔシャツ一枚だけ着ている。色は白。

しかし、Ｔシャツとはいえ、ワンピースのように裾は膝下10cmまで届いています。ご安心を。

武装は両腕に機銃をそれぞれ二門ずつ、左腕が30mm機関砲、右腕が45mm機関砲。対戦車機銃でもある。

髪は金髪で短いツインテール。サイズの小さい白色のベレー帽を被っている。

望遠鏡を受け取ったサクヤは物資輸送する日本の鋼の乙女を望遠鏡で見た。

サクヤ

「…………あれが日本の…。」

独り言を漏らす、無表情に変わりなかった。

テント内にて

オオツツ



「將軍、何でしょうか？」

ルル

「ツツ？サクヤが望遠鏡を覗いてるって言ってたから。何か見えた？」

オオツツ

「いえ、目標物はありません。日本の鋼の乙女が三人で物資輸送しているだけでした。」

ルル

「そう……。あ、それと、輸送艦のレーダー、チェックした？」

オオツツ

「山の中にテント張って待機してと言ったのは誰ですか？」

ルル

「……だよ。ハハ……。」

オオツツ

「で、レーダーがどうしたんですか？」

ルル

「うん……。サクヤにもさっき言ったんだけど……。今日の午前6時に偵察機『アウル・ライト』が飛び立ったのを捉えてさ。」

オオツツ

「そうですか。……って、ええっ！！！！本当ですか！？」

ルル

「要塞島から発信しているレーダーが捉えているから、多分輸送艦のレーダーも捉えているはずだよ？」

オオツツ

「じゃあ、さっきの時間は一体……。 (泣) 」

ルル

「そ、そこまで落ち込まなくても……。それに、アウル・ライトの軌道を辿ったら月の周辺に特別遠征部隊の本隊がいたんだって。」

オオツツ

「でも、宇宙ですよ。無理じゃないですか。それに、本隊は太陽

系解放同盟軍を追ってるはずじゃ……?」  
ルル

「多分ワープ空間から何らかの手違いでこの世界に来たんだと思う。」

「  
オオツツ

「何なんですか、その偶然は……。」

ルル

「まあ、そういうことだから。」

オオツツ

「はあ。」

ルル

「それで……、サクヤとはうまくいつてる?」

オオツツ

「やり取りを聞いているなら分かりますよね……。」

ルル

「やっぱり? 性能と実力は折り紙つきなんだけど。あの子、意外と

顔見知りだからさ、仲良くしてね。」

オオツツ

「それができれば苦労しませんよ。」

ルル

「それもそうね……。そろそろ時間だから、通信切るね。」

オオツツ

「了解しました。」

ブツという音がして通信が切れる。

オオツツ

「うーん。やっぱり将軍は何を考えているのか……。こんなことなら苦労しないのに……。」

サクヤ

「…………何が苦労しないの？」  
オオツツ  
「っ！？」

振り返るといつの間にかサクヤがテントの入口に立っていた。

オオツツ  
「さ、サクヤ…さん。聞いてたの…………？」  
サクヤ  
「…………。」

サクヤは何も言わず、携帯用のオイルパックを持ち出した。

オオツツ  
「どこか行くのですか？」  
サクヤ  
「…………偵察。…あの三人の…。…心配無用、すぐ戻る…………。」  
オオツツ  
「あ、あの、ちよっ…………！」

しかし、オオツツの言葉に見向きもしないで、そのまま飛び立つサクヤ。  
オオツツは飛び立ったサクヤの姿を眺めることしかできなかった。

## 第1章7話 北海道でこたごたな会話（後書き）

どうでもいい戦争雑学

### CDL投光戦車

北アフリカ戦線で序盤、どさくさに紛れて進出したイタリア軍が英砂漠軍に大敗。

ドイツ軍が救援として参戦し、英軍の拠点エジプトのカイロまで進撃したとき、

英軍がスエズ運河をドイツ軍から守る為に運河をサーチライトで照らして監視するCDL作戦

(Canal Defense Light「運河防衛サーチライト」)

と秘匿名で呼んでいた事から。

運河は敵の攻撃に脆弱だったので、装甲戦闘車両にサーチライトを搭載して警戒する計画だった。

これは第一次世界大戦からこの計画は使われ、当時は自動車のエンジンに発電機と強い光力の特殊サーチライトで敵の奇襲を防いだ。

一九四一年の北アフリカ戦線勃発時にはすでに多くの実験を終了して、実用化段階であった。

サーチライトに炭素アーク灯を用いて、戦車の車台に搭載できる特殊投光器が開発された。

これを搭載した戦車が「CDL戦車」と呼ばれた。

CDL戦車は、マチルダとチャーチル歩兵戦車を改造して開発。そ

の後M3グラント戦車にも搭載された。

アーク灯の光はパラボラ型の反射装置に集光されて、戦車の開口スリットから1.5〜2m幅の光束となって夜間に投射された。

指揮官の命令で砲塔にある照射孔の装甲シャッターが、電気作動によって毎秒六回開閉することで、光をストロボライトのように点滅させて突進してくる敵兵を一時的に盲目状態にした。

この炭素アーク灯サーチライトは強力で、CDL戦車中隊一六両で一斉照射すると、8Km先でも新聞記事が読めたといわれている。

しかし、英軍は極秘扱いのままにして実戦にはほとんど投入されず、一九四五年三月「ライン川渡河作戦」でレマーゲン橋を照らし、ドイツ軍の奇襲を防いだのと、

ヒトラーが自殺した同年四月二十九日のエルベ川の渡河作戦の支援だけが実戦参加であった。

CDL戦車をより活躍させれば欧州戦線は歴史と違った終結を向かえただろうと、後に多くの専門家と軍関係者は述べていた。

余談

設定を変えて本編に出すかもしれない。

## 第1章8話 日独伊、日本に集結（前書き）

最近YouTubeやwikiばかり見て進みませんでした。更新から一週間空いてしまいました。

最近になって東方projectについて知るようになりました。完全に流行遅れです。しかもまだ全部を理解していない……。

それはさておき、今回は前半がなんかシリアスになっていますが……、うまく書けない……。

## 第1章8話 日独伊、日本に集結

本来の予定時刻よりも早く物資輸送が終わった。  
午後2時である。

三人の鋼の乙女は今休憩施設で休んでいる。

これからドイツからの物資が到着する。ドイツとイタリアの鋼の乙女も来るらしいが、向こうは客人である。だから、物資輸送を手伝わせるわけにはいかない  
というのがレイの考えだった。

三人の物資輸送に気づかれないように間近で観察（偵察）していた  
サクヤは一時撤退し、もとのテントに戻った。

帰ってくるとオオツツが拗ねたようにサクヤに聞く。

オオツツ

「サクヤさん。すぐ戻ると言いながら五時間も戻りませんでしたね。  
どこまで偵察しに行っただんですか？」

サクヤ

「……あの三人。」

オオツツ

「だからって作業が終わるまで付きつきりでする必要ないんじゃないんですか？ 貴方がいない間にまた將軍から通信が来たのよ。貴方に報告しようにも小型通信端末持って行かなかったからずっと待つてたんですよ！」

サクヤ

「……内容は何？」

オオツツ

「……………、例の特別遠征部隊…というより艦隊が、月の軌道から離れてこの地球に向かっているっていう事。」

サクヤ

「……………それだけ？」

オオツツ

「そうよ！だから具体的な動きを感知するまではその場で待機！こんな短い報告をするのにどれだけ待ったことか！」

サクヤ

「……………」

サクヤは無表情のまま聞いていた。その表情が気に喰わないのか、オオツツも少し声を荒げて続けた。

オオツツ

「聞いていますか！？確かに貴方は上官ですし、私は戦車タイプだからスムーズに偵察とかはできませんけど、せめて自分の言った事に責任持ってくださいよ！」

オオツツは言い終えると真っ直ぐにサクヤを見た。

サクヤは依然無表情。

重苦しい空気の中、ひたすら沈黙が続く。



そんなに長くは無かったと思う。

サクヤ

「……………さい。」

オオツツ

「……………えっ?」

サクヤ

「……………ごめん……ない……さい……………」

オオツツ

「……………」

サクヤ

「貴方の……………言う通り……………、私は……………自分が言ったことを……………守らなかつた……………。將軍にはできて……………部下にはできないなんて……………失格……………。次は……………絶対厳守……………します……………」

オオツツ

「……………、じ、実は……………私もちよつと言い過ぎたかなつて思つて反省しています……………。その行動も、私たちの負担を軽減させるためですよ。上官に対して失礼な事を言つてすみません……………」

サクヤ

「……………貴方が……………謝罪する必要は……………無……………。貴方の……………言う事こそ……………正……………。將軍も……………同じように……………話された……………」

ずっと無表情だったサクヤは謝つてからは顔を下に向けて、深く反省しているようだった。

別の見方をすれば落ち込んでいるとも言えるが。

オオツツ

「……………あ、あの……………えっ……………えと……………」

サクヤ

「……………」

オオツツ

「あの……、サクヤさん……その……あの……。」

サクヤ

「……。」

オオツツ

「……えっと……な……仲直り……しませんか……？お互いが……まあ……悪かったみたいです……。」

そつと手を差し出すオオツツ。

サクヤにとっては驚くべき行動であった。

（……將軍以外の人間……もとい鋼の乙女にここまでされてしまうなんて……。）

でも……悪くない。）

サクヤ

「……あ、ありが……とう。」

顔を上げて、少し顔を赤くしながらも、差し出した手を握るサクヤ。

（……自分は將軍によって具現化され、鋼の乙女装備、をしてここにいる。）

將軍が別の人と組ませた理由は、戦略的な事だけではなかったかもしれない……。）

そう直感した。

一方のオオツツもサクヤの行動に驚いていた。

（正直拒むと思ったんだけど……。でも、とても嬉しい。しっかり

相手として見てくれた事が……。仲良くなれるのもそう遠くないかな？）  
クスツと微笑する。

やがて再び通信が入る。

サクヤ

「……私が出ます。」

握った手を離して奥の通信機に向かうサクヤ。  
その日、初めて他人に感情を表情に出した日でもあり、自分が少し変わった日かもしれないと思った。

話を戻して北海道休憩施設。

レイ、ナナ、てんざんは外にいた。

時刻は午後2時52分

やがて、西の空から二つの影が見えた。  
側に三人の影も見えた。

ナナ

「あれかな？」

レイ

「間違いない。」

てんざん

「側を飛んでいるのは誰でしょうか？」

レイ

「直にわかるだろう。信号を出そう。」

レイは信号弾を上空に撃った。

輸送ヘリはその信号に従い、施設に近づいた。

そして、着陸した。

三人はまず飛んでいた三人に出会った。

レント

「日本の鋼の乙女の諸君、久しぶりだな。誘導感謝する。」

ルーデル

「久しぶりねえ。やっぱり、てんちゃんは本物が数倍かわいいわあ

」

てんざん

「お久しぶりです、レントお姉さま、ルーデルお姉さま。…ひゃう

!?!」

レント

「おい、ルー！ここは他国だぞ！」

ルーデル

「あらあ、いいじゃないの。日本と同盟組んでたんだから。てんち

ゃんが嫌がるなら別だけど。」

てんざん

「いつ、いいえ！私は大丈夫です。」

来て早々ルーデルに抱き上げられるてんざん。

ちなみに日本の三人は技術交換でドイツに来たことがあるので、久しぶりである。

クラウディア

「ナナちゃん、久しぶりやな。」

ナナ

「あつ、クラウディアも来たんだ。」

クラウドディア

「あれ、ナナちゃん、話し方戻ってるけど……ええの？」  
ナナ

「いやぁ……ぼくには合わなかったみたいだから。」  
レイ

「なあ、ナナ。もしかしてクラウドディアに学んだのか？」  
ナナ

「ううん、正直そこも曖昧なんだよね……。」  
クラウドディア

「ナナちゃんったら、うちのベロちゃんたちに指導されておったけど。そうや、まだ Pasta 作れる？」

ナナ  
「……、ごめんなさい！もう作り方忘れちゃって……。」

クラウドディア  
「そうなんか……。ベロちゃん楽しみにしてたのに……。ま、うちもな。あ、そうや！またベロちゃんたちに教わればええんちゃうの？」

レイ  
「あの……できれば断りたいのだが……。」  
ナナ

「ええっ！どうして！？もしかしたら記憶が戻るかもしれないのに！」

レイ  
「どうしてもだ。」  
クラウドディア  
「なんや、ホンマつれないな。」

ナナは一度存在感を目立たせる為にイタリアに行って修業をしてきた。  
日本に帰ってきた時はベローチエの話し方をマスターしたが、肝心

のパスタの出来は悪く、60%は食べるとお腹を壊す。(日海司令官も犠牲者の一人)

それでも味はしっかりして美味しかったので、もう一度食べたいという決死の海兵もいた。

そんな変わったナナを見かねたレイが奮闘し、元には戻ったがその時の記憶は無くなった。

レント

「あの、話を割ってすまないのだが。」

レイ

「どうかしたのか？」

レント

「他の鋼の乙女はどうしている？」

レイ

「ああ、他はみんな各地で復興作業をしている。ここにいるのは私たち三人だけだ。」

レント

「そうか、それは残念だな。」

レイ

「仕方ないさ。勝っても町が荒れていてはな。」

レント

「それもそうだな。我が祖国は敗戦国だから、復興以前に戦後処理に手がいっぱいだからな。」

ガタン

輸送ヘリの一つが開く。中から陸上戦力の四人が降りてきた。

ミハエル

「いや、ようやく着いたか。」

フェイ

「ほう、なかなかいいところだな。だが、東部戦線に劣らず寒いな。」

ヴィルヘルム

「ここが日本か。自然がいっぱいあるぞ。」

ベローチエ（2号）

「あう……、もうアカンわ。長旅でものすごい疲れたわ……。」

おお、ナナはんや、久しぶりやな。」

ナナ

「あつ、陸上の鋼の乙女も来てたんだ。」

レイ

「だが、あの小さい子は誰だ？見たことがないのだが……。」

てんざん

「私と同じか、それよりも小さいかも……。」

レント

「ああ、確かに日本とは面識が無かったな。」

ナナ

「ドイツにもいるんだね。イタリアのベローチエ以外に見たこと無

かったから。」

ヴィルヘルム

「れ、レント？それってヴィルのことか？」

ミハエル

「あ、そっか。ヴィルはその時いなかったな。」

ベローチエ

「てゆうか、ウチラもナナはん以外は初めてやで。」

フェイ

「ならば、二人は自己紹介してやれ。私たちはもう知ってるからな。」

「

ベローチエ

「L3/34のベローチエやで。」

「ヴィルヘルム

「88mm高射砲のヴィルだ。とっても強いんだぞ。」

レイ

「私は零戦のレイだ。よろしく。」

ナナ

「九七艦攻のナナだよ。よろしくね、ヴィル。」

てんざん

「か、艦上攻撃機のてんざんです。よろしくお願いします。」

と、ここでナナが気づく。

ナナ

「ねえ、レント。エーリヒはどっしたの？」

レント

「えっ？あ、ああ、確か……。」

ともう一つの輸送へりを見る。

レント

「あの中には支援用の食料があるんだかな。」

ナナ

「食料！？じゃあ、もしかしたら……。」

レント

「いや、我々も苦肉の策を打ったのだが……。」



ドイツとイタリアの乙女が一斉に頷く。  
それで、日本の三人が近づいて開けてみると……

エーリヒ

「もう食べられないようー！。ムニヤムニヤ……」

寝言を言いながら寝ているエーリヒがいた。

レイ

「えーっと、これは……。」

てんざん

「ど、どうして寝ているのでしょうか？」

ナナ

「これが苦肉の策……？」

レント

「まあ、エーリヒを抑えるには仕方ないことだ。」

レイ

「どういつことだ？」

レント

「食料の一つに強力な睡眠薬を鋼の乙女に効くように調合したものを混ぜてたんだ。」

ナナ

「ああ、なるほど。確かに一番効果があるね。」

しかし、レイとてんざんは顔を見合わせている。

それもそのはず、エーリヒの食に対する執着心と異常な消費量を間近で見たのはナナだけだからだ。

てんざん

「あの〜、ナナお姉さま、私たちには分からないのですが……。」  
ナナ

「まあ、口で説明するより、間近で見た方が分かりやすいよ。」  
ルーデル

「あら、さすがナナちゃん！エリちゃんのことよく分かってるわね〜。お姉さん、感心しちゃったわ〜。」

ナナ

「一度食事に付き合ったからね。……思い出したくないけど……。」

というよりドイツに来て空腹なところをエーリヒに出会ったというのが正しい。

レイ

「あれ、そういえば……、報告では輸送へりは三機と聞いていたが？」

ドイツ&イタリア全員

「……………」

全員が黙り込み、顔を見合わせる。

てんざん

「？……………」  
「どうされたのですか？」

レント

「あ……………、ああ、えっとだな……………、実は途中から見なくなってな……………」

レイ

「なっ、なんだと!?!？」

レント

「あつ、いや、確か日本上空まではちゃんとあつたんだ！陸も確認できたし。ただ……いつの間にかいなかったんだ。」

「気付かなかったのですか？」

レント

「ああ、目的地に近かったから油断した。我ながら情けない……。」「

ナナ

「じゃあ、もう一機は途中で？」

レント

「だが、目的地寸前までは来てたんだ。多分この休憩施設からはそう遠くないはずだ。しかし、我々には慣れない土地だからな。」

ナナ

「それって、ぼくたちに探して欲しいってこと？」

レント

「まあ……、そうなるな……。すまないのだが、探してもらえるか？」

レイ

「少し信用し難いのだが、仕方ないな。」

ナナ

「うーん、まあ、近くなら大丈夫かな？」

てんざん

「じゃあ、私たちに任せて下さい。」

レント

「本当に申し訳ない……。」「

レイ

「では、そのの休憩施設で待っていてくれ。すぐに見つけだす。」

レント

「了解した。頼んだぞ。」

日本の三人は来るはずだったもう一機の輸送へりを探しに上空に飛

んでいく。

ルーデル

「レンちゃん、お疲れ〜。」

フエイ

「流石だな。」

レント

「正直焦ったぞ……。輸送ヘリの失踪を聞いたレイから何か殺気のような違和感を感じてな……。」

ミハエル

「まあ、とりあえず後は向こうに任せればいいんだな。」

クラウディア

「これならきつと成功するやろ。安心せえつて。」

レント

「まったく……。あの二人も無茶な提案するからな……。」

ルーデル

「ねえねえ、今からあの子たちの様子がどうなるか見に行かない？」

レント

「相変わらずだな……。」

ミハエル

「おっ、それ面白そうだな。」

ベローチエ

「ホンマおもしろそうやな〜。」

ルーデル

「でしよ〜、気になるわよね〜。」

レント

「つてお前らも行く気か!？」

ミハエル

「なあーに、バレなきゃいいんだろ。」

ルーデル

「そうそう。あつ、フェイちゃんも来る？」  
フェイ

「……まあ、退屈しすぎにはいいかもしれないな……。」  
レント

「って、フェイもか!？」

ルーデル

「後はレンちゃんだけよ。」

レント

「うう〜……、わ、分かった……。」

さすがに孤立しては寂しいだけである。こつこつしてドイツ&イタリアの乙女は現場に向かった。

第1章8話 日独伊、日本に集結（後書き）

「……………あれ、もういいのかな？」

読者の皆さん、はじめまして。要塞島軍総大将のルルです。

作者がネタ切れだから代弁して欲しいと言ったので来たのですが……。

今回の話、どうでしたか？

作者の文才の無さで前半、私の部下とのやり取りがなんかぐだぐだになっていたようですが……。

それでも読んでいただいたので良かったですって作者言っていましたね。

私としてはもう少し頑張っただけです。後ろから主砲構えて脅せば変わるかな……？

さて、第1章なんですけど次回が最終話らしいです。

多分第1章を終えてから私たちの設定を書くと思います。オリキヤラですので必要ですね。

文才のない上、名称にしか頼らない作者ですけど、これから

「WW2終結……鋼の乙女その後の軌跡」  
応援よろしくお願いします」

- 要塞島内陸研究所から読者の皆さんへ -

**第1章最終話 感動の再会！そして激動へ（前書き）**

第1章最終話です。

ですが、まだ続きます。



## 第1章最終話 感動の再会！そして激動へ

輸送へりは簡単に見つかった。

周りが長草に囲まれていて、そこから外側は森林である。距離としては本当に休憩施設からはそう遠く無かった。

ナナ

「あつ、見つけた！」

レイ

「よし、降りるぞ。」

三人は輸送へりの側に降りた。

てんざん

「でも、かなり近いですよ。これならすぐ見つかりますよね。どうしてでしょうか？」

レイ

「確かにそうだな。」

ナナ

「まあ、とりあえず中身を確認しようよ。あと一つだから……資材だっけ？」

てんざん

「開閉ボタンは、っと……あつた、これですね。」

てんざんがボタンを押し、輸送へりの扉が開く。  
その中には……

ナナ

「ホントだ。資材がちゃんとおあるよ。」

中には木材や鉄工などの資材のみ。

レイ

「で、これは飛ばせるのか？」

てんざん

「私が確認します。」

と、てんざんが中に入り、コックピットを調べる。わずか10秒で二人のもとに戻ってきた。

てんざん

「どうやら燃料切れらしいです。計器が空を指してました。」

ナナ

「レイ、どうする？」

レイ

「三人で持ち上げて行ければ済むんだが……。」

ナナ

「やっぱり？」

てんざん

「引き受けたのですから、仕方ありませんよ。」

ナナ

「てんちゃん、なんか前向きだね……。」

レイ

「それよりも、早く運ぶぞ。今の北海道は日が暮れるのが早い時期だからな。」

二人

「は〜い。」

と、三人が輸送へりを運ぼうとした時。

??? x 2

「えいつ！」

レイ

「な、なあ!?!」

ナナ

「う、うわあ!?!」

てんざん

「ひゃう!?!」

不意に後ろから押された……というより抱き着かれた三人は勢い余って絡まるように地面を転がり、一つの塊となった。

やがて回転が止まり、いきなり抱き着いてきた二人を見上げた三人はその瞬間、思考が止まった。

レイ

「なっ……!?!」

ナナ

「へっ……!?!」

てんざん

「えっ?えっ?」

三人の視線の先には……

あかぎ

「ふふっ 久しぶりね、みんな」

いちこ

「レイちゃん、ナナちゃん、てんちゃん、どうしたんですか?目を丸くしちゃって」

戦時中に亡くなった姉が二人ともいた。

レイ

「あ……、あかぎに……いちこ!?!?!」

ナナ

「ど、ど、ど、どうして!?!?!?!」

てんざん

「ほ、本物なんですか!?!?!」

あかぎ

「やあねえ、酷いわよ、みんな。本物よ。」

いちこ

「そうですよ。あかぎといちこさんはレイちゃんたちに逢いたいと強く願ったから戻ってこれたんですよ。」

レイ

「馬鹿な……うう……。」

あかぎ

「レイちゃん？もしかして……泣いてる？」

レイ

「！？、い、いや、泣いていない！……あつ、いや、泣いてはいるがこれは別に深い意味はなくてだな！」

いちこ

「ふふつ、レイちゃんも素直になればいいのに、てんちゃんみたいに。」

てんざん

「うええ〜ん！いちこお姉さま〜！！」

ナナ

「い、いちこ……。」

あかぎ

「ほら、ナナちゃんも。頭撫でてあげる。」

ナナ

「あ、あかぎ……。うう、うわあ〜ん！会いたかったよ〜！！」

劇的な出会いとなったが、無事に感動の再会を果たした。

ルーデル

「はあ……、いいわね〜。」

ベローチエ

「ほえ〜。なんかよう分からへんけど感動するな〜。」

フエイ

「そうだな。……それはそれでいいのだが、私たちはいつまでいれ  
ばいいのだ？」

レント

「ルーに聞いてくれ……。」

ミハエル

「ま、これで一件落着つてところか？」

レント

「少し違う気もするが……、そうだな。」

クラウディア

「とりあえず最後まで見ててもええんちゃうの？」

レント

「……好きにしる。」

ルーデル

「もう、レンちゃんたら、ロマンが無いわね。」

レント

「……。」

茂みにうまく身を隠して聞いていたドイツ&イタリア鋼の乙女。

レントはこの後の説明のタイミングを考えていた。

が、空氣的に彼女たちが休憩施設に戻ってからだると結論し、仕方なく目の前の光景を見続けた。

二月十九日、夜

要塞島内陸研究所（直方体をしたコンクリートでできた施設）通信室にて

ルル

「いい？貸し出せる高機動軽戦車は五十台、双砲塔重戦車は十台まで！今この世界に全戦力の10%があるんだから、そっちはそれだ

けで対処して！」

???

「ちよっ！姉ちゃん！相手戦力は三万だぜ？」

ルル

「いつもそのくらいで前線に立って戦ったじゃない？今は本部の資源がギリ貧なの！それだけでも十分過ぎるわよ！後は三人で何とかしなさい！」

???

「分かっているけど！でもよう！」

ルル

「言っておくけど、九割は無傷で返してよね！」

???

「殆ど使うなってか！？」

ルル

「仕方ないじゃない！私たちがこの世界にいる間は楓と椿が本営役なんだから前線は必然的にあんたら三人でしょ！それくらい馬鹿でも理解できるでしょ！」

???

「待ってくれ、姉ちゃん！確かにそうだけど、今まではちゃんと援護があつたから前線でも勝ったけどよう（ルル）」「心配するな！二人ともスナイパーライフルで援護できる。」「……でも相手は陸戦力が九割だぜ？相手戦車の撃破は……。」

ルル

「自分達でしなさい！資源の少ない中、何のために武装強化してあげたと思ってるの！たまには自分の力で対処しなさい！」

???

「……」

ルル

「と・に・か・く、十分な実力があるのだから……、分かった？じやあ……、気をつけてね。」

通信を切ったルルは四角に切り抜かれた窓から見えた三日月を見て、ため息をつく。

ルル

（ホント、出来の悪い弟を持つと苦労するわ。何のために側近三人衆って名乗ってんだか……。）

すると、再び通信機が鳴る。

ルル

「どづした？」

????

「將軍、私デス。特別遠征艦隊ノ位置ヲ特定シマシタ。」

ルル

「……別に通信機から報告しなくても、私が施設にいるんだから、SCS……。」

SCS

「シカシ、対等ニ会話スルニハコウスルシカナイト。」

ルル

「分かったわ。それで、艦隊の位置は？」

SCS

「現在大気圏付近ニテ確認。地球側カラダト、座標140、43。3。チョウド日本ノ北海道ノ上トナリマス。近日中ニ降下ノ可能性

アリ。」

ルル

「……やはり妙ね。」

SCS



「ソウデスネ。太陽系解放同盟ヲ追ツテ、コノ世界ニ迷イコソダ。早期警戒機（偵察機）『アウル・ライト』ヲ回収シタノナラモウ用済ミノハズ……ト才考エデスカ？」

ルル

「ふっ……、その通りだわ。緊急用に造ったとはいえ、随分賢くなつたようね。」

SCS

「ソレハ將軍ガ手掛ケタカラデス。」

ルル

「しかし、何故かしら？」

SCS

「私ノ仕事デハ位置ダケシカ確カメラレマセンカラ、理由ナンテ…

…。」

ルル

「となれば、理由は一つか……。」

SCS

「何カ心当たりガ？」

ルル

「日本の鋼の乙女と接触した……とか。」

SCS

「マサカ……ダガ、モシソウダトシタラ、今ノ日本ノ状況ト見レバ『ツジツマ』ハ合ウ。」

ルル

「R型戦闘機どころか、プロペラ機といった殆どが旧式の時代。そこに存在しないはずの鋼の乙女に出会った。少し彼女たちに情が移つたのかもしれない。時代は違えど、戦場で戦うことは両者とも変わらないだろうし。おまけにかわいい。」

SCS

「……。」

ルル

「まあ、あくまでも予想だがな。それよりも……早く帰ってこないかなあ、欧州の三人。」

SCS

「ナゼデスカ？」

ルル

「誰か帰ってこないと私が外に出られないもの。」

SCS

「要スルニ留守番役デスカ……。」「ルル

「たびたびアメリカ軍の調査隊が懲りずに来るからねえ。警戒区域で追い返す役は必要よ。セキュリティ・コントロール・システムは島内しか効かないから、分かるよね、SCS？」

SCS

「心得テイマス。島内八私、セキュリティ・コントロール・システム、ニ才任セヲ。」

通信を終え、通信室、そして研究所から出るルル。鬱蒼とした森を照らすのは三日月。

(この先の衝突は避けられないか……)

そのまま歩いていき、島内西部、唯一砂浜のある場所まで来て、コンクリートで覆われた海岸線に登る。

コンクリートの上には既に対空ミサイル、対艦・対潜水魚雷砲、迫撃砲、高射砲、索敵監視塔が設けられていた。

三日月や星が海に写っている。ここからは見えなくとも、その視線の先には日本。

「…………綺麗ね…………。」

この先の戦場でどれほど鋼の乙女を見るのか？  
特別遠征艦隊は何を考えここに居続けるのか？  
どれほど自分たちの任務は完遂出来るのか？

異世界での先のことなど分からない。過去といえども真実は違うかもしれない。でも……

（己の命を大事にする…………。誰一人欠ける事なく無事に帰る…………。すべてを私が守る…………。それだけだ。）

海をしばらく眺めてそう考えた後、砂浜の例のプレハブに入り、一夜を過ごした。

**第1章最終話 感動の再会！そして激動へ（後書き）**

今回はオリキャラと周辺の設定・解説を二回に分けて書くつもりです。

**設定変更に関する極秘報告書 2 - 1 (前書き)**

作品に出るオリキャラの設定と簡単？な説明

七割妄想、二割名称そのままです。

あと一割？

歴史で本当に実在したもの

## 設定変更に関する極秘報告書 2 - 1

サクヤ（旧名エイミー）

タイプ：

戦闘機（空）

（鋼の乙女装備時）

武装：

通常（人間時）

短刀 宵

伸縮ナイフ×10

拳銃 リベレーター改

鋼の乙女装備

30mm機関砲×2

45mm機関砲×2

150mm手持ち迫撃砲

携帯式巡航艦級波動砲

「ヴァーン砲」

要塞島軍ナンバー2。鋼の乙女装備をしている。

元の世界でも有力。

余り話さないのが性格が暗いように見えるが、表現の仕方がうまくない為、淡々とした話し方になる。

もともとは事故死した女の子の地縛霊で、ルルによって具現化された。ルルとは長い付き合いとなり、息もよく合う。

幽霊から具現化されたので、鋼の乙女装備でなくても最大50cm

浮いたまま移動できる。  
確実に任務をこなす忠誠型。

髪は金髪で短いツインテール。瞳は薄い水色。小学生並の身長。服装は基本白で、膝下10cmの裾の長いTシャツ。

（わかりにくい人は、アリスに似た服装を想像して下さい。）  
小さい白ベレー帽を被っている。45mm機関砲は対戦車も兼ねている。

携帯式巡航艦級波動砲はルルが「マーナガラム級」宇宙巡航艦の艦首砲を威力をそのままに縮小に成功した兵器。しかし、身体への反動負荷はかなりあるので、一日一発が限度。

名前はツンデレのような権力ヤンデレお嬢様から。

必殺技1

四段機関砲一点射撃

効果：空、陸/単体

必殺技2

ヴァーン砲

効果：全/直線上

オオッツ

タイプ：

自走砲（陸）

武装：

60mm小型砲×2

300mm長距離自走砲

持続式圧縮波動砲

要塞島軍鋼の乙女。

鋼の乙女では最も古参だが、ルルから造られていない鋼の乙女でもある。

廃棄された試作品で、ルルに拾われ、直されただけである。助けた恩として前線に立つが、全面的にルルを信頼しているわけではなく、意見の食い違いでたびたびルルと衝突する。

性格は冷静・状況分析型で、一応コンピュータの扱いは鋼の乙女随一らしい。

主に遠距離攻撃と援護の為、よく後方で待機している。ヴィルヘルムのようにリュックを背負い、中に自走砲台がある。

300mm長距離自走砲の衝撃に耐えられるようにオオツツ自身の装甲も厚い。

60mm小型砲は接近戦用にとルルが改造して取り付けた。

基本リュックからの攻撃の為、両腕が使える。よく望遠鏡とセットで遠距離攻撃し、接近戦では銃も扱う。

髪は茶髪に近いショート。瞳は濃い灰色。身長は170前後。

服装は作業服に似た黄土色の服。つば入り帽子を被る。自走砲台はヴィルヘルムみたいな飛び出てない為、速度は並程度。

リュックの両端のサブポケットに小型砲があり、それを延ばして接近戦は戦う。

名前はそのまま「大筒」から。

必殺技1



レインオブキャノン

効果：陸／周囲広範囲

必殺技2

長距離自走砲集中砲撃 破

効果：空、陸／単体

必殺技3

持続式圧縮波動砲一一一

効果：全／直線上

ラミデス

タイプ：

水陸両用駆逐艦（海、陸）

武装：

12.7cm主砲

20mm機関銃×4

魚雷

対空ミサイル

弾道弾迎撃ミサイル

圧縮炸裂波動砲

要塞島軍鋼の乙女で欧州に送られている。

オオツツ同様ルルに造られていない。とある野戦病院の病室にいたのをルルに説得されて入隊する。

姿や性格が日本の鋼の乙女「ゆきかぜ」に酷似している。ルルは武装を改造し、本家は背中に魚雷管が左右あるが、ラミデスは一つのみ。さらに一部魚雷でなく対空ミサイルを備えている。しかし、それでも時々ルルから間違えて「ゆきかぜ」と呼ばれることも。

姿は前述通り。

本来は駆逐艦だが、陸戦力としても戦えるように足にキヤタピラを備え、水陸両用となったが、陸は速度が遅くなる。海と陸で必殺技が違うが、使える波動砲は同じ。

名前は某速く終わるRPGの死神から。

必殺技1（海）

玖惨式魚雷一斉射撃

効果：艦、潜水/前方

必殺技1（陸）

弾道弾迎撃ミサイル

効果：空、陸/単体

必殺技2

圧縮炸裂波動砲

効果：全/直線上+周囲

スミス

タイプ：

## 超重戦車（陸）

武装：

203mm主砲

110mm機関砲

パイルバンカー砲

超絶波動砲

要塞島軍鋼の乙女で欧州に送られている。

ルルによって造られた第1号。

規格外の主砲と機関砲を装備している。装甲もかなり厚くオオツツをも越える。重量もかなりあるが速度は並程度。

性格は穏やかで、戦闘向きでないように思われるが、戦闘ではしっかり任務を果たす。機関砲だけでも十分戦車も撃破できる。というより、戦車砲並の砲弾が連射される感覚である。

服装はフェイに似たものだが、色はすべて黒。

髪は黒の長髪（背中の中ぐらいの長さ）で、瞳も黒。身長はオオツツ同様。

制服を着せると学園にいそうなヒロインみたいになるらしい。

ハイグリッブ機動機を搭載したため、ここぞという時に回避率を急激に上げられる。

名前はイギリスの「砲兵牽引車No.39」の名称より

必殺技1

デス・スロウズ 鮮血

効果：陸/前方

必殺技2

パイルバンカー

効果：陸/単体

必殺技3

超絶波動砲

効果：全/波状直線

ムツ

タイプ：

戦闘機（空）

武装：

30mm機関砲

125mmロケット砲

バルムンク

刀 不知火

要塞島軍鋼の乙女で欧州に送られている。

ルルによって造られた第2号。

日本の鋼の乙女「レイ」を参考にしたので、若干旧デザインのレイに酷似している。罪を背負う者や悪は断罪するといった正義感の強い性格になったが、本家のようにそれなりに仲間と馴染んでいる。サクヤ同様忠誠型。

服装は前述通りだが、袴は黒。

スピード重視の戦闘機だが、見た目よりも装甲はそれなりにある。

名前は存在しえなかった「六式戦闘機」より

必殺技1

陸式断罪刀 不知火

効果：空/単体

必殺技2

バルムンク

効果：全/単体

ルル

タイプ：

武装により異なる

武装：

通常（人間時）

刀 七属・全（全型携行）

多局地貫通拳銃 Ptガン

機関銃 MP41

左腕武装

空間式想像思念鏡 x 4

e t c …

鋼の乙女装備一型（空）

30mm機関砲 x 6

12mm機関銃 x 2

鋼の乙女装備二型（陸）

70mm主砲×2

50mm機関砲

20cm大砲

鋼の乙女装備三型（空）

55mm速射戦車砲

25mm機関砲×2

GB8滑空誘導爆弾

携帯式戦艦級陽電子砲

「ブルドガング砲」

鋼の乙女装備四型（空）

77mm機関砲

バズーカ砲

左腕武装

要塞島軍総大将。 本作品の中心人物の一人。

元の世界でも国家クラスの軍力を持ち、他国でも恐れられている。

また、彼女自身卓越した身体能力と技術力、戦術眼を持ち、異世界の兵器さえ再現し自軍に配置して使用している。

異世界への移動には「アングルボダ級ワープ仕様」宇宙空母の改造版を使用している。ジェット部分を縮小したので、全長は「アングルボダ級」と同じだが、収納能力が半減、さらに移動後は約五日間エンジンの放熱をする必要がある。

異世界移動の目的は資源・残骸回収。新兵器の開発や従来兵器の修理・改造のため。

ちなみに彼女の左腕は機械。元の世界での任務中に失った。機械の手に手袋を付けて隠しているが、機関砲やガトリングガンなども搭載されている。左腕武装とはこのことを指す。

性格はスミス同様穏やかで優しい。しかし、戦場や兵器に関することになると厳しい性格に。特に弟に対しては瀕死にさせるほど容赦しない。（部下曰く、'狂気と慈愛の性格'）

一見完全超人だが、実は非常に感情が不安定。本人も意識しているので平常を保ってはいるが、鬱になると治まるか任務が完了するまで返り血すら気にしない殺戮マシーン化して誰にも止められなくなる。その時の目は瞳孔さえすべて漆黒に染まる。元の世界ではこの状態で滅ぼされた国の城は血で染まり、誰も生き残っていないほど。

服装は黄土色の軍服・軍帽。髪は黒のショート。瞳も黒。身長はオツツ、スミス同様。右目に眼帯を付けることがあるが、眼帯の裏側に高性能装置があり、スナイパースコープからスキャンによる透視、空間情報までわかる。

必殺技1（一型）

スプレッド・アンブレラ

効果：空／周囲広範囲

必殺技2（二型）

大砲

効果：空、陸／放物線上

必殺技3（三型）

ブルドガン砲

効果：全／直線上

必殺技 4

七属・全 無影斬

効果：全 / 単体

必殺技 5 (三型)

GB8 ホーミングマスター

効果：全 / 単体

必殺技 6 (四型)

マツハズーカ砲四型

効果：全 / 単体

必殺技 7

破壊光線 (左腕武装)

効果：全 / 直線上驚異的広範囲

必殺技 8 (五型)

???

効果：???? / ????



設定変更に関する極秘報告書 2 - 1 (後書き)

次回は要塞島の説明と、  
オリキャラのとあるミニストーリーです。

設定変更に関する極秘報告書 2 - 2 (前書き)

やっと書けた。

しかし、混ぜすぎた上に専門的すぎる。  
理解できない部分があるかもしれない。  
後悔してませんが。

## 設定変更に関する極秘報告書 2 - 2

### 要塞島

もともと戦時中に日本の鋼の乙女とライトニング姉妹が初めてぶつかった地図上に書かれていない名もなき島。

地図に無い島は拠点にしても相手に有利となるため、日米両陣営も必死に探していたらしい。

結局は空白のまま太平洋戦線が日本の勝利で終結したのを逆手にこの島を選んだ。(ルル談)

### 要塞島海岸沿い

すべて分厚いコンクリートの壁で覆われていて、直接的な上陸が不可能。

コンクリートの上には索敵監視塔、迫撃砲、対空ミサイル台、対艦・対潜水魚雷砲、高射砲で構成されている。

また、一部には戦艦砲、海岸砲、潜水艦ドッグ、弾道弾迎撃ミサイル台が配置されている。

### 要塞島西部

壁の内側に砂浜がある唯一の場所。立地がまともなので、ルルはプレハブを建ててそこで寝泊まりする。

プレハブには要塞島に張り巡らされた監視カメラの映像を見れる。

通信端末機もあり、仲間の通信機にかけることが容易である。

周辺には無人機銃が配置され、砂浜には地雷が仕掛けられ、コンクリートが破壊されるとどちらも自動発動する。要するにコンクリートを壊さずに上陸できれば最も防衛線が薄い。

#### 要塞島東部

少し小さめの川と洞窟があるが、水深が深い為、潜水艦ドッグの一つとして利用している。

潜水艦には「コロンビア・F」と「マイアーリ」がある。

コロンビア・Fは異世界の再現兵器だが、マイアーリは実在した物を改造したもの。

ドッグの護衛として無人機銃、迫撃砲台、機雷などが配置。

コンクリートに鉄格子をつけて川をせき止めないようにしている。

ドッグ内部には未完成の潜水艦、さらに奥に潜水式長門級改造大型戦艦「不滅」が收容されている。ちなみにルルの統括する海軍戦力最大規模。つまり、海軍で最強の戦力。具体的な武装はまた今度に。

#### 要塞島北部

主に情報収集施設としてパラボラアンテナがある。情報を集めるだけで、解析や收容は中央の研究所。とはいえ、大事な機関のため、無人機銃や索敵監視塔、高機動軽戦車三台が配置されている。

さらにアンテナ施設の中核には人型戦機「アキレウス」や「ヘラクレス」、レーザー砲台が配置されている。

#### 要塞島南部

鬱蒼とした森が広がる。自然を利用した罠が多数配置され、無人機銃、トーチカが配置されている。別に施設があるわけではないので、補給面では最も進攻しにくい。

#### 要塞島内陸東部飛行場

洞窟の上に位置する。プロペラ機やジェット戦闘機、戦闘ヘリなどが收容され、周りは高射砲、対空ミサイル台がある。また、高所にあるため、800m列車砲、対空戦車、三連ミサイル砲が配置されている。列車砲の射程距離は警戒区域（島から半径10km）全域。

#### 要塞島内陸中央研究所

要塞島の核。直方体の形をしたシンプルなコンクリート製建物。しかし、中はかなり広く複雑で、外見と矛盾した広さを誇る。ここにだけ別世界とも通信を繋げる端末機がある。北部から得た情報を收容し、新兵器開発機構まで備わる。R型戦闘機の一部も收容されている。

また、「アングルボダ級ワープ仕様」宇宙空母が收容されていて、いつでも元の世界に脱出できる。おまけに上空に簡易要塞防衛システム「シヴァ」のコアユニットがある。

実は地下に一人鋼の乙女がいるとかいないとか。

#### SCS

セキュリティ・コントロール・システムの略称。

人工高度知能システムを搭載した臨時の防衛システムで、要塞島内全ての兵器を任意に独断で動かせる。

研究所に核がある。女の子の姿をして研究所内のパソコン画面に現

れることも。  
パラポラアンテナを操作して世界の状況を見渡す。

次からミニストーリー  
ルル達がこの世界に来る前の話です。

この世界に来ることが決定したのは、たわいない会話から急に出てきたものだった。

場所は海に浮かぶ巨大氷河に立地するルルの本部「永久凍土都市」の第4エリア、時計塔と並ぶ同じ高さのビル内での会話。

ルル

「ねえ、エイミー？」

エイミー（サクヤ）

「……何か？」

ルル

「『小鳥遊夢見』って子、知ってる？」

エイミー

「……タカナシユメミ……？……それが……どうしたのですか？」

ルル

「いや、なんか急に頭に浮かんで……。」

エイミー

「確か……某主人公の従妹にあたる子……でしたっけ？」

ルル

「そうそう、その子。」

エイミー

「……また変なもの……見たんですか……？」

ルル

「いや、変っていつか……すごいというか……。」

エイミー

「？」

ルル

「年代が年上の女の子にハサミで……しかも四人。さらに一人拉致って……。」

エイミー

「……それ以上言うと……変な誤解を招きますよ……。」

ルル

「さつきから変ってなによ……。でも、暇だからなあ。モニターも正常だし、見るだけじゃねえ……。」

実は数ヶ月前は「海の上の永久凍土」いう立地条件に関わらず何処から来たのか外敵にたびたび襲撃されたが、ルルの技術力で改造された都市の防衛システムでいとも簡単に追い払われている。

しかし、なかなか収まらないので、本部に留まるが、最近では平和な日が続いていた。

と、ドアを開けてラミデスが入る。

ラミデス

「あ…、あの、将軍。」

ルル

「あつ、ラミ。どうだった？」

ラミデス

「はい。えっと……交渉で……鉄工材が約20Kg、航空機用木材約10Kg、あとは……、燐が5Kg、クロムが3Kgです。それと、「異世界回収隊」からはエーテリウムを300採取したそうです。」

ルル

「そっか。お疲れ様。はい、重油缶。」

ラミデス

「あ、ありがとうございます。」

ルル

「ごめんね。本当は弟の役目なんだけど、西国反乱軍の討伐援軍に出しちゃったから。」

ラミデス

「いえ……、これくらいなら私でもできますから。」

ルル

「そう言ってもらえると嬉しいわね。」

エイミー

「……どうして……ラミデスさんに?」

ルル

「気分。」

エイミー

「気分って……。」

ルル

「気にしないことね。さて、私も動きますか。エイミーと鋼の乙女全員ついて来てもらっわ。」

ラミデス

「えっ?」

エイミー

「……相変わらず……いきなりですね……。で、どこから?」

ルル



「そうねえ……、本家の鋼の乙女がいる世界かな？日本軍勝利ルトの戦後。」

二人

「せ、戦後！？」

ルル

「な、何よ、二人とも。大きい声出して。」

ラミデス

「あっ……。」

エイミー

「でも……、珍しいですね。いつもは……異世界の戦場に……首突っ込んでいるのに……。」（主に残骸回収の目的で）」

ルル

「でも、どうせ冷戦になるでしょ？だから、核兵器の工場にそつと入って、設計図とかをコピーするの。」

ラミデス

「もしかして……作る気ですか！？」

ルル

「違う。構造を知りたいのよ。今後の爆弾製造方法とかの参考に。それに、核兵器に匹敵する兵器は空軍に既に二つ持ってるし。」

エイミー

「『皇帝』と『G I』ですね……。……よくあんな異世界のものを……無理矢理改造しましたね……。どっちもでかいし……。」

ルル

「それで、エイミーに相談があるんだけど……。」

エイミー

「……私ですか？」

ルル

「名前変えない？」

エイミー

「なっ!?!」

ルル

「向こうの世界に同じ名前がいるから、間違えないように。」

エイミー

「ちょ、いきなりそれはいくらなんでも(ルル)『あ、このお嬢様の名前からとりましょ サクヤでいいかな?』無視ですか!!--」

ルル

「いいじゃない。いい名前だけど……?」

サクヤ

「そうですけど……ってもう名前が変わってる!?!相談無しに一方的に!!--」

ラミデス

「えっと……、よろしくお願いします、サクヤさん。」

サクヤ

「早速切り替えた!?!」

ルル

「いい名前よね、ラミ。」

ラミデス

「あ、はい。」

サクヤ

「ラミデスさん!?!逆じゃない!?!普通!逆だよね!?!」

ルル

「殆ど無口で淡的なキャラなのがここまで変わるなんて。名前ってすごいわね。」

サクヤ

「実験なんですか!?!私への実験なんですか!?!それに、『サクヤ』って他の世界の人と被ってますよ!!--」

ルル

「いたかな?」

サクヤ

「いましたよ！どっかの館のメイドとか！」

ルル

「でも、私達が行く世界にはいなかったから。」

サクヤ

「はあ〜……（泣）」

ルル

「そういうことだから、ラミ、他の鋼の乙女に伝えて。出発は明日だけど、長期滞在だから、装備とかもしっかり揃えるように。」

ラミデス

「わ、分かりました……。」

ルル

「ほら、サクヤもいったん家に帰るよ。」

サクヤ

「……あの、将軍。……ルナ君達には？」

ルル

「伝えてないよ。向こうの世界に臨時通信端末機を設置してから。はじめに軍の指揮をしてる楓からして、その後前線の弟達に伝える。」

サクヤ

「……ですが、都市を開けて……大丈夫ですか？」

ルル

「心配しなくていいわよ。巡航艦配置してあるから。都市内はセキュリティシステムと甲三兄弟がいるから。有次郎にも連絡とったんだけど、訓練し過ぎてバテたって。ま、内陸だからここまで来るの私無しだと難しいし。」

サクヤ

「あと、な<sup>ル</sup>m」名前は変えないから。』……もう……いや……。」

次の日「アングルボダ級ワープ仕様」宇宙空母に乗った六人は専用施設から跳躍空間に跳んだ。

空間を移動中に五人はルルから今回の作戦概要を聞いていた。

ルル

「今回はグループに分けようと思います。」

オオツツ

「じゃあ、世界中で活動するってこと？」

ルル

「そういうことね。とりあえず日本と欧州に分けるから。」

まず、日本にはサクヤとオオツツ。欧州は残り三人で。」

全員

「はい！」

ルル

「でも、派遣前に拠点を創るから、創り終えてからね。」

スミス

「拠点はどの辺りに？」

ルル

「太平洋に当時の地図に無い島がある。日本かアメリカかも曖昧だからそこを拠点にする。可能であれば、資源や残骸も回収しといて。」

ムツ

「では、軍の編成は？」

ルル

「基本的に輸送系の編成ね。必要な戦力はその状況次第で、甲三兄弟がその世界に送るから。まあ、自分達で何とかしなさい。できるだけ兵器には頼りたくない。修理とかの資源が不足しているのが理

由だけど……。」

全員

( やっぱり……。 )

ルル

「注意するのは向こうの鋼の乙女達ね。向こうから見れば私達は不法占拠してる軍だからね。平和傾向になってるから、戦闘は少ないけど油断しないように。」

全員

「はい！」

ルル

「そろそろかな？」

跳躍空間を抜けるとちょうど木星辺りから宙域に侵入した。このまま地球に向かう。予定では深夜に例の島にたどり着く。

19XX年8月下旬。

- この姿を見る人は深夜だからこの時代いないだろう。いや、日夜復興作業しているなら見るかもしれない。とある異変として。

そう思い、徐々に近づく青い地球を見ていた。

到着四ヶ月後(ライトニング姉妹が見つってから三ヶ月後)に要塞島が完成したのは先の話。

## 設定変更に関する極秘報告書2-2（後書き）

- やつと第2章に入れます。

ルル「ちよつと待つて！」

- いきなり何ですか？

ルル「これ一つ投稿するのに随分かつたわね。」

- まあ、オリジナルのストーリーだからな。

ルル「あんな説明で大丈夫なの？この先の話で重要なのに。」

- 読者を信じる！

ルル「……GB8爆弾発射！」

- ちよつと待て！それは待て

ギヤアアアア……。

ルル「はあ……、私はこんな作者から生まれたのか……。

あつ、見苦しいところ見せてすみません。私からきつちり言ってますから。

もしわからない部分があれば、感想を使って聞いてください。私自身のことでも結構です。ネタバレしない範囲で答えると思いますので。

引き続き、第2章をお楽しみ下さい。」

第2章0話 三箇所近況報告（前書き）

第2章前に知っておきたい出来事（？）です。

一部関係ないかもしれませんが。

## 第2章0話 三箇所近況報告

未知なる過去の地球

我々が太陽系解放同盟軍を追って跳躍空間から抜け出した場所は同じ太陽系であった。

だが、地球はR型戦闘機とは無縁な世界であった。

どうやら過去の太陽系に出てきたらしい。

その事を調べる為に私自らが「アロー・ヘッド」に乗り込み出撃したが、エンジントラブルにより地球に不時着した。

しかし、私はここで驚愕の出来事に遭遇した。

この地球では、人間（ほぼ女性や少女）のような外見でありながら全身武装をした「鋼の乙女」という兵器を開発していた。

彼女たちは兵器でありながら感情を持っており、人間と同様に接することができるようだ。

私は彼女たちに助けられ一日世話になった。

どうやら我々の知る過去の時代とは違う時代かもしれない。

無事に艦隊に戻った私を見て隊員達は安堵の表情を浮かべた。

しかし、私は信じ難いことにこの地球から太陽系解放同盟軍らしき部隊の発見報告を受けた。

隊員の報告によると太平洋のとある島から存在しないはずのR型戦闘機の反応を複数検知したそうだ。

我々の追っている進路は正しかったのだ。

太陽系解放同盟軍がこの地球を拠点にしようとしているのか、一部だけで我々の足止めをするつもりなのか不明だが、この地球を利用されては彼女たちも巻き込むかもしれない。

再び彼女たちの元に行く訳だが、我々の戦いに関係ない者が巻き込



まれることはあつてはならない。  
私は隊員達に太陽系解放同盟軍であろうR型戦闘機の掃討を命じ、艦隊を地球に降下させた。

・地球軍特別遠征艦隊指揮官アレン・F・ソフットの航海日誌より・

二月二十日

アメリカ軍とルルが接触してから二日後、基地内では要塞島に関する議論が展開されていた。

クレア

「チクショー！思い出すだけでもムカつくぜ。」

ルリ

「クレア、落ち着きなさい。貴方の気持ちも分かりますが、今は動くべきではありません。」

クレア

「じゃあ、やられたのをそのまま見過ごせって言つのか？」

ルリ

「そういう訳ではありません。しかし、今の我々では明らかに実力不足です。いつか必ず報復の機会があります。それまでは動くべきではないのです」

ネコ

「そうだニヤ。いつか必ず勝てるニヤー。」

フランシス

「そうよ。ルリさんの言う通りよ。あんた一人だけ行つたってまた返り討ちにあうだけよ。」

クレア

「んなこたあ分かってるけどよお！」  
ハイネ

「しかし、クレアさんが一撃で倒されるとかなり厳しいでありますが。」

クレア

「今に見てるよ！いつか必ずぶっ飛ばしてやるからな！」

ルリ

「……司令官、何かありますか？」

司令官（米）

「ノーコメントだ。」

ルリ

「そうですね。参りましたね……。クレアも落ち着きそうにないし……。

」

すると、ドアが開きライトニング姉妹が入る。

クラレンス

「やあ、クレア。あっさり負けたんだねえ。」

アリス

「ホント弱いわねえ。クスッ」

クレア

「お、お前ら！潰されたいのか！」

クラレンス

「アハハ 随分ご立腹なこと。」

アリス

「クレアならいくら足掻いても意味無いのにねえ。」

ルリ

「やめなさい！二人とも！」

フランスス

「一体何しに来たのよ？」

クラレンス

「ボク達はちよつとした耳寄り情報を手に入れたんだけどね。」

ハイネ

「耳寄り情報？」

アリス

「しかも、例の島についてのね。」

全員

「!？」

クラレンス

「と言つても写真だけどね。」

アリス

「あの島は『要塞島』と呼ばれてるらしいわ。」

ルリ

「ちよつと待って！いつ撮ったんですか!？」

アリス

「あの戦闘機タイプの鋼の乙女にとにかく言われたようね、ルリ。」

ハイネ

「ということは我々が島に出撃していた時と同じでありますね。」

クラレンス

「ま、君達が陽動してくれたおかげで島全体を撮影できたわけさ。

クレアのやられっぷりの方が面白かったけどね。クスッ。」

ルリ

「クラレンス！クレアをおちよくるのもいい加減にしなさい！」

クラレンス

「今日はルリの気分も悪いみたいだね。」

アリス

「そうね、じゃあ退散しよつか、姉さん。」

クラレンス

「そうしよつか、アリス。」

来てからわずか2分でて出ていったライトニング姉妹。机の上にはA  
4の封筒一枚。

クレア

「クソッ！あいつもうざいけど、双子の方がもつとうぜえ！」  
ルリ

「私達の出撃を利用するなんて……。しかし、有益なものを残した  
のも事実……。」

ネコ

「ニヤア？あいつらっていいやつらだったかニヤア？」

ハイネ

「それはないと思いますが……。」

フランシス

「狂っても仲間って言いたいのかしら？受け入れる気なんて無いけ  
ど、そうですね、ルリさん。」

ルリ

「そうですね。ですが、この封筒が本物なら我々が有利になるこ  
とは間違いありません。」

クレア

「じゃあ、その写真ですぐに対策立ててくれ！すぐにでも殴り込ん  
でやる！」

ルリ

「落ち着きなさい。気持ちだけ先走っても意味がありません。クレ  
ア、少し休みなさい。対策は立てておきますから。」

フランシス

「ルリさん、私もお手伝いします。」

ライトニング姉妹が撮影した写真から対策を立て始めるアメリカ軍。

しかし、簡単に対策を立てるのは不可能だとルリは直感していた。島の戦力はルリ以外にこの世界に五人存在している。彼女たちも同等の能力があるはずである。

ならば連合軍の鋼の乙女で攻めるべきだろうか？

いや、枢軸国の協力も必要である。特に同じ太平洋に面し、アメリカを降伏させた日本は取り分け重要である。

戦争は終結し、平和を求める今なら……

このルリの考えは簡単には実現しないが、確実に要塞島攻略の構図が描かれ始めた。

ドイツ国内

まだ東西に分かれていないとき、ドイツの鋼の乙女は全員日本に飛んでいった。

彼女達からすれば偶然といったところだろう。

そのおかげでドイツ総統官邸前にまで近づけた。

目的は地下のDF研究所内のデータ回収と痕跡の撮影。

それが將軍からの指令だ。

ムツ

「あの…、スミスさん。」

スミス

「えっ？あ、はい、何でしょうか？」

ムツ

「大丈夫ですか？何かぼーっとしたような感じに見えたんで。」

スミス

「えっ？そうだった？ごめんね。心配かけてしまって。」  
ムツ

「いえ、大丈夫ならそれで構いませんので。」

ラミデス

「あの…、それで…この先はどう進みますか？官邸内にこれは同伴  
できませんよ？」

ラミデスの言う「これ」とは、今彼女達の真上に浮遊しているR型  
戦闘機の電子戦機「パワード・サイレンス」のことである。

この電子戦機からジャミングと呼ばれる索敵遮断空間を展開し、彼  
女達はこの中に入っていた為、誰にも気付かれずに官邸前に来た。  
とはいえ、戦闘機だから官邸に入るはずもなく、地下への通路まで  
ジャミングから出なければならぬ。

スミス

「心配に及びません。將軍から麻醉銃と電子爆弾貰ってますので。  
でも、今は無理ですから夜になるまで待ちましょう。戦後から数ヶ  
月経っています。街灯もまだあまり普及していないはずですし。」

夜になれば、スミスの言う通り、官邸を除けば街灯はあまりなかつ  
た。だが、代わりに連合軍兵士が見張りをしている。ここからだ  
と4人。内部にはさらにいるはずである。

スミス

「とりあえず近づきましょう。麻醉銃の用意はした？」

ムツ

「大丈夫です。」

ラミデス

「私も…準備しました。」

スミス

「じゃあ、行きますね。」

彼女達は官邸前を通り過ぎ、内部に入る。連合軍兵士は麻酔銃で眠らせ、難無く地下に着いた。だが、地下にあったのは痕跡だけで、設備や資料などは既になかった。

スミス

「……やっぱり。痕跡だけすね……。」

ラミデス

「あの、私が写真撮ります。」

痕跡を撮影し、地下、官邸を出た三人。侵入前と変わらない静けさであった。

だが、彼女達は予想外の事態に遭遇した。

ベローチエ（5号）

「あぁー！！！！見慣れん鋼の乙女や〜！！」

ベローチエ（8号）

「ほんまや！はようパスタの姉さんに知らせな！」

スミス

「なっ！？あれはベローチエ！ドイツにいないはずでは！？とにかく急ぎますよ！パスワード・サイレンスの元に！」

ベローチエ（6号）

「あかん！逃げられたらあかんで！」

ベローチエ（9号）

「よし、こちらで追いかけるで！はよ知らせてな！」

スミス達を追い始めたベローチエ×4

しかし、角を曲がったところで

ベローチエ（6号）

「？、どこ行つた？ここ曲がったはずやけどな？」

ベローチエ（8号）

「大通りやで？見失うはずないはずやけどな？」

ベローチエ（5号）

「ど、どないしょ。パスタの姉さんに怒られる。」

ベローチエ（1号）

「おゝい、どないしたん？」

マチルダ

「全く何ですの！ドイツ国内の見回りで気分が鬱蒼としているというのに騒ぎ立てて！」

ベローチエ（9号）

「見慣れん鋼の乙女がいたんやけどそこで見失なっちゃったんや。」

マチルダ

「見失つたじゃありません！あなたたち何しているんですか！これだけの数がいながらも！」

ベローチエ（6号）

「堪忍したつてな。角曲がるまではいたんやけど、曲がった途端に消えたように見失つたんや。」

マチルダ

「幽霊でも見たんじゃないの？」

ベローチエ（8号）



「幽霊ちゃうで！あれはほんまに鋼の乙女やったで！」

マチルダ

「じゃあどんな鋼の乙女でしたの？」

ベローチエ（7号）

「確か戦車と航空機と艦船の3人やったで。」

ベローチエ（8号）

「そつや！あの戦車の姉さん、ドイツのフェイはんの服装と似てたな。」

マチルダ

「フェイの服装に…？」

ベローチエ（5号）

「でも、服装は帽子まで全部黒やったし、黒髪でストレートやったな。あと、胸がパスタの姉さん並にぱっつんぱっつんやったわ。」

ベローチエ（9号）

「でも、あとの2人はうちらと同じくらいやったな。」

マチルダ

「胸の大きさを聞いているのではありませんわ！何処で見たんですか！」

ベローチエ（7号）

「その總統官邸から出てきたんやで。」

ベローチエ（1号）

「そ、總統官邸やって!？」

マチルダ

「總統官邸…？」

總統官邸と聞いて急に顔を険しくしたマチルダ。總統官邸はまだ連合軍が管理している。地下の設備も本国イギリスに移動させ、シスターが解明している。だが、今になって鋼の乙女が官邸から出てきたとなると何か不可解だった。

マチルダ

「まだ何かありそうね……。とりあえず官邸を見に行きなさい。」

ベローチエ（1号）

「皆頑張つてな。」

マチルダ

「貴方もですわ、1号！」

ベローチエ（1号）

「ええー！？堪忍したつてな！」

マチルダ

「私も行きますから。」

ドイツ国内の一夜の出来事が後に世界を動かす事態となる事には誰も気付かない。現地の鋼の乙女も。

## 第2章0話 三箇所近況報告（後書き）

どうでもいい戦争雑学

イギリス砲兵牽引車 No. 39

スミス砲

オリキャラの名前に使っている実在兵器。

一九四一年初夏、ドイツ軍のフランス電撃戦で英派遣軍が本国に撤退し、三万の将兵の再装備とドイツ軍の本土侵攻に備え、英軍は兵器の生産と新兵器の開発に力を注いでいた。

この背景の中、玩具製造企業から軍需会社に転換したトライアンコ技術社のスミス技師によって考案された。

英陸軍の公式記録は「兵器委員会登録番号8033」であり、同年七月三十一日に性能実験が行われたが、安全性に問題があった。

スミス砲は口径三インチ（七六・二ミリ）の滑腔【かつこう】砲身（砲身内部に砲弾に回転を与えて弾道を安定させるための施条がない滑らかな砲）で、砲弾を砲尾の薬室から装填する一種の後方式迫撃砲である。

直径一メートル六センチある二枚の皿型車輪（周囲は硬製ゴム）の中央の太い車軸部分に、砲身と照準具などの操作装置と一発格納できる弾薬筒が付属していた。

二枚の皿型車輪は一枚が内側に向けた凸型で、もう一枚が外側へ向いた凸型である。

連結牽引移動が可能で、発射準備は車輪の凸型面を上にして九度横に回転させると、車輪が砲床になる。

また、車軸を回転して射界は仰角プラス三度だが、左右角は三六度だった。

位置によつては装甲防盾ともなった。

しかし、同年九月二十日に英本国軍司令部はスミス砲を「第二線兵器」とした。

理由としては制式装備としては中途半端であるという意見が多かったからだ。

一九四一年四月に戦況が変わり、制式装備に採用され、陸軍と空軍の一部に供給され、飛行場の防衛任務に用いられた。

しかし、一九四二年に発射時のガス圧力に耐えられないことから開発計画が放棄され、次第に人々の記憶から消失してしまった。

一九四五年十二月に旧式という理由で廃止された。

第2章1話 日本驚愕！特別遠征艦隊着陸（前書き）

混ざりました。

妄想はできても描写にできない作者。

## 第2章1話 日本驚愕！特別遠征艦隊着陸

あの感動の再会后、あかぎが

「もつと皆とお話したいから、一泊したらどう？」「と言つのと目を覚ましたエーリヒが

「日本食食べさせるまで、私帰らないから！」と駄々をこねたので、レントは仕方なく独司令官から許可を貰い日本に一泊する羽目になった。

（始めはレントが独司令官に話していたのだが、途中であかぎが無理矢理変わり、結局あかぎが代わりに許可を貰った。断片的だが、写真がどうかと怪しい話が聞こえた。）

レント

「おい、あかぎ。司令官と何を話したんだ？」

あかぎ

「別に、うふふつ。」

あかぎの顔が怪しい笑みを浮かべていたのは気のせいだろうか。

休憩施設の食堂は13人の鋼の乙女で満席となった。元々臨時に建て替え、鋼の乙女は3人しかいなかったから仕方ないことだ。

食堂でドイツの鋼の乙女が3人に説明する。

ナナ

「ええっ！？DF技術による復活！？」

レイ

「確か欧州にいたあの改造された鋼の乙女に使われた技術と聞いたが……。」

ミハエル

「ああ。レンとエリも一度はDF改造されたんだ。」

フエイ

「親玉の鋼の乙女を倒したのが連合軍のエイミーとお前達日本軍のチハなのは知っているな。」

てんざん

「はい。戦争が終わって日本に帰ってきた時に聞きましたから。」

レント

「話を戻すが、イギリスの鋼の乙女、シスターが戦時中からDF技術を調べて、DF研究所を連合軍が接收したことで、DF技術で鋼の乙女を復活させられる事を突き止めたそうだ。」

あかぎ

「それで私達が戻ってきたわけよ。」

ナナ

「展開が唐突だけど、結果的に二人が帰ってきたからいいのかな？」

レイ

「そうだな。」

てんざん

「私もお姉さま達が戻ってきて嬉しいです!」

いちこ

「てんちゃん、よく分かってるわ。ちゃんと成長していて、いちこさん安心したわ。」

てんざん

「ひゃう!?! い、いちこお姉さま、食堂ですよ!?!」

いちこ

「可愛い子を抱くのには場所なんて関係ないのです。」

ミハエル

「あははっ、本当にルーにそっくりだな。」  
あかぎ

「あゝ、いちこ抜け駆けはずるいわよ。」

ルーデル

「そうよ、皆のてんちゃんなのよ。」

フエイ

「日本のだろ……。」

エーリヒ

「ねえ、ご飯まだ？」

ペローチェ

「おおい、待たせたな。日本食とパスタやで。」

食堂で夕食を食べた鋼の乙女は休憩施設の部屋に日本と欧州と分けて宿泊した。

日本側の部屋では、そろそろ寝ようとしているのにあかぎは何やらうきうきしていた。

あかぎの事だから、何か良からぬ事を企んでいるかもしれないという思いで、寝ていながらも神経を張り詰めることとなった。

当のあかぎは、それを察してなのか静かに部屋を出た。向かう先は欧州側の部屋

欧州側の部屋の前にはルーデルがいた。

ルーデル

「あ、あかぎ、大丈夫だった？」

あかぎ



「大丈夫よ。そつと部屋を出たから。そつちは？」

ルーデル

「こつちはバッチリよ。」

あかぎ

「じゃあ、お待ちかねのドキドキ！鋼の乙女寝顔写真撮影大会。今回はこの最新式カメラを使います。」

あかぎが取り出したのは、一眼レフカメラに赤外線加工された『暗くてもフラッシュ無しでしっかり撮れるカメラ』（あかぎ命名）。いろいろツツコミたいところだが、あかぎがシスターに頼んで作った特別製なのでそこは妥協。

とりあえず部屋に忍び込み、7人の寝顔をしっかりと収めた。特にヴィルヘルムとベローチェが愛くるしくて、鼻血が出そうになったとはあかぎ談。

その後、ルーデルと別れて部屋に戻ったあかぎは、あかぎが部屋を出て安心して眠った3人もしっかりカメラに収めたの言うまでもない。

あかぎ

「皆の寝顔って本当にかわいらしいわ、うふふつ。」

日本へ降下

我々は大気圏を越え、地球上空へたどり着いた。しかし、日本から少し座標がずれていたようだ。眼下には広大な土地が広がる。どうやら中国大陸らしい。過去の地球である以上余計な混乱を避ける為、

夜間航行となったが、夜の地球もやはりどこか懐かしさを感じていた。  
日本の北海道にはちょうど朝に到着する。鋼の乙女レイと別れたのも朝であるので、少し奇遇を感じた。

だが、我々の任務はあくまでも謎のR型戦闘機の撃破。北海道は中継地点。それを踏まえて任務を遂行したい。余計な情けは悲劇を生むのは散々体験してきた。彼女達は巻き込まないと決意を改めた。この日誌を書いている今、地平線から朝日が上りはじめた。

・地球軍特別遠征艦隊司令官アレン・F・ソフトの航海日誌より・

二月二十日

アメリカは要塞島攻略の会議をしていた。

日本はとんでもないものが西の空からやって来た。

最初に気付いたのはもちろん……

レイ

「せいっ！せいっ！……ふっつ。」

あの広場でレイがいつもの訓練をして、少し休憩していた時、

レイ

「な、なあ！？」

ふと空を見て、突然現れた「テュール級」宇宙戦艦を筆頭に5機編

成や単機のR型戦闘機。

レイ

「あ、あれは…！」

レイが見た中に、早期警戒機「アウル・ライト」を確認した。

朝6時。

一度出会った宇宙からの尋ね人が再び彼女の前に現れる。誰も予測できない不意の訪問。

反射的にレイは艦隊に向かって飛んでいった。

乗組員1

「前方より飛行物体を確認。これは……しよ、少女？前方より、少女が飛んでいます！」

乗組員2

「袴を着た少女がこちらに向かっています！」

アレン

「あれは……。うむ、心配無用だ。彼女に信号を出せ。」

乗組員3

「ですが（アレン）『早くしろ！』りよ、了解！」

レイ

「むっ？あの戦艦の点滅光は信号か？」

テュール級宇宙戦艦の艦首の下辺りからレイに向けて光が点滅している。

レイ

「……着陸場所への案内を頼む……と。」

(……だが、これだけ大型だと敷地内に入るかどうか……。いや、確か近くに広いグラウンドがあったはずだ。そこならいいかもな。)

レイがグラウンドに向かおうとすると、艦隊も彼女の後に続いた。

休憩施設ではナナがレイの様子を見ようと外に出た時、

ナナ

「えっ？ええっ……！！！！！！？」

ナナの大声に続いて後ろから来たてんざんが気づく。

てんざん

「ど、どうしましたか、ナナお姉さま！？って、あわわわー！！

！？」

ナナ

「何！？何！？何なの！？てんちゃん、あれ何！？」

てんざん

「わ、私にも全然分かりません！！一体何なんですかー！？」

ナナ

「れ、レイ！あれ一体な……、レイがない！？」

てんざん

「レイお姉さまが!?!いつもはその広場で……。まさかあそこに!?!」

ナナ

「ど、どどどどうしよう!?!レイが危ないよ!」

てんざん

「た、大変です!い、急いで行かないと!」

ナナ

「そ、そうだ、早く助けに行かないと!飛ぶよ、てんちゃん!」

てんざん

「わ、分かりました、ナナお姉さま!」

鋼の乙女と言えどもさすがに目の前の宇宙戦艦の大きさには驚かされる。

完全にパニックった二人は宇宙戦艦を目指し何故か低空飛行で近づくというよりなぜ他の乙女に知らせないのか?

レイの危機を察知したからだろうか?

レイ

「……………」

地面に着いたレイはその圧倒的な大きさに呆然としていた。

アウル・ライトや他のR型戦闘機は確かに彼女達からすればやや大きいぐらいだが、戦艦は約10〜13倍といったところだ。ヨルムンガンド級輸送艦も2、3倍はある。

アウル・ライト以外にも独特の形状をした多数のR型戦闘機。

強化戦闘機「ウォー・ヘッド」「ストライク・ボマー」、中距離支援機「モーニング・スター」「ホット・コンダクター」、要撃機「ワイズ・マン」、爆撃機「ステイヤー」、高機動機「ピース・メーカー」等、他多種のR型戦闘機。

レイ

（凄いな……。未来ではこのような技術があるのか。我々鋼の乙女が太刀打ちできるかどうか……。）

レイは率直にそう思った。

宇宙戦艦やヨルムンガンド級輸送艦、入りきらなかったR型戦闘機がグランドに着陸した。

まさに今の世に見合わぬ景色がそこにあった。

戦艦からアウル・ライトが単機だけ出て来て、レイの近くに着陸した。

レイは自然と背筋を伸ばし、姿勢を正した。

アレン

「また会ったな。」

レイ

「アレン指揮官殿。なぜまたここに？」

アレン

「少し厄介な事……。」

「……………イ〜!」

レイ

「厄介な事……………ですか?」

「……………さま〜!」

アレン

「ああ、実は……………。」

「レ〜イ〜!」

「レイお姉さま〜!」

レイ

「む? ナナとてんざんの声がしたような……………。」

ナナ

「レ〜イ〜!」

てんざん

「レイお姉さま〜!」

レイ

「ナナ! てんざん!」

てんざん

「レイお姉さま! 危ないです!」

ナナ

「そつだよ! レイ! 早く逃g……………。」

ナナとてんざんはある人物を見るまでパニックっていたが、

ナナ

「……………。」

てんざん

「……………。」

レイ

「ど、どうしたんだ二人とも。急に危ないだなんて言って……って  
何で固まってるんだ？」

てんざん

「……え、えっと？あ、アレン指揮官ですか？」

ナナ

「こねって……どっぴいっぴいとっ。」



## 第2章1話 日本驚愕！特別遠征艦隊着陸（後書き）

……後書き任された……エイミー改め……サクヤ……です。

新年……明けても……ペース……守るらしいですけど……基本的に  
土か日に……更新するようです……。

作者から……伝言ですが……第2章から……少し長めの話を予定……  
……で……更新遅れ……可能性ありらしいです……。

前書きに……作者言っていましたけど……本当に……表現力がないん  
です……。内容を……濃くしたいとは……思っているらしいのです  
が……。

……そんな……作者ですけど……今後とも……よろしくお願いします……  
……。

これで……いいですか……將軍……？

第2章2話 今昔連合軍結成（前書き）

突如現れた艦隊と再会した三人。  
この出会いに動き出すものは

## 第2章2話 今昔連合軍結成

これだけ大きい戦艦に三人しか気付いていないわけではない。

目を覚ました他の鋼の乙女も次々に気づき始めた。

ミハエル

「なっ、何だありゃ!？」

フエイ

「あれは日本のなのか？」

あかぎ

「わ、私達も知らないわ。初めて見るわ。」

ベローチエ

「なんや、あのでっかい飛行物体は〜！」

いちこ

「そういえばレイちゃん達がいなのです〜。」

レント

「もしかしたらあいつら、あそこに行つたかもしれないぞ。」

あかぎ

「まずいわ。私のレイちゃん達が危ない。」

ルーデル

「あかぎの言う通りよ!皆で助けに行きましょう!」

ヴィルヘルム

「で、でもあんなでっかいものに攻撃できるのか?」

クラウディア

「そやなく、確かに迂闊に手出ししたらあかんかな。」

いちこ

「でも、レイちゃん達が……。」

休憩施設から出て、外から戦艦を確認した鋼の乙女達は謎の軍団に立ち向かって救助するか様子を見るかで意見が分かれていた。

その三人はというと

レイ

「落ち着いたか？」

ナナ&てんざん

「……。」

アレン

「……いきなりだから仕方ないだろう。それに、この大きさは誰でも驚く。我々にとっては頼もしい宇宙戦艦だがな。」

ナナ

「それで……、どうして戻ってきたわけ？」

アレン

「我々はある軍団を追ってここまで来た。我々人類の敵として我が軍に鹵向かってきた連中だ。その軍団の戦闘機がこの地球の何処かにか潜んでいることが分かった。」

てんざん

「そうでしたか。」

レイ

「で、その戦闘機とやらはどんなものだ？」

アレン

「今後ろにある戦闘機と同系統であることに間違いない。まさかこ

の地球を拠点にするとは思わなかった。」

ナナ

「それって……ここで戦うってことだよな。」

アレン

「……できれば宇宙内で始末したかったのだが……。」

するとアレンの想像どつりの展開となった。

ナナ

「じゃあさ、ボク達も手伝おうか？」

レイ

「確かに宇宙は無理だが地球内なら我々も戦える。」

てんざん

「私達も平和の為に戦います。」

アレン

「それはダメだ。」

三人

「えっ？」

まさかの即答。

無論アレンにとって予想通りの反応だった。

アレン

「これは我々の敵である。君達が巻き込まれる義理はない。元々存在しないものに加担しても何も残らない。下手すれば命を落としかねない。」

レイ

「それは……一理あるな。」

ナナ

「レイ？」

レイ

「だが、せつかく平和になった世界だ。ほつとく訳にいかない。」  
アレン

「君達には分からないだろうが、君達が今まで戦った戦闘機とは次元の違う戦闘機だ。君達だと多数相手ではまず勝ち目はない。対抗できるのは我々の艦隊だけだ。」

てんざん

「確かにあの戦闘機もエンジンを撃ち抜いて破壊しました。」  
アレン

「あ……そうだったか。だが、あれはたった二機。相手は相当数いると予想される。」

ナナ

「そうかもしれないけど、地理的にはボク達のほうが詳しいし、休憩施設とかも必要でしょ?」

レイ

「ナナ? まだ私達しか知らないんだぞ? どうやってこの戦艦を収容するんだ? 大きさも考えれば見つかるのも時間の問題だ。」

ナナ

「でもほつとけないよ。平和な世界でまた戦闘がおきるのなら、早めに終わらすのがいいじゃん。レイもてんちゃんもそうでしょ?」  
てんざん

「でも、私達だけでは判断しかねないと思いますけど……。」  
ナナ

「うっ……そう……だけど。」

???

「レイちゃん、ナナちゃん、てんちゃん!」

三人

「へっ?」

突然四人に聞こえた声。  
音源は空。

いちこ

「レイちゃん、ナナちゃん、てんちゃん、大丈夫ですか？」

ナナ

「あっ、いちこ。」

レイ

「……ちょっと待て。降下にしては……速くないか？」

てんざん

「そついえば私達飛び出して来ましたから……。」

ナナ

「ちょっといちこー？スピード落とさないとぶつかるよー？」

だが、ナナの声に反してさらにスピードが増すいちこ。

ナナ

「いちこ？聞こえてるでしょ？」

レイ

「いちこー！」

いくら呼び掛けてもスピードを落とさない。

てんざん

「いちこお姉様、ぶつかりますよー！」

レイ

「いちこ……まさか……。」

いちこ

「ナナちゃんー!!」

ナナ

「……ってなんでボク!? ちょ、ちょっとまっ……うわぁ!」

いちこはそのままナナに水平突撃。スピードに乗ったいちこを受け止めたナナは一時滑空して倒されて、勢いでゴロゴロ転がっていく。

回転が収まるときにはナナはぐったりしていた。あれだけの速度で転がれば当然である。

いちこ

「もう、心配かけて……。いちこさん達を泣かせるつもりですか」

ナナ

「……。」

レイ

「いや、あのな、いちこ。」

いちこ

「ん? あ、レイちゃん!」

レイ

「な、ちょっとまっ……ムグッ。」

いちこ

「レイちゃん、無事だったんですね。本当心配したのよ?」

レイ

「わ、分かった、分かったからまず離してくれ。」

いちこの抱擁から解放されるレイ。日本海軍ではいつものことだが、アレンは少し目を背けていた。

いちこ

「あれ、この人は……?」

てんざん



「あの、いちこお姉様、この方は……。」「

いちこ

「も、もしかして……レイちゃん達をさらおうとした悪い人ですね」「

アレン

「はっ?」

レイ

「いや待て、いちこ!それは違う!」

いちこ

「私達の可愛い可愛いレイちゃん達をさらおうとするのは100年早いのです!」

いちこの勘違いから、アレンに機関銃を向けはじめ。

てんざん

「いちこお姉様!?!やめてください!」

いちこ

「ええい、問答無用なのです!」

ダダダダダッ

いちこ

「えっ……?」

いちこの銃弾はいつの間にか離陸したアウル・ライトのバルカンで相殺された。最低限装備の早期警戒機でも旧式の銃弾よりは勝る。

いちこ

「い、今の青い弾は何なんですか？」

レイ

「あのな、いちこ。」

いちこ

「ほえ、レイちゃん？」

レイ

「この人は、私達を助けてくれた恩人なんだ。」

いちこ

「え、ええ〜！！！！！？そ、そうだったんですか〜！？いちこさんはなんてことを……。」

レイの言葉を聞きたいいちこはその場でうずくまり泣き出しそうになった。

レイ

「い、いちこ！？泣く必要は無いんだぞ？」

いちこ

「だって、いちこさんはレイちゃん達の恩人に向かって撃つたのですよ？許してくれませんかよね？」

てんざん

「そんな、滅相ありません！」

レイ

「そつだ！いちこは悪くない！」

いちこ

「で、でも……。」

アレン

「ゴホンツ、取り込み中済まないが少しいいかね？」

レイ

「えっ？あつ、はい。」

アレン

「確かに貴女が我々をそのように認識してしまうのも無理はない。だが、我々はそれを承知で彼女と会っていたし、こうなることも予想できた。だから、貴女が悪いことは何も無い。悪いのは我々の方だ。」

いちこ

「それって……本当ですか？」

アレン

「そうだ。貴女が彼女達の仲間であるなら、尚更だ。」

レイ&てんざん

「……………」

いちこ

「じゃあ……許してくれるのですか……………」

アレン

「元よりそのつもりだ。怪我もせずに済んだからな。」

いちこ

「何でしょうか……………。まるで司令官に諭られたような気分です……………」

「

レイ

「良かったじゃないか、いちこ。」

てんざん

「そうですね、いちこお姉様。」

いちこ

「レイちゃん、てんちゃん、優しいのね。ちゃんと成長してくれて

良かった……………」

レイ

「うわっ!?!」

てんざん

「ひゃう!?!」

二人を抱擁するいちこ。だが、二人とも嫌がる事なくいちこの抱擁

を受け入れた。

ナナ

「……何でボクだけ外れてんだろ……。」

横たわりながら見ていたナナはそっと呟いた。

ともかく特別遠征艦隊は戻ってきた三人といちこによって残りの鋼の乙女を納得させた。

ナナ

「……まあ、手伝おうとは言ったものの、ボク達だけじゃあね……。」

いちこ

「そうですね、いちこさんの攻撃も相殺されてしまいましたし。」  
ルードル

「レイちゃん達が戦いに行くのなら助っ人に行きたいのだけれどもねえ。」  
レント

「自分の国に帰らなければならぬ以上無理だな。」

ミハエル

「なんせ海のと真ん中となると俺達も使えないからな。」

ベローチエ

「うちらも危険なところには行かれへんし。」  
あかぎ

「やっぱり戦力差があるならやまとちゃんやゆきかぜちゃんに、陸軍の鋼の乙女も必要よね。」  
てんざん

「それに、司令官の特別出動許可が必要ですし。」  
レイ

「やはり未知の部隊となると挑む前から問題が山積みだな。」  
ナナ

「あの、アレן指揮官の艦隊は強いのか？」  
アレן

「相手を追撃しているようなものだから強いとは思う。だから我々だけで討伐するつもりだった。というより、君達は無理に参加する必要性は無いんだけどな……。」  
ナナ

「大丈夫だよ。皆がまとまっている今、ボク達は誰にもやられる気がしないんだ！」  
レイ

「その自信は何処から湧いて来た……。」

2時間の協議の結果、次のとおりとなった。

先陣は艦隊。後方支援に鋼の乙女。

日本の補給基地の一部をドックとして利用。

鋼の乙女に護衛用のR型戦闘機を配備。

途中変更あり

結果として鋼の乙女も協力する前提で終了。

協議終了後、ドイツとイタリアの鋼の乙女は帰国。

「いつでもいらっしやいね。待つてるから。」

とあかぎが言い、出発した。

要塞島中央研究所通信室。

ルルは欧州の三人と話していた。

ルル

「やっぱり無かったか……。」

スミス

「申し訳ありません。痕跡を写真に収めただけとなりまして……。」

ルル

「そう……、仕方がないわね。なら、施設を接收したイギリスに侵入  
してみてください。」

スミス

「承知しました。……それで、どのように？」

ルル

「できたら文章とか資料を写して。それと、ラミデスをこっちに戻  
してもらえる？痕跡の写真と一緒に。」

スミス

「ラミデスさん……ですか？」

ルル

「私もそろそろ動きたいからね。ジャミングしながら浮上して、ラ  
ミデスだけ外に出せばいいから。浮上ポイントにステルスヘリを送

る。」  
スミス  
「了解しました。」

ルル

「そろそろ動かないとね……。現場の指揮はやっぱり必要だから。」

ルルはこれから起こる出来事に胸踊る気分、笑みまでこぼす。

無論戦争関係なので笑えないのだが、彼女にとっての戦場は一常識人からすればとてもじゃないが想像できない。

むしろ、本家の鋼の乙女と一戦を交えることが楽しみで仕方なかったのだ。

もうじき始まる熱き戦争。

アメリカにソ連を巻き込む北と南で。

彼女達の参加は絶対。

避けられない歴史の戦い。

動き出す歴史の歪み。

全てはそこに集結する。

第2章2話 今昔連合軍結成（後書き）

来週もしかしたら土日更新が出来ないかも。



第2話3章 日本復興実録（前書き）

やっと投稿。

二月の異変から二ヶ月後……

## 第2話3章 日本復興実録

戦後から半年の二月。歴史の歪みが発覚していた。短くまとめれば、

鋼の乙女復活技術完成

日本に宇宙からの特別遠征艦隊が着陸

要塞島の誕生に謎の武装軍団

だが、全ての異変を知る者はいない。現地の人類に鋼の乙女、異世界から来た者もすべて。

それでも時間は動き、着々と歴史を刻む。

北海道にいる海軍の鋼の乙女はあかぎといちこの助力もあり、一ヶ月半で北海道の救援活動を完了、関東の基地に戻ろうとしたが、問題はアレン率いる特別遠征艦隊の収容である。しかし、問題も一つある。

あかぎといちこだ。

実は復活したことを海軍司令官（現鋼の乙女統括司令官に昇進【准将に相当】）、やまと、ゆきかぜ、陸軍の鋼の乙女に伝えていない。

あかぎ

「確かにそうよね。」

いちこ

「でも二人にちゃんと会いたいし。」

ナナ

「うーん、どちらも想像を超えるからね。頭が追い付くかどうか…

…。」

レイ

「特に司令官が心配だな。」

ナナ

「それって多分別の意味での心配だと思うけどね。」

あかぎ

「あの司令官の事だからねえ。」

レイ

「? ……話がよく分からないのだが?」

いちこ

「今は司令官の心配をすることはないってことよ。」

レイ

「そうなのか?」

いちこ

「そうです。今はこちらの方の心配をしないとイケないのです。」

レイ

「……。」

とりあえず、一つ一つ解決していくということで鋼の乙女は関東の基地に戻る事を決めた。アレンに関してはまだ考えるということとなった。聞けば、艦隊には補給機が燃料を生成する為、数ヶ月も飛び続けられる。

なので、艦隊は空に待機させ場所を確保したら誘導する手順にする

ことにした。

レイ

「本当に大丈夫だろうか？」

ナナ

「そこは運任せだね……。」

あかぎ

「みんな、準備できた？ 基地に帰るわよ。」

関東の木更津基地。戦時中鋼の乙女が拠点として使用された基地でもあり、ここから主戦場へと参加した。本来は空軍基地で、海軍基地は横須賀基地だが、この時代の主戦力である鋼の乙女を早急に出撃させる為、一時的に彼女達の主な駐屯基地となった。

俗世間では、戦争に直結する思想を持つ人々を裁く極東裁判があった。戦勝国だが、再び過ちを犯さぬよう当時の首相や高官らが連合国によって裁かれた。

海軍司令官は鋼の乙女の指揮官であり、戦時中での積極的な和平活動を評価され、今の階級に就いた。

余談だが、敗戦国ドイツもニュルンベルク裁判という極東裁判と同様の時期に裁判があった。

裁判を回避し、基地に戻った司令官は連合国指導のもと軍構成と通常兵器の再編などの戦後処理で忙しい日々を送った。

唯一の楽しみといえば、各地に復興に派遣された乙女達からの報告だけである。通信機越したが声を聞くだけでも十分なようだ。

司令官（日海）

「ぶっつ……。」

四月下旬に入り、今日の仕事を終えた司令官。普通はあと4時間くらいで終業だが、今回は凄まじい勢いで片付けた。

というのも、数日後に戦時中から指揮下だった海軍の鋼の乙女が戻ってくるのだ。

実に約八ヶ月振りである。仕事を終えて溜め息をついたが、やはり内側は歓喜溢れてソワソワしている。

こんな状況にどうして冷静にいられようか、否、それはむしろ不可！死んだわけではないが、八ヶ月という期間はまさに地獄！遂に私の可愛すぎる鋼の乙女達がッ！

……はっ、いかんいかん！これではせっかく昇進した意味が無いし、彼女達にも示しが付かん。あくまでも冷静に、温かく迎えなければ！

と意気込む（？）司令官であった。

四月二十九日、海軍の鋼の乙女が基地周辺に到着した。

あかぎ

「凄いわね。こんなにも街が変わってるなんて。」

てんざん

「日本の鋼の乙女総員で関東を復興させましたから。」

ナナ

「でも八ヶ月でここまで変わるなんて想像しなかったな。」  
レイ

「まあ、私達は基盤を軸に復興作業したからな。その上に国民達が頑張ったのだから、その証でもあるな。」

いちこ

「そうだったんですか。でも、あかぎといちこさんにとっては三年と十ヶ月振りですけどね。」

ナナ

「あつ、そっか。二人とも日本には戦後に戻ってきたもんね。」

てんざん

「基地も久しぶりですう。」

あかぎ

「それじゃあ、中に入って司令官を驚かせましょう！」

いちこ

「おー！」

レイ

「目的が違うだろ……。」

基地内にはせわしなく働く従業員や整備士、兵士がいた。大して基地自体は変わっていないが、**連合国軍**……いや、**アメリカ軍**兵士も基地内にいた。

勿論日本の兵士もアメリカの兵士も彼女達に気付けば挨拶をした。兵士にとっては正に女神とも言える鋼の乙女である。戦後、彼女達への敬意が当たり前になりつつあった。

そんな基地内を見回した五人は司令室前に着いた。  
いよいよ司令官との再会である。

レイが戸を叩いて、

レイ

「零戦レイ、只今北海道より帰還致しました。」

司令官

「入りたまえ。」

ガチャ

レイ、ナナ、てんざんが入室し、てんざんが戸を閉める。

懐かしさがあつた。まるで初めて起動したてた時に入った時と同じような光景。司令官は椅子に腰掛けているが、厳格な空気が上官であるという感じをより深くしていた。

司令官

「諸君、久しぶりだ。北海道及び、東日本復興ご苦労である。まあ、戦時中からの馴染みみたいなものだから、あまり緊張しなくてもいい。」

レイ

「あつ、分かりました。」

ナナ

「あれっ?」

ナナが司令官の服のバッジに気付いた。

ナナ

「司令、もしかして昇進した?」

司令官

「フツフツ、さすがはナナ君。気付いてくれたか。君達を派遣した後に上官から通達があつてな。それで私は『鋼の乙女統括司令官』という准将に等しい階級まで昇進したのだ。」

全員

「!?!」

てんざん

「そうなんですか!? 凄いですね!」

レイ

「おめでとつございます! 司令!」

ナナ

「おめでとー、司令。」

司令官

「うむ、祝福感謝する。だが、少し心残りがある。」

レイ

「心残り?」

司令官

「副官のあかぎ君も対象だったが、既に故人だったからな……。」

全員

(ええっ!?)

司令官を知る者なら誰もが耳を疑う発言であつた。

ナナ

「し、司令……、それって……まさか……。」

司令官

「む? どうしたかね? 私はただあかぎ君が純粹に頑張ってくれていたからそう言っただけだが。」

ナナ

「でもさ、それってあかぎの事を思つての発言だよな!」



レイ

「ナナ！」

ナナ

「な、何、レイ。ボク何か変な事言った？」

レイ

「そういう事でなくてな……！」

司令官

「……………レイ君、いいんだ。ナナ君の言った事は正しい。」

レイ

「えっ…………？」

てんざん

「ど、どういうことですか？あかぎお姉様に冷たいような態度でしたのに。」

司令官

「これは……………どの人間にも当てはまると思っが。言っなら…………後悔…………かな？」

全員

「…………。」

司令官

「人間は近くの親しい人が亡くなると、その人について思うようになる。親密であればあるほど強く思い、同時に後悔する。君達も後悔した事があるだろう。私も彼女がいなくなっってから副官という立場の重要性と彼女の役割がよく分かった。」

ナナ

「そっ…だったんだ…………。ごめんなさい…………。」

司令官

「いや、謝らなくていい。私のミスでもある。」

全員

「…………。」

司令室が重い空気に包まれる。

コンコン

戸の叩く音で我に帰る司令官。直ぐに姿勢を直す。

司令官

「ゴホンツ、入りたまえ。」

咳ばらいして入室させる。だが、入室者を見た司令官は瞬間、思考停止した。

あかぎ

「驚いたわ、司令官がそんなこと思ってたなんて。」  
いちこ

「あかぎが羨ましいです。いちこさんも司令官に褒められてみて  
います。」

司令官

「……………」

ナナ

「まっ、ボクのおかげで本心聞けたけどね。」

てんざん

「私もまさかとは思ったのですが……………」

レイ

「自分から言っただのは意外でしたが。」

司令官

「……………えっ？えっ？これは……………夢？夢なのか……………？亡くな  
った……………はずでは……………？」

ナナ

「あゝ、やっぱりこうなったね……………。目が完全にどっか行ったよう  
だね……………。」

その後、司令官に2時間に渡る説明をして、ようやく理解して落ち  
着いた。

司令官

「何はともあれ、これで全員揃ったわけか。」

ナナ

「というか、司令が話を聞いてくれるようにするまでに1時間もか  
かったんだけど！」

司令官

「それはすまなかった。なんせ急に死人が戻ってきたと思ったから  
な……………。」

ナナ

「さりげなく言い方がひどい……………。」

あかぎ

「まあまあ、ナナちゃんのおかげでもあるから少しくらいは許して  
あげてね？」

レイ

「ところで司令、やまととゆきかぜはまだですか？」

司令官

「ん？ああ、二人は艦船タイプだからアメリカ軍の輸送艦などの護

衛に従事している。多分あともう少して報告に戻ってくるはずだよ。

「  
てんざん

「ですが、大丈夫でしょうか？先程の司令官のようにはならないで  
しょうか？」

司令官

「そんなひどかったかね？」

ナナ

「さっき言った通りだよ。」

それから15分後

コンコン

やまと

「戦艦やまと、司令官へ報告しに参りました。」

司令官

「入りましたまえ。」

やまと

「司令、今日も問題無く終……………」。

ゆきかぜ

「？、どうしました？やまとさん。」

やまと

「レイ……………ナナ……………てんざん……………あかぎ、いちこー!？」

ゆきかぜ

「えっ？ええっ！？あかぎさんにいちこさん！？」

あかぎ

「うふふ、久しぶりね、やまとちゃんにゆきかぜちゃん  
いちこ

「お久しぶりなのです、二人とも」

やまと

「これ……幻か？」

あかぎ

「残念だけど本物よ。」

やまと

「本当にあかぎだな！？あかぎだよな！？」

あかぎ

「お帰り、やまとちゃん。」

やまと

「あつ、あかぎ……！！！！！！」

あかぎ

「ちよっ！？あ、危ない危ない。大丈夫？やまとちゃん。」

やまと

「本当……無事で良かったぜ……グスツ。」

ゆきかぜ

「……………」

いちこ

「ほら、ゆきかぜちゃんも」

ゆきかぜ

「へっ、うわっぶ……。」

いちこ

「ゆきかぜちゃん、やまとちゃんと二人だけで寂しくなかった？」

ゆきかぜ

「あ……、実は……少し寂しかったです……。」

いちこ

「でももう大丈夫ですよ。いちこさん達だけでなくレイちゃん達も戻ってきたからね。」

ゆきかぜ

「い、いちこ……さん……。グスッ、うつつ。会いたかったです……。」

もはや姉妹である彼女達には説明が無くとも大方理解できる。それが姉妹の証と言えるだろう。

やまととゆきかぜも北海道で再会したレイ達同様に抱擁し、その温かさが自分達の姉妹である事を認識させる。

一旦その場を収めて二人に改めて説明した。

やまと

「そうか。連合国によって復活したのか。びっくりしたぜ。なんせレイ達が戻るとしか聞いていなかったからな。」

ゆきかぜ

「でもみんな戻って来て嬉しいです。」

レイ

「そうだな。皆が顔を会わすのは久しぶりだからな。」

ナナ

「ところで司令、あと二つ聞きたい事があるんだけど。」

司令官

「何かね、ナナ君。」

ナナ

「陸軍の鋼の乙女はどうですか？ふがくとかは陸軍を手伝いするとか言っていましたけど。」

司令官

「うむ……、今は確か九州南部まで復興させているはずだ。まあ、この基地が陸海軍鋼の乙女統括基地に指定されたから、待っていていればこの基地に戻れると思う。」

てんざん

「そうでしたか。」

司令官

「して、もう一つは？」

ナナ

「あつ……………えつ……………」

司令官

「？、どうしたかね？」

ナナが「二つ」と言った時点でレイに小声で「大丈夫か？」と言われたが、実際には打ち明けるのが難しかった。あかぎといちこの反応もあり、謎の艦隊が来たとなると信憑性に関わる。

ナナ

「あの……………その……………きゅ……………」

司令官

「きゅ？」

ナナ

「給油缶はいつものところかな？アメリカの兵士とかいたからさ。」

司令官

「なんだ、給油缶か。心配しなくていい。いつもの場所だ。そういえばアメリカ軍から品質の良い給油缶が贈られている。向こうの鋼の乙女もよく利用するものだから、そちらも試飲しても構わない。」

口に合わなければ、従来のもあるから安心したまえ。」

ナナ

「そっか。ありがとう、司令。」

司令官

「まあ、君達が元気でいてくれるならそれでいい。」

その後、司令室を出た7人（あかぎだけ残った）はお互い八ヶ月間の話をして盛り上がった。  
だが……

話終わると、ナナを始めレイ、てんざん、いちこの表情が少し暗くなった。ナナの場合お喋りであるのでかえって目立った。

やまと

「ん？どうしたんだ？話のネタが尽きたか？」

ゆきかぜ

「大丈夫ですか？顔色が暗く見えますが……。」

しかし、誰も答えない。

やまと

「おいおい、せっかく久しぶりなのにそんな暗かったら悲しくなる  
だろっ？」

ナナ



「……………そうだけど……………」

ナナがよろこばく口を開く。

ナナ

「やまと、ゆきかぜ……………少し見てもらいたいものがあるんだけど……………」

四人はやまとゆきかぜを連れて基地外に出た。

第2章4話 迷いし乙女に時は止まらず（前書き）

お待たせしました。予定を前倒ししてやっと投稿。

あかぎが司令室に残った理由…

ナナ達に導かれ艦船の二人が見た艦隊は…

## 第2章4話 迷いし乙女に時は止まらず

司令室に一人残ったあかぎは司令官と今後について話していた。

あかぎ

「……………それでまた私が司令官の副官になるんですか？」

司令官

「まあ、あかぎ君がなにより彼女達に良い影響となる。」

あかぎ

「はあ……………でもあの子達には心配かけたみたいだし……………。いいです

よ、今回は。」

司令官

「そうか。すまなかった。」

あかぎ

「もう済んだことですし、司令官が私の事心配してくれてたし。」

司令官

「いや、別にそういう意味で言ったわけでないし、第一誰がババアの心配をするんだ！」

あかぎ

「まだ言ってますか？せっかく作業中のレイちゃん達を収めた写真があるのに。」

司令官

「何！？それは本当か！？」

あかぎ

「渡しませんよ。私といちごだけで楽しみますから。」

司令官

「私も作業中のレイ君達の姿をぜひぜひ見たいのだ！」

あかぎ

「え、でもねえ……………。」

司令官

「頼む！白黒の焼き増しでも構わんから！あかぎ君！そこを何とか……！」

あかぎ

「はあ、じゃあ一つ聞いてもらえるかしら？絶対に驚かない条件で。」

司令官

「……よし、分かった。」

あかぎ

「実はナナちゃんが言おうとした事なんだけど……。」

やまと

「特別遠征艦隊？なんじゃそりゃ？」

ゆきかぜ

「私もよく分からないのですが……。」

ナナ

「うーん、やっぱり口で言うより見た方が早いかな。」

レイ

「確かこの辺りだが……。」

てんざん

「あ、お姉様方、あそこです。」

やまと

「ん？………な、なんだありゃ！！！！？」

ゆきかぜ

「すげー……。」

基地から数km離れた海岸沿いに来た六人の上空に  
現れた「テュール級」宇宙戦艦。やまととゆきかぜはその圧倒的な  
存在感に面食らっていた。

ナナ

「そう、あれ。」

やまと

「あれが……特別遠征艦隊……。」  
ゆきかぜ

「……………」

ナナ

「すごいでしょう」

レイ

「自分がやったみたいに聞こえるが……。」

やまと

「うっ……………うっ……。」

ナナ

「へっ？やまと？」

てんざん

「どうしたのですか、やまとお姉様。」

やまとはいきなりナナの背中をバシバシ叩き始めた。

ナナ

「痛っ！やまと痛い！」

やまと

「でかしたぞ！ナナ！あれはやばい！カッコイイ！！俺は今、猛烈  
に感激している！！」

ナナ

「わ、分かったから、弱く叩いてよ！馬鹿力なんだから！」

ゆきかぜ

「やまとさん、すごい喜んでる……。」

いちこ

「やまとちゃんもまだまだって事ですね」

ゆきかぜ

「?.....それって?」

いちこ

「ゆきかぜちゃんももっと成長したら分かるわよ。」

ゆきかぜ

「そう.....ですか。でも...カッコイイですね」

艦船タイプだけ第一印象が「カッコイイ」かは他の乙女も分からなかったが、理解してくれたのでとりあえず良しとした。

やまと

「つまり、あれの収納スペースが必要っていうことか?」

いちこ

「収納というより着陸できるポイントだけでいいのです。」

ゆきかぜ

「でも、ここは都心部だから広いスペースを確保するのは難しい。」

レイ

「問題はまだあるが、最優先はそれだな。」

てんざん

「北海道の時は十分な広さがあったからよかったのですが.....。」

やまと

「あ、そういや、レイ達はドイツとイタリアの鋼の乙女に会ったんだよな?」

レイ

「ああ、確かに会ったが…何故知ってる？」  
やまと

「まあ、司令官が言ってたからな。あれもすごいけど向こうの鋼の乙女にも会いたかったな。」

ゆきかぜ

「ずっと輸送船の護衛でしたから。」

ナナ

「そうだったんだ。」

いちこ

「じゃあ、雑談はこのくらいにして本題を片付けましょうね。」

やまと

「って言われてもやっぱり司令官に決めてもらわないとなあ。」

ゆきかぜ

「私も同感です。」

ナナ

「うーん……やっぱり司令官に判断してもらっしかないか……。」

レイ

「大丈夫か？さっきみたいになるのは御免被りたい。」

やまと

「さっきみたいに…？」

基地司令室前、

ナナ

(今度こそ…。)

コンコン

あかぎ

「どつどつ。」

全員

「へっ!?!」

あかぎ

「あら、皆来たのね。あら?どつしたの?皆キョトンとして。」

レイ

「な、なんであかぎが?」

あかぎ

「決まってるじゃない。副官に再昇進よ。」

全員

「ええっ!?!?!」

あかぎ

「何よ。私じゃ不満?」

レイ

「いや!そっじゃない。帰ってきたんだなあって。」

あかぎ

「レイちゃんったら、優しいのね。」

レイ

「ちょっとM……うわっぶ。」

いちこ

「あ、あかぎずるいのです。いちこさんも混ぜて下さいな。」

レイ

「ぶはっ……ま、待ってくれ。これでは前とかわ……ムグッ……。」



レイはあかぎといちこに挟まれるように抱かれ、顔が豊満な胸にうずくまり息苦しそうに見える。

てんざん

「だ、大丈夫でしょうか…?」

やまと

「ん?心配するなよ、てんざん。戦時中もそうだったから大丈夫だつて。」

ゆきかぜ

「……少し……羨ましいかも……。」

やまと

「おい、それを今言ったら『そうだったの?じゃあ、ゆきかぜちゃんも』…ほらな。」

ゆきかぜ

「へっ!?!…ムグツ。」

被害者一名追加入りました。

ナナ

「で……司令官も羨ましそうに見てないですよ。」

司令官

「まあ、久しぶりに見るところ…何と言うか…そんなに悪くは無いと…。」

全員

「………………。 (冷たい視線) 」

司令官

「ちょ、全員そんな冷たい目で見ないでくれ!私が悪かった!」

一対多じゃ敵わず頭を机に付けて謝る。この人、結局変わってない……。

全員そう思った。

司令官

「ところで……何か言いに来たのではないかね？」

ナナ

「だった。あの……司令官……驚かないで聞いて欲しいんだけど……」

以下（ry

ナナ

「……という事なんだけど……」

司令官

「……確か基地にスペースがある。多分戦艦は無理だが輸送艦と他なら着陸できる。」

ナナ

「えっ！？信じるの!?!？」

司令官

「嘘なのか？」

ナナ

「いや……本当です。」

司令官

「ならばいいだろう。その戦艦とやらの構造も見てみたいし。」

ナナ

（どうして信じてくれたんだろう?）

あかぎ

(ふふふ〜 ナナちゃん戸惑ってる。かわいい〜)

司令官がナナの話を感じたのは勿論あかぎのおかげである。あかぎが残っている時に例の特別遠征艦隊について話していた。さらに、持っていたカメラに収めていた事も功して、司令官の興味を引いた。

あかぎ

「多分あの子達と同じ事を言うと思うから、いい返事してくださいね。」

司令官

「うむ、いいだろう。………ところで『写真はちゃんとあの子達を安心させてから』………分かった。」

ちなみにこの司令官、完璧な「ロリコン」である。だからあかぎみたいな大人の女性のようなナイスバディに対してババアとか言う。

補給スペースの確保に成功

我々は今東京上空を飛んでいる。昔と言えば昔だが、戦後復興が瞬く間に進み、徐々に都心部としての姿に戻るだろう。

ちなみに私は南半球の都市で生まれた。あの頃は既にバイドという攻撃的生命体が地球に近づいている話を聞いたり、実際に交戦したりした。昔の地球とは地球内の争いだけで宇宙から見れば何とも言えぬ綺麗な惑星だ。

話を戻すが、鋼の乙女達から場所を確保したと報告が入った。どうやら交渉は成功したようだ。スペースはさほど広くないようなので、

「ヨルムンガンド級」輸送艦に物資を運ばせるつもりだ。いよいよ謎のR型戦闘機と戦う日が近づく。彼女達の為にも負ける訳にはいかない。

・地球軍特別遠征艦隊司令官アレン・F・ソフートの航海日誌より・

二ヶ月後の六月二十五日、ある場所にて

ドゴーン

ボン、ボン

ダダダダダッ

兵長

「撤退！撤退だ！」

兵1

「奇襲だ！チキショー！」

兵2

「兵長、軍が分断されました！奴ら海からも……うわぁー！……！」

兵長

「おい、大丈夫か！？」

兵3

「兵長！上官との連絡が取れません！指揮系統はすべて混乱しています！」

兵長

「どういうことだ！？」

兵3

「多分前日に落成式の宴会があったのが原因と思われる！さらに、この部隊以外の前線部隊は壊滅状態！警戒状態の解除中を狙った奇襲です！援軍も望めません！」

兵長

「くそつたれ！！兵力差がありすぎる！」

兵1

「兵長！我が部隊が囲まれました！さらにT-34中戦車も確認！  
もう無理です！」

兵長

「突撃だ！死ぬ気で突破しろ！何としても生き残れ！うおおおっ  
！！！！！」

この日、北緯38度線にて6・25戦争が幕を開ける。鋼の乙女も艦隊も謎の軍も巻き込んだ戦争となつて。

## 第2章4話 迷いし乙女に時は止まらず（後書き）

北緯38度線 韓国と北朝鮮との軍事国境線

6・25戦争 朝鮮戦争勃発日。1950年だが無理矢理設定した。宣戦布告無しに北朝鮮が砲撃を開始、その後北朝鮮軍が越境して戦争となる。

第2章5話 激突！朝鮮戦争 1 - アメリカ、日本駐屯基地へ（前書き）

朝鮮戦争勃発！

その前の話もありますが……

アメリカ軍久しぶり

日本陸軍一部遂に登場

## 第2章5話 激突！朝鮮戦争 1 - アメリカ、日本駐屯基地へ

六月二十五日、北朝鮮軍の進行に周辺諸国、アメリカから西側諸国は震撼する。アメリカとソ連の対立からなる冷戦に突入した世界。

韓国軍はアメリカから練習機程度の戦闘機しか与えられていない。対する北朝鮮軍はソ連の戦闘機 Yak-9 や il-10、An-2 さらに編成された熟練パイロットもあり空戦は北朝鮮軍が圧倒。陸戦も韓国軍は不十分な装備と兵力に対し、北朝鮮軍は10万が北緯38度線を越境、さらにゲリラ部隊が海からも進攻、韓国軍は分断され、各地で敗北を繰り返す。開戦からわずか三日後に首都ソウルは陥落・占領。一部反攻した韓国軍は一部の北朝鮮軍を壊滅状態にさせたがあまり効果は無く、韓国軍全滅は必至と思われた。

業を煮やしたアメリカは韓国軍の援軍に鋼の乙女の介入を決定。日本の駐屯基地である木更津基地に派遣された。

327

クレア

「何だよお！要塞島の前に韓国軍の援軍かよ！？」

ルリ

「仕方ありませんわ。韓国は我々西側諸国の国です。ソ連との対立を考えれば必要な国です。」

ネコ

「ルリちゃん、この船は韓国に向かっているのかニャー？」

ルリ

「一直線ではありません。一度日本の基地で補給してから出撃します。」



ハイネ

「つまり、日本の鋼の乙女とも接触するのでありますね。」

エミリー

「そういえば私達が直接日本に来るのは初めてよね？」

ルリ

「日本は戦後に鋼の乙女を中心に考えを改めたと聞いていますし、我が軍のエリートも既に日本で活躍しています。ですので、我々も迎え入れると思いますわ。」

フランス

「流石はルリさん！素晴らしいです！」

ルリ

「あ、ありがとうございます。(えっと、何が素晴らしいのかしら?)」

クレア

「相変わらずだよな、フランスは。」

フランス

「何よ、クレア。文句でもあるの?」

クレア

「お、なんならやってやるつか?」

エミリー

「もっつ、喧嘩はやめてください!」

ネコ

「おお、エミリーちゃんも言うようになったニヤー。」

ルリ

「エミリーの言う通りです。仲間割れしてる場合にはありません。平和になってもしっかり自覚を持ってもらわないと私達の意味が無くなりますわ。それに、今の世界にはより強大な敵がいるのをお忘れなく。」

フランス

「!…すみません、ルリさん……。」

クレア

「まあ、言いたい事も分かるが……、ま、とりあえず久しぶりにレイに会えそうだな。」

エイミー

「……ボソツ（チハもいるかなあ……）。」

一方、日本の木更津基地では、戦争勃発の二日前にチハのいる陸軍の鋼の乙女が戻ってきた。司令室には司令官と一人の乙女がいた。その時の会話。

はやぶさ

「陸軍一式戦闘機はやぶさ、及び陸軍鋼の乙女、只今復興作業から帰還致しました。」

司令官

「うむ、陸軍鋼の乙女よ、御苦労であった。」

はやぶさ

「早速ですけど……一つ質問したいことが……。」

司令官

「ん？何かね？」

はやぶさ

「戦時中に私達の指揮をした司令官殿はどうなりましたか……？」

司令官

「あゝ、あいつね。心配しなくてもいい。彼は帰ってきていて……入院してたな。酷い栄養失調だったと聞いているが。向こうで何していたんだ？」

はやぶさ

「さあ…。(死に物狂いで『黄金のブルマ』を捜していたなんて言えないからね…)じゃあ、一時期貴方の指揮下となるのですか？」  
司令官

「まあ、鋼の乙女の指揮は私とされているから事実上そうなる。何、安心したまえ。私はあいつよりかはまだ優しい方だ。」  
はやぶさ

「そうですね。よろしくお願いします。」  
ふがく

「おーい、はやぶさ！終わった？」

司令室の戸をいきなり開けるふがく。

はやぶさ

「ふがく!？」

ふがく

「ああ、久しぶりにまともな基地でゆっくりできるわ。」

はやぶさ

「ま、まだ終わってないけど。」

ふがく

「もういいじゃん。報告終わったんだし。それと、このオッサンも前の司令官みたいに変態だから気をつけいた方がいいわよ。」

はやぶさ

「で、でも……。」

司令官

「ふがく君の言う通り報告は済んだし、長旅で疲れただろう？部屋で休むといい。」

はやぶさ

「司令官がそうおっしゃるなら……。」  
ふがく

「早く、レイ達にも会いたいし。」

はやぶさ

「わ、わ、ちょっと待って。」

ふがくに手を掴まれて退出するはやぶさ。さながら学校内で友達に手を引かれる感じであった。

司令官

「……そういえばあれを話さなかったが……。まあ、レイ君達からの方がいいかもしれんな。」

コンコン

司令官

「入りたまえ。」

入ってきたのはチ八だった。

チ八

「し、失礼しますう。」

本来チ八が一人で司令室に入るのは滅多に無い。非常に恥ずかしがり屋で自分から発言することができず、周りに誰かいないと大丈夫かなという不安を募らせてしまう。

最近では一人でもやるべきことはやれるようになり、戦時中で雑用もしていたので、復興作業でもちゃんと人一倍頑張った。だが、チ八は今だに悩んでいた。

司令官

「チ八君、どうしたのだ？」

チ八

「あ、あの…実は…。」

チハは司令官に自分の悩みを打ち明けた。

しかし、悩みの内容はまさに彼女にしか分からない心境の悩みだった。

チハは迷っていた。本当に自分はここにいいのかを。

チハは戦時中ビルマ戦線を後にし、フィリピンに派遣されたが運悪くライトニング姉妹に鹵獲された。その後、エイミーと出会い、連合軍としてドイツ、日本と戦った。ドイツならまだしも日本は生まれ故郷であるチハにとって一つの罪としてチハに根付いてしまった。

太平洋では和解し、欧州ではドイツ軍との最終決戦で見事撃破し、英雄となった。

そして、日本に帰り陸軍鋼の乙女と復興作業に参加した。

だが、罪意識はまだ根付いており、今は仲良くしているけど本当に大丈夫だろうか、と夜考えてしまう。そのため復興作業に何度か足を引く張ってしまった。

チハは自分だけではどうしようもなく、かと言って仲間には打ち明けるのも無理である。だからこそ司令官に打ち明けたのだ。勿論、司令官に打ち明けるにも相当勇氣はあるし、直前まで迷っていた。

司令官はそんな事情を察知していたかのように、チハの悩みを一言一句漏らさず聞いていた。

司令官

「チ八君、君はここにいていいのだよ。」

聞き終えた司令官が放った最初の一言がこれだった。

チ八

「えっ……………」

チ八は顔を上げた。

司令官

「確かに我が国の軍と砲火を交えて撃破したことを罪とするならあながち間違いではない。本来兵器は物体だ。例え親しい仲間でも物体に意志はない。牙を向くこともある。だが君達は人間と同じ理性、意志がある。だからこそ考えてしまふ。チ八君、君の悩みを一つの試練と考えるはどうかな？」

チ八

「し、試練ですか？」

司令官

「意志のある者は必ず試練という壁にぶつかる。種類も豊富で、他人からしたraitたい事ないと思われることもある。しかし、その壁を越えて初めて成長する。チ八君、君の試練は則ち精神、心の試練だ。」

チ八

「??…あの…………よく分からないのですが…………？」

司令官

「君は亡くなった仲間に対して何をしたかな？」

チ八

「えっ?…えつと…………お、お参りに行きました。哀悼の念を込めて

……。」

司令官

「君が撃破した日本人にもやったかい？」

チハ

「あ……い、いえ……。何だか怖くて……。私が倒してしまったのにそんな権利なんて私には……。」

司令官

「だからこそだ。償いの気持ちを持って同じようにお参りに行くといい。それが君の試練だ。これを越えれば君は大丈夫だ。」

チハ

「ほ、本当にそれだけで……？」

司令官

「戦時中に鹵獲されて生産国の人間に牙を向いた兵器はいくらでもある。君がその哀れな兵器の代表となってお参りをするんだ。君にしかできないからこそ試練なんだ。」

チハ

「そうだったんだ……。えへへっ。」

チハは少し笑い出した。

司令官

「どうしたかね？私の説明が分からなかったかな？」

チハ

「いえ、私、司令官殿に相談して良かったと思います。司令官殿のおかげで私の居場所はあるんだって解りました。」

司令官

「そうか。それは良かった。」

と、司令室にはやぶさが入る。

はやぶさ

「あ、チハ。ここにいたの。皆待っても来ないから……。」

チハ

「あ、すみません、はやぶささん。」

はやぶさ

「もしかして取り込み中でしたか？」

司令官

「今話が終わった所だ。気にしなくていい。」

はやぶさ

「じゃあチハ、行こっか。」

チハ

「はい、はやぶささん。」

チハが司令室を出る間に、

チハ

「司令官殿、ありがとうございました。」

と笑顔で一礼。

扉が閉まった後、司令官はチハの可愛すぎる幼い感じの笑顔を見て  
「こ……これが陸軍の……真の力……！！！！グハツ！」とか言って  
鼻血を出して卒倒したとか。  
あかぎがいなかったただけでも良かったかも知れない。



この話から六日後の六月二十九日にアメリカ軍鋼の乙女が木更津基地に着いた。

その迎え入れを任されたのはあかぎ、レイ、はやぶさ、チ八だった。

あかぎ

「アメリカの鋼の乙女の皆さま、日本にようこそ。」

いつもの砕けた口調で言うあかぎ。

ルリ

「あかぎ……本当に復活したとは……。」

あかぎ

「あら、ルリちゃんじゃない。」

ネコ

「あかぎ、久しぶりだニャー。」

あかぎ

「ネコちゃんも来たんだ。よしよし。」

ルリ

「ネコ？あかぎと仲がいいみたいですが？」

ハイネ

「ネコさんが自分から元敵の鋼の乙女といるのは珍しいですね。」

あかぎ

「戦時中にネコちゃんの怪我を診た事があって、それから仲良くなっただけ。」

ルリ

「戦時中！？聞いてませんわ！ネコ！説明しなさい！」

ネコ

「えーっと、確かニャーが怪我した時に偶然あかぎがいて怪我を診てくれたニャー。ニャーはその時親切なお姉さんだーとしか思っ

無かったニヤー。だから敵だなんて全然気付かなかったニヤー。」  
ハイネ

「ネコさんらしいですね。」

レイ、はやぶさはクレアと話していた。

クレア

「おう、久しぶりだな、レイにニューゼロ。」

レイ

「久しぶりだ、クレア。…ニューゼロって？」

はやぶさ

「だから私の名前はニューゼロじゃなくてはやぶさです!」

レイ

「なんだ、はやぶさの事が。」

はやぶさ

「ちよつとレイ聞いてよ、私敵から名前言われた事が無いんだけど。」

クレア

「あれだ、装甲がレイに似ているからニューゼロだ。」

レイ

「なるほど。私が零戦だからニューゼロか……。」  
はやぶさ

「ちよつと!レイも納得しないでよ!私の名前ははやぶさです!」

クレア

「ま、改めて見ても二人とも対して差が無いな。」

この一言が二人をまた小さな争いに発展させた。

レイ

「いや!それは無い!私の方があゝ!」

はやぶさ

「私の方があるわよ！」

レイ

「いや、はやぶさは一度物を使っていたから総合的に私が上だ！」

はやぶさ

「レイだって私に黙って豊胸運動していたし！」

レイ

「それは物では無いし、第一はやぶさにも教えただろ！」

クレア

「お前ら『関係無い奴は引っ込んでろ（下さい）！』……おいおい。」

┌

一向に収まらない小さい争いにクレアは呆れていた。

チハはというと……

エイミー

「チハ！」

チハ

「え、エイミーさん!？」

抱きしめられた。

エイミー

「チハ！大丈夫だった？虐められたりしなかった？」

チハ

「だ、大丈夫ですよ、エイミーさん。なんせ私の故郷なんですから。」

┌

エイミー

「でも戦時中は……」心配しなくてもいいです。日本の鋼の乙女が

私を迎え入れたんですから。』……そうよね。」

チハ

「あれ？エイミーさん、目が潤んでいますけど？」

エイミー

「え、こ、これは目にゴミが入っただけで、別に涙じゃないんだからね！」

チハ

「そうですよね。えへへっ。」

エイミー

「何笑ってるのよ。それにさん付けじゃないでしょ。」

チハ

「いひゃい！いひゃいれす！」

エイミーがチハの頬をつねっていると、エイミーがやってきた。

エイミー

「お姉ちゃん、そのくらいにしたら？」

が、チハはその事を知らないので、

チハ

「ふえ！？え、エイミーがふひゃり！？」

エイミー

「そついえば初対面だったわね。」

エイミーはチハを離れた。

エイミー

「私、お姉ちゃんの妹のエイミーです。チハさんですね。」

チハ

「い、妹！？エイミーに妹がいたんですか！？それに私の名前も知ってる…。」

エイミー

「お姉ちゃんがチハさんの事教えてくれたの。」

チハ

「そうだったんですね。あ、私、九七式中戦車のチハです。」

エイミー

「うん、宜しく。」

フランス

「あの、ルリさん。挨拶はそのくらいでそろそろ。」

ルリ

「そうですね。事態は非常に切羽詰まっていますからね。」

あかぎ

「じゃあ行きましようか。」

アメリカ軍は日本の鋼の乙女の案内のもと、日本の司令官に会い、早速韓国軍増援について話し相手をした。

第2章5話 激突！朝鮮戦争 1 - アメリカ、日本駐屯基地へ（後書き）

どうでもいい戦争雑学（お詫びの意を込めて）

勝手ながら第1章最終話の後書きを消して今更ここに新しく解説します。

ドーリットル空襲

戦時中初めて日本爆撃をしたドーリットル米陸軍中佐率いる部隊が行った。

部隊は特別改造された陸軍のB25双発爆撃機16機で、東京から1100km余り東方の日本近海に進出した空母ホーネットから発艦。

当時は中距離爆撃機で航続距離は約2200km。爆撃後は空母に還らず、中国の飛行場でぎりぎり着陸した。しかも、日本の接近には燃料消費の激しい低空飛行による進攻。勿論護衛戦闘機は一機も無かった。

爆撃は東京、横須賀、名古屋、神戸等に行った。

これによって日本は本土防空システムや指揮統制通信の弱点を明らかにする機会でもあった。

実は日本は迎撃に十分な時間があるのはあまり知られていない。これはレーダーと海上警戒線が不十分による奢りに元づくものであった。

第2章6話 激突！朝鮮戦争 2、日米連合軍介入（前書き）

前半が要塞島軍関係

後半が朝鮮戦争編

後半長々とありますが訂正等があれば教えて貰えると有り難いです。

第2章6話 激突！朝鮮戦争 2、日米連合軍介入

要塞島軍が朝鮮戦争を知らないはずがない。  
だからこそ日本に二人配置された。  
現場までは近いのだけれども……

オオツツ

「サクヤさん、まだですか。」

サクヤ

「あと……少しで……動く……。」

将軍が派遣したヨルムンガンド級輸送艦に不具合が生じて発艦できないのです。今サクヤさんが機械室で修復しているのをサポートしています。

欧州では三人とも活躍しているのに私達は偵察程度しかしていない。これでも陸戦兵器ですけど動きが鈍るんじゃないかと不安ではないです。

サクヤ

「オオツツさん……その工具……取って……。」

オオツツ

「へっ？あ、はい。」

サクヤ

「……………よし。」

オオツツ

「動きますか？」



ゴオオツツ……

腹に響く機関部の低い轟音が輸送艦の発艦可能の証だ。

オオツツ

「やっと行けますね。」

サクヤ

「……將軍の……言われた事……覚えてる……？」

オオツツ

「はい。出来るだけ隠密に残骸回収。私達は第3軍として攻撃する。鋼の乙女に出会った場合は専守防衛で……ですよね。」

サクヤ

「そう……貴女は陸戦だから……。」

オオツツ

「心配しなくても大丈夫ですよ。副砲も整備しましたので接近戦も問題ありません。」

サクヤ

「……では行きます……。」

サクヤとオオツツ、他数台の軽戦車、戦闘機を載せてヨルムンガンド級輸送艦は北海道から発艦。輸送艦の周りには電子戦機。パワード・サイレンス三機でその存在を隠した。

要塞島内陸中央研究所。

とある一室にルルともう一人いた。

水陸両用駆逐艦鋼の乙女のラミデスだ。

例の写真を渡した後、要塞島周辺の回収タンカーの護衛をしていた。要塞島周辺も幾つか海の底に戦闘機類の残骸があるので、それらを回収していた。中には軽巡洋艦もあり、時間をかけてしっかり回収した。

これらの残骸は要塞島のある場所で使われた元の素材へと錬成分解する。還元率は10%未満だが、量で賄っていた。これもルルが持つ技術の一つである。

ラミデス

「でも周辺ではそろそろ…。」

ルル

「とはいえ、遠くには行けないし…。」

ラミデスがいるのは、周辺の残骸がほぼ回収されたのでどうするかを相談しに来たからだ。しかし、要塞島はまだアメリカ軍にしか知られていない。だからむやみに範囲を広げて見つかるとう厄介なのだ。どうせ見つかるのも時間の問題なのだ。

ルル

「悪いけど、今はしらみ潰しに周辺だけ探すしかないわね…。」

ラミデス

「そうですね。はあ…。」

ルル

「気持ちもわかるけど……今は、ね。」

ラミデスは退室した。椅子に座ったまま話していたルルは、肘を机に立てて頭を支えて考えていた。

が、数分もしないうちにまた誰かが入って来た。

ルル

「あら、中々いいじゃない。似合ってるし可愛いよ。」  
「??？」

「ソ、ソウデスカ？」

ルル

「話し方がそのままだとちょっとなあ……。」  
「??？」

「チョットお待ちヲ……声変換起動……」

「……ああ……、これで良いでしょうか？」

ルル

「充分、女性らしい声。持ってきて正解だったわ。」  
「??？」

「私もこのような形で将軍にお会いできるとは思いませんでしたから。」

今ルルと目の前にいるはメイドだ。

白と黒を基調としたメイド服、頭は金髪のポブカットである。ただ普通と違う点を挙げるなら耳に三角錐の機械的突起がある事だ。

ルル

「で、立体的に……いや、本物の空間を移動できた感想は、SCS  
？」

SCS

「画面上からやパラボラアンテナのネットワークから見えましたけど、これは新鮮な気分です！物もしっかり掴めます！」

ルル

「気に入った？これも異世界から持ってきたロボットなんだけど。」

SCS

「こんな素晴らしいロボットを制作できる世界はよほど発展しているのですね！」

ルル

「そ、そうだね。（そういえばSCSはこの世界で即席で創ったから何も知らないんだった。）」

ちなみにルルが持ってきたロボットは「コピーロイド」と言われるロボット。充電場所からネットワーク上の人格プログラムを組み込むことでネットワーク上のキャラを現実世界に再現できるロボット。ルルはこれにSCSのデータを組み込んだ。無論、戦闘用にそれなりの強化仕様・武器装備は施してある。

SCS

「でも、これって充電式ですよ？途中で切れたら私は…？」

ルル

「臨時に予備バッテリーが掛かるけど、もって10分。それまでに充電場所に戻ればいい。」

SCS

「わかりました。」

ルル

「代償として要塞島やアンテナからの全体情報が瞬時に見れないけどね。」

SCS

「分かっていますって、將軍」

ルル

「そう。（こんな明るい設定だったかしら…？ま、瀟洒で頼もしいからいいけど。）…さて、通信室で指揮を執らないと。」

朝鮮戦争は現在北朝鮮軍の圧倒で韓国軍はもはや風前の灯火だった。ところが、北朝鮮軍は突如として進軍を停止した。理由は今でも不明だが空白の三日間はアメリカ軍や西側諸国の増援にとって貴重な時間となった。

アメリカ軍の鋼の乙女だけでなく、日本も鋼の乙女のみ共同参加となり、朝鮮半島へ送られた。

ルリ

「そろそろ到着しますわ。準備は出来ていますか？」

クレア

「おう、バッチリだ。」

ネコ

「こつちも万端だニヤー。」

ハイネ

「いつでも行けるであります。」

エイミー

「こつちもOKよ。」

エミリー

「は、はい。」

フランシス

「私はいつでもルリさんをお守りします！」

あかぎ

「皆は準備できた？」

レイ

「いつでも。」

ナナ

「大丈夫だよ。」

てんざん

「私も大丈夫です。」  
やまと

「俺はいつでも行けるぜ。」  
ゆきかぜ

「準備は出来ました。」  
いちこ

「皆頑張るのですよ。いちこさん応援してるからね。」  
レイ

「いちこは行かないのか？」  
いちこ

「今回は裏方で見守る手筈です。だから、レイちゃん達も無事に帰ってくるのですよ。」

レイ  
「ああ、約束する。」

今回の鋼の乙女の役割は韓国軍の救援が主で、戦闘はできるだけ回避する方針だ。

今では平和に導く乙女として戦場へと赴く。彼女達にとって平和とはかけがえの無いものだと思付いたからこそ兵器であり兵器と違う自分達が止める。

ここに初の日米連合軍が結成された。

しかし、この戦争はそう簡単には終わらなかった。

到着早々彼女達の目の前にはまさに戦時中と変わらぬ光景があった。韓国軍は北朝鮮軍によってほぼ壊滅していた。

ルリ

「これは…ひどい。」

ルリの発言にどの鋼の乙女も頷く。

レイ

「どうしてここまでひどいのだ？ 仮にも兵士であるのだから一方的とはいかないはずだが？」

ルリ

「韓国軍は戦後新しく編成された部隊。ですが北朝鮮軍は戦時中に活躍した兵士がそのまま編成されていると聞きます。経験の差で既に負けていたのでしょうか。」

クレア

「にしてもやられすぎだろ、コレ。」

ルリ

「仕方ありませんわ、クレア。相手は奇襲してきたし、韓国軍の装備も北朝鮮軍に劣っているのは歯が立ちません。」

あかぎ

「ここですつと見てるのも気を悪くするだけだからとりあえず作戦を実行しましょうか。」

ルリ

「そうですね。作戦を確認しますが、エイミーとエミリーは韓国軍の救援と援護を、私を含む艦船タイプは海岸沿いからゲリラ部隊の鎮圧と補給物資の確保を、飛行タイプは敵戦闘機・爆撃機の撃破と韓国軍、エイミー、エミリーの援護を。」

あかぎ

「あと、自分達が危なくなったらすぐに退くこと。自分の命も大切

だからね。他の国からも通常兵器の援軍とか来るから間違えないようにね。」

韓国軍はアメリカ軍の援軍に一時的に士気は上がるも壊滅状態である以上完全にアメリカ軍が主流となった。

しかし、援軍に来てすぐに逆転した訳ではない。

戦時中アメリカ軍で活躍した多くの兵士は戦後既に退役し、帰国している為、韓国に送られたのは新しく徴兵された新規アメリカ軍と武装面以外は韓国軍と何も変わりのない編成だった。

また、他国との連携も成っておらず、北朝鮮軍に苦戦を強いられた。

乙女達はあくまで援護なので、前線で撃破していくのは無理なので、結局は頼りない一般兵士が進むのを見ているしかない。

だが、乙女達がいるだけでもかなり楽であったのは事実だ。

特に飛行タイプが活躍した。

レイ

「はああああ!!!」

レイは自慢の速度を駆使して敵の銃撃を避け、愛刀の主翼斬で戦闘機の翼や胴体を斬り捨てている。

クレア

「はっ、甘いぜ!」

ネコ

「ニヤハハ、やっぱりアメリカは最強だニヤ!」



クレアとネコは的確に敵に銃撃を浴びせて撃墜する。

ナナ

「ボクも負けないよ！」

てんざん

「私もです！」

ハイネ

「確実に敵を仕留めるのであります！」

ナナ、てんざん、ハイネは爆撃で陸戦部隊の援護に徹した。

北朝鮮軍が熟練の兵士といえども鋼の乙女には敵わなかった。

だが、相変わらずアメリカ軍の一般兵士は北朝鮮軍に押されていた。

そして、七月五日、烏山の戦いでアメリカ軍は北朝鮮軍に敗れた。

北朝鮮軍は兵士を義勇軍として補給し続けている為、アメリカ軍だけでなく、他国から集まった国連軍も苦戦していた。

また、準備不足であった国連軍は各地で敗北を続け、アメリカ軍が大田の戦いで大敗を喫すると、国連軍は最後の砦、洛東江戦線にまで追い詰められた。

ルリ

「くつ。状況は悪化するばかりですか…！」

やまと

「弱すぎるだろ。これじゃ烏合の衆だな…。」

あかぎ

「でも直接介入はできないし…。今は信じるしかないわね……。」

乙女達も国連軍の不甲斐なさと介入できない事に憤りを感じていた。

しかし、状況は更に悪化し、北朝鮮軍によりアメリカ兵捕虜が虐殺される「303高地の虐殺」が起きる。

この酷い事実遂に乙女達も不満が爆発する。

レイ

「いくら我々が援護してもこれでは意味が無いではないか！」  
ルリ

「私も国連軍がまさかここまで押されているとは思いませんでした  
…。」

クレア

「やっぱ俺達が介入して北朝鮮軍を叩き潰した方が良くないか!？」  
エイミー

「でも北朝鮮軍の補給基地とかは破壊したし…。」  
エイミー

「わ、私も敵戦車も多く撃破しましたし、もうじき良くなると思いますー!」  
あかぎ

「そうね〜。きっとエイミーちゃんの言う通りになるはず。だから、我慢して、ね。」

ちなみにエイミーは復活後、エイミーの地獄特訓（チハ命名）をこなしてきたので、実戦でも戦車を撃破できる、役に立つレベルにはなっていた。

エイミーはそんな妹がチハと重なって見えて、少し危ない場面もあったが長年の経験と強化された武装で切り抜けた。

北朝鮮軍に苦戦していた国連軍も徹底抗戦の構えを崩さず釜山橋頭堡でしぶとく抵抗を続け、遂に北朝鮮軍の進撃は止まった。

ここからエミリーの言う通り少しずつ押し返し始め、国連軍はソウル近郊の仁川に上陸させる仁川上陸作戦（クロマイト作戦）を成功させた。

また、仁川上陸作戦に連動したスレッジハンマー作戦で、アメリカ軍とイギリス軍、韓国軍を中心とした国連軍の大規模な反攻が開始されると、戦局は一変した。

この成功で乙女達も士気が上がった。

ナナ

「やっと希望が見えてきたってところかな？」

てんざん

「この調子ならきつと戦争は終わりますよ。」

ゆきかぜ

「でも、北朝鮮軍はまだ諦めていないですし、和平交渉をするかどうか…。」

ネコ

「ニヤア、北朝鮮軍もとつと諦めてくれればいいのにー。」  
フランス

「でも作戦の成功で敵の補給線は断たれたから時間の問題ね。」

その後、補給線を断たれた北朝鮮軍は敗北を繰り返し、九月二十八日に国連軍がソウルを奪還し、九月二十九日には李承晩ら大韓民国の首脳もソウルに帰還した。

国連軍は北緯38度線まで奪還した。

だが、戦争はまだ続くのだった。

第2章7話 激突！朝鮮戦争 3、どんでん返し（前書き）

朝鮮戦争逆転編です。

勢いよく朝鮮半島を攻めた結果が（r y

## 第2章7話 激突！朝鮮戦争 3、とんでん返し

無事に韓国首都ソウルを奪還し、戦争は終わるはずだった。

ところが、十月一日、韓国軍は「祖国統一の好機」と踏んだ李承晩大統領の命を受け、単独で北緯38度線を突破した。

韓国軍の動きは乙女達にもすぐに伝わった。

てんざん

「ええ！？まだ終わらないのですか！？」

レイ

「首都は奪還したし充分なはずだ！何故終わらない！？」

ルリ

「どうやら韓国はまた一つの国として再建するつもりようです。」

フランス

「でも元はといえば日本が朝鮮半島を植民地にしたのが大元よね。」

本来なら日本が責任を取るはずなんだけど。」

あかぎ

「そ…それは……。」

クレア

「おいおいフランス。今更過去の因縁つけても変わらないんだから目の前の事態を見るよ。」

フランス

「へえ、クレアのくせに随分言うようになったじゃない。ルリさんほどじゃないけど。」

ルリ

「やめなさい、フランス。今のはクレアの言う通りです。」

フランス

「えっ！ルリさんも同じ考えでしたか！？失礼致しました！」

ナナ

「……アメリカ軍って結構面倒だね……。優秀なのに……。」

十月二日、韓国軍の進撃に対し北朝鮮の朴憲永は中華人民共和国首脳に参戦を要請。中華人民共和国の國務院総理（首相）の周恩来は「国連軍が38度線を越境すれば参戦する」と警告。

その頃、国連安保理では、国連軍による38度線突破の提案はソ連の拒否権により葬られたが、十月七日、アメリカの提案により国連総会で議決した。

これにより十月九日にアメリカ軍を中心とした国連軍も38度線を越えて進撃し、十月二十日に国連軍は北朝鮮の臨時首都の平壤を制圧した。

到着当初とは形勢は完全逆転し、首都を奪われた北朝鮮軍はさらに追い詰められる。

しかし、これに警鐘を鳴らすのはアメリカ軍の高官と鋼の乙女である。

先の警告もあり、もしこのまま進軍し続ければ中華人民共和国と戦う事になるのは明らかだった。

しかし、国連軍はアメリカ統合参謀本部の命令を無視し北上を続け、敗走する北朝鮮軍を追いなおも進撃を続け、日本海側にある軍港である元山市にまで迫った。さらに先行していた韓国軍は一時中朝国境の鴨緑江に達し、「統一間近」とまで騒がれた。

このような国連軍の攻勢を受けて、これまで参戦には消極的だった中華人民共和国も、遂に開戦前の北朝鮮との約束に従って中国人民解

放軍を「義勇兵」として派遣することを決定する。彭徳懐を司令官とした「中国人民志願軍」が派兵された。

更に中華人民共和国はソ連にも協力を要請した。報はソ連の鋼の乙女の耳にも届いた。

ソ連の鋼の乙女司令室でスターリナは報を聞いた。

すると、ロジーナが部屋に入って来た。

ロジーナ

「あら、何かあったの？」

スターリナ

「先程中国から協力要請が来たと聞いてな。」

ロジーナ

「中国？確か朝鮮半島で北朝鮮軍と韓国・国連軍がドンパチしてるって聞いているけど。」

スターリナ

「その北朝鮮軍が追い詰められて中国に救援要請したそうだ。」

ロジーナ

「中国なら十分な兵士は集められるよね。何故我が祖国に？」

スターリナ

「相手はアメリカ軍と最新兵器。対抗する為に我々が必要なのだろう。だが、我々は不参戦するつもりだ。他の高官も一致している。」

ロジーナ

「そう。何か理由でも？」

スターリナ

「戦後アメリカと我がソ連は仲が悪くなったが、今ぶつかってもお互い消耗するだけだ。最悪、核を使うかもしれない。」

ロジーナ

「物騒ね。北朝鮮は相当追い込まれてるようね。」

スターリナ

「聞けば国連軍にはアメリカと日本の鋼の乙女が支援攻撃しているそうさ。」

ロジーナ

「あら、平和を目指してたんじゃないか？ 鋼の乙女が参戦してるなんて。」

スターリナ

「さあな。我々にも分からんが、我々は物資的支援しかしない方針だ。」

鋼の乙女が参戦してる事を聞いてロジーナは少し何かを思い、にやけた顔をした。ロジーナを知る者でなければ確実に怖い印象を受けるだろう。仮に知っていてもその思った考えはあまり良いとは言えない。

スターリナ

「中国には燕がいるはずだが多分国内事情に集中するだろう。」

ロジーナ

「だったら私が参戦してもいいわよね？」

スターリナ

「なっ！？ わざわざ参戦するのか？」

驚いたような発言だが、実は先程のロジーナの笑みを見逃さなかったスターリナはおおよそこうなるだろうと予想していた。



ロジーナ

「最近訓練だけでつまらないって思ってたのよ。久々に暴れてみたいと思ってるね。」

スターリナ

「だが、向こうには鋼の乙女がいる。それにここからでは遠すぎると思うが？」

ロジーナ

「向こうに鋼の乙女がいるのはハンデじゃない？それに、アメリカの鋼の乙女にフェイとミハエルにほぼ対等に戦った乙女の実力も知りたいし。」

スターリナ

「フツ。確かに多少の情報は得られるかもな。」

ロジーナ

「そういうことよ。」

スターリナ

「分かった。だが、暴走したら止める役がないが。」

ロジーナ

「心配しないで。自制心は保てるようにはしたから。」

スターリナ

「そうか。なら気をつけてな、姉さん。」

ロジーナ

「ふふつ、ありがとう、スターリナ。」

ロジーナは部屋から出ると早速支度し始めた。確かに距離はあるが輸送ヘリの類で行くつもりだ。

ロジーナ

「戦時中では共に戦った身だけれども……。エイミー、貴女のナカは何色かしら……？フツ、フツ……。」「

結果としてソ連は朝鮮戦争に物資的支援と一人の鋼の乙女を送り込んだ。

電波系のヤンデレ暴走戦車「T-34初期型」のロジータは戦争を更なる混沌へと導くかもしれない。

その頃現場はというと、中朝国境付近に集結した中国軍は十月十九日から隠密裏に北朝鮮への侵入を開始した。十月二十五日、迫撃砲を中心とした攻撃に韓国軍はこれを北朝鮮軍による攻撃ではないと気付き、捕虜を尋問した結果、中国軍の大部隊が鴨緑江を越えて進撃を始めたことを確認した。

中国軍は十一月に入り国連軍に対して攻勢をかけ、アメリカ軍やイギリス軍を撃破し南下を続けた。国連軍は中国軍の早期参戦を予想していなかった上、補給線が延び切って、武器弾薬・防寒具が不足しており、これに即応することができなかった。また、中国軍は街道ではなく山間部を煙幕を張って進軍したため、国連軍の空からの偵察の目を欺くことに成功した。

十一月二十四日には国連軍も鴨緑江付近より中国軍に対する攻撃を開始するが、中国軍は山間部を移動し、神出鬼没な攻撃と人海戦術により国連軍を圧倒、その山間部を進撃していた韓国第二軍が壊滅すると黄海側、日本海側を進む国連軍も包囲され、平壤を放棄し北緯38度線近くまで潰走した。

遂に中国軍が戦線に参戦したことで乙女達にも緊張が走る。

クレア

「あれだけ警告してやったのに本当に馬鹿な連中だ。」

ネコ

「そつだニヤー。ニヤーの方が国連軍よりもっと賢いニヤー。」

ナナ

(そつかなあ…？余り変わらない気がするけど…。)

あかぎ

「やっぱりレイちゃん達みたいに素直に退きそつにないわね。」

ルリ

「これでは仕方ありません。一度我々が退いてみてはどうでしょう

か？」

ハイネ

「私達だけ退いてもあまり変わらないと思いますが…。」

ルリ

「確かに今の現状ではもはや止められないでしょう。ですが、我々

の支援が無くなれば国連軍もさらに退くはずですよ。」

あかぎ

「でもいい案とは言えないわね。中国軍は既に出てきちゃったし。

せめて一般市民の被害を少なくするのがいいと私は思っただけど。」

ル

てんざん

「そつだとしたら、私達は何をすればいいのでしょうか？」

あかぎ

「まだ避難していない一般市民を助けたり、爆撃機が街に爆弾を落

とすのを防いだりとか。」

ルリ

「……流石ですね……。戦時中から平和を考えているだけに我々も見

習わないと。」

レイ

「あかぎは我々の柱だからな。」

あかぎ

「違うわよ。皆のお姉さんよ。」

レイ

「そ、そうだ！そうだったな！（焦り）」

あかぎ

「もう、レイちゃんったら。」

レイはあかぎにこの場で抱き着かれると思っていたが、あかぎも場である以上弁えている。あえて言うなら終わった後だろう。

とりあえず鋼の乙女達はあかぎ案を採用した。

アメリカ軍は通常兵器として「ノースアメリカンF51ムスタング」(ノースアメリカンP51ムスタングを改名)、新しく開発されたジェット戦闘機「ロッキードF80シユーティング・スター」を主戦力としていた為、飛行タイプの鋼の乙女無しでも北朝鮮軍相手に圧倒していた。

だが、中国軍の参戦で思わぬ事態が発生した。そしてそれは一般のアメリカ軍パイロットに衝撃を与えた。

戦時中、日本の戦闘機がごとく撃墜できなかった超空の要塞と「ボーイングB29四発重爆撃機」が敵戦闘機に呆気なく撃墜された。

その敵戦闘機とはソ連製のジェット戦闘機「MiG15」だ。

そして十一月八日にF80とMiG15による航空史上初のジェット戦闘機同士の空中戦が繰り広げられた。

MiG15の脅威は鋼の乙女にも猛威を振るつた。  
敵爆撃機への警戒の為に、飛んでいた時だった。

ネコ

「ニヤ！？敵が来たニヤー！」

クレア

「随分遠いな。」

レイ

「……いや待て！かなり速い！」

ネコ

「ニヤー！！あれはルリちゃんの言った敵のジェット戦闘機つて  
やつだニヤー！」

レイ

「とうとう来たか！」

三機のMiG15は三人に攻撃を仕掛ける。銃撃なら避けるのは慣  
れているが、レイにとって初めてである為、苦戦していた。

レイ

「くっ！速い…！」

プロペラ機は本来800km/時が限界速度だ。レイの場合は少し  
特殊な為、最大1000km/時を訓練でたたき出した。だが、ジ  
ェット戦闘機は軽くプロペラ機の4倍の速度を出せる。その速度に  
乗った敵の銃撃はレイにとって致命的な威力となる。

ところが、レイは逆にスピードを落とし始めた。

ネコ

「ニヤ！？レイちゃん、どうして速度を落とすニヤ！？」

クレア

「レイ！お前自殺する気か！？」

二人は一度要塞島前でジェット戦闘機と対峙していたので、その攻撃方法をとっていた。銃撃が得意な二人はMiG15に劣るが最高速度を出し、お互いの連携で弾を当てて撃破していた。

レイ

「自殺する気など無い。」

レイは完全に空中で停止した。  
そこにMiG15が突っ込む。

クレア&ネコ

「レイ！」

レイ

「フッ！」

レイはMiG15の突進を僅かに避け、そのコンマ数秒で、

レイ

「はあ！……！」

一閃。

MiG15の主翼の片側が斬られ、地に落ちていく。  
MiG15がレイを通過する一瞬でレイは主翼斬で斬った。

二人には信じられない光景だった。たったコンマ数秒のすれ違いでMiG15を斬ったレイ。

ちょうどレイが最後のMiG15を撃破し、墜落するまでその場は静寂となった。

墜落したMiG15の爆発で我に帰った二人はただ、「すごい……。」  
としか言えなかった。

一旦駐屯地に帰り、レイは二人に説明した。

レイ

「クレアとネコは銃撃が得意だしお互いの連携で倒しただろ？私は銃撃よりも主翼斬の方が扱い易い。でも相手が高速だから逆に待ち構えた訳だ。」

クレア

「相手のスピードを利用した訳か。でもコンマ数秒でよく斬れたな。」

レイ

「胴体視力を鍛えるときにもより素早い敵を斬る訓練をしていたからな。その努力の賜物だ。」

クレア

「さすが俺がライバルと認めただけあるぜ。」

ネコ

「でもニャー達はやっぱり二対一じゃないときついニャー。」

クレア

「確かにな。ルリも通常兵器のF80が苦戦したって言ってたしな。

」  
レイ

「うむ……。私も初めてだったから流石にひやりとした。早く戦争が終わればいいのだが……。」

ちなみにクレアの言っていたF80がMiG15に敵わないと見たアメリカ軍の高官は対抗策に新しく開発したジェット戦闘機「ノースアメリカンF86セイバー」を戦線に持つてくるように命じた。

やられたらやり返し、相手が強ければ更に強い物を投入し、朝鮮戦争は泥沼化しつつあった。



第2章7話 激突！朝鮮戦争 3、どんでん返し（後書き）

後書きをするように頼まれた要塞島軍一の射程距離を誇るオオツツです。

作者はこうやってオリキャラに後書き任せてるけどネタが無いからだよな？

せっかく朝鮮戦争編してるんだから探せばいくらでもあるはずなのに。

あ、後、本文の朝鮮戦争の進行方向が間違ってるのか心配していましたね。

間違いがあれば指摘してくだされば幸いです…と伝えてって言うってたっけな……。

まあ、個人的には私とサクヤさんを早く出せって感じですけどね！

……なんかこの言い方すると某弾幕ゲームファンに間違えられそうだな……作者ここまで考えなかったのかしら？

気にしたら小説書けませんね。仕方ないって將軍も言ってたし。

でも、もうひとつ言いたい。

何で私の服装が作業服なの!?

どっかの工場長のつもりなの!?

一番納得出来ない!……って作者に言ったんだけど作者ファッションに超疎いから戦場に合う服装が思い付かないって言われました。

無駄だとはわかっていたんですが……。

仕方ないので我慢します。

最後に、長々と私の後書きに付き合っておりがとつございました。応援宜しくお願いします

第2章8話 激突！朝鮮戦争 4、狂喜と未知（前書き）

PVが1万を越えました。

文才がないうえ少し専門知識がないとわかりにくい小説ですが、これだけアクセスしてくれたことに感謝しています。

今後とも宜しくお願いします！

不安ははたして読者が理解できているかです。

失礼な言い方ですが、ストーリーも少しずつ変えていくので、分からなければ感想にでも書いてください。

それでは本編をどうぞ。

## 第2章8話 激突！朝鮮戦争 4、狂喜と未知

MiG15の導入による一時的な制空権奪還で勢いづいた中朝軍は十二月五日に平壤を奪回し、翌年一月四日にはソウルを再度奪回した。

一月六日、韓国軍・民兵は北朝鮮に協力したなどとして江華島住民を虐殺した（江華良民虐殺事件）。

韓国軍・国連軍の戦線は再び潰滅し、二月までに忠清道まで退却した。

ハイネ

「中国軍の介入で以前のように押されているであります。」

てんざん

「ジェット戦闘機の導入がやっぱりダメでしたか…。」

クレア

「俺達も撃ち落としてるけど、ソ連製だけあって数が多いぜ。」

エイミー

「陸戦でも部隊が押されているわ。」

ルリ

「これでは振り出しに戻りそうですね…。」

だが状況が再び変わりつつあった。

中国軍は日中戦争や国共内戦における中華民国軍との戦いで積んだ経験と、人命を度外視した人海戦術、ソ連から支給された最新兵器や日本軍の残して行った残存兵器をもとに、参戦当初は優勢だった。しかし、度重なる戦闘で高い経験を持つ古参兵の多くが戦死したことや、補給線が延び切ったことで攻撃が鈍り始めた。

それに対し、アメリカやイギリス製の最新兵器の調達が進んだ国連

軍は、ようやく態勢を立て直して反撃を開始し三月十四日にはソウルを再奪回したものの、戦況は38度線付近で膠着状態となる。

ネコ

「ウニヤ〜、これじゃ戦時中と変わらないニヤ〜。」  
レイ

「確かに膠着はしたが被害は両軍とも多い。」  
あかぎ

「結局私達もあまり活躍出来ずに、一般市民を守れなかったわ〜。」  
ルリ

「確か我が合衆国と国連本部で和平交渉に関する議論をしています。できればこれ以上戦線が上がり下がりしなければいいのですが…。」

だが、その思惑はそう簡単には実現しなかった。

この頃マッカーサーによる中華人民共和国国内への攻撃や、同国と激しく対立していた中華民国の中国国民党軍の朝鮮半島への投入など、戦闘状態の解決を模索していた国連やアメリカ政府中枢と政治的に対立する発言が相次いだことから、戦闘が中華人民共和国の国内にまで拡大することによってソ連を刺激し、ひいてはヨーロッパまで緊張状態にすることを恐れた。

鋼の乙女陣営に一通の通信が鳴る。取ったのはルリだ。

ルリ

「はい、こちら鋼の乙女のルリです。」  
????

「君が鋼の乙女の代表か？」

ルリ

「え？ええ、そうですが。」

「??？」

「私はマツカーサーだ。」

ルリ

「マツカーサー元帥!？」

ルリには驚きである。現在GHQ最高司令官にして朝鮮戦争の指揮をしているマツカーサー元帥からの通信だった。

ルリ

「元帥殿が何故私達に？」

マツカーサー

「実は意見を聞きたいのだ。」

ルリ

「意見……ですか？」

マツカーサー

「今回の朝鮮戦争が長引く要因の一つとして中朝国境の奥にある補給設備と考えているのだが。」

ルリ

「中朝国境奥ですか？確かに中国軍が待機していると聞いていますか。」

マツカーサー

「そこで私はB・29や最新鋭のB・50で爆撃しようと考えているがどうだろうか？」

ルリ

「それは合理的ですが、他の高官はどのようにおっしゃりましたか？」

マツカーサー

「大半が反対していた。」

ルリ

「大丈夫なんですか？」

マツカーサー

「いや、分からないが私は奴らにアメリカの制裁を加えたいと思っている。これ以上新たな米兵がやられるのは、ごめんこうむりたいのだ。」

ルリ

「それはそうですが……他の高官が反対しているとなると……」

マツカーサー

「私は奴らの制裁に核も惜しまぬ所存だ。」

ルリ

「核ですって!?!」

マツカーサー

「強気に出なければ戦争は終わらん!」

ルリ

「待つてください!今和平交渉の議論がされています。私はその方がより安全だと思えますが。」

マツカーサー

「それでは時間が掛かる。その間にも命が失くなっていく。」

ルリ

「核を使うよりかはましですわ!実験で見ましたけどあれは私達は認めません!あのよう大量破壊兵器をもし使ったらソ連が黙っていられないし、我が合衆国は危険にさらされます!兵器で治めてもまた同じ事を繰り返します!」

マツカーサー

「そうか。仕方ない。」

そこで通信が切れた。

ルリは言い過ぎたかもしれないと思った。

相手はあの元帥だ。もしかしたら更迭されるかもしれない。

そう思い、覚悟を決めた。

しかし、ルリが更迭されるどころか、トルーマン大統領により、四月十一日にマツカーサーは最高司令官を解任された。

ルリ達は付属の通信部隊から聞いた。

ルリ

「えっ！？マツカーサー元帥が解任！？」

あかぎ

「マツカーサー元帥と言えば日本の主導を代わりにしている人よね。何かあったのかしら？」

通信兵

「聞いた所によれば、マツカーサー元帥の攻め方ではソ連を刺激する恐れがあり、トルーマン大統領がマツカーサー元帥を解任、後任にはアメリカ軍の第8軍及び第10軍司令官のマシユー・リッジウエイ大將が着任したとの事です。」

ルリ

「わかりました。下がって宜しいです。」

通信兵

「それでは。」

通信兵が去った後、今後について二人は考えた。



ルリ

「とりあえず強行作戦がなくなりましたので安心しました。」

あかぎ

「後は後任の方がしつかりしてくれれば早期に終わるはずよ。私、少しうんざりしてきたわ。平和をどうして実現させようとしなくていいのかしら？」

ルリ

「……私ではわかりませんね……。」

あかぎ

「あら、いくら頭のいいルリちゃんでも一人だけじゃ、平和を考えるのは難しいわよ。私だって皆と一緒に考えたり、教え合ったりして初めて平和について考えるようになったのよ。でもやっぱり皆と一緒にいられるのが唯一の平和なのよね。」

ルリ

「……………」

この後、六月二十三日にソ連のヤコフ・マリク国連大使が休戦協定の締結を提案したことによって停戦が模索され、七月十日から開城において休戦会談が断続的に繰り返されたが、双方が少しでも有利な条件での停戦を要求するため交渉は難航した。

その間も、前線の将兵は戦い続けた。

鋼の乙女も終わるまでは援護を続けた。

そんな時、突如前線に動きがあった。中朝軍が再び勢いづき始めたのだ。

各前線にて韓国・国連軍が敗退した。しかし、中朝軍もその部隊だけ壊滅状態だった。

なぜ中朝軍も壊滅しているという同士討ちのような事態が発生したのか？そんな不可解な前線にエイミー、エミリーもいた。

エイミー

「な、何！？急に勢いづいたなんて!？」

エミリー

「何かあったのかな？」

しかし、悠長な考えとは裏腹に事態は最悪となった。

エイミーとエミリーが援護している部隊が戦っている中朝軍の後方から何かが接近しているのを二人は確認した。

姿がはつきり捕らえられる頃には既に国連軍に攻撃をしていた。

エイミー

「あれって……ロジーナさん!!!??」

ロジーナ

「アハッ、アツハハハハ!!弱い!!弱すぎるわ!!最新兵器なんて全然じゃないの!!」

エイミーは直感した。これは危険である。

エイミー

「エミリー、今すぐ退くのよ!!」

エミリー

「えっ!?!お姉ちゃん!?!」

エイミー

「あれはあなたには危険過ぎるわ。」

その間にもロジーナは国連軍を圧倒していく。

ロジーナ

「ほらほら、それじゃ私はいけないわよー！！アーツハツハツハツハ！！」

遂にエイミーとロジーナは対面した。ロジーナはエイミーを見ると先程までの暴走を止め、エイミーを見た。確かに自制心は存在していた。

ロジーナ

「あら…エイミー、久しぶりね。」

エイミー

「お、お姉ちゃん…。」

エイミー

「だから、あんたは下がってなさい！ロジーナさん、どついつ事ですか？」

ロジーナ

「状況見て分からない？私はソ連側だから中朝軍の味方よ？もっとも、私自身が楽しむだけに来たんだけどね。」

エイミー

「でも私達は仲間ですよね。」

ロジーナ

「ええ、そうよ。でも今はお互い対立した陣営。ここは戦場よ。フツッ、分かるわよね？」

つまり、ロジーナとの戦闘は避けられない。

ロジーナ

「一度貴女と手合わせして、貴女のナカの色を見せて貰おうかな  
って思ってたのよ。ウフフッ」

エイミー

「うっ……。」

ロジーナ

「それが嫌なら側にいるもう一人でもいいのよ？」

エイミー

「ふえ！？わ、私！？」

エイミー

「！！、それだけはダメ！……いいわ！受けてたつわ！」

ロジーナ

「そうこなくっちゃね。貴女のナカの色、見させて貰うわ！！！！！」

エイミー

「エイミー！今すぐ退くのよ！」

エイミー

「は、はい……」

そしてエイミーとロジーナの戦闘が始まる。

ロジーナは戦時中と変わらず、むやみやたらな突進に主砲・機銃乱  
射でエイミーに近づく。

ロジーナの実力は戦時中の共同作戦で見ている。無論、その以上な  
タフさも。

エイミー

「確かにこれは……！！」

エイミーは突進するロジーナから距離を置いて砲撃を試みるも、主砲・機銃乱射でゆっくり照準を合わせられない。

何度か砲撃したが照準が合わない為、かすれて別の戦車に命中してしまう。

結局はドイツ軍のミハエルのように逃げながら反撃する戦法で戦つ。

だが、持久戦ではエイミーが不利なのは目に見えている。

二人の鋼の乙女からの流れ弾で中朝軍・国連軍ともに通常兵器の被害が増える一方だった。

ロジーナ

「どうしたの？貴女の実力はこんなものじゃないでしょ！？もっと愉ませてよ！アゝッハハハハハ」

エイミー

「ハア…ハア…くっ、まだまだ！！」

ロジーナ

「フフツ、アハハハハ、さあ、いくわよ！！ツヴェエート！！」

ロジーナが乱射を止めて一直線にエイミーに目掛ける。

エイミー

「や、やば！」

エイミーはロジーナの突進を紙一重でかわす。狙いを外したロジーナはすぐ傍の戦車に攻撃。

機銃の連射に劣らずの速度で戦車を殴る、殴る、殴る！フィニッシュに某メカ超人の如く鋭い爪で切り裂き、戦車は大破した。いや、木っ端微塵となり、原形を留めていなかった。

エイミー

「あ…、あんなの喰らったら……ひとたまりもないとか言うレベルじゃない……。」

ロジーナ

「ウフフフツ よく避けれたわね。さすがミハエルとフェイと対等に戦えただけあるわね。」

エイミー

「ロジーナさん！もう充分でしょ！止めましょうよ！両軍とも被害が増えるだけです！」

ロジーナ

「何を言ってるのかしら？私はまだ貴女のナカを見てないのよ？終われるわけじゃない！」

エイミーの体力はかなり消耗している。だが、ロジーナは今だぴんぴんしている。

逃げながら反撃するにも数十分保つか保たないかだ。さらに、逃げながらだと流れ弾で一般兵士への被害も増える。

エイミー

「どうしたら……。 (そもそも`ナカ`って何…?)」

ロジーナ

「エイミー、いくわよ！」

ロジーナは再び主砲・機銃乱射で迫る。

エイミー

「こうなったら精密射撃で近づく前に……。」

エイミーは主砲をその場でロジーナに照準を合わせた。

ロジーナ

「あら、貴女もミハエルのように私の攻撃を真っ正面から受け止めるのね!?!」

ロジーナも左腕の主砲をエイミーに向けた。

そしてお互いが主砲を放とうとしたその時だった。

エイミー

「お姉ちゃん!危ない!」

エイミー

「!?!」

ドーン!!!!!!!!!!

後方に退いていたエイミーの叫び声と同時にエイミーとロジーナの間で大きめの爆発が起きた。

ロジーナ

「な、何!?!」

さすがのロジーナのいきなりの爆発に驚いていた。

エイミー

「い、今のは……砲撃……?」

エイミー

「お姉ちゃん！西だよ！西の空！」

エイミー

「西…？」

エイミーの言う通りに西の空を見ると、地上から黒煙が立ち上っていた。やがて黒煙が放物線を描いてこちらに向かってきた。

そして近くの戦車が爆発した。エイミーの思っていた通り、砲弾だった。黒煙はその砲弾の軌道だ。

エイミー

「でも…普通の砲弾じゃない…。威力が違うし、命中率が高い…。」

先程と同じように西の空に黒煙は確認できている。砲弾は狙い違わずエイミー・エイミーの国連軍とロジーナの中朝軍の戦車に確実に命中し、破壊していた。

エイミー

「でも…私達が狙われていない…？」

そう。砲弾は通常兵器や一般兵士に命中し、最初の一発以外は全て彼女達に命中していない。

ロジーナは謎の砲弾に機銃を撃つも破壊できないと分かるとその黒煙を見ていた。

ロジーナ

「あれって国連軍の最新兵器？」

エイミー

「いや…、距離にしては遠いし、こんな的確に戦車に当てられる兵



器はまだ開発中って聞いてるし。それに両軍とも攻撃してるのだからない。」

エイミー

「じゃあ、第三者ってこと？」

ロジーナ

「ぶくん、私とエイミーの戦いを邪魔するんだ……。ぶつ飛ばそうかしら…？」

三人の会話している途中で黒煙は全て消えていた。と同時に両軍とも壊滅していた。今頼れる戦力は彼女達だけだが、その彼女達もはや乙女同士で戦う場合ではない事を理解した。

西側から一人の人影と三台の戦車が見えてきたからだ。人影は一台の戦車に乗っている。

時刻にして今は夕方。陽が傾いてエイミー達からは影になって見えない。

ようやく見える距離に来てエイミー達は気付いた。戦車に乗った本人は後ろを向いていてエイミー達に気付いていなかった。

作業服につば入り帽子、少し大きめのリュックを背負った明らかに変人だ。

エイミー

「そこのあなた！」

エイミーが呼び掛けると戦車は停止し、乗っていた人がこちらを振

り向くと凄く驚いた表情をした。

????

「えっ?ええっ!?!ちよ、鋼の乙女!?レーダーに反応してないけど!?!」

と、エイミー達と手に持っている四角い機械みたいなものと見比べていた。

どうやら女性で、首から望遠鏡を下げていた。

????

「ま、まずい…。ここに三人も鋼の乙女がいるのは計算外だ…。てつきり国連軍と中朝軍だけかと思ってたのに…。(って事はさっきの攻撃見てたかも…)」

エイミー

「ちよつと、さっき見た黒煙を出した砲弾、貴女からの攻撃?」

????

(うつ!?!やっぱり見られてた…。)

エイミー

「ちよつとあんた!聞いてるの!」

????

「……ま、まあ確かに私自身がやったけど…。」

エイミー

「私自身?その戦車じゃなくて?」

????

(ヤバツ!口走った!)「そ、そう!私じゃなくてこの戦車で…」

しかし、言い終わる前にロジーナが突如主砲を放つ。咄嗟に乗っていた女性は飛び降り、乗っていた戦車に主砲が命中し、爆発。

エイミー

「なっ！？ロジーナさん！？」

「??？」

「あ、危ない…。いきなり何を…！」

ロジーナ

「うるさいわよ！貴女のせいで私達の決闘が中止になったのよ！ど  
うしてくれるの…！」

エイミー

「そ、そっち？」

エイミー

「いや、普通の反応でしょ。」

「??？」

「けっ、決闘？」

ロジーナ

「そうよ！だから代わりに貴女のナカを見させてよ！」

「??？」

「ナカ…？って貴女まさか將軍が警戒するよう言ってたあのロジー

ナ！？」

ロジーナ

「へえ、私を知ってるんだあ。なら愉しめそうね。ウフッフ　貴女、

名前は？」

「??？」

「私は鋼の乙女のオオツツで…って悠長に自己紹介してる場合じゃ

…」

ロジーナ

「そう。鋼の乙女ならより愉しませてくれるわよね？」

オオツツ

「（聞いてた通りだけど、今は不利の状況。不穏な空気。）今すぐ  
逃げ…」

だが、ロジーナは傍の戦車二台を破壊し、オオツツの足元に主砲を放った。

オオツツ

「きゃあ!？」

爆風に巻き込まれて少し吹き飛んだ。

ロジーナ

「逃げるなら容赦しないわよ?ウフフツ」

オオツツ

「うつつ…、あ、後ろにミハエルが!」

ロジーナ

「えっ!?嘘っ!?ミハエルが!？」

後ろを振り向くが勿論いるはずがない。

その間にオオツツはロジーナから離れた。

ロジーナ

「……………私を騙すなんて…ミンスクのドイツ軍以来ね…。絶対許さないから!!!!!」

オオツツの後をロジーナが猛烈な勢いで追いかけて行った。

残されたM26姉妹。

エミリー

「…どうする？」

エイミー

「とりあえず戻りましょ。さっきのオオツツって言った鋼の乙女、私達は知ってるはずよ。ルリさん達に報告しないと。」

混乱した現場は一時停戦状態となった。

## 第2章8話 激突！朝鮮戦争 4、狂喜と未知（後書き）

どうでもいい戦争雑学

二次戦中のジェット戦闘機

二次戦中のジェット戦闘機と言えばドイツ軍のMe262である。

Me262に戦闘で初めて出会ったのは一九四四年八月、英軍の木造双発戦闘機モスキートのパイロットだ。

モスキートは偵察任務でフランス上空を飛んでいた時、Me262の突撃と30mm機関砲の襲撃に会うが、雲の中にかくれ難を逃れた。

Me262はBMW社のエンジンを使用し、推力は九キロ、最大速度870Km/時（242m/秒）。

ピストン機関に換算すれば二九馬力に相当。

これが二基あるので計五八馬力となる。

ちなみにノースアメリカンP51ムスタングが一四九馬力、零戦が一三馬力である。

武装は先程書いた30mm機関砲を四門。

Me262は「シュツルム・ホーゲル」（嵐鳥＝海ツバメの一種）が愛称だった。

一九四四年十月四日～十一月七日までに

B24四発重爆撃機を4機、P47サンダーボルト戦闘機、P51ムスタング戦闘機、偵察機を計15機撃墜した。

Me 262は本来一九四三年に登場できたはずだが、思わぬ横槍が入る。

十一月に展示飛行の好成績に満足したヒトラー総統はMe 262が戦闘機と聞いて激怒し、爆撃機への改造命令を下した。

結果、ドイツ空軍最後のチャンスは彼方へと消え去った。

他のジェット戦闘機に、日本海軍では特攻機の橘花きっか、英軍ではグロスター社のミーティアがある。

ちなみにミーティアは後の航空界に影響をもたらした。

第2章9話 激突！朝鮮戦争 5、始動！第三軍対峙（前書き）

遂に要塞島軍の戦闘があります。

未知の軍に人は、鋼の乙女は何を思う



第2章9話 激突！朝鮮戦争 5、始動！第三軍対峙

アメリカ合衆国側で和平交渉が少しずつ進み、朝鮮戦争は終息に向かいつつあるが、鋼の乙女達の戦いはまだ終わっていない。

エイミーとエミリーは駐屯基地に帰還し、ロジーナの参戦とオオツツと言う鋼の乙女の報告をした。

エイミー

「……まあ、とりあえずロジーナさんは敵の鋼の乙女を追いかけていったわ」

ルリ

「そうですね。ロジーナは単独参戦ですからソ連に影響はないと思います。……問題はもう一人ですね」

レイ

「その鋼の乙女とやらはどの国にも属さないのか？」

ルリ

「確かにそうです。しかし、目的がよく分からないのです」

クレア

「しかも、奴らの所持している兵器が少しばかり特殊なやつだ」

てんざん

「特殊、ですか？」

ネコ

「たとえば、戦闘機なのに戦車砲をつけているとか」

ナナ

「戦闘機なのに戦車砲？ならボクでも避けられそうだけど」

クレア

「俺はそれでやられたんだ」

レイ

「な、何だと！？本当なのか！？」

クレア

「ああ、今じゃ無茶してたって頭を冷やしたけどな。お前達も気をつける、あいつは鋼の乙女の常識が通用しない」

あかぎ

「うーん、確かに危険よね。レイちゃん達も気をつけるべきね」

ルリ

「で、本題に戻しますが、エイミー、敵の特徴は？」

エイミー

「えっと……まず装甲系ですね。彼女は確か戦車砲は持っていなかったわ」

エイミー

「でも強力な遠距離攻撃で国連軍と中朝軍の戦車に的確に当ててました」

ハイネ

「両軍とも攻撃されたでありますか！？」

ルリ

「と、なれば相手は第三軍ということですね」

ナナ

「じゃあ、ボク達に出会ったら攻撃していいわけ？」

ルリ

「相手から仕掛けたらの話です。余計な混乱を招いて戦争を長引かせてはいけません」

レイ

「よし、もう少しの辛抱だ。皆、気を引き締めるぞ！」

全員

「おーっ……！」

と意気込む彼女達。

だが、やまととゆきかぜが血相を変えて駆け込んできた。

やまと

「おい！皆！大変だ！」

ナナ

「やまとにゆきかぜ！どうしたの、そんな血相変えて？  
ゆきかぜ

「大変なんです！実は前線辺りから突然R型戦闘機を確認したんです！」

やまと

「それでな、その戦闘機で両軍のジェット戦闘機がいつも簡単に撃破されたんだ！」

てんざん

「ええーっ！！？本当ですか！？」

ルリ

「R型…戦闘機……？」

アメリカ軍には理解できないが、日本軍にとっては衝撃である。そして何よりナナとてんざんは一種の恐怖感を感じた。

二人は以前たつた二機のR型戦闘機と対峙し、それでも辛勝だった。

日本軍は多彩な種類があるのだけは知っている以上かなり危険であることだけは認識した。

北緯38度線の上空に突如現れた謎の戦闘機と見知らぬ一人の鋼の乙女。

両軍ともこれは我が領土を侵す相手の兵器だろう。と考え、多数の戦闘機、ジェット戦闘機を幾つか回すが、全て殲滅された。しかもたった十機の戦闘機に。

これが通常の戦闘機と違うと分かった国連軍は直ぐさま鋼の乙女に援軍要請を送った。

???

「無駄な……。犠牲……。増やすだけ……」

十機のR型戦闘機に囲まれている一人の鋼の乙女はその要請を盗聴し、呟いた。

後日、日本軍の言ったR型戦闘機の破壊の為に行動を開始した。

その出発10分前。

レイ

「刀の手入れをしてくる」

ナナ

「もうすぐ出発だよ？」

レイ

「大丈夫だ。5分あれば間に合う」

ナナ

「うん……、分かった。すぐ戻ってよ」

レイ

「言われずともそのつもりだ」

しかし、本当は刀の手入れではなかった。

懐から通信端末を取り出した。

レイ

「えっと……、周波数は……」

通信端末の周波数を合わせて端末に話しかける。

レイ

「こちら、鋼の乙女のレイです」

アレン

「レイか？どうした？」

レイ

「R型戦闘機が私達のいる戦線に現れたのですが……」  
アレン

「な、何だって!!!? ちょっと待て!!!……………朝鮮半島に反応がある! もしや太陽系解放同盟軍か!? よし、今すぐ小隊編成をそちらに送る!」

レイ

「了解しました!」

アレン

「前にも言ったが、R型戦闘機に無茶して挑むなよ!」

レイ

「分かっています!」

通信を切って再び仲間のもとに戻った。

一方、ロジーナは……

ロジーナ

「ハア、ハア、逃げられたわね」

例の長距離自走砲をリュックみたいに背負ってた鋼の乙女、オオツツをかれこれ34分追い続けた。

ロジーナ

「でもまだ近くのはずよ。必ず見つけ出して、必ずナカの色を見さ

せてもらつわ……。フツ……。フツ……。フツ……。フツ……。」

不敵に笑いながら、ロジーナは再び搜索を始めた。

ロジーナが去つた後、すぐ近くの茂みに隠れていたオオツツは安堵の息を漏らす。

オオツツ

「ふう……。いくら近距離装備でもあんなヤツに勝てる訳無いよ……。はあ。あ……。サクヤさんどこかなあ……。助けに来てほしいんだけど……。」

しかし、迂闊に動けばロジーナに見つかる。とりあえずこの場に隠れるしかなかった。

日米鋼の乙女は北緯38度線上空にいる十機のR型戦闘機と一人の鋼の乙女を確認した。

レイ

「あの機体は……。戦闘機『レディ・ラブ』と中距離支援機『ホット・コンダクター』とかいうやつかな？」

「そしてあの鋼の乙女は間違いなく、第三軍の乙女でしょう。」

ピンク色に近い色のキャノピーと戦車を彷彿させる長い砲身があるR型戦闘機が各五機。

その中心を取り囲んで少女がいた。

背中から機体の翼を付けているから間違いないなく鋼の乙女だ。

金髪おさげに小さいベレー、Tシャツとスカートが一緒の白い服はアメリカ軍にとっては忌み嫌うライトニング姉妹の妹、アリスを連想させた。

そこに、国連軍のジェット戦闘機F86セーバーが二十機で向かっていた。戦闘機が二十機纏めて一点を攻撃するのは戦後初だろう。

F86は搭載してある12.7mm機関砲6門で攻撃を試みる。

だが、R型戦闘機は戦闘機と違い、その場から上下左右に移動する。

F86の銃撃や突進も全て外れた。

F86が旋回し、再びR型戦闘機に向かおうとした時、レディ・ラブから追尾ミサイルが放たれる。

旋回中でもあるF86はすぐさま回避行動をとるも、三機は命中し、撃墜された。

ルリ

「あれがR型戦闘機……」

ネコ

「ニヤー!? あいつら動いてないのに全然当たってないニヤー!?」

ネコはほんの少し動いていた事に気づいていない。



しかし、本当に驚いたのはこれからだ。

旋回したF86が再び敵機に向かう時、ホット・コンダクターの砲身に光が収縮されていく。

そして、砲身から持続式圧縮波動砲が放たれる。

F86は初めて見た奇妙な攻撃に一瞬判断が遅れた。その一瞬で十二機のF86に波動砲が命中、空中爆発する。

ナナ

「な……、何あれ！！？あの範囲、反則じゃん！！！！？」

クレア

「な……なんて威力だ……」

ルリ

「……対戦闘機の戦術でまとまった場所にいたのが裏目に……！！」

彼女達から見ればまさにどこにも逃げ場のない五本の黄色い柱に見えた。

残りは五機。

いや、レディ・ラブのバルカンでさらに二機減り、三機となった。

ハイネ

「じ、次元が違い過ぎるであります……」

てんざん

「あの戦闘機にあれほどの力があるなんて……」

もはや勝機がないと判断したのか三機のF86はR型戦闘機から離れる。

その時、例の鋼の乙女が動き出した。

いや、動いたのではなく、三機のF86の進路上に突如現れた。

レイ

「何!!!?いつの間に!!!?」

F86も気づいたようだが、もう遅かった。

出現と同時に両腕をF86に向けて銃撃。  
三機もろとも撃墜され、部隊は全滅した。

あかぎ

「……本当に私達の常識が通用しないわ……」

やまと

「なあ、本当に戦るのか?」

ネコ

「なんか勝てる気がしないニャー……」

ネコが珍しく弱音を吐く。それほど全員に衝撃を与えたのだ。

一人を除いて

「……クッククック……。」

ルリ

「?、ど、どうしたんですか、クレア?」

クレア

「クックツ……アハツ、アハハツ、アツハツハツハ!」

レイ

「クレア!?! 一体何が起きた!?!」

ネコ

「ニヤー、大変ニヤー!?! クレアちゃんもまた壊れたニヤー!?!」

クレア

「アハハ……悪かった。いきなり笑い出して」

ナナ

「な、何だったの?」

クレア

「いや、久しぶりに強ええヤツを見てつい、な。」

ルリ

「まさかクレア!?!」

クレア

「戦ってみてえ。ぞくぞくしてきた」

ルリ

「やめなさい! 要塞島の二の舞を踏むつもりですか! それに今のを  
見たはずです!」

クレア

「おう、でも今勝てる方法を思い付いた」

全員

「な、何だつてー！……！！？」

上空には乙女達が見ていた位置にR型戦闘機と例の鋼の乙女が平然と居座っていた。

???

「!?!」

この乙女はすでに日米鋼の乙女が見ていたのに気づいていた。

今驚いたのは、その方向から驚いたような声が聞こえたからだ。

???

「今のは……？」

何か動きがあったのだろうか？

しばらくその方向を見ていた。しかし、何も動きは無かった。

まあ、いずれにしろここに来る。その時までゆっくり対応できるようにすればいい。さっき瞬間移動に見せ掛けた行動を見せたと考えていて、例え一斉に襲ってきても勝てる自信があった。

ルリ

「……なるほど。ですが確認できませんわ」  
ハイネ

「ですが、もし本当ならば……」

クレア

「俺は確かに見た。だからいけるはずだ。だからお前達も協力してくれ」

レイ

「そこまで言うなら……」

ナナ

「一回やってみるけど……」

てんざん

「もし失敗したらさっきみたいに……あわわあ……」

クレア

「失敗したら全力で逃げる」

ネコ

「クレアちゃん、大丈夫かニヤー？逃げてる途中でさっきの光みたいな撃たれたら避けられないニヤー」

クレア

「一か八かやるしかねえ。今だからだ」

あかぎ

「気をつけてね。もし怪我でもさせたらお姉さん、許さないからね」

乗り気ではないが、クレアの提案をもとに航空機タイプの鋼の乙女が出撃した。

???

「やっと来た……」

航空機タイプの鋼の乙女がこちらに向かって来ているのはすぐに確認できた。

???

「日本勢三人……アメリカ勢三人……」

十一対六。勝機などないに等しいのだが……。

日米鋼の乙女は遂に第三軍の敵と対峙した。

レイ

「一つ聞く。貴様は何者だ？」

???

「サクヤ……。要塞島の……副官のもの……」

ナナ

「副官！？かなり強いじゃん！身体が小さいのに」

てんざん

「私と同じくらいでしょうか……？」

サクヤ

「今なら……逃げてもいい……私は追わない……。攻めるなら……」

容赦しない……」

クレア

「目の前に出て来て退く奴がいるか？」

ネコ

「そつだそつだニヤー」

ハイネ

「その通りです。覚悟するであります」

サクヤ

「……私じゃなくていい……代わりにやって……」

その言葉に呼応し、R型戦闘機が乙女達に向いた。

サクヤ

「私に……無理に挑んだ事……後悔しないことね……」

## 第2章9話 激突！朝鮮戦争 5、始動！第三軍対峙（後書き）

どうでもいい戦争雑学

F86対MiG15

一九五一年十二月十七日に最初の戦闘が起こる。

当時の米パイロットは半分が訓練不足だったが、四機でチームをつきり傘形の陣型を組むこと、空中戦は必ず二機一組でという命令により、一機が交戦中、もう一機が後方を守るということという戦法が生まれ、訓練不足のパイロットも安心して戦えた。この戦法は今でも広く踏襲されている。

F86は760Km/時以下のスピードで午後二時五分、発進する。ゆっくり飛んだのは、燃料節約の為でもあった。

鴨緑江の南に到着した時、MiG15四機がやって来た。F86より2000m低く飛んでいて、F86はすぐ急降下に移る。

MiG15は初めて見る米軍戦闘機に気づき、左に散開し、ジクザグの回避運動をとろうとせず、真っ直ぐ逃亡しようとした。

しかし、これが間違いだった。

F86の隊長機は四秒ずつ三回、機銃を撃った。

弾数にして一八 発中一五 発撃ち込んだ。

後部胴体から赤い火を上げた一機のMiG15は一度機首を上げるも、錐揉み状態となって落ちた。

残り三機は北に逃げるも、F86は越境を禁じられていたので、戦闘は終了した。



一九五三年七月の停戦成立時の空戦総括

F86とMiG15の喪失比は一对十であつた。

MiG15七九二機を撃墜し、F86七八機が撃墜された。しかし、喪失比は一对七であるという説もある。

また、F86以外にF80シューティング・スターやその他合わせ  
て六一機撃墜されている。

まさにMiG恐るべしだ。

ある米パイロットは「MiG15に対してF86セーバーがろう  
じて優位に立てたのはレーダー照準器と耐G飛行服のおかげだつた」  
と語つた。

損害

F86セーバー戦闘機

七八機

他

六一機

空中戦の戦果

米第五空軍により

九機

米海軍機より

一六機

海兵隊機より

三五機

F86の戦果

MiG15戦闘機

ラボチキンLa9戦闘機	七九二機
ツポレフTu2双発爆撃機	六機
他	九機
合計	三機
	八一機

第2章10話 激突！朝鮮戦争 6、終止符（前書き）

遂に第三軍と激突。

クレアの思い付いた秘策とは

## 第2章10話

### 激突！朝鮮戦争 6、終止符

対峙する数分前

クレア

「さっきのは瞬間移動じゃない」

先程サクヤの見せたF86ジェット戦闘機の軌道上への瞬間移動を否定した。

無論、納得出来ない他の乙女達はクレアに説明を求めた。

よほど自信があるのか、学校の先生が棒で指して説明するように、持っている機銃をサクヤに向けて説明する。

クレア

「F86が逃げる前にあいつをよく見たんだ。そしたら、気付いたんだ。あいつはダミーだって」

ルリ

「ダミーですって!?!」

ナナ

「ダミーって偽物ってことだね。どうして分かったの!?!」

すると向けていた機銃をずらし、サクヤの奥の雲を指した。

てんざん

「あれは……ただの雲ですか?」

クレア

「あいつの身体が透けて向こうの雲が見えた」

レイ

「身体が透けていただと！？もしかして相手は幽霊か!？」

ナナ

「いや……それは絶対ないけど……」

冷静にツッコミを入れるナナ。

クレア

「確かに俺も分からないけど、もうひとつ確証がある」

やまと

「もうひとつ確証?」

クレア

「あいつが軌道上に出現する時、一瞬あいつの頭上で何かが起きてた」

ネコ

「な、何かって何なのニヤー?」

クレア

「さあ……だけど、トリックはあるはずだ」

あかぎ

「どちらかと言えばかなり曖昧ね」

ルリ

「あまり信用できませんわ」

クレア

「レイ!」

機銃を下ろし、いきなりレイを呼ぶ。レイも一瞬ビクツとしたがすぐにクレアの方を向く。

レイ

「な、何だ?」

クレア

「R型戦闘機に詳しいよな。何か特殊な戦闘機とか聞いてないか？」  
レイ

「特殊な戦闘機？うーん……………」

アメリカ軍がR型戦闘機について知ったのはやまとゆきかぜの報告の後だ。宇宙から日本に上陸した艦隊と聞いたが全く理解出来なかった。

それもそのはず、そのような夢物語が信じられるような時代ではないからだ。実現しようと頑張った典型的な例を挙げればドイツ軍ぐらいだ。結局どれも実現不可能なものだったし、仮にできても実戦で有用なものはほんの一握りだった。

しかし、目の前の惨状を見て、現実味を痛感させられた。

クレアはそれほど頭がいい訳ではなく、喜怒哀楽が激しいため感情的になりやすいが、アメリカ合衆国にはほぼ絶対の忠誠を誓い、ルリほどではないが自国の危機になりうる敵となれば、頭をフル回転させて敵を撃破する。今、その状態が発揮されたのだ。

レイ

「うむ…………我々も多くは聞いていないが……………」

ナナ

「戦闘機以外ねえ…………なんか言ってたような……………」

あかぎ

「あ、そういえば」

あかぎが何かを思い出したかのようにポンスと手を叩く。

あかぎ

「たしか…………電子戦機…とかいうのにジャミングっていう機体を隠

せる機能があるって……」

レイ

「ああ、そういえば言ったな。たしか……『パスワード・サイレンス』……だったと思うが……」

クレア

「それだ!!!」

レイ達の会話に割って話す。

クレア

「それならあいつが突然現れたのも実証できる。そいつを破壊すれば勝てる」

ルリ

「……なるほど。ですが確証できませんわ」

ハイネ

「ですが、もし本当ならば……」

クレア

「俺は確かに見た。だからいけるはずだ。だからお前達も協力してくれ」

レイ

「そこまで言うなら……」

ナナ

「一回やってみるけど……」

てんざん

「もし失敗したらさっきみたいに……あわわあ……」

クレア

「失敗したら全力で逃げる」

ネコ

「クレアちゃん、大丈夫かニャー？逃げてる途中でさっきの光みたいな撃たれたら避けられないニャー」

クレア

「一か八かやるしかねえ。今だからだ」

あかぎ

「気をつけてね。もし怪我でもさせたらお姉さん、許さないからね」

そして対峙した。

サクヤ

「大声出してから……6分と39秒……何を話した……？」

クレア

「へっ！お前に答える義理はねえ。が、教えてやる。あんたをぶっ潰す話し合いさ！」

サクヤ

「私を……？クスッ……、無駄な……」

レイ

「無駄かどうかは後で判断するんだな」

サクヤ

「いいわ……。攻撃……。開始っ！！」

合図とともに五機のレディ・ラブがバルカン掃射する。

乙女達は左右に散開して避ける。

レイ



「いいか、必ず二人以上で一機ずつ確実に破壊しろ！」  
全員

「了解！」

続けざまにレディ・ラブとホット・コンダクターは追尾ミサイルを放つ。

レイは主翼斬で迫り来るミサイルを次々切り捨て、他の乙女も機銃掃射でミサイルを迎撃する。

先陣を切って接近したのはレイ。  
自慢の速度と回避力で近づき、

レイ

「抜刀・主翼一閃！！！！！」

レディ・ラブの真正面を捉えて一閃。

ど真ん中から横に斬られたレディ・ラブは爆発。

怯むことなく、すぐ側でバルカンを撃つレディ・ラブも一閃。

エンジン部分ごと斬られ、爆発。

隙を見てレイの背後から別のレディ・ラブが追尾ミサイルを放つも、

ナナ・てんざん

「レイ（お姉さま）！」

と二人でミサイルを迎撃。

レイ

「む、すまない！」

ナナ

「いいからやっちないな！」

てんざん

「私達で援護します！」

レイ

「分かった。よし、行くぞ！！絶刀・主翼斬！！」

今度はその場で主翼斬を振ると、斬撃が衝撃波となってレディ・ラブを襲う。

レイは一人で三機撃墜したが、ナナとてんざんの援護あつての成績だった。

クレア

「おらあー！！ブラストチャージ！！」

クレア達は的確なコンビネーションでミサイルを迎撃し、クレアが今まさに爆弾をレディ・ラブへ渾身のシュートを放った。クレアからシュートされた爆弾と真正面にぶつかり、爆発。

もう一機もネコとハイネが高い命中率と威力を誇る通常機銃で撃墜。ナナ達の使っている機銃と違い、やはりアメリカの武器は高性能であり、十分通用する事を証明した。

ハイネ

「皆さん！危ないであります！」

日米軍の乙女達は気付いていなかった。レディ・ラブと交戦中に三

機のホット・コンダクターが離れて、波動砲発射作業に取り掛かっていた事を。  
いち早く気付いたハイネが叫ぶ。

レイ

「しまった!！」

てんざん

「あわわわあ!！」

クレア

「やばい!ネコ!」

ネコ

「まっかせるニャー!!!キャットザテンペスト!!!」

ネコは目に留まらぬ速さで一気にホット・コンダクターと距離を縮め、一機に機銃をお見舞いし、猫型爆弾を投げ付け爆破。一機は粉砕したが、二機は発射完了し、砲身に光が収縮し始めていた。

ナナ

「く、来るよ!」

ネコ

「ウニャーア!!!!!」

ネコはすかさず機銃掃射。すると、一機のホット・コンダクターの波動砲機関内部に弾が当たり小さい爆発が生じ、光が消え失せる。隙を与えず機銃を撃ち込み撃破。

が、もう一機は間に合わず黄色い光の柱が一本、乙女達に放たれた。

レイ

「来たぞ!かわせ!」

先程の五本でないのが幸いし、難無く避けた。

ネコ

「止めるニャー!!快投!キャットボム!!」

ネコはホット・コンダクターに椅子やらボールやらガラクタを投げ付け、先程の猫型爆弾を投下、爆破させ、三機目を撃墜した。

レイ

「よし、あと二機……………む?」

ハイネ

「……………消えてるであります!?!」

残りの二機だけでなく、サクヤも消えていた。

ネコ

「ニャ?終わったのかニャー?」

クレア

「待て!隠れてるかもしれない!」

ナナ

「で、でも何処に!?!」

見回しても見つからない。一時静寂に包まれた。

ネコ

「何処だニャー?」

クレア

「ネコ!警戒するならここに戻つて……………ネコ!後ろだー!!」



限界速度を越えながらホット・コンダクターに弾幕の雨の如く集中機銃掃射。機銃も呼応するかのように弾速が速い。

僅か4秒。穴だらけのホット・コンダクター二機は爆発。R型戦闘機は全滅した。

ネコはそれを確認すると、緊張の糸が切れたように静かに落下し始めた。

クレア

「やばい！あれだけ動けば内燃機関にかなり負荷を掛けたはずだ！あいつ、失神してる！」

しかし、落下し始める前にレイが素早くネコの身を抱えた。攻撃中に既に移動していたのだ。

ハイネ

「ね、ネコさんはどうですか？」

レイ

「心配無い。クレアの言う通り、失神だ」

クレア

「よかった。だけどネコはもう……」

てんざん

「なら、私が連れていきます」

レイ

「だが相手はまだいる。ここは……」

ナナ

「なら、僕も行くよ。相手はあと二機（一人）。楽勝だよ」

レイ

「……………分かった。ネコを頼む」

ナナ

「クレア達も気をつけてね」

クレア

「おう。ネコを頼むぜ」

ナナとてんざんは失神したネコを後退させるため離脱したが、その間もサクヤははまだ姿を現さなかった。

残った三人は辺りを警戒する。

レイ

「もうお前達に勝機はないぞ。ここぞ隠れてないで、潔く負けを認めろ」

すると、三人の前で空間のズレが見えた。ズレは少しずつ縮小し、元に戻った時、サクヤともう一機のR型戦闘機が現れた。

クレア

「やっぱりな。その戦闘機の機能で隠れてたか」

サクヤ

「……随分と……強く賢く……なったのね……」

レイ

「ふっ、我々が戦闘において成長しないとも思っていたのか？」

ハイネ

「貴女に聞きます。一体何の目的がありますか？」

サクヤ

「目的……？別に……目的というか……任務で……動いてるだけ……」

……」

クレア

「任務ってのはルルから言われた事か？」

サクヤ

「なっ!?!」

常に無表情に近く、淡々と話していたサクヤが一瞬、驚いたような様子を見せた。

クレア

「生憎、任務だろうが何だろうがお前達みたいな馬鹿に好き勝手させる訳にはいかねえんだよ。」

サクヤ

「……そう……なら……」

サクヤは両腕の機銃を構えた。

サクヤ

「私が……やる……」

両腕の機銃を放つ。

三人は散開し、それぞれ機銃をサクヤに向けて撃つ。だが……

ハイネ

「なっ!?! 弾が当たらないのであります!」

クレア

「見れば分かる!クソッ!」

サクヤ

「R型戦闘機は……見事……でも私には……勝てない……」

と、レイがサクヤから距離を取り始めた。いや、サクヤから離れている。



サクヤ

「背中……がら空き……」

ハイネ

「レイさん危ない！狙われてます！」

サクヤは左腕の機銃で二人を牽制し、右腕の機銃でレイを狙った。

レイ

「はあ！！！！！」

レイはいきなり何も無い場所で主翼斬を抜き放った。

クレア

「れ、レイ？一体何を！？」

不可解な行動の答はすぐに分かった。

レイの前で再び空間のズレが生じ、縮小し、現れたパワード・サイ  
レンズは上部の球体アンテナが切断されていた。  
さらに、後ろにもう一人サクヤが腕で顔を覆っていた。多分反射だ  
ろう。

ハイネ

「なっ！？敵がもう一人！？」

クレア

「……………いや、違う。あれが本物だ」

トリックを見破られ、サクヤは一瞬恐怖を感じた。先程まで二人を牽制していたサクヤは既に消えていた。

サクヤ

「……………ありえない……………！ジャミングは……………感知できないはずでは……………！」

レイ

「勘だ。ほぼ賭けだったがな」

サクヤ

「それだけで……………」

ジャミングは発生機体バワード・サイレンスに直接触れない限り、任意でしか解除できない。

離れば見えない。

レイはそれを勘だけで斬ったのだ。

レイ

「今度こそ終わりだ」

サクヤ

「クツ……………、四段機関砲一点射撃！！」

左手を右腕に掴ませると、各二門の機銃が連結、右腕にある一つの銃口に四本の銃身が繋がり、レイに向けた。

レイ

「まだやるか！？」

直ぐさま回避行動するレイ。  
銃弾は四発が同時に放たれ、距離が開くと拡散した。まさに散弾式  
機関銃である。

レイ

「駄目だ！避けきれん……グアツ！！」

拡散する弾がレイの左足に命中し、少量の赤い液体が足を伝って流  
れる。

また、身体には当たらずともかすり弾が服に穴を開けていく。

ハイネ

「駄目です！このままでは……」

クレア

「クソッ、弾幕攻撃しやがって！」

二人もかすり弾だけが命中するのは時間の問題だ。

サクヤの四発銃弾の拡散タイミングは一定ではなく、ランダムで拡  
散する。つまり、動かなければ当たらないという場所はない。

サクヤ

「……もう……終だね……」

サクヤは更に弾速と発射速度を上げる。

レイ

「くっ、もはや……！！」

先程左足を撃たれ、若干速度が落ちたレイは、死を覚悟してサクヤに近づき一矢報いようと考えていた。最悪刺し違いになるかもしれない。それは日本軍の鋼の乙女にとって最もしていけないタブーだ。だが、あれは必ず敵となる。摘める芽は今摘めたいと考えた。その時だった。

サクヤ

「!?!」

サクヤは攻撃を止め、直ぐにその場を離れた。と同時にその場にレイザーが通った。

サクヤ

「今のは……R型戦闘機の……エクリップス強化仕様型………XPS  
レイザー?」

飛んできた方向を見ると、R型戦闘機の変換戦闘機「エクリップス強化仕様型」を確認した。可変とは速度の事で、燃料1・5倍消費して速度を2倍にできる。

他にヨルムガンダ級輸送艦二機に、中距離支援機「モーニング・スター」、強化戦闘機「ウォー・ヘッド」、爆撃機「ステイヤー」を確認した。

クレア

「なっ!?!?新手かつ!?!?」

レイ

「クレア、ハイネ待て！あれは我々の味方だ！」

ハイネ

「味方ですか！？」

サクヤ

「……………」

奥のヨルムンガンド級輸送艦から乙女に向けて発光信号を送る。

クレア

「あれは……信号……か？……………レイ殿、貴女の協力要請を受け、  
一個小隊を参戦させます……………お、おい、レイ！どどういう事だ？」

レイ

「出発前に連絡しただけさ」

一方サクヤは苦い表情をしていた。

サクヤ

「くっ……………將軍の……………言っただ通りに……………」

特別遠征艦隊の参戦を予測していないので、今回は対R型戦闘機用の兵器を所持していない。

劣勢に立たされたサクヤはこの場から離れる以外選択肢は無かった。

レイ

「待て！逃げる気か！」

サクヤ

「……………」

無言のまま群青色の何かを取り出し、ピンを抜いてレイ達に投げ付けた。

カツー！！

レイ

「うわあー！！」

クレア

「ぐあつ！！」

ハイネ

「ま、眩しい！！」

閃光弾。

サクヤは速度を上げ、現場から離れた。

視力が回復する頃には既に姿も無かった。

レイ

「ちっ、逃げられたか…」

クレア

「あんな物とか卑怯じゃねえか」

ハイネ

「ですが相手の情報はかなり得られました」

ナナ

「レ〜イ〜！！」

三人のもとにナナが戻ってきた。

クレア

「ナナか。ネコはどうだ？」

ナナ

「少し無理をしてたけど、何日か安静にすれば回復するって整備士が言ってたよ」

ハイネ

「そうでしたか。迷惑を掛けてしまいました」

ナナ

「いや、もう和解したんだし、仲間だから当然だよ。…っと、そうだった。司令官から全員に帰還命令を出したよ」

レイ

「分かった。すぐ行く」

四人はその場を後にし、初の第三軍との戦闘は終了した。

一方、朝鮮戦争も七月二十七日、板門店で北朝鮮、中国人民志願軍両軍と国連軍の間で休戦協定が結ばれ、戦争は一時の終結した。(調印者：金日成朝鮮人民軍最高司令官、彭徳懐中国人民志願軍司令官、M・W・クラーク国際連合軍司令部総司令官。なお李承晩はこの停戦協定を不服として調印式に参加しなかった)。しかし、板門店がソウルと開城の中間であったことから、38度線以南の大都市である開城を奪回できなかったのは国連軍の失敗であったとされる。

第2章10話 激突！朝鮮戦争 6、終止符（後書き）

- 作者です。次で第2章も終わりなので出て来ました。今回はアシスタントと共に第3章の方針を言います。  
では、影薄い苦勞人のナナ君です！

ナナ「って、影薄いは余計だよ！」

- グハツ！！な、ナナ君、いきなりグーで殴るのは……

ナナ「作者から言ったからでしょ！大体、どうしてボクを『ナナ君』って呼ぶのさ！」

- 他に言い方無かったものですから………すみません……

ナナ「司令官みたいで嫌だよ、この人」

- まあ、こんな感じで進めます。

ナナ「あつ、無視した」

- とりあえず方針の前に言いたい事が……

ナナ「言いたい事？」

- はい。まあ、目次見て気付いたと思います。が念のため……  
自己紹介文から抜粋



ユーザー名が他の人と重なったので、雪風からチハへ変えました。

ナナ「ユーザー名変えたんだ。多分あまり気にしないと思うけど？」

・とりあえず。検索がごっちゃになりそうなんで。

ナナ「ふ〜ん……」

・言いたいののはこれだけです。では第3章の方針ですが、仮想戦となります。勝手に何処かを戦場にしてドンパチする構想を考えています。一応、イギリス国内とあと一つ。

ナナ「何でイギリス国内だけ決定なの？」

・欧州の鋼の乙女も出したいと思ったからです。後向こうにオリキヤラいますし。

ナナ「ドイツ・イタリア軍にイギリス軍と要塞島軍だね。じゃあ、後一つは？」

・太平洋の何処かです。要塞島以外ですが。

ナナ「そこってどう考えても最終決戦だよね……」

・とりあえずこのくらいです。

ナナ「えっ!?!もう終わり!?!」

- 後は文才が良くなりたいですね。

ナナ「それは自分で努力しなよ……」

- というわけで引き続き応援宜しくお願いします。

ナナ「ボク達も頑張るから、絶対見て下さいね！」

第2章最終話 犠牲（前書き）

戦争において民間人の犠牲は0には出来ない。

## 第2章最終話 犠牲

朝鮮戦争は確かに終結した。しかし、兵士だけでなく多くの民間人も巻き込まれた。

お互い恨みを持ちながら独立して国となった。

鋼の乙女による抑止力も発揮できず、再び同じ戦果となった鋼の乙女達の間にも重たい空気が流れる。

世間も黙っていられない。第二次世界大戦で奇跡を起こしたと讃えられた鋼の乙女にも批難の声上がり始めた。「抑止力が無ければただの危険物」「憲法擁護にする必要は無い」「早急に処分するべきだ」と唱える学者まで出てくる始末。

日本だけでなく、アメリカ合衆国でも派兵した兵士の家族から不満の声が上がっている。

韓国軍は約20万人、アメリカ軍は約14万人、国連軍全体では36万人が死傷した。

一方、アメリカの推定では、北朝鮮軍が約52万人と言われている。中国人民志願軍は約15万2000人が「戦死」したと中華人民共和國側は発表している。毛沢東の息子の一人毛岸英も戦死した。

戦線が絶えず移動を続けたことにより、地上戦が数度に渡り行われた都市も多く、最終的な民間人の犠牲者の数は100万人とも200万人とも言われ、一説には全体で400万人〜500万人の犠牲者が出た。内訳は北朝鮮側の死者250万人、韓国側は133万人で大多数が一般市民だった。中国人民志願軍の戦死者100万人、アメリカ軍は6万3000人である。

朝鮮の領土は日本の3分の1であるにも関わらず、アメリカ空軍は

80万回以上で海軍航空隊は25万回以上の爆撃を行った。その85%は民間施設を目標とした。56万4436の爆弾と3万2357のナパーム弾を投下した。投下された爆弾は60万トン以上であり、第二次世界大戦で日本に投下された16万トンの3.7倍である。米軍は味方である韓国にも無差別爆撃をし、釜山から仁川までジュネーヴ条約に違反して民間人虐殺をしているという証言があった。ブルース・カミングス教授によると米軍の爆撃で1950年9月25日のソウル爆撃で5万人が死亡、ソウルを再占領した後は7万人も死亡したと言われている。米軍の無差別爆撃によって敵である北朝鮮も甚大な被害を受けた。

中国人民解放軍、北朝鮮軍に人的被害が特に多いのは、旧式の兵器と人的損害を顧みない人海戦術をとった為に、近代兵器を使用した国連軍の大規模な火力、空軍力、艦砲射撃により大きな損害を被った事が一因とされる。

鋼の乙女達に届けられたこの被害情報はさらなる追い撃ちとなった。

レイ

「我々は国を守る為、人を守る為に生み出された兵器。平和な世の為に生み出された兵器だ。なのに…なぜだ!!」

ルリ

「さすがの私もアメリカ軍のした事は…許せません!!」

クレア

「こんな小さい国でもごまんと民間人がいるのに無差別爆撃なんて

…!!」

ナナ

「しかも85%が民間施設狙いとか、どう考えてもおかしいよ!!過去の戦争を繰り返す気!？」

あかぎ

「み、みんな……少し落ち着いて……」  
レイ

「落ち着いていられるか！！こんな非人道的行為を繰り返す！何故自ら平和を失くす！？」

あかぎ

「レ、レイちゃん……」

あまりの剣幕に何を言っていないか分からず黙り込むあかぎ。

と、鋼の乙女統括（元日本海軍）の司令官が入る。

司令官に突っ掛かったのはレイ。

レイ

「司令！！朝鮮戦争は……我々が介入すべき戦争だったんですか！？」

全員が驚いた。まさかの介入意義への反発を司令官へとぶちまけた。

司令官

「君達がいなければ、更に被害は増えてたはずだ」

レイ

「では何故あれほどの犠牲者が出るんですか！！あれほど辛い全面戦争の後で！！」

司令官

「だがな、レイ君」

レイ

「司令はっ！！……司令官殿はっ！！味方のしたことを黙認するのですかっ！！」

司令官

「……」

あかぎ

「レイちゃん……」

レイ

「私は……いや……私達は、被害を抑える為に戦った。相手も傷付けた。それも民間人の為に……。」

司令官

「レイ君、君の気持ちはよく分かる。共に辛い全面戦争を体験した身だからな。だが、私にはどうにもできない。出来なかつたのだ……！日本はまだアメリカや国連に意見できるほどの環境、そして実力がまだない」

レイ

「ならどうして……！」

あかぎ

「レイちゃん……！」

あかぎが司令官に迫るレイを止めて抱擁した。

レイ

「あ、あかぎ……？」

あかぎ

「ごめんね。少し席を外すわね」

あかぎはレイを抱いたまま外に出た。

二人は近くの浜辺まで来た。周りに人の気配はない。

レイはあかぎより前に出て海を眺めた。

あかぎはレイに問い掛けた。

あかぎ

「レイちゃん、どうしたの？レイちゃんらしくないわよ？」

レイ

「私は……自分が情けないのだっ……！」

あかぎ

「……」

レイ

「鋼の乙女とは……国を……人を……守る為に生み出された……！戦争を経てからは平和を目指すようになった……！だが、それでも……終わらない！終わらないんだ！いくら酷い体験をしても、争いは終わらない！そして……、いつも関係ない民間人が巻き込まれる……！彼らは……平和な世界にするために必要な……大切な……人達だ……！なのに……敵も味方も……民間人を巻き添えにする……！あかぎ！私は……私はそれが許せないんだ……！」

あかぎ

「……」

レイ

「鋼の乙女とは一体……！私は……民間人を助けてやりたいだけなのだ！でも、そんな私も同じなように……誰一人として民間人を助けられない……。だから……だから……！」

あかぎ

「……」

あかぎは無言のままレイをこちらに向かせて抱き寄せた。

レイ

「あかぎ……」

あかぎ



「レイちゃん、貴女の言いたい事はよく分かるわ。お姉さんも天国ですつと見ていたし。でもね、それは鋼の乙女全員が考えるべき問題。レイちゃん一人だけで抱え込んで自分を責める必要は無いの。それに、今の発言からレイちゃん、自分の命より民間人を選ぶって事だよな？それって自己犠牲じゃない？」

レイ

「！……！」

あかぎ

「確かにあれほどの戦争の後だもん。民間人の犠牲をこれ以上増やしたくないのは分かるわ。でも、落ち着いて考えて。もし命を落としたり誰が戦闘機や爆撃機を撃墜する？味方機がやられて爆弾を積んだまま墜落したらきつとさらに酷いことになったと思うの。それに……敵を撃破できなければ民間人はいつまでも危険に曝される。そしたら、もつと被害は増えたわ」

レイ

「な……なら……、あ、あかぎは……味方のしたことを……認めるのか……！？」

あかぎ

「私だつて認めたくないわ。でもこれが現実なのよ。私達は何でもできる訳でも無いし、誰一人傷付けずに戦争を終わらせる力は無いわ。」

レイ

「なら……！！」

あかぎ

「レイちゃん、過去の事実を変える事は出来ないわ。でも未来は変えられる。いつか皆で笑い合っている世界になるまで民間人だけでなく、皆を……人間を守る事が大切よ。だからこそ、今回のような事を将来二度と起こさせないようにするのが私達の役目だと思うわ」

レイ



一方、朝鮮半島内のとある山の中

サクヤ

「何……してたの……？」

オオツツ

「すいませ〜ん……、ずっと隠れてました……」

サクヤ

「分かってる……だから……余計に……手間取った……役に立たない……」

オオツツ

「役に立たないは言い過ぎですよ！」

サクヤ

「じゃあ……何かした？」

オオツツ

「うっ……」

ちなみにオオツツはあの後ロジーナにまた見つかり、追いかけて回され、この山の辺りで撒いた。そこにサクヤが来た。

オオツツ

「地獄でしたよ……絶対人選ミスでしょ、これ」

サクヤ

「悪口……言わない……帰還する……。ロジーナの……参戦なんて……予想……できたかしら？」

オオツツ

「はいはい、分かりました」

要塞島軍のヨルムンガンド級輸送艦に乗り込み、帰還する二人だが、サクヤは元祖鋼の乙女達の実力について少し警告すべきかもしれないと考えていた。

第2章最終話 犠牲（後書き）

第3章前半

仮想戦 イギリス研究所防衛戦

ドイツ軍のある兵器を再現した要塞島軍が侵攻する。  
立ち向かうのは欧州鋼の乙女。

第3章1話 要塞島 ロンドンタワーブリッジ(前書き)

前半は要塞島関連、後半はイギリス国内にて

### 第3章1話 要塞島 ロンドンタワーブリッジ

朝鮮戦争で日米軍が中朝軍と要塞島軍と戦っていた時、どの艦を寄せ付けない要塞島に二人の珍客が現れた。

身なりからして、ドイツ第三帝国の者だ。

ルル達は知られていないはずの場所である以上警戒はしていたが、相手の目的を知る為に内陸への上陸を許した。

ラミデス

「通して良かったんですか？」

SCS

「我々の情報を他国に漏らす危険性がありますが？」

艦船タイプの鋼の乙女ラミデスにコピーロイドのセキュリティメイ  
ドSCSは要塞島軍総大将ルルに警告を促す。

ルル

「要塞島自体アメリカ軍しか知らないはず。太平洋に面しているのにドイツが来たとなると既に情報は漏れてるじゃない？それに、もしそのつもりなら艦ごと沈めればいい」

SCS

「確かにそれで済みますが……」

ルル

「見た感じ、私達に喧嘩を売りに来た訳でも無いでしょ」

要塞島へ入った二人は指示されたルートを通り、中央研究所へ入った。

指定された部屋には机を隔てて椅子に座っているルル、後ろにラミデスとSCSが立っていた。

ルル

「まずは要塞島へようこそ…かな」

???

「我々を島内へ上陸させ、案内してくれた事に感謝する」

軍服に幾つか勲章を付けた男性が話す。憶測だが将校クラスだろう。

ルル

「いつもなら近づいた艦には警告出して、それでも近づく時は撃退か沈没させているけど、あなた達がドイツから来たから少し興味が湧いてね……。ドイツは何故私達を知っている？」

要塞島にとって最も気になる死活問題だ。もし世界中に知らされているなら既に戦力を整えているはずだ。いくら武装で固めてもそれほど大きくない島だから物量には勝てないのが現状だ。  
今の時点では。

???

「いや、ドイツ国内で知っているのは私達だけです」

今度は白衣を着た科学者らしい男性が話す。



ルル

「あなた達だけ……?」

???

「私達は特殊な盗聴器で朝鮮戦争の米軍と本国とのやり取りを聞いて貴女方の情報を得ました」

ルル

「そう。あれだけ嚴重なアメリカ軍の通信を盗聴できるのはかなりの技術ね」

となれば二人は軍部において要人の位置にいた人物だろう。と考えていた。

ルル

「で、あなた達は何の目的で来たわけ?」

???

「盗聴した内容から鑑みるに、貴女方の技術は我々の想像以上の技術を持っていますね。どうか、我々に協力してほしい。その為の交渉に来ました」

ルル

「……それはドイツ復活の為……?」

???

「大戦にてドイツが足りなかったのは時間と再現技術です。貴女ならそれを解決できると思います……」

ルル

「おあいにくさま、私達は既に世界の敵でね。ましてや一国の復活を手助けする気などさらさら無い」

当然の返事である。この世界での本来の目的は残骸から使える鉄材資源の回収とDF又は核の情報を手に入れるだけだ。

????

「……なら、せめてこの設計図だけでも目を通して貰いたい」

科学者の男性が手に持っていた紙を机に広げる。ラミデスとSCSも何なのかを見るため近くに寄った。

広げられたのは兵器の設計図だが、奇妙な兵器だった。

ルル

「真空爆弾……旋風砲……」

どれも非現実的な兵器だが確かにルルにとっては再現出来ない兵器ではない。

????

「いかがでしょうか？」

ルル

「あなた……シュリーバー博士ね。生きていたとはね……」

シュリーバー

「おや、ご名答でございます。世間では既に死んでいると思われるのですが」

ルル

「あなた確か、マリオ・ツイッパーマイヤー博士に影響されたのよね？」

シュリーバー

「恐縮でございます」

あまり興味は無いし、造る気も無いのだが、ある兵器の設計図に目を止めた。

ルル

「レパルシン……」

シュリーバー

「そちらに興味がおありですか？そちらの兵器は私自身も関わった事があるので、詳細な情報もありますか？」

ルル

「……これは……確かに……興味はあるが……」

シュリーバー

「何か不都合でもおありかな？」

ルル

「いや、ない。……そうね……このレパルシンとやらならこちらでも検討したいと思うが？」

シュリーバー

「元より貴女を頼りに来た所存でございます」

設計図から見てレパルシンはかなり夢物語だが実用性はあるとみてこう言った。

ルル

「で、あなたはただ彼を誘導しただけでないのでしょう？」

今度は入口に立っていた軍服の男性に声を掛けた。

????

「ハッ、恐れながら私も海軍の友人からある設計図を貰っています」

軍服の男性が近づき、懐から設計図を取り出し広げる。

ルル

「これは……！」

潜水艦の設計図だが、違う。潜水艦発射弾道ミサイル、SLBMだ。潜水艦から発射される弾道ミサイル。設計図は核を搭載した潜水艦の詳細な情報まで書かれていた。

ルル

「核に関する設計図……。となれば……。フォン・シュナイダー。ウイルスハウスの核施設のドイツ軍将校か」  
シュナイダー

「その通りでございます。海軍の友人が核に精通・研究している私に託した設計図です」

これはかなり歴史が曲がっている証拠でもあった。もはや本や資料で見た歴史の知識では予測不可能な状態だと悟った。

フォン・シュナイダーはバルジの戦いにて連合軍のある少尉によって核兵器施設ごと葬られたはずだが…。

ルル

「……………そうだな、一応これらは私達だけで審議する。席を外して貰いたい」

シュリーバー

「協力する気になってももらえれば本望ですが」

ルル

「ドイツに協力する気はない。ただ、兵器を造るかを審議するだけだ。勘違いしないように。SCS、部屋に案内を」

SCS

「かしこまりました。ではお二方、こちらへ案内いたします」

SCSに案内されて二人が部屋を出た後、ラミデスが疑問をぶつける。ルルの決定に不安があった。

ラミデス

「いいんですか？兵器を造る事を言っつて？それに核は……」  
ルル

「出発前に言っただけど、核ではなく、その機構が知りたいだけ。…  
…それに、少なからずこれらは役に立つ。実際こんな兵器をドイツ  
は造ろうとしたっていう文献はいくらでもある。だから、どれほど  
使えるか試してみたい」

ラミデス

「そうですか……」

ルルの決めた方針は少なからず自軍にもメリットがある。そう思い  
直し、後は何も追及しなかった。

ルル

「あとはムツとスミの二人がイギリスで頑張ってくれば……。」

窓から見える密林を見て小声で呟いた。風が吹いたのか、葉が穏や  
かに揺れていた。

要塞島にドイツの二人が来た三日前、イギリスのテムズ川河口にあ  
る港バジルドンから侵入した要塞島軍の潜水艦は深夜に浮上した。  
そのままテムズ川沿いを航行、タワーブリッジ辺りで上陸し、帝国  
戦争博物館に極秘に設けられたDF研究所へ向かう算段だ。

しかし、前回ドイツ、ベルリンにてベローチエ達に見つかったのが誤算だった。

その後、ベローチエ以外の鋼の乙女がその場に居合わせたので、要塞島軍の狙いは割れている。（相手は私達は何軍かは知らないはず）

今の戦力は鋼の乙女二人と潜水艦とパワード・サイレンスのみだ。武器はあるが不足しているし、万が一向こうの鋼の乙女と対峙するならば無事には済まない。援軍を送るとは言っていたが逃走用の時間稼ぎ程度の部隊と思われる。

それらを踏まえ、彼女達は任務を遂行しなければならない。

スミス

「ふう……とりあえず落ち着こう。あーやっているいろいろ考えても、何も解決しないわ……」

と独り言を漏らす戦車タイプの鋼の乙女スミス。

ムツ

「スミスさん、目的のタワーブリッジが見えました」

ずっと潜望鏡で外を眺めていた航空機タイプの鋼の乙女ムツがスミスに報告する。

スミス

「そうですね。上陸の準備は（ムツ）『既に万全です。パワード・サイレンスも配置してあります』あら、仕事が速いわね」

ゆっくり浅橋に近づけ、潜水艦のハッチを開いた。  
深夜1時。

人がいないのを確認して二人は浅橋に降り立った。

スミス

「よし……ではムツさん、上空から帝国戦争博物館辺りの警備を確認して下さい。パスワード・サイレンスは私が使用します。もし見つかったら直ぐに私の元に」

ムツ

「もしスミスさんが先に見つかったら？」

スミス

「上空で待機。敵が来たら専守防衛をお願いします。私が先に見つかった場合ですよ？」

ムツ

「了解しました」

ムツは音を出るだけ抑えて上空へ飛んだ。

それを確認して浅橋から階段で道路に出た時だった。

カッ！ カッ！ カッ！

スミス

「!!!?」

突然強烈な光がスミスを照らした。サーチライトだ。

スミス

「サーチライト！？まさか既に!？」

周りには数台の戦車、兵士、そしてイギリスの鋼の乙女。

その一人が高笑いをしていた。

マチルダ

「おーっほっほっほっほっ。残念でしたわね。貴女達の行動は既に我がイギリス軍が把握していましたわ」

シン

「まさか本当に鋼の乙女が来たなんて…」

シスター

「イギリスのDF研究所には行かせませんよ」

待ち構えていたのはマチルダ一のマチルダ、M4シャーマンのシン、クルセイダーのシスター。

イギリス軍はスミス達の乗る潜水艦をバジルドンで既に捕捉していた。

マチルダはベルリンの騒動と照らし合わせ、帝国戦争博物館辺りを警戒区域に指定させ、緊急事態宣言を首相から許可を貰い、周辺住民は全て避難させた。

万全な罫を仕掛け、それにまんまと引っ掛かったのだ。

スミス



「……まさかここまでとは……」

マチルダ

「言っておきますが、上空に飛んだ鋼の乙女も既に我が空軍に包囲されていますわ」

シン

「お前に勝ち目は無いぞ。諦めて投降しろ！」

シスター

「それにしても……ドイツのフェイに似てますね……服の色と顔以外は」

しかし、包囲された状況の中でスミスは少し微笑していた。

スミス

「クスツ……貴女達って面白い……」

マチルダ

「な、何ですって……！」

スミス

「だって、こんな小数じゃ包囲って言えますか？市街地だから仕方ないと思うけど」

シスター

「かなり余裕がある……。気をつけるべきですね」

マチルダ

「貴女、この包囲網を突破できると思いますか？」

スミス

「じゃなきゃ余裕なんてしてないわ」

とはいえ、周りは十台近くの戦車が道を塞いでいる。そんな完璧な包囲にスミスの余裕発言にマチルダは苛立った。

マチルダ

「これだけ戦力を前に余裕だなんて…目に物を見せてあげますわ！  
！シン！シスター！」

シン

「任せて下さい！インフェル・スロアー！」

シスター

「じゃ、いきますか。テンカウントボンバー！」

マチルダ

「喰らいなさい！ロイヤルガード！」

三人の鋼の乙女の必殺技に周りの戦車や砲兵の迫撃砲がスミスを襲う。

度重なる爆発で地面が少しえぐり取られ、その破壊力を物語った。

攻撃が止み、黒煙が周りを包み込む。完全に跡形無く吹き飛んだと誰しもが思った。

黒煙が晴れる前に、道を塞いでいた左側の戦車三台が突如爆発した。爆発で兵士も数名巻き込まれた。

マチルダ

「な、何事！？」

味方戦車のいきなりの爆発に驚くマチルダ達だが、黒煙が晴れると、更なる衝撃が襲った。

スミスが先程爆発した戦車に右腕の主砲を構えた姿で平然と立っていた。多少爆発による焦げ目と顔に付いている煤が確認できるが外

見的なダメージはどこにも見られなかった。  
黒色の長髪も毛一本乱れていない。

マチルダ

「あ…ありえませんか…。あれほど攻撃を喰らってもほぼ無傷だなんて…」

シン、シスターも同様に思い、同時に恐怖を感じた。

ドイツ第三帝国崩壊寸前に現れた最強の鋼の乙女と同じぐらいの恐怖を。

スミスは構えた右腕を戻して、マチルダ達に笑顔を浮かべて言った。

スミス

「言ったじゃないですか。これは包囲なんかと言えないって」

真顔に戻し、スミスは破壊した戦車の方に走り出し、包囲を突破した。

マチルダ

「ハッ！逃がしてはなりませんわ！今すぐ全軍に通達を！相手の狙いはDF研究所ですわ！」

我に帰ったマチルダは直ぐさまスミスの追跡と攻撃を命じた。

第3章1話 要塞島 ロンドンタワーブリッジ（後書き）

補足

フォン・シュナイダーは某戦ゲーから。  
ルドルフ・シュリーバー博士は実在した人物。ハインケル社の技師。

### 第3章2話 ロンドン市内上空戦

スミスによる包囲網突破5分前。

ムツは上空からでも分かる明度のサーチライトがスミスを照らしていたのを確認した。

ムツ

「まさかこんな早く見つかるとは……」

それでも任務は続行する。命令通り上空で一時待機すると、ムツの正面からイギリス空軍が迫ってきた。

スピットファイアやスパイトフルといったプロペラ機にミーティアといったジェット戦闘機を確認した。

ムツ

「ふっ……この程度なら……」

ムツは手持ちの30mm機関砲を構えて迎え撃とうとした。

しかし、あらぬ方向からの攻撃で体勢を崩された。下からだ。

ムツ

「くっ!?!」

間一髪で避けたが、銃弾がムツの額の紅い鉢巻きを掠めた。ムツの下から狙ったのはスピットファイアのマーリンとP51のムスタング。

それだけでない。向かってきた通常戦闘機の中にフィッシュ・ソードのフェアリー、ラン・カスターのランも紛れていた。

マーリン

「やりますね！ですがもう終わりです！」

ムスタング

「あなた方を我々の研究所に近づけさせません」

ムツ

「やはりこちらもか……」

スミス同様周囲を囲まれ、劣勢に立たされた。

フェアリー

「あ、あなたは……！？」

フェアリーがムツを見た瞬間、背筋に悪寒を感じた。

ラン

「フェアリーさん、どうしましたか？」

フェアリー

「まさかあの時の……！？」

あの時とは戦時中のセイロン島での戦いだ。

日本海軍の空母機動部隊がインド洋に駐在している英東洋艦隊を一掃するビルマ戦線支援作戦の一つで、フェアリーも英国艦隊を守るべく空母機動部隊と戦った。

その時に戦場では似つかわしくない意味での敗北をしそうになったのだ。

というのも、連合艦隊には日本の鋼の乙女にレイ、ナナ、あかぎを投入していた。そのレイがフェアリーのメイド服に釘づけになり、任務そっちのけで追いかけ回した。その勢いがフェアリーにとってドイツ軍のルーデルを彷彿させる程、相当（もともと機動力が優れているので尚更）だった。

余談だがフェアリーはアフリカでドイツ軍との戦闘時に日本ドイツ技術交換で来ていたレイに再び会い、レイは今だにメイド服への執念を捨てていなかった。

ある意味レイに対して嫌な思い出しかないフェアリーの目の前にレイそっくりの鋼の乙女がいるので先程の台詞を吐いた。

ムツ

「あの時？何の話だ？私は初対面だが？」

無論ムツはおろか、味方もフェアリーの言った意味がよく分からなかった。

マーリン

「あの時って……？フェアリーさん、会ったことがあるのですか？」

ところが、フェアリー自身が戸惑っていた。確かに格好は似ている

が雰囲気が違う。

もし本物ならまた辺り構わず飛び込みそうな気がするが。目の前の鋼の乙女はそのような気配など微塵も感じず、戦闘体勢をとっている。

フェアリー

「……………もしかして……………違う……………？」

ムツはそれを聞いて逆に納得したように頷いていた。

ムツ

「あ、成る程。將軍の言つてた事が現実……………」

ムツ自身ルルからモデルにされた鋼の乙女を聞いている。

この世界に来る前に「その世界の鋼の乙女に間違われるかもしれない」と言っていた。

ムスタング

「それにしても……………見た目からして装甲が日本陸軍のニューズ……………はやぶさに似てますね」

マーリン

「私も同じように思っていました」

この二人は戦時中、南方ビルマ戦線に派遣され日本陸軍と戦った。レイは海軍なので会うことは無かったが、レイとほぼ同じ薄装甲のはやぶさに総合的に負けた経験がある。



もしかしたらはやぶさと同等の能力を持つ鋼の乙女かもしれない  
思っていた。

ラン

「あの、もしかして日本軍について知らないのって私だけでしょう  
うか……」

完全においてけぼりにされたランが一言。

フェアリー

「あら、そんなことはありませんわ。それに、目の前の鋼の乙女が日  
本軍とは決まってるから」

ムツ

「……」

ずっとやるせない顔でイギリス空軍のやり取りを見ていたが、マー  
リンとムスタング、他の戦闘機は常にムツを捉えていた。

ドドドドドドッ……

地上から激しい爆音が聞こえた。スミスへの集中攻撃だ。

マーリン

「マチルダさん達もやっってるようです。私達もいきましょー！」

マーリンの合図で戦闘機がムツ目掛けて攻撃を開始した。

ムツは30mm機関砲を構え後方に下がりながら、向かってくる戦闘機を牽制するように機銃掃射をする。

ムスタング

「逃がしません！」

右下からムツに攻撃するも、ムスタングの予想通り高い機動力と旋回力で銃弾をかわされた。

お返しとばかりにムツも反撃するがムスタングも最新鋭だけあり難無く避けた。

戦闘機は鋼の乙女の援護に周り、ムツの周囲を包囲している。

援護でもチャンスがあればラン、フェアリー、ジェット戦闘機も攻撃するがそう簡単には当たらない。

ムスタング

「マーリンお姉さま……」

マーリン

「分かりました」

ムスタングがマーリンに何かを合図するとマーリンはムツの後ろに回り込んだ。

ムツ

「何を……?」

ムツは防戦一方で機銃も牽制程度だが、マーリンの動きにすぐ反応した。

と、二機のジェット戦闘機がムツに突撃した。

突然なのですぐそちらに振り返えざるを得ず、銃弾をかわして機銃掃射し、二機とも主翼に被弾、火を噴き出して墜ちていく。

マーリン

「これで黙らせてあげます！シューティングスター！」

後ろに回り込んだマーリンは機銃を構え、機銃の先に収縮されたエネルギーを纏った銃弾を放った。

ムツ

「まづい！」

回避行動に移ろうとした矢先に

ムスタング

「貴女には…美しい死を。エレガントワルツ」

正面から回転式ミサイル砲をムツに向けて放った。

マーリンとムスタングの挟み撃ち攻撃。左右からはフェアリーとラングが弾幕を張りムツの動きを制していた。

マーリンの銃弾とムスタングのミサイルが重なった瞬間、大爆発し、

生じた衝撃波がイギリス空軍を襲つた。

マーリン

「くっ……！」

全員の体勢を崩され、一般戦闘機の機体はかなり揺れた。空中でもあり、一般戦闘機の何機かは一時墜落しそうになったが、ぎりぎりを持ちこたえた。

爆発が収まると、ムツの姿は無かった。

ラン

「ハア…ハア…た、倒したん……ですか？」

フェアリー

「これだけ……強い爆発なら……直撃でなくても……致命傷のはず……」

途切れ途切れだが、しっかり体勢を立て直した。

マーリン

「凄い……衝撃でした……」

マーリンが二人の方に近づいて言った。

続いてムスタングも近づいてきたが、表情が他と違いなぜか浮かない表情だった。

いち早くマーリンが気付く。

マーリン

「ムスタングさん……、どうしましたか……？」

ムスタング

「……………逃げられました…」

その一言で全員驚愕した。

ラン

「ええ〜!!?!?!?に、逃げられたんですか?!?!?」

マーリン

「本当ですか?!?!?」

フェアリー

「でも直撃したはずでは?」

ムスタング

「ええ、確かに直前まではいたのですが……………ちょうど足元からミ-

ティアのようにジェットブースターを放出させて……………」

マーリン

「ジェットブースター……………鋼の乙女が……………」

と、マーリンの通信機に通信が入る。マチルダだ。

マチルダ

『マーリン、聞こえます?』

マーリン

「マチルダさん、どうしましたか?」

マチルダ

『敵に逃げられましたわ!至急ランとフェアリーをよこしなさい!』

マーリン

「分かりました。実は私達も逃げられたようで……………」

マチルダ

『あなた達もなの?!?先程の爆発は一体?!?!?』

マーリン

「申し訳ありません」

マチルダ

『謝るのは後で構いませんわ！マーリン達は今すぐ帝国戦争博物館の防衛にあたりなさい！』

マーリン

「分かりました！すぐ向かいます！」

通信を切つてすぐにフェアリー達に説明した。

ラン

「マチルダさん達も逃げられたんですか！？」  
ムスタング

「まずいですわ。状況は悪くなるばかりですか」

フェアリー

「敵はどれも異常ですね」

マーリン

「一刻の猶予もありません！早く行きましょう！」

イギリス空軍はすぐに指示された持ち場へ向かった。

陸上では包囲網を抜けたスミスは市街地の路地に周り、パワード・サイレンスのジャミング領域に入ると、建物の壁に寄りかかる。

スミス

「ふう…追っ手はいないですね……。損傷度合は……。23%……」  
内燃機関への損傷は無いので任務は続行するが、左腕の損傷が激しい。

イギリス軍の集中攻撃に左腕を盾のように翳して全体の損傷を抑えた為、左腕は完全に服が破けて露出し、左腕全体の火傷の跡が目立つ。

もし規格外の重装甲でなければそこで終わっていただろう。

スミス

「でも博物館まではまだある……。さっきの空中爆発も気になる…  
…ムツさんは大丈夫だろうか…」

通信機からの応答は無い。あの爆発で壊れたかもしれない。  
スミスは最悪の事態を想定したが、それでも任務はやり通すことにした。

一方、ムツは臨時に搭載されたジェット式急加速ブースターで爆発には巻き込まれなかったものの、衝撃波に加え初めて使う事もあり高速で地面へ真っ逆さまに突っ込んだ。

地面に勢いよくぶつかるそのままごろごろ転がり、ウォーター  
―橋辺りで伏した状態でようやく停止した。

身体全体にかなりの損傷を負った。袴は所々擦り切れて肌が露出し、打ち身や擦り傷が多数あった。

ムツ

「う……あ……、……損傷……度は……63%……」

数字はかなり重度の損傷を表している。

だが、いつまでもいるわけにはいかない。敵に見つかるのも時間の問題だ。

ゆっくり身体を起こし、橋の手摺りに手を掛けて立つ。幸いにも主翼損傷は軽微（というのも地面へ激突する際に一旦主翼パーツを外した為）で、多少の距離なら飛べる。

ムツ

「……不覚だが……スミスさん……すみません……お願いします……」。

私は……潜水艦内の治療キットで……修理が済み次第……すぐ向かいます……うぐっ……」

主翼を取り付け、スミスがいるであろう方向を振り向いてから、痛みを堪え、ムツはテムズ川水面を低空飛行で飛びロンドンタワーブリッジ近くに留めた潜水艦を目指した。



第3章3話 イギリス・イタリア軍奮起録（前書き）

遅れました。

過去話を出しましたが曖昧です。

### 第3章3話 イギリス・イタリア軍奮起録

ベルリンの一件でマチルダは自軍だけでは敵の進攻を食い止めるのは無理だと判断し、ドイツとイタリアの鋼の乙女にも応援要請を送ったが、正直曖昧だった。

今のドイツは東西分割され、鋼の乙女の指揮をどちらが持つかで長期間に渡り議論されていた。

指揮系統が完全に定まっておらず、ドイツ軍の援軍は来ないとイギリス軍は考えていた。

イタリア軍は………言うまでもないが、ベローチエが多数いるので暇なベローチエ全員を帝国戦争博物館内に収容した。  
その数45体。

クラウディアは別任務でイタリアにはいなかった。

そもそも帝国戦争博物館自体それほど大きいわけでない上に、ベローチエ達には何も知らせずに収容しているから、博物館内はぎゃーぎゃー騒がしい。スミスが包囲網を突破した事でマチルダ達イギリスの鋼の乙女が博物館に到着したが、案の定ベローチエ達はまだ騒いでいた。

ベローチエ

「外がえらい騒がしいんやけど、何があつたん？」

「教えてや〜。イギリス軍は皆不親切やわ〜」

「そつやそつや！いきなり集まれ言うときながら何の説明しとらんし〜」

「そつやで！ウチラの自由を要求する〜！」

「あゝ、なんか腹減ってきたわ〜」

「あゝも〜、外に出してや〜。皆集まって暑いわ〜」

「どっかにキッチンないんか〜？パスタ作りたいんやけど？」

「なあ、パスタの姉さんなんかかしてな〜」

マチルダ

「うるさいですわ！！外は厳戒体勢ですわ！！」

ず〜っと自分の周りをうるちよろするベローチエ達に怒声を浴びせるマチルダ。

いくらマチルダみたいにベローチエに慣れていても45体はうざったい。

ベローチエ

「そんなん言われても分からんわ〜」

「具体的に教えてや〜」

「それよりはよパスタ作りたいんや〜」

シン

「あの、マチルダさん…。ベローチエ45体は流石に……」

側にいたシンが申し訳なさそうに話す。シスターも多分同じ気持ちだろう。

マチルダ

「まあ、私も薄々気づいてましたが……」

だが、それでも内心マチルダはベローチエに期待していた。ベローチエといえども鋼の乙女。戦績は期待せずともこの人数であれば時間稼ぎは出来るはずだ。

イギリスの鋼の乙女も集結した。敵は一人は撃退できた（多分）。

博物館周辺は機甲師団を配置。入口を扇状に囲む。

万全の体勢で迎え撃つイギリス軍。

帝国戦争博物館に集結するイギリス軍の様子を建物の陰から覗き見していたスミスは突破口の検討を模索していた。

スミス

（やはり数が多い……。正面から攻撃すればすぐ見つかる。どこか別の入口があれば……）

問題はその一点だけと想っていたが、スミスはまだ気づいていない。パワード・サイレンスの燃料が少ない事に。

動きがあつたのはマチルダ達が到着してから10分後、機甲師団の戦車が突如爆発。しかし、発射元は誰ひとり見ていないと言っただ。

マチルダ

「ありえせんわ！敵はたった一人ですわよ！」  
兵士

「ですが、本当にどこから砲撃されたのか見当もつきません！」

また一台、さらに一台撃破される機甲師団。それでもやはりスミスの姿は誰ひとり見ていない。

ベローチエ

「な、何や何や！？いきなり戦車が爆発したで〜！」

「戦争や〜！戦争がまた始まったんや〜！」

「ええ〜！！！！？ウチラどないすんねん！？」

「パスタの姉さん、何が起きてるんや〜！？」

内側の入口から外の様子を見ていたベローチエ達が一様に騒ぎだす。

マチルダ

「全員周囲を警戒しなさい！！！」

しかし、兵士は皆見えない恐怖に怯えていた。中には自暴自棄で辺り構わず機銃掃射する者も。

流れ弾が味方にあたり、負傷者まで出る始末。

戦車ははまだ訳も分からず撃破され、残りわずか。

一般指揮は完全に混乱した。

マチルダ

「皆落ち着きなさい！私達がまだ残っていますわ！」

マチルダが兵士に檄を飛ばす。何人かは正気に戻ったが、なお戦車は撃破され続ける。

一方的に攻撃され、マチルダは唇を噛み締める。

マチルダ

「くっ、一体何処から…！」

シン

「ま、マチルダさん！あそこ！」

シンが入口前を指差す。

そこに空間の歪みが見えた。それほど大きくない、いや、少しずつ縮小している。

マチルダ

「な……何ですの…？」

歪みが消えた頃には、スミスの姿と、謎の戦闘機……というのからからない物体がスミスの真上を浮遊していた。

スミス

「数が多かったんで、先に潰しました。私、時間が少し押してきたので」

ロンドンタワーブリッジ辺りで会った時と同じ口調で話す。

マチルダ

「貴女……！よくもやりましたわね！」

スミス

「だって、数が多いし他に入口無いですから奇襲以外何も思い付か無くて…」

相変わらず減らず口で話す。

その時、上空から大量の爆弾が降ってきた。

フェアリー

「お覚悟なさいませ…。ロイヤルボマー！」

ドドドドドッ

爆弾で地面に多数の穴が空いた。不意打ちが功を奏し、スミスも防ぎきれず何発か貰ったが、損傷は軽微だ。

しかし、低空飛行していたパワード・サイレンスにも命中し、爆発した。燃料が底をつき、移動できなかつたからだ。

スミス

「あつ、しまった……!!」

初めてスミスの顔に焦りが見えた。それを見て得意げになるマチルダ。

マチルダ

「おーっほっほっほ！思い知ったでしょう？これが我がイギリス軍の力ですわ！」

スミス

（自分がした訳でも無いのになんかイラッとする……）

シン

「今だ！精密砲撃！」

スミス

「!!!?」

シンが主砲を向けて放った砲弾は腹部を直撃した。砲弾が爆発し、少し後ずさる。

スミス

「ウグツ……ハア、ハア。くっ、仕方ない……。」

スミスは入口に立つマチルダとシンの上に主砲を向けた。

マチルダ

「私達ではなく中を狙うつもり?無駄ですわ。貴女達の事を想定して、全て厚さ8cmの防弾ガラスに替えましたわ!」

だが、そんな言葉など聞き入れていないスミスは照準を合わせて、静かに一言。

スミス

「デス・スロウズ 鮮血」

砲塔内部で超高速回転を加えられた砲弾が放たれた。

マチルダ

「なっ!?!きゃああー!?!」

シン

「へっ!?!うわああー!?!」

放ったと気づいた時には既に砲弾は二人の間を通り抜けた。



砲弾から発生した衝撃波が鎌鼬の如く強烈な風で二人を吹き飛ばし、博物館入口に風穴を開けた。入口で見ていたベローチェ数人も吹き飛ばされた。

砲弾は博物館を貫通してもなおエネルギーを維持し、最終的に博物館から3km先の建物に着弾し、崩壊させた。

吹き飛ばされたマチルダとシンは入口から離れた壁に叩き付けられて倒れた。二人とも擦り切れた服や肌の切り傷から赤い液体が流れている。

マチルダ

「うっ…シン？大丈夫…かしら…」

シン

「マチルダ…さん。僕は大丈夫…ですが」

二人を横目にスミスが悠々と博物館内に入った。

上空から見ていた航空機タイプ全員が下りてきた。

マーリン

「マチルダさん！シンさん！大丈夫ですか！？」

フェアリー

「なんと酷い…」

ムスタング

「今すぐ基地に連れて治療します！」

ラン

「ごっ、ごっ、ごめんなさい！私が爆弾投げれば阻止出来たのに、マチルダさん達に当たるかと思って……」

マチルダ

「それはいいですわ、ラン。それよりも…」

マーリン

「マチルダさん！？無理をしないように！」

マチルダは力を振り絞り絞り立ち上がるが、立っているのがやっとなくらい損傷が激しい。

マチルダ

「マーリン、シンを基地にお願い」

マーリン

「マチルダさん？」

マチルダ

「私は残りますわ」

フェアリー

「駄目ですわ、マチルダさん！あなたも重傷を負ってますわ」

マチルダ

「でも、ベローチエ達が…」

ムスタング

「マチルダさん、心配する気持ちは分かります。ですが、自身の身も案じて下さい。私達も同様に貴女を頼りにしていますので心配なのです」

マチルダ

「……分かりましたわ」

ムスタング

「では、私とマーリンお姉さままで運びます。二人は博物館周辺で待機して下さい」

マチルダとシンを抱えたマーリンとムスタングはその場を離れた。マチルダはやはりベローチエ達を心配せずにいられなかった。

もともと敵同士であったが、ベローチエの違いを一目で見抜け、ベローチエ自身も恐れなど全く出さず気ままに話し掛けてくれた友人でもあり、姉妹でもある。

戦時中、マチルダは一般兵士ですら腰が引ける程高貴な存在で、当時は特に親しいという鋼の乙女もいなかった。彼女がベローチエと出会ったのは食堂だ。

たまには食堂で食べるのもいいだろうと思い、食堂に出向いた時だ。ランがいつものドジで食堂の椅子に突っ込み、それを元に戻そうとしたベローチエが床のワックスで勢いよく滑ってそのままランにヘッドバッドをかました。

片付けが終わってベローチエが「でもさっきのはいい滑り具合やったわ」と言ったのを無言で聞いてると、「いや、今のスベるところちやうわってツツコまな」と言われた。これが初めての出会いだ。それ以来、マチルダは頻繁に食堂に出向いた。ベローチエの料理はどれも美味で、特にパスタは『愛のパスタ伝道師』を名乗るだけあって極上だった。ベローチエ自身も気兼ね無く話すのでとても気が楽になった。ベローチエがマチルダを「パスタの姉さん」と呼ぶのはマチルダの髪型でくるくるした形がパスタのフリッジに似ているということだった。

しかし、第二次世界大戦が勃発。マチルダはアフリカに進出したイタリヤ軍を止めるべくベローチエを給仕として出撃する。そこでイタリヤ軍のベローチエに出くわし、ベローチエはスパイだった事が判明した。が、当の本人はスパイであることすら忘れていた。

それでも敵だと知り、まさに友達に裏切られた気分を味わった。(この時スパイのベローチエ(1号)を人質にイタリア軍に交渉したが失敗。交渉に来たイタリア軍のベローチエ達は1号の拷問(羽箒でくすぐる)を見るに耐えられなくなり逃げ出した。おかげでランはベローチエ達から『眼鏡の鬼畜女』と呼ばれるようになったとか)イタリア軍は撃破するも、結局ドイツ軍の電撃参戦でイギリス軍はエジプトまで一時撤退した。

オーバーロード作戦後、マチルダはベルリン市内で再び旧友と再開した。

見た目は変わらないが、どこか緩い感じの表情は消え失せ、まがまがしい空気を漂わす……DF改造された1号だ。桁違いの実力を発揮し、連合軍やドイツ軍を追い込んだ。

1号やDF改造されたベローチエはエイミーとチハが黒豆ことアイオンとツヴァイを撃破したことで機能停止、終戦となった。

戦後、順次改造されたベローチエは元に戻り、マチルダの希望で1号はイギリス軍の給仕として正式採用された。

今回、状況は違えどベローチエ達の危機である事は目に見えていた。

スミス

「何……これ……？」

今、スミスの目の前にはたくさんのおベローチェがうよよしている。先程の一発でより騒がしくなったのだ。

ベローチェ

「うわゝ、いきなり壁が壊れたゝ！」

「終わりやゝ！この世の終わりやゝ！」

「もう駄目やゝ、ウチラ全員スクラップやわゝ」

「そんなん嫌やゝ」

「じゃあ何すればええねんや！」

「知らんわアホゝ！」

「イギリス軍はなんでウチラを助けるのやゝ！」

「パスタの姉さんゝ！助けてなゝ！」

「うわあゝ、鋼の乙女やゝ」

「ホンマや！鋼の乙女や！敵なんやろか？」

「敵に決まってるで！」

「ええゝ、ウチラどうすんの！？」

「知らんわゝ！ウチラはパスタしかうまい事できんわゝ」

「それやゝ！敵にパスタを食べさせて満足させたら帰るかもな」

「ホンマかいなゝ、12号天才やゝ」

「でもキッチン無いでゝ」

「そやなゝどないしよゝ…」

正直これだけの人数どうすればいいのか全く分からない。中には攻撃するベローチェもいるが、やはり豆鉄砲並の威力しかない。いくつか武器を見直し紙風船よりかはあるがあまり変わらない。

スミス

「……ある意味…地獄？」  
苦笑いで見ながら、そう思わざるを得なかった。

シスター

「痛いかな…？精密砲撃」

ベローチエ達に目がいつて物陰からのシスターの攻撃に反応しきれなかった。

顔に命中し、そのまま後ろに倒れた。

すぐに起き上がり照準を合わせようとしたが、

ベローチエ

「わあ！主砲が飛んでくるで！」

「はよう避難せな！」

「どこに避難せえ言うとするねんや！狭すぎるし！」

と慌ただしく動き、照準がブレる。

スミス

「あゝも〜、うっとうしい」

機銃を取り出しベローチエ達に向けて掃射する。

しかし、ベローチエは身体が小さい。これだけの人数がいながら機銃を避けるだけの行動はできた。それに、スミスの機銃は初速が遅い為なおさら避け易い。

シスターが再び物陰から精密砲撃。

スミス

「ぐはっ、痛っ!!!」

損傷の激しい左腕に命中、激痛が左腕を通して身体全体に染み渡る。シスターは的を得たとばかりに左腕を狙い始める。

スミス

「くっ、調子に乗って……。うぐあー!」

再び命中。反撃しようにもベローチエ達が邪魔して照準がブレ、外す。シスターも物陰から物陰へ移動しながら撃つのでなかなか当たらない。

シスター

「まさかベローチエがここまで役立つとは思いませんでした…」  
スミス

「だあ!もう許さない!」

スミスが背中に掛けていた濃い青色のライフルみたいな銃を無造作に手に取り、シスターに向けた。

銃口から淡い紫色の光が収縮されるのを見て、

シスター

「も、もしかしてエネルギー弾!?!」  
ベローチエ

「うわっ!銃口が光だした!」  
「なんかめっちゃやばいやん!」  
「やばい!こっち向いとる〜!」

威力や範囲なんかお構いなしだ。

スミス

「超絶波動砲おー！！！！」

収縮されたエネルギーが一直線に発射された。放出されたエネルギーが直線軌道を軸に飛散するが、シスターもベローチエも紙一重で避けた。

波動砲は博物館に別の風穴を開けた。

その時、シスターは焦り、スミスは嬉々とした。

なぜなら破壊した壁の向こう、研究設備が顔を覗かしていたから。



### 第3章3話 イギリス・イタリア軍奮起録（後書き）

どうでもいい戦争雑学

空中戦用ミサイル（AAM）  
サイドワインダー

ジェット戦闘機の高速化に伴い旋回半径が大きくなり、従来のドッグファイトでも機銃の狙いが定まらなくなった。そこで各国は小さなロケットに誘導装置をつけ敵機に命中させる空中戦用ミサイルを考えた。

命中させるには二つの方法がある。

一つは航空機から電波を発し、敵機から反射した電波を感知して自ら舵をきる電波ホーミング（セミアクティブ・ホーミング）。

もう一つは敵機のエンジン熱（赤外線）を感知して向かう熱源ホーミング。（赤外線パッシブ・ホーミング）

最初に実用化されたのは構造の簡単な熱源ミサイルだった。

サイドワインダーはガラガラへびの意で、敵機が避けてもミサイルが左右に首を振って後を追い掛けるのが由来だ。

長さ2.8m、直径12.7cm、重さ72kgなので、小型爆弾よりやや重い。

ただし、重さの大半はロケットや命中させるシーカー（誘導装置）であり、爆薬は意外に少ない。

実戦では一九五八年九月二十四日、台湾海峡にて台湾軍のF86セーバーが初めて敵機MiG17に使用した。



第3章4話 帝国戦争博物館決戦（前書き）

少し長いです。

そしてベローチエが大活躍！……かも

### 第3章4話 帝国戦争博物館決戦

スミス

「見い〜つつけた」

超絶波動砲によって破壊された壁の向こうには紛れもなくDF研究設備があった。

そういえばこの笑い方をしたら双子に似てるって將軍に言われたけど誰の事なのかなあ……？

クスリと笑うスミスに対して、シスターは焦燥、ベローチエは疑問の表情を浮かべた。

ベローチエ

「なんやあの部屋。隠し部屋か？」

「敵が笑つとるけど、あれが目的か〜？」

「なあなあ、シスター」

ばれたのなら仕方ない。シスターは説明した。

シスター

「あれは……DF研究所です」

DF。それを聞いてベローチエ全員が驚愕と同時に戦慄が襲った。

ベローチエ

「だ、ただ、DFやて!？」

「先輩のベローチエが犠牲になったアレか!？」

「ウチラ何一つ聞かされてないで!!」

「ハッ!もしかしてウチラを集めたのも、まさか改造されるんちゃうか?!?」

「な、なんやつてえ〜!!?!?」

「やばいやん!ウチラ殲滅される〜!!」

博物館内は一気に大混乱に陥る。辺り構わず走りまくる。どうせならそのまま入口に殺到するか空いた穴から逃げ出せばいいものと思うスミスだが、マチルダに言われたのか誰ひとり出ていかなかった。

シスター

「ちよ、落ち着いて下さい。私達はDF改造する気はないですし、逆にその鋼の乙女に狙われているんですよ!」

すると、ベローチェ全員が突如停止した。

ベローチェ

「えっ?ホンマか?」

「ウチラ改造されないんか?」

「シスターの言った事や。多分本当やで」

「そうや!シスターの言った事や!」

「じゃあ改造されないで済むんか?」

「その通りや!皆落ち着くんや。今はあの敵をどうにかするんや!」

「でもどうやって?」

「人数で押すんや」

「に、人数?」

「ほら、塵も積もればなんとか言っちゃう」

「さっすがっ、1号天才や!」

シスター

「い、1号？混じってたんですか？」

ベローチェを見た目で識別出来るのはマチルダだけだ。ましてや1号がいるのはまさしく誤算だ。なぜなら戦前からあらゆる体験を通し、戦場にも出て戦闘の心得を知っている。

必然的に1号が45体の指揮を執りはじめるようになった。徐々に混乱が落ち着き、統制が執れるようになった1号は

ベローチェ

「よっしゃあ！ここは皆でジェットストリームアタックや！」

と、完全に敵を阻止する勢いを見せ始めた。

まあ、勢いだけで相変わらぬ豆鉄砲だから気にすることはないわけだが。

一列は無理なので五列ぐらいで並んで五人同時に砲撃し、素早く列を離れると次の五人が砲撃する時差攻撃。

結果は火を見るより明らかだ。着弾した側から弾が地面に落ちる。無論ダメージにならない。

ベローチェの行いを無視してシスターが初めてスミスに話しかけた。正確には二回目だが。

シスター

「一つ聞きます。何が目的ですか？」  
スミス

「だから目的じゃなくて任務」

シスター

「同じ事でしょう？」

スミス

「まあね……………簡潔に言えば……………DF関係書類を集めて我が軍でも再現する……………かな？」

シスター

「ですがDFはまだ未知の領域。悪用も簡単ですから安々と渡す訳にはいきません！」

スミス

「そう。じゃあ聞くけどそれは完全に完成してるの？」

この問いにシスターは口を噤む。今のDF技術は再生技術の特化にしか応用が効いていない。大規模に実験すると辺りに甚大な被害をもたらすのは間違いないからどうしても実行出来ない。現実的に言うならば原発を増やすようなものだ。

スミス

「ふ〜ん……………」

シスターの沈黙に何かを考え始めた。

スミス

「……………えっと……………あなたが責任者なのかな？じゃあ……………取引しない？」  
シスター

「と、取引？」

意外な発言に目を丸くするシスター。

スミス

「そう。私達が代わりにDF技術を完璧にさせる。私は無理だけど  
將軍ならできるわ」

シスター

「……それで、私達の条件は？」

スミス

「そ、そうね………うん……、私達の邪魔をしない………で  
いいかな？」

シスター

「今考えましたね」

スミス

「あつ、ばれた？で、でも楽な条件よ？」

シスターは内心あまり戦いたくない（面倒くさい）し、それで戦闘  
回避できるなら賛同したいところだが……

シスター

「私はイギリス軍の全権を持って無いし、見ず知らずの軍に苦勞し  
て分かったDF技術を渡すのは私のプライドが許しませんし。そ  
れに機密漏洩とかで面倒くさい事を押し付けられそうだし」

スミス

「……」

スミスは右手を額に当てて落胆した表情をしてため息。



スミス

( やっぱり見よう見真似の交渉じゃあ効果無いか……というより、  
将軍が交渉に成功した例を一度も見てないし )

となれば方法は一つ。

強行突破

右手を戻し、主砲を再び構え始め、

スミス

「自己紹介が遅れたわ。私は要塞島軍第2級重戦車のスミス。あなたは？」

シスター

「イギリス軍のクルセイダー、シスターです」

ベローチエ

「イタリア軍のベローチエや」

スミス

「そつちには聞いてない……」

ベローチエ (1号)

「こらあゝ！それを言うなってゝ！ウチラをナメると火傷するでゝ  
！」

再び砲火が交じり合う。

博物館内での再衝突から約1時間後、ロンドンタワーブリッジが掛かるテムズ川。要塞島軍の潜水艦内部ではようやくムツの修理が完了した。

ムツ

「ふう、随分かかってしまった。」

潜水艦を動かし、浮上させる。ハッチを開け外に出ると東の空がうつすら明るい。時刻は午前4時過ぎ。綺麗な明けの明星が輝いている。

今だ遠くから砲撃からの爆発音が聞こえる。スミスはまだ戦闘中だ。

ムツ

「ならば今すぐ博物館に向かって助太刀せねばな」

ゆっくり上空に上がるムツ。その時背後から何かの気配を察知した。

何かに向かって機銃を向けたが、何かが分かるとすぐに機銃をしまった。

ムツ

「援軍か。これはありがたい」

何かの正体はR型戦闘機の爆撃機「ステイヤー」五機編成二組と補給機の「POWアーマー」。

「ヨルムンガンド級」輸送艦はないので単体で来たようだ。

ムツ

「あれ？これは……」

POWアーマーの足？の部分に何かぶら下がっている。  
肩掛けの付いたバズーカのようなが。

ムツ

「なるほど。將軍は私達の為に……。よし、博物館に向かうぞ！」

ムツとR型戦闘機は博物館を目指し出撃した。

スミス

「ハア…ハア…ハア……」

ベローチェ

「見たか〜！これがウチラの強さや〜！」

シスター

「99%私の攻撃なんですけど……」

あれだけの耐久力を持ちながらも長期戦で徐々にスミスは追い込まれた。

ベローチェは45体から8体に減ったが撃破したのではなく気絶させて戦闘不可にしただけだ。

それでも追い込まれたのはシスターの攻撃とベローチェの支援の連携と言えよう。

戦闘に役立たずとも支援だとベローチェは大いにシスターに貢献した。

スミスの攻撃を受けてもベローチェの回復技「アモーレ！アモーレ！」でお互いを回復し、しかも45体全員使えるので、なおさらミスには不利になった。

スミス

「損傷度合56%……」

元より防御が0に近い左腕に多く被弾し、頭3発、胴体4発、両腕9発、両足3発、シスターの必殺技を1回受けた。

かなりポロポロで、服も所々破れて下着も少し見え、肌が露出し火傷跡に多数の傷があるがこれでまだ半分。しかし疲労で前屈みになっている。

超絶波動砲はどうしたと思うだろう。

超絶波動砲は一発撃つと30分は撃てない。しかも波動砲に攻撃が当たると再チャージが必要になる為更に時間が伸びる。DF研究所を見つけたのはいいが迂闊に使った事を後悔した。

スミス

「こつなれば……」

前屈みから身体を起こし、主砲を構える。砲塔内部で砲弾を超高速回転させ、

スミス

「デス・スロウ」だから無理ですよ」うぐっ!？」

必殺技発動前にシスターが主砲に精密砲撃し阻止する。

スミスの必殺技は予備動作がある。それを見抜かれてから一度も攻撃できなかった。

シスター

「もう無理ですよ。諦めて投降して下さい」  
ベローチェ

「どや!もう諦めるんやで!」

だが、ここで予想外の出来事が起きた。

ラン&フェアリー

「きゃあああああー!!--!--!」

博物館上空でラン、フェアリーの悲鳴が聞こえた。

ベローチェ

「な、なんや今の悲鳴は!？」

シスター

「フェアリーさんとランさんの声!？何かあったのでしょうか!？」

悲鳴で一瞬上を見上げたシスターとベローチェ×8。

スミス

「今ッ!」

上を向いた隙を見逃さずシスターに主砲を一発放つ。  
砲弾はシスターの身体ど真ん中に命中し吹き飛んだ。

シスター

「きゃあ!?!？」

ベローチェ

「ああ、シスター!？」

すぐにベローチェが回復させたがシスターは立ち上がれなかった。

ベローチェ

「し、シスター?どないした?」

シスター

「か……から……だ……が……」

スミス

「主砲に麻痺弾を仕込みました。これでしたら動くませんね」

再びベローチェとシスターに微笑む。

……ゾクッ……

心なしか微笑みに恐怖を感じたベローチェ達。  
全員身体が硬直してしまった。

それを見届けると無言でDF研究所に向かった。

上空の悲劇は数分前の出来事。

ランとフェアリーはマーリンとムスタングがマチルダとシンを運んでからも警戒を続けた。中の戦闘は聞こえているはずだが、介入すること無く警戒を続けた。

やがて自分達が相手する敵を確認した。

フェアリー

「来ましたわ！」

ラン

「あっ！本当だ！……って、えっ、増えてませんか！！？」

鋼の乙女が来ると思っていた二人の予想に反し（鋼の乙女はいたが）、奇妙な形の戦闘機？みたいな物体を率いて現れた。

ムツ

「ふっ、待たせたな」

フェアリー

「誰ひとり待ってませんわ」

ムツ

「むう……ま、まあ、先程は油断したが、次は本気だ！」

ムツが右腕を上げると側の物体が前に出た。

陣形は謎の物体が五機、鋼の乙女、その背後に五機、更に後方に丸っこい物体だ。

丸っこい物体は後方にあることから支援系だとフェアリーは予測した。

ラン

「だ、大丈夫でしょうか……？」

フェアリー

「ランさん、決して慌てず落ち着いて当たってください」

怖じけづくランに優しく諭すフェアリー。

ムツ

「行けっ！！」

ムツの合図で前方五機が追尾ミサイルを放つ。

ミサイル攻撃に戸惑ったランだがフェアリーが落ち着かせてミサイルを避けさせる。

敵は陣形を保ちながら前進、博物館に近づいてくる。



フェアリーとランは機銃でのみの応戦するも避けられてしまい阻止出来ない。

イギリス軍の援軍がやってくるも追尾ミサイルや誘導ミサイルで撃墜される。

博物館上空間近になり二人はひどく焦り、一心不乱にミサイルを避けて機銃を撃ち込む。

ラン

「も、もお駄目ですううー!!」

フェアリー

「諦めないで！二人が戻るまでは！」

しかしそんな心配も杞憂に終わる。  
敵が進攻を止めた。  
そして敵の鋼の乙女が前に出た。

フェアリー

「な、何をつ…！」

ムツ

「今に分かる！私の奥義を受けるがいい！」

奥義！？そう聞いてすぐ回避行動に移行したが

フッ

二人の間に風が通り過ぎた。

ムツ

「陸式断罪刀 不知火」

聞こえてきた声は後ろ。

ムツ

「我等に挑んだ事を後悔せよ」

刀をしまうと同時に二人は腹から斬撃の衝撃に襲われた。

ラン&フェアリー

「きゃあああああー！！！！！」

敵の狙いは博物館ではない。博物館を護衛する者の排除。二人は力無く地上へと墮ちていった。赤い液体を口から漏らしながら。服は切れていない。内燃機関に直接斬撃を与えた。

ムツの刀は敵の装甲、防御関係無しに斬れる。理由は分からないが、絶対防御不可の攻撃とルル自体も認めた。

彼女に創られたんですが。

博物館内DF研究所。そこには大量の書類、設計図、大型機械、兵器が置かれていた。

スミス

「うわ……………まさにつて感じ」

部屋の乱雑さにも感嘆するも時間がないので直ぐさま作業に作業に取り掛かる。

博物館内はベローチエ達がオロオロしている。シスターが麻痺で動けない。あんな怪物を一体誰が倒せるだろうか。

シスター

「ベ……………ベロー……………チエさ……………ん」

ベローチエ（1号）

「シスター！？大丈夫か？今マチルダ呼びにいったからな〜！！」

シスター

「無理……………です……………間に……………合い……………ません……………。……………それ……………よりも……………  
……………耳を……………」

ベローチエ

「な、なんや？」

ベローチエ全員がシスターに近づきシスターは耳打ちする。

ベローチエ

「ええええ……………！！……………円周率が3.14から3に……………！！……………？」

「アホお……………！！……………どう聞いたらそう聞こえんねん……………！！ゆとりちやうで……………！！」

「で、でもそんなにウチラが足止めできるんか〜？」

（1号）「やるしかないんや！覚悟を決めるでっ！！」

「お、おおー！」

シスターの提案で奮い立つベローチエ達。

ベローチエ

「で、弾はどうするんや？」

「「「あ……」「」」

スミスがDF研究所に入って10分後。スミスは空いた穴から出てきた。

特製の麻痺弾だからまだ大丈夫ね。後はベローチエだけだし、ムツさんに合図して脱出しよう。という楽観的考えは壊された。

ベローチエ

「来たなあ！覚悟しいや！！」

案の定ベローチエが攻撃してきたが、やはり豆鉄砲。無視するのが一番！と思っていた矢先

ガンッ！

今スミスの背中に何かがクリーンヒット。しかも

スミス

「痛ったあ！！」

ベローチエ

「よっしゃあ！効いたで！」

な、何！？何が起きたの！？ベローチエがいきなり強い砲弾を！？  
急な出来事を誰が予測できたか。  
正体を確かめるべく振り返る。

ガンッ！

スミス

「もがあっ！！！？」

今度は顔面に直撃。そのまま後ろに倒れる。

ベローチエ

「うおっ！？今の痛そ〜」

スミス

「むぐぐ……」

スミスは顔面に当たった砲弾を掴んで立ち上がり、それを見た。

スミス

「……………ベローチエ！！！！？」

ベローチエ

「そおい！もう一丁！」

ドンツ！

スミス

「って待ちなさい！あなた達何をS…ごばあ！！？」

今度はスミスの腹部。かなりの衝撃だ。少し吐血した。

ベローチエ

「まだまだあ！！行けえ！我が同志よ！」

スミス

「待てって言うてるでしょうがぁー！！！」

バゴツ！

スミス

「ぶはあっ！！！！」

お気づきだろうか？

ベローチエ達が何の弾を使っているかを。

自分達だ。いわゆる人間大砲ならぬベローチエ大砲。

勿論操作は残った8人。

弾役は？

いるじゃん。周りに38体の気絶したベローチエ達がそこにもあそこにも。

そしてここは帝国戦争博物館。大砲くらいありますよ。

そして何より彼女達は鋼の乙女。それがベローチエ大砲最大の強み！敵は既にボロボロなら十分だ！

というのがシスター案。

そして見事に有効打となった。

スミス

「普通仲間を弾にする！？私達は確かにいろいろ規格外だけど、そんなこと一度もしたことないわよ！！！？」

ベローチエ（1号）

「勝つためには多少の犠牲も必要やで！」

スミス

「又ググ……」

スミスは悔しがった。これが思わぬ弱点だからだ。

ルルが率いる軍勢は強力な分、異世界において様々な規制がある。

世界ごとに違うが、一貫して共通する事項がある。

・相手への攻撃は許可があるのみ。決して相手を破壊しない事。

ルルが使う『破壊』には、死の概念も混じっている。

つまり、相手を殺すなっこと。

これがスミスにとって重い足枷になるとは本人も思ってもいなかった。

ベローチエは「この世の存在」。

飛んでくるベローチエに対処は出来ない。避けるしかない。

しかし、ダメージと疲労が重なっている今、避けるのすら困難だ。

ベローチエ（1号）

「よし！次でトドメ刺すで！」

1号が大砲に入る。

ドンッ！

ベローチエ（1号）

「DFの資料返せえ〜！！！！！！」



スミス

「ぐっ！！！！？」

再びど真ん中に命中。そして浮遊感を感じた。

1号は自分から加速度を上げたようだ。追加されたエネルギーはスミスに全て押しだし、

ガガガガガガッ！

ドゴッ！！

1号と共に押し出されながら壁を破り、博物館正面口から外に押し出された。

1号の運動エネルギーが尽きてスミスの腹部から落下するとスミスも遅れて落下し、

ズン！！

背中から地面に着地。

スミス

「がはっ……………損傷度合78%……………」

ムツの損傷度合63%を越えた。

ベローチエ（1号）

「痛たたっ……………。どや！ウチラの勝ちや！」

スミス

「私はまだ生きてるわ」

ベローチエ（1号）

「でもすぐには動けんやろ？今のうちに資料返して貰うで」

1号がスミスの身体を探る。

しかし、スミスからは紙切れ一つも無い。カメラしかない。

ベローチエ（1号）

「カメラ？なんや、資料を撮っただけか？にしてもなんか機械的なカメラやな」

とカメラを持っていたら、手の内から消えた。

ベローチエ（1号）

「へっ！？き、消えた！？魔法か何かか！？」

スミス

「んな訳ないでしょ…」

戸惑う1号に何気なくツッコむスミス。

1号は傍に鋼の乙女がいることに気づいていない。

ムッ

「鈍いな。話し掛けないと分からないか？」

ベローチエ（1号）

「ほえ？…うわあ！！？あ、新手か！？ってウチが持ってたカメラ持ってる！な、なな、何でや！」

ムッ

「とことん鈍い」

袴を着て武士の出で立ちを彷彿させる旧レイ似の鋼の乙女。

ロンドン市内の戦闘は終結に近づいてきた。

### 第3章4話 帝国戦争博物館決戦（後書き）

追記：

- ・シスターの麻痺が治りました。
- ・シンとマチルダの修理が完了しました。
- ・10分後にマーリン、ムスタングと共に到着予定。
- ・砲弾にされたベローチエが目を覚ましました。

ナナ

「……だつてさ」

ただ単に次回に繋ぐ（使う）為の報告です。ありがとうございます。ありがとうございました。

ナナ

「で、ボク達の出番まだ？」

イギリスが終われば一話だけおまけ的な話を出してから出します。

ナナ

「へっ？おまけ？何それ？」

戦闘に関係ないほのぼの系の話を検討したいと。  
あと公式設定と考えた勝手な設定を目立たせる目的もある。

ナナ

「設定を目立たせる？例えば？」

ナナ君の影薄さがより一段と磨きがかかるとか！

ナナ

「そんな設定を目立たせるなあ!!」

ぐぼお!!お…重い……。そ…それは冗談ですが、まあ、頑張ります…。

ナナ

「物凄く不安なんですけど……」

第3章5話 イギリス逃亡阻止戦（前書き）

バルムンクがチート並の威力に…  
やりすぎたな。後悔はしてないが。

### 第3章5話 イギリス逃亡阻止戦

ベローチエ（1号）

「新手の鋼の乙女やな！」

ムツ

「口に出す必要は無い。……しかしそれにしても……」

帝国戦争博物館正面口前には仰向けに倒れるスミス、そのスミスをぶつ飛ばしたベローチエ（1号）、そしてベローチエからカメラを奪ったムツ。

ムツ

「まさか貴女が負けるとは予想だにしませんでした」

ベローチエ（1号）

「だろうな。なんせウチが倒したからな！」

ムツ

「！！？、ほ…、本当ですか！？」

スミス

「ええ……情けながら……」

流石にこれには驚愕した。なんせヘタレ代表とも言えるベローチエに倒されたのだから。厳密に言えばトドメを刺したが正しいが。当の本人は正義のヒーロー的なノリだった。

ベローチエ（1号）

「やっぱりウチラは力を合わせれば最強や！初めてウチラだけで倒したからなあ！」

スミス

「前半シスターに頼りっぱなしだったくせに……」

ベローチエ（1号）

「でもトドメ刺したのは事実やで〜」

スミス

「まだそう思ってるの？私はまだ立てるわよ」

実際にはムツの協力あってだがそれでもしっかり立つことはできた。でも限界なのか足ががくがく震えている。

ムツ

「任務は完了しましたよね？」

スミス

「ええ、そのカメラに」

ムツ

「では脱出を『待つて下さい！』…むっ？」

二人が正面口に顔を向けるとシスター、ベローチエ×12、例のベローチエ大砲もあった。

シスター

「絶対に逃がしません！」

ムツ

「諦める。私達には援軍が来てる」

そう言うと上空に待機していたR型戦闘機11機が降下する。

シスター

「あ、あれは？」

ムツ

「私達の爆撃機だ」

ベローチエ



「ほえ、あんな変な形のが爆撃機なんや」

「そんな流暢に言うところ場合ちゃうねん！」

「そつや！爆撃機やで！ウチラ陸戦やから相手が有利や！」

「ええ、それは氣い付かへんかった！」

「いや待てえ！ウチラにはこれがあるんやで！」

「そつや！鋼の乙女も追い込めたんだからきつと出来るはずや！」

ムツ

「……………バルムンク試作型、発射」

ベローチエ達のやり取りを無視して冷酷に指示を出した。一組のステイヤーが大型ミサイルのバルムンク試作型を発射した。

バルムンク試作型が着弾すると同時に猛烈な爆風がシスターとベローチエ達を襲う。

シスター

「うっ!？」

ベローチエ

「あわあ、ほなさいなら、！」

「ああ、何人が飛ばさ、うわあ、！」

しかしスミスとムツも例外では無かった。なぜなら着弾距離が近過ぎたからだ。

スミス

「馬鹿っ！私もう無、きゃあああー！……！」

ムツ

「しまっ、ぐわあ……！」

やっと博物館を視野に入れたマーリンとムスタングはバルムンク試作型による凄まじい爆発を目撃した。爆発によって生み出された炎の光はその威力を語っていた。

マーリン

「む、ムスタングさん！！あれ！！」

ムスタング

「かなり大きい！まさか敵がもう！」

二人は全速力で現場に向かった。

博物館正面口前は焦土と化していた。

黒く焦げた地面に崩壊したコンクリートの壁。正面口も完全に崩れ落ち、瓦礫と化する。

瓦礫を押し分けて最初に出て来たのはシスターだ。続いてベローチエ1号。どちらとも服がボロボロだ。ベローチエ1号にいたっては上半身は下着のみだ。

ベローチエ（1号）

「うわあ、めっちゃ恥ずかしいわ」

シスター

「大丈夫ですか？かなりの威力でしたから」

ベローチエ1号は顔を真つ赤にしながら周りの仲間を捜すが、僅か数人しか確認できず後は瓦礫の下に埋もれているようだ。

ベローチエ（1号）

「ああ、どうしよう。シスター、何か着る物無いか？」

シスター

「これじゃあどうしようもないですね…」

と、シスターはふと気が付いた。

これだけの威力でありながら敵は着弾点からの距離が短い…。だとしたら私達同様瓦礫に埋もれているのでは？

直ぐさま辺りを警戒し始める。

ベローチエ（1号）

「うおおい！ウチを無視しないでくれや」（泣）

シスター

「静かに！近くに敵がいるはずですよ！」

シスターの真剣な表情を見て押し黙り、同様に周りを警戒する。

が、上空からの音に遮られる。マーリンとムスタングだ。

マーリン

「シスターさん！これは一体……？」

ムスタング

「ベローチエさんも大丈夫ですか？」

シスター

「マーリンさん、ムスタングさん、敵の援軍です。」

マーリン

「援軍ですか？」

シスター

「はい、爆撃機なのですが……奇妙な形をして……何か見ませんでしたか？」

ムスタング

「いえ。着いた時まで何も見てませんが」

となれば先程の爆発でもろとも破壊されただろう。

と思っていた矢先、

ベローチエ（1号）

「ああー！さっきの爆撃機！」

1号の指差した先にR型戦闘機1機がしっかり健在していた。

スミスはPOWアーマーの足？の部分に引っ掛ける形で吊されていた。

ムツは当然飛んでいる。

ムスタング

「やはり戻ってきましたか」

ムツ

「仲間が危なかつたからな。今回は先程の様にはいかんぞ」

有無を言わずムスタングは三連ミサイル砲を、ムツは不知火を抜いて構える。

ベローチエ（1号）

「ウチラが応援するで、皆頑張つてな」

空中戦となれば必然的に援護も出来ないので二人を応援し始める。

と、POWアーマーとステイヤー五機がその場でターン、ロンドンタワーブリッジの方に撤退を始めた。

いち早く気付いたシスターは二人に呼びかけた。

シスター

「いけません！あの戦車タイプの鋼の乙女はDFの情報を持っています！」

マーリン

「では私が…」

と撤退するステイヤーを追おうとするとムツが機銃で牽制する。

ムツ

「おっと、ここから先には行かせないぞ。R型戦闘機は貴重な戦力だからな」

ムスタング

「あなたこそ」

牽制をする為マーリンに向いていたムツに今度はムスタングが機銃を撃つ。だが簡単に避けられる。

ムツ

「だから言ったる。先程の様にはならないって」

ムスタング

「そのようですね。ならば押し通りましょう」

ムツ

「らしくないな。優雅に上品に決めるんじゃないのか？」

ムスタング

「今は一刻も争う事態ですので」

ムスタングが三連ミサイル砲を撃つ。それを阻止すべくステイヤーが追尾ミサイルを放ち相殺する。

続けざまに追尾ミサイルを放つが、二人にとってその速度は遅く感じた。もはやビルマ戦線で「はやぶさ」と対峙した二人は以降スピード重視を軸として総合的に訓練してきた。そのまま機銃や機関砲で迎撃する。

攻撃が止むとすかさず反撃に移る二人だがステイヤーのバリア弾によって攻撃全てが防がれる。

いきなり光の壁みたいなもの放ちそれが攻撃を防ぐと二人は驚愕した。

マーリン

「い、今のは？」

ムスタング

「私もよく分かりませんが……、防御の一種のようですね」

そう解釈して放たれた誘導ミサイルをすぐに回避する。

マーリン

「ならばこれで仕留めます！シューティングスター！」

マーリンが銃口にエネルギーを収縮させて銃弾を放とうとする。狙いはステイヤーだ。

ムツ

「させるか！」

阻止すべくムツが単身突撃したがムスタングがマーリンの背後からムツに機銃を撃った。

ただ真つ直ぐ突撃したムツは一瞬反応が遅れた。

ムツ

「ぐっ…」

ムツは避けるべくすぐ軌道を変えて、再びマーリンに攻撃しようとしたが遅かった。

収縮されたエネルギー弾が放たれた。すぐステイヤーはバリア弾を放ち阻止しようとする。

しかしバリア弾といえ鋼の乙女の必殺技。バリア弾が接触した時は受け止めたが徐々に軋み、歪み、5秒後バリア弾は粉碎された。突破してなお勢いは止まらずステイヤー三機を炎に包みこんだ。

ベローチエ（1号）

「いよっしゃあああ〜！さすがイギリスを代表する鋼の乙女、マーリンや〜！」

シスター

「その調子ですー！」

マーリンの活躍に陸戦組は嬉々とするが、撤退する部隊とは徐々に離れている。

ムツはいまだ構えを崩さず二人に相對する。

ムツ

「データ以上か……。だが誰も通さん」

ムスタング

「データで読み取るのは浅はかですね。鋼の乙女でデータ以上の実力がある者はいくらでも存在しますから」

ムツ

「そうだな。同じ事を將軍から言われた」

お互い機銃を向けて撃ち込む。この場においてスピードと回避力はムツが二人を凌駕している。

それでも二人は攻撃の手を緩めず果敢に突破を試みる。

やはりイギリス軍。その戦い方はいまだ伝統スタイルであった。

イギリス軍は相手が自軍より強い軍だと分かると素直に認め、なお挑み続ける。

相手は強い。だがそれを打ち破ったイギリス軍は更に強い。

こう意識させる事で自信を生み出し高い士気を維持した。そして全力でぶつかる事が出来た。

相手は強いのなら手加減も躊躇も要らない。

今の二人は本気でムツを撃破する事しか頭になかった。そしてムスタングにとって自身の力を最大限に発揮するチャンスでもあった。

ムスタングは連合軍の切り札として開発された鋼の乙女の一人であ



る。比類無き強さにフェアリーを教師として知識を蓄え、反面心優しく騎士道を思わせる性格に連合軍司令官から絶大な信頼を得たまさに最強の鋼の乙女であった。

しかし、そんなムスタングにも悩みはあった。

今まで全力を出し切った戦いをしたことが無いという事だ。

ビルマ戦線でももはや限界だという境地にまでは至らなかった。騎士道を貫く事で相手に合わせた戦いをする為、自分の力を抑えなければならぬ。

。心優しい故全力を出せない事に何度も板挟みしてきた。

しかし今の相手は確実に格上。ならば全力を出しても良いだろう。その心に迷いは一つも無かった。

ムスタング

「全力で！！参らしていただきます！！」

もはやムツとムスタングの一騎打ちと思っていたマーリンだがそれでも相手はマーリンを足止めする。

マーリンはムスタングの変化に薄々気付いていた。だから足手まといになる前に目の前の爆撃機を撃破しようと切り込むがムツに足止めされてなかなか照準が定まらなかった。

一方ムツもムスタングの戦闘意欲とも言うのかその気迫は感じ取れた。

ムツは本来スミスのサポートとして欧州に割り当てられた。撤退さえ成功すれば自分の任務は完了だ。

だが、彼女も鋼の乙女。目の前の敵の気迫が上がる中その闘争心が少しずつ燃え始めていた。

ムツ

「そついえば名前を言ってなかった。要塞島軍第4級戦闘機、もとい六式戦闘機ムツだ」

ムスタング

「P-51のムスタングです」

ムツ

「覚えておこう」

ムスタング

「私もです。いきます!!」

ムツ

「来い!!受けて立つ!!」

直ぐさま三連ミサイル砲を放ちムツは軽々と避けるが、避けた先に既にムスタングが機関砲を構えていた。

持ち前の回避力で攻撃を乗り切り反撃に機銃を撃つがムスタングも負けず劣らず避ける。

お互い壮絶なドッグファイトを続けた。

先に勝負に出たのはムツ。刀を構え直した。長期戦だと向こうにも分があると思えば必殺技でカタを付けようとした。

ムツ

「陸式断罪刀 不知火い!!」

自分の持つ最大速度で一気に間を詰めてムスタングの身体へ横に振り。

ランやフェアリーですら視認出来ないスピードの1.5倍での一閃だった。

だがムツは直感した。

- 空振り -

ムスタングはムツを視認して紙一重でかわしたのだ。

ムスタング

「あなたが間合いを詰めるのを待っていました…」

ムツのすぐ傍、三連ミサイル砲を構えたムスタングがムツにそつと一言。

零距离に等しい間合い。

三連ミサイル砲が火を噴いた。

マーリンは既にステイヤー二機を撃破していた。ムスタングがムツの気を引いたおかげで一気にステイヤーに切り込め、必殺技「スプレッドファイバー」で撃破した。

そしてムスタングの善戦を見る事無く撤退した部隊を追い始めた。

ムツ

(くっ……油断した……。だが敗因は違う……。この鋼の乙女……。本気を出したって訳か……)

零距离からの三連ミサイル砲を直撃したムツはモデルにした乙女の特性上軽装甲だ。

ゆっくり降下していった。

ベローチエ(1号)

「勝あつたああーっ！っ！……！」

シスター

「さすがマーリン家の……！」

ベローチエ

「うおー！！さすがムスタングや〜！」

「ムスタング最強や〜！」

「むっちゃカツコイヤン！」

「アカン、格好良すぎるわ〜！」

地上ではいつの間にか復活したベローチエ達がムスタングを称賛した。

しかし、ムツは地面に墜落する事無く高度10mぐらいで保った。まだ意識は生きてるようだ。

と、ムツが何かを構えていた。見た目がバズーカのような物だ。

ムツ

「勝負にはっ、まだ負けてないっ！」

ムスタングにとって最後の悪あがきをするつもりだと思った。

ムスタング

「諦めが悪いですね。ならば御望み通り負けを肯定させましょう」

近づくムスタングだがその悪あがきは全員の予想を超えた。

バズーカから放たれたのは一発の大型ミサイル。速度は先程の爆撃機が放ったミサイルより若干遅い。

放ったと同時にムツは足のジェットブースターを起動させその場から離れた。

ムスタング

「……そういえばそれを使えたんですね」

逃げるムツを追撃すべく再び全力を出そうとした時だった。

背中に強烈な衝撃が走る。

ムスタング

「うぐっ！！？」

衝撃を真に受けたムスタングは地面に叩きつけられた。

ムスタング

「がはっ…！！」

腹から思い切り地面に叩きつけられ、口から吐血した。

叩きつけられる前、一瞬だけ後ろを振り返った時、ここに向かう途中で見たのと同じ大爆発による炎の光を見た。

放ったミサイルはバルムンク。試作型ではない。

故に一発でも先程と同じ光景を造るのに十分だった。

爆発が収まる時には既に遅かった。ムツには逃げられた。やはり敵は普通で無かった事を再認識し、そのまま昏睡した。

ようやくマチルダとシンが陸軍を引き連れて博物館に到着するも一歩遅かった。

まず真っ先に地面に伏して倒れているムスタングを見つけた。ドレスはかなり破れ、所々肌が露出し背中には火傷があった。口からも赤い液体が線を引いていた。

シン

「ムスタングさん！！」

マチルダ

「ムスタング！？大丈夫！？」

しかし返事は無い。マチルダがムスタングに手を触れる。

マチルダ

「……………まだ生きてますわ…。救護班！！今すぐムスタングをつ  
！」

すぐに鋼の乙女専属の救護班（という名の整備班）が駆け寄り、ムスタングをトラックに載せた。

マチルダとシンは博物館に歩み寄るが、博物館は原形を留めていなかった。

バルムンク試作型で正面口を破壊し、ムツの放ったバルムンクで博物館の三分の二を瓦礫に変えた。

その光景に二人は慄然した。

シスター

「あつ…、マチルダさんにシンさん」

ベローチェ（1号）

「おお〜い、マチルダ〜！」

見ると瓦礫の上からこちらに向かってくるシスターとベローチェ達  
がいた。

マチルダ

「シスター、ベローチェ！無事に…！という訳でも無いわね…！」

全員服がボロボロなのを見ればよほどの激戦だったのかが分かった。

シスター

「すみません……。耐えたのですが、DF研究所に……」

マチルダ

「私達のミスですわ。敵を過小評価した事が何よりも……。それよりここでは何が？」

シスターと1号は博物館内の戦闘からバルムンクによる最後の攻撃まで詳細に語った。

マチルダ

「要塞島軍……。R型戦闘機……」

シスター

「そうです。アメリカの鋼の乙女なら何か知っているのでは？」

マチルダ

「まあ、この惨事は向こうにも伝えるつもりですわ。再び私達が手を組む事態になりそうね……」

シン

「こうなったらまたゆっくり紅茶が楽しめなくなりますね」

マチルダ

「仕方ありませんわ。それほど敵は強大ですから」

将来あの軍と戦う未来を想定し、イギリス軍は再び奮起する決意をした。

マーリンにもはや勝ち目は無くなった。自身のメイド服もボロボロだ。目の前にはロンドンタワーブリッジ。そして立ちほだかるR型



戦闘機ステイヤー五機と同じくボロボロな状態のムツ。

先の大爆発から僅か10秒後、彼女はマーリンの前に現れた。

マーリン

「ムスタングさん……」

そう言うと一目散にムツ達から離れていった。多分仲間を助けにいったのだろう。

ムツ

「終わったか……」

ムツも糸が切れたように降下した。スミスはしっかりムツを受け止めた。

スミス

「お疲れ」

ムツ

「負けてしまったがな」

スミス

「次勝てばいいんです。まだこの世界にいられるんだから。それまで休みなさい」

ムツ

「……それもそうですね……あなたも……休んでくださいよ……」

こうしてイギリスロンドン市内、帝国戦争博物館の戦いは要塞島軍の辛勝で幕を閉じた。



### 第3章5話 イギリス逃亡阻止戦（後書き）

前話の後書き通り次は少し離れます。

ずばり「鋼の乙女秘密図鑑」！！

なにそれ？と思う方の為に解説。

戦闘以外での鋼の乙女の日常に密着した、どの司令官も持つ至福な図鑑である。

所謂番外編みたいなおまけです。

という訳で今回は読者に次の中から選んでいただきたいと思います。

今回は日本海軍の三人です。

？レイ

戦後も真面目に訓練するレイ。訓練終了後、ふとメイド服の事を思い出した。

？ナナ

戦後も相変わらず影が薄いことを気にするナナ。今度は特別遠征艦隊を巻き込んだ大胆な行動を画策する。

？てんざん

十分な実力がありながらなかなか発揮する事が出来ずに足を引く張る事を気にしていたてんざん。今度はいちこやゆきかぜに相談しようとするが…。

以上の三人です。番号で構いません。

期待に沿えられるよう頑張りますのでよろしくお願いします！

第3章 5・5話 鋼の乙女秘密函鑑ver・レイ(前書き)

遅れました。

そして本編より長い。なぜだ……

ある日の早朝。

日本の某海軍基地。

まだ太陽が山際にある時間帯に一人の鋼の乙女が真刀で素振りをしていた。

日本海軍の代表とも言えるエース、レイだ。

レイ

「ハッ！セイツ！ヤアッ！」

今回は何処から持ってきたのか、テーブルに置いた空き缶を斬り捨てていた。

彼女がこのような「物」を使って訓練するようになったのはやはり今が戦後だからだろう。

戦後とはいえいつ出勤が掛かるか分からない。また鋼の乙女は戦闘以外に自然災害による被害への救援だったりと現自衛隊のような活動も取り入れ始めた。

これも司令官の案だ。

全員がこの案に賛成したのはいいが、その後の司令官の欣喜雀躍しながらの笑みには全員引いた。

とはいえ現時点で災害救援で出動した試しは無い。逆に朝鮮戦争など戦争関係で出撃していた。

そして彼女がいつも以上に訓練に励む根本こそ朝鮮戦争だ。

自分達の力不足が多く、多くの死を招いた。彼女はこの上ない責任感を誰よりも感じていた。あかぎによつて宥められたがやはり完全に捨てきれなかった。

故、物を使うのは目標（敵）に対する命中率を上げる為。

事実、中朝軍のMiG15、要塞島軍のR型戦闘機を撃破したがそれもほんのわずか。戦時中の撃墜数と比べるなら話にならないが、やはり撃墜数が落ちている事を認めざるを得なかった。

その思いが今の彼女……レイを動かしていた。

訓練を終え、自室へと戻ったレイは一角に設けられた三畳半の広さがある和室に仰向けに寝転がる。

普段からこうしているのではなく、たまたまこうしたい気分だった。

窓の外からは重金属を切断したり溶接したりといった音に混じって男性の野太い怒声が微かに聞こえた。

また新米整備士が失敗して怒られてるのか…と思った。この整備士

長、かなり古参だからレイも面識はある。

レイ達の使う宿舎には隣接した兵器工場がある。鋼の乙女も兵器であるうえ、定期的なメンテナンスがすぐ出来るように配慮した結果だ。

そのため窓ガラスは全て防音仕様。戦後になってアメリカの技術者が来て新しい物に取り替えたのでさらに遮音性は高くなったが、工場から伝わる微小な振動は今だ部屋に伝わる。全員もう慣れていくが…。

レイは仰向けのまま目を閉じ、今まで自分が歩んできた日々を思い出した。

まずは日中戦争突入時。

初めての实战に死への不安に緊張していたが整備士長、やまとに励まされて緊張が解けた。言われた言葉を胸に秘めて出撃した。

初戦は呆気なかった。出撃した中国機はすべて主翼斬で斬り捨てた。

もつと強い機体と戦いたいと思っていたな。

思いが伝わったのか義勇軍として米機がやってきた。その時の性能の高さ、アメリカの優秀さを感じたのは今でも覚えている。

そういえばあかぎがジョークも覚えてねとか言ってたけど戦闘への欲求が強かったから何も覚えなかったがな。



戦闘後に帰還した時に当時の私の冷徹な心を変えた。私のただ皇国の為に戦うだけの兵器だという概念を変えたのだ。

「俺達は皇国の為に造られた兵器だ。でも戦争じゃ傍にいた仲間が明日死ぬかもしれない。だったらその短い間で家族ごっこしたっていいんじゃないか？」

やまとの言葉をきっかけに私は姉妹の繋がりを意識し始めた。

鹿児島演習を経て真珠湾攻撃。

私は宿敵クレアと初めて出会い、一騎打ちをした。

その時のクレア達アメリカの考えを知り、己の戦争の考えの甘さに愕然とした。作戦終了後にあかぎに打ち明けている最中に心が折れそうになったが、あかぎに抱擁されて落ち着いた。

そういえば作戦自体はナナが全てやって私はクレアを抑えていただけだった。聞いたところ私にもクレアにも無視され続けた事では「スーパー 八つ当たりタイム」状態になり真珠湾基地を壊滅させた。ようだ。しかしあれだけ広大な基地を壊滅させたナナを評価した者は少数だった。

あつ、で、でも私は評価してるぞ？

慰めとかじゃなくて………純粹に。

えっ？友人だから？

いやだからそうじゃなくて………ただ純粹に………うん………。

今私誰と話したんだろう？  
急に頭に浮かんだというか……。

まあいい。えっと、それからウエーク島、ポートモレスビー侵略の  
MO作戦の援護、セイロン島での戦いがあって……。

ここで目を開けて身体を起こした。

(セイロン島……？確かその時私がソードフィッシュ(フェアリー)  
のメイド服に目を奪われて追いかけて回したんだよね……。  
そ、そういえば英国艦隊を撃退して帰路にあかぎと約束していたよ  
うな……。

ハッ！わ、私は一体何を考えている！確かにあの時はあかぎだった  
から許されるわけであって実際はかなりの失態で……って……  
今は戦後……。

いやいやいやいや！か、仮にあかぎならいつもの事になるからまだ  
しも、ナナやてんざんとか他の皆に見られたら……)

???

「……ん」

(…………でもあんなにかわいい服なんだ！自分の着ている袴よりも若干な！やっぱり私だって女だ！一度でもいいから着てみたい！)

???

「……ちゃん？いるの？」

(でもメイド服とかは特別仕様だから今の日本ではそう簡単には手に入らないが……！いや、待てよ。あかぎなら……)

???

「?……おかしいわ？」

(いやっ、駄目だ！今更過去に言った事をお願い出来る訳がないし、第一メイド服の為にそんなリスクの高い手段を選ぶ訳には……！)

546

ガチャ

???

「レイちゃん？」

レイ

「うひゃああ……!!!!!!?」

いきなり扉が開いたので驚いて飛びそうに、いや実際飛んで天井に頭をぶつけた。座ったまま飛んだのはある意味奇跡だ。

レイ

「痛っ!!!!」

???

「びっくりした〜。どうしたのレイちゃん」

レイ

「ああ、いや、その……いきなり入ってきたから……」

頭のぶつけた部分をさすりながら入って来た相手を確認した。

????

「気をつけてよ、レイちゃん。でも何回か呼びかけたのよ？」

レイ

「えっ？す、すまなかった。考え事をしていたからな」  
????

「まったく。もしレイちゃんに何かあったらあかぎに何て言われるか……」

レイ

「悪かった、いちこ」

いちこは不機嫌に顔を膨らます。

レイはいちこが何か小包を持っている事に気付く。

レイ

「いちこ、その小包は？」

いちこ

「あ、これですか？これはあかぎがレイちゃんに渡してきてっ  
ちこさんに預けてたのです」

レイ

「私にか？」

レイはいちこから小包を受け取り、早速中身を確認すべく開けてみる  
と……

レイ

(服……だよな?もしかして……)

中身を取り出すと、黒いワンピースにフリルの付いた白いエプロンドレス、白いフリルの付いたカチューシャ。

紛れもなくメイド服だった。

いちこ

「そういえば、あかぎは北海道の復興作業の時にルーちゃんから預かってたって言ってたわ」

ルーちゃん。ドイツ軍のルーデルか。感謝する。

そしてあかぎ。約束覚えていてありがとう。

……のはいいがさっきからいちこがこちらをチラチラ見ているのがどうも気になる……。

レイ

「あの〜、もしかして……いや、もしかすると……」  
いちこ

「着替えてね」(満面の笑みで)

レイ

「やっぱりか……」  
いちこ

「でも障子は閉めるから安心して」

そそくさと部屋と和室を仕切る障子を閉める。いちこもまたあかぎに似ている。とはいえ姉の命令だ。従うしかない。

仕方なく着ている袴と巫女服を脱いでメイド服に着替える。  
というものの外国の服、ましてや英国の服（当時は）。当然着方が  
分からないので、フェアリーのメイド服みたいなイメージをしながら  
試行錯誤で着る。

10分後

いちこ

「レイちゃん、着替え終わった？」

レイ

「な、何とかな……」

いちこ

「じゃあ開けるね」

レイ

「あ、やっぱりちょっと待て！後1分！」

いちこ

「もう遅いのです」

スパアン！

勢いよく障子を開けるいちこ。

障子を開けると、少し着崩れがあるが形はちゃんと整ったメイド服  
姿のレイ。

本人は顔を赤くしていた。恥ずかしいだけではなく、憧れのメイド

服を着た事に若干興奮気味でもあった。

が、そんな事など気にしない。勿論いちこの取る行動は一つ。

いちこ

「きゃあああ~~~~~!!!!!!かあわぁいいい~~~~~!!!!!!」

いちこの可愛さメーターがゲージを振り切りオーバー、暴走したいちこがレイに飛びついた。

レイ

「やっぱりこうな」むぎゅっ!!」

勢い付けすぎて押し倒され、豊かな胸が容赦無くレイの顔を埋め尽くす。

いちこ

「可愛い!可愛い!可愛い過ぎる~~~~!!!!!!ゆきかぜちゃんの可愛さを越えて超可愛いです~~~~!!!!!!」

レイ

「むぐぐ~~~~!!!!く、苦しい!胸を退かして……。後、ゆきかぜに失礼だあ!」

心の中でしっかりツッコむ。だがいくらもがいても無駄なのは目に見えていた。レイは2分間いちこの強烈な抱擁を我慢し続けた。

ようやく解放されたレイはぐったりと仰向けになっていた。

いちこ

「危なかったです。後少し抱き着いていたらレイちゃんが窒息するところなのです……」

レイ

「ハア……、ハア……、ま、毎回……思うが……、身長差を……考えて……抱き着いてくれ……」

いちこ

「でもまだ抱き着き足りません」

レイ

「やめてくれえ……。流石に……。私も……。死ぬ……」

戦場で何度も死線をくぐり抜けたが、花畑までも見えたのは初めてだった。三途の川がちらつと見えたような……。

いちこ

「あっ、ここはこつするのですよ」

いちこがレイのメイド服を直す。

レイ

「そつか……すまない」

いちこ

「このくらいで一々謝ってたらキリが無いわよ」

いちこが手を差し延べ、それを掴んで立ち上がる。

レイ

「ぶっつ……まあ、いつもの事だから仕方ないが、あまりやり過ぎ



るなよ。後、鼻血出てる」

いちこ

「えっ、本当ですか！？……レイちゃんのアマリの可愛さに耐えきれなかったからですか？」

レイ

「私に聞くな。ほら」

いちこが鼻血を確認している間にハンカチをいちこに差し出す。

いちこ

「あっ、ありがとうございます。レイちゃんは相変わらず優しいです」

いちこはレイからハンカチを受け取った。瞬間、レイはハンカチを渡した事を後悔した。

なぜならいちこはレイのハンカチをポケットに入れると自分のハンカチを取り出して鼻血を拭いた。

レイ

「い、いちこ……？」

いちこ

「えっ？だってこのハンカチはレイちゃんからのプレゼントでしょ？あかぎが鼻血を出した時にレイちゃんとナナちゃんからハンカチをプレゼントされたから部屋に飾ったわって言ってたから」

レイ

「断じて違う！！プレゼントではなく奪われたんだ！！善意で渡したというのに、あかぎがあかぎならいちこもいちこだ！返せ！！私

のハンカチ!!」

いちこ

「もう、駄目ですよ、そんなに怒っちゃあ」

レイ

「怒らせたのは誰だ！斬られなくては今すぐ返せ！」

いちこ

「ちょ、ちょっとレイちゃん、落ち着いて？ね？今暴れたらせつかくのメイド服が破けちゃうわ」

レイ

「うっ……」

本心を突いた一言はかなり効いた。せつかく貰ったメイド服。傷付けたくない。そのまま意気消沈し、

レイ

「うっ……同じ手でまたハンカチを取られるとは……不覚……」

完全にorzの姿勢になった。

結局ハンカチは返される事は無かった。

レイ

「で、もう十分だろう？着替えても「駄目」まだ皆に見せてないわよう」「み、皆!!!?そ、それだけは勘弁を……!!」

あからさまに皆の知る真面目（で少し天然）なレイとはイメージが掛け離れた乙女チックなレイのメイド服姿。何を言われるか分から

ない。本当にそれだけは回避したい。

しかし現実是非情である。

ガチャ

ナナ

「やつほー 暇だから遊びに……来た……よ……?……何その格好」  
いちこ

「あらあら、ナナちゃんグッドタイミング」  
レイ

「ナナ!? おま、ノックぐらいはしろよ!」  
ナナ

「というより、レイってそんな趣味が?」  
レイ

「違う!! これは趣味じゃなくていちこが無理矢理」  
いちこ

「でも嬉しかったんだよね」  
レイ

「うおい!! いちこ!!」  
ナナ

「……………」

顔を真っ赤にして必死に弁解するレイを冷ややかな眼差しで見続けるナナだった。

いちこ

「それで、ナナちゃんは どうして来たの？」

ナナ

「えっと、あかぎがちょっとレイの部屋に遊びに行つてほしいって言つてたから来ただけだよ？ま、実際ボクも暇だったしいいもの見れたよ」

レイ

「う、うう〜…」

和室の仕切りとなつてゐる段差に腰掛け、赤面しながら人差し指でツンツンするレイ。お前はチハか。

ナナ

「でもいいじゃん。夢が叶つたからいちこ」

「夢だつたんですか？」

ナナ

「だつてレイとあかぎでセイロン島に向かう途中で話してたじゃん。外国の服に興味あるって」

レイ

「お、覚えていたのか！？」

ナナ

「勿論だよ。皇国一筋のレイがまさかの女の子らしい発言。忘れる方が難しいよ。それにドイツ軍の軍服を貰つた時嬉しそうにほお擦る「ストオーツプウ！それ以上は言つな！」事実じゃん。顔真っ赤にしちやつて〜、可〜愛い」

ナナもナナでこういう状態のレイをおちよくるのは楽しい。後で命

を懸けた壮絶な全力追いかけてっこが待ち受けているが、なぜかそのような雰囲気を出していないレイであった。

ナナ

「どうしたの、恥ずかしくて追いかけれないかな、キャハハッ」

レイ

「う、うるさい……」

ナナ

「ほらほら、悔しかったらここまでおいで」

レイ

「くっ………!!」

しかし、追いかけるどころか立ち上がるつもりもないレイ。流石にナナも何か変に思う。

ナナ

「どうしたの？いつもみたいに主翼斬振り回しながら追いかけて回すの……」

と少しずつレイに近付く。しかしそれは誤りだった。

ほんの一瞬、レイがナナの顔面にジェット戦闘機さながらの右ストリートを打ち込んだ。

ナナ

「ブツ！……!？」

顔を殴られて後ろにのけ反りながらダウンした。上半身を起こすと殴られた部分をさすりながら怒りをあらわにした。

ナナ

「痛った〜い！〜！な、何するんだよ！〜！」

レイ

「自業自得だ」

ナナ

「な、なんだって！〜！」

いちこ

「ちよつとちよつと！レイちゃん！ナナちゃん！」

直ぐさまいちこはナナを抱擁する。

いちこ

「ナナちゃん、大丈夫？」

ナナ

「かなり痛い〜。鼻血まで出てる！ちよつとレイ！〜！」

レイ

「お前が余計な事を言わなければこうしなかった！〜！」

いちこ

「レイちゃん！いちこさんも今のは許せないですよ！〜！」

レイ

「分かつてる。今のは謝ろう。でもな、元はナナのせいでもあるんだからな！〜！」

ナナ

「な、何それ！その言い掛かりは！ボクだけ悪い言い方してさ！〜！」

レイ

「事実だ」

ナナ

「ふざけないでよ！もういい！レイの馬鹿あ！」「いちこ」

「な、ナナちゃん落ち着いて……」

ナナ

「もうどうなったって知らない！皆に言い触らすよ！」

ナナは強引にいちこから離れ部屋を出ようとした。

が、レイに止められる。

レイ

「そ、それだけはやめてくれ！」

ナナ

「ちよつとレイ！放してよ！また殴るつもりでしょ！」

レイ

「ち、違う！そんなつもりは無い！」

ナナ

「じゃあ放してよ！」

レイ

「駄目だ！とにかく言い触らすのはやめてくれ！」

ナナ

「ボクを殴ったくせにボクには何もするなって？都合が良すぎるよ！！ボクは被害者だよ！！」

レイ

「頼む！全て私が悪かった！お前は何も悪くない！謝るから、な！」

レイの束縛から逃れようと暴れるナナ。だが毎日訓練を怠らず続けているレイ。簡単には逃れられないのは分かっているが精一杯抵抗していた。

ナナ

「放せ、このっ！」

レイ

「うっ！」

ナナの肘がボディに入る。それでもレイはナナを離さなかった。続けざまに顔に手の甲が当たる。足を踏まれる。爪で引っかく。脛を何度も足蹴りされる。それでもレイは離さなかった。

いちこ

「二人とも！喧嘩しないでください！」

しかしいちこの言葉など二人には聞こえなかった。

ようやくナナが抵抗を弱めていき、徐々に沈静していく。二人とも息が上がっていた。レイは所々皮膚に引っかき傷がある。

ナナ

「ハア……ハア……ど、どうして止めるのさ……」

レイ

「ゼエ……だ、駄目なものは……駄目だ……ハア……ハア……」

ナナ

「理由になってないよ……」

レイ

「他の者に……まだ見られなくなかったんだ……」

ナナ

「今更……見られてもいいじゃんか……」

レイ

「……」



事態は収束したが、その後いちこに内容はしっかりしているのに何処か真面目でない説教をされたのは言うまでもない。

ナナ

「で、結局何が嫌な訳なの？」

レイ

「まあ……その……み、皆に……見られると……た、耐えきれなく……なりそうで……」

いちこ

「もういいじゃないですか。どうせあかぎが広めると思っし」

レイ

「あっ……」

ナナ

「有り得る……。あかぎなら有り得る。……じゃあボクは結局殴られ損か……」

レイ

「……、ほ、本当に悪かった!」

即座に土下座する。何気に扉の前のポジションで。ナナはあれだけ抵抗したというのにメイド服は傷付かなかった事を不思議に思っていた。

ナナ

「でもなんで破れなかったんだろう?」

するといちこが得意げに答えた。

いちこ

「それはですね、そのメイド服も鋼の乙女専用だからですよ。私達と同じ巫女服や袴同様に戦闘で生じる深いダメージじゃないと破れないのです」

レイ

「はあ！？なぜ言わなかった！」

いちこ

「だって、レイちゃんが今にも主翼斬を抜いて襲いそうだったもの」

ナナ

「レイ？君は一体何をしようとしてたんだい？」

レイ

「いや、あれは……」

と言いかけて止めた。いちこが可哀相になる。あれはもう仕方ないと自分に言い聞かせた。

ナナ

「どうしたの？」

レイ

「ふっ……いや、私が悪かったただけだ。仲直り。姉妹同士仲良くしよう」

最後に笑顔で答えた。

その後、部屋に入って来たあかぎに拉致されて日本の鋼の乙女全員にメイド服姿をお披露目された。さらにカメラ中継により司令官は疎か、基地全体にメイド服姿のレイが映し出された。この事がきっかけで一般軍人の持つ真面目なレイのイメージは一変し、結果基地内でレイの人気は急上昇した。しかもレイのファンクラブまでも結成される始末。

レイ

(やっぱりこうなるのか……)

それ以来、その日を忘れるかのように訓練時間を更に延ばしたのは言うまでもなかった。

第3章5・5話

鋼の乙女秘密函鑑ver・レイ(後書き)

この回読んで

文章はあれだけど良かったよ

と思った読者はぜひリクエストしてもらいたいです！また本編に挟みますので宜しくお願いします！m)・|・)m

日本勢が思い付きやすいですがドイツ、イタリア、アメリカ、イギリス、ソ連、特別遠征艦隊、要塞島軍なんでもいいです。

ではまた次回……

**第3章6話 要塞島軍動く(前書き)**

オリキャラメインの話。

ドイツ第三帝国終了のお知らせ。

### 第3章6話 要塞島軍動く

場所は変わって要塞島。

唯一砂浜が存在する西部。更に外側にコンクリートの絶壁。その上に多数の対空・対艦装備。

最近では新しくソ連製S-75(SA-2ガイドライン)の模造兵器とR型戦闘機区分されている汎用戦車を配置した。

そこに一隻の戦艦、甲板に三人いた。

白衣を着た研究員らしい男性にドイツ軍服を着た男性、そして黄土色の軍服と軍帽を被る女性が話をしていた。

シュリーバー

「しかし本当に素晴らしい！まさかあのレパルシンを完成させるとは……」

ルル

「このくらい造作も無い……」

シュナイダー

「いえ、貴女の技術力は世界を圧倒しております」

ルル

「ま、世界に喧嘩売る気はないが、褒め言葉として受け取るう。じや、私は降りるから勝手に持って帰りな」

シュリーバー

「では我がドイツ第三帝国の復活を目指して」あく、もつづるさいから早く帰れ」では失礼。艦を出せ！」

ルルがコンクリートの上に着地すると同時に戦艦はゆっくり進み出した。

徐々に距離と水平線に従い少しずつ小さくなる戦艦。

ルルは通信機を取り出し、周波数を合わせて呼びかけた。

ルル

「SCS? 準備出来た?」

SCS

「いつでも」

ルル

「では試運転を兼ねて……」

この時誰かが傍にいれば彼女の不敵な微笑を聞いただろう。

要塞島東部飛行場。 要塞島で比較的標高が高いエリアに飛行場を設けてある。 中央研究所との輸送アクセスを簡略する為に線路まで設けられた。

その線路の末端、一両だけ巨大な砲身を付けた車両がある。

その巨大な砲身が微小ながら徐々に動く。

その口径はミリで言うなら850mm。 前説明した時は800mmだったがルルが少し余った資材でいじくった結果こうなった。

850mm列車砲の砲身は既に地面と水平になるまで上昇。 砲身は更に反時計に回り始める。

しばらくして反時計運動も止め、カチツという音とともに砲身は固定された。

要塞島一標高が高いだけあってそこから見る光景は絶景だ。まず要塞島全体を見渡せる。島の七割を占める青々とした自然の森に砂浜、コンクリートの絶壁に各人工施設。とにかく全てが把握出来る。その外側には際限無い海が広がる。

その水平線近くに一つの点が水平線に向かって移動している。ドイツの戦艦だ。

SCS

「左右角共に正常。風向き南西寄り、調整完了。目標捕捉、距離9 Km。射程範囲内より攻撃準備。出力確保。命中率83%。命中部位・着弾点予測、戦艦左側面。誤差0.5m。目標は搭載物確保の為、沈没による撃破を優先。発射準備完了」

ルル

「気長に結果を見ますか。発射して」

SCS

「発射許可受託。カウントダウン。3、2、1……」

ルル

「平和を脅かす悪には制裁を………ま、人の事言えん  
ドゴオオオオーン!!!!!!」

850mm列車砲から放たれた轟音によりルルの独り言が掻き消された。

高速回転で放たれた砲弾は光の玉とも表現できる程空気との摩擦で火花を散らす。



あとは呆気なかった。戦艦左側面に命中し、しかし出力が大きすぎた為、砲弾は着弾する事なく戦艦を貫いた。ここから見れば小さく見える穴だが実際には左船底がごっそり持っ  
ていかれた。

バランスを失った戦艦は左に傾きながら沈みゆき、3分後には沈没した。

ルル

「おおー、我ながら中々の出来だわ！……しかし、まだ改良の余地がありそうね」

たった一発で戦艦を仕留められるならもう十分だと一般世間は思うだろうが、ルルは違う。

より確実に効率的に敵を撃破する為に日夜兵器の研究を続ける。彼女自身が納得できるまで同じ兵器を何度も改良する。

小数の軍が大国相手に対等またはそれ以上に渡り合えるのは『全てが完璧でない優秀な兵器』だからである。

元の世界においてルル達の軍は大陸にある国全てと対等に渡り合える。

とはいえルル自体国相手にしょっちゅう喧嘩を吹っ掛けている訳でもなく、ひっそり兵器開発してるだけである。

理由は戦闘を維持し続ける程の資源が足りないからだ。金は国家予算クラスは所有するが、産業分野においてルルの技術力を抜けば19世紀の技術までしか発展せず、かつ資源が極力少ないのだ。

それは自分達の世界の話だが。

ルル

「ん、んーっ…」

戦艦の沈没を見届けてから、手を組み腕を上げて大きく背伸びする。少し小振りな胸がピンと張った。

ルル

「ふう。ドイツ第三帝国の資料見たけど正直引く。兵器とか技術分野は最高だし奇想天外な発想もユニークで評価に値するが……。狂ってる連中が大半なのよねえ……。チート並の有名な軍人を抜けばいろいろ問題あるし（とは言うがそこまでは酷くない…はず）そんな奴らを放っておくと彼女達に迷惑だからなあ……ましてや私が造った兵器を悪用されると黙って帰す訳にいかないし。

まあ沈んだし、いつか。

「ラミ？そこにいるー？」

ラミデス

「はい。今向かいます…ってそれでいいんですか？」

呼び掛けに応じ、砂浜に立地しているプレハブから出てきたのは、日本海軍の鋼の乙女ゆきかぜに酷似した水陸両用駆逐艦のラミデス。砂浜を走り、コンクリート壁に付けられた梯子を上り、ルルの前に寄る。

ルル

「じゃあ、引き上げお願いね」

ラミデス

「無視しないd……分かりました！」

いつの間にかルルは刀に手を掛けていたので素早く海に振り返りそのまま海に向かってジャンプした。

が、海ではなくコンクリートの端ぎりぎりに着地した。

ルル

「え？何？今のジャンプ？」

ラミデス

「あ、危なっ！危うく勢いで報告し損ねそうになりました。サクヤさん、オオツツさん、スミスさん、ムツさんがほぼ同じ時刻に帰還しますよ」

ルル

「そういうのはフェイントでジャンプする前に言って欲しかったんだけど……」

ラミデス

「だから勢いで……もういいです」

と落胆するラミデスを見て苦笑しながらもルルはその場から一瞬で消えた。

ラミデスは今度こそ海へジャンプし、沈没地点に向かった。

ラミデスが戦艦の引き上げ作業をしている間に、要塞島の西上空からヨルムンガンド級輸送艦、東海上から潜水艦が近づき、両方とも要塞島に到着した。

ルルは到着した艦の中にいる鋼の乙女に直ぐさま集合を呼び掛けた。

5分も待たずとも中央研究所の一室に全員集合した。軍隊である為当然な訳だが。

ルル

「正座」

四人

「へっ？」

ルル

「いいからとりあえず正座」

言われるがまま正座する四人。ルルは笑顔でかつ普通に話しているが、四人の心は恐怖に支配されている。

直感で分かる。ルルの身体から何やら黒いオーラが溢れてる。「出てる」ではなく「溢れてる」。絶対普通じゃない。

ルルは真面目な顔に戻して近くの椅子を寄せ、それに座って足を組

んで四人を見つめる。四人は蛇に睨まれた蛙の如く身動き一つ出来なかった。

ルル

「どうして集めて正座させてるのか……分かるよね……？」

四人

「……」

誰ひとり口を開けない。

ルルも無言のまま立ち上がり四人に近付く。瞬間、オオツツの首筋にナイフが触れていた。ナイフを抜き出す音すら聞こえなかった。

オオツツ

「ひっ……!!」

だが動く事は許されない。ルルはオオツツの前にしゃがみ視線を合わせる。

ルル

「ツツ。今回はあなたが一番ずば抜けてたわよ……」

オオツツ

「ず、ずば抜け……て……？」

ルル

「働かなかったでしょ」

オオツツ

「……!!……い、いやあの、そ、それは……!!」

ルル

「ふーん……追いかけて回されて隠れていた以外に何かやったかしら」

オオツツの目から大粒の涙がこぼれ落ちる。素直に打ち明けた。

オオツツ

「だって、こ…怖かったですよお！あんな怪物、遠距離支援の私  
が…た、倒せるわけなんて…グスツ…」

ルル

「泣いて許されると思ってるの？それに残骸回収ノルマ、達成して  
ないわよ」

涙を拭ったオオツツは一瞬、耳を疑った。

オオツツ

「えっ…？ちよつと待って下さいよ…！規定通り艦に詰め込みまし  
たよ！？確か575kg…」

ルル

「585kgよ」

オオツツ

「き、聞いてませんよ！？」

ルル

「変更事項伝えたわよ。サクヤに」

オオツツ

「ちよつとサクヤさん！」

サクヤ

「伝えようと…思ったけど…戦闘中で…」

オオツツ

「ひ、酷いじゃないですかあ！！？戦闘後、休養で2日休んでから  
帰ってきたのに！目を逸らさないで！何でいつも私だけ…私だけ  
え！…！」

再び涙を流しながら両腕でサクヤの肩を掴んで揺さぶる。

その様子を見てほくそ笑む乙女が一人。

オオツツ

「って、あんた何笑ってるのよ！」

スミス

「別に、ただ見てて面白いから笑っただけよ。少し同情するけどね」

オオツツ

「なっ！？き、貴様……！！」

スミス

「フフツ、私を殴りたそうだけど今は無理なのよね」

オオツツ

「くっ……！後でぶん殴る……！」

スミス

「臆病者が私の装甲に太刀打ちできるかしらねえ？それにそんな顔で言っただって怖くも何ともないし」

ルル

「スミ！」

ルルが一喝して黙らせる。ルルはオオツツから離れ、椅子に腰掛ける。

ルル

「あなたもあなたで人の事言えないわよ。」

スミス

「わ、分かっています……」

どうせ將軍の事だから全て把握されてる、と思いい口を嚙む。それか

ら誰も口を開かず静寂が五人を包む。

しばらくして再び話し出す。

ルル

「いい？全員に言うけど、本家ナメるな。データはあくまで戦時中。今は戦後。当然時間はかなり経っている。通常兵器もそう、鋼の乙女も同様強化されている。」

それに鋼の乙女研究チームが新たに装備を作っていると聞いている。次に会った時は今以上に厳しくなる。撃墜される可能性も有り得る。そして何より向こうには特別遠征艦隊が味方している。私達が所有（模造開発）しているR型戦闘機は数が少ない以上余計な犠牲は出せない」

サクヤ

「ですけど……異世界である故に……戦闘力に制限……」

オオツツ

「そうそう、制限さえ無ければ私も戦えるのに……」

「制限が無かったら原型すら無くなるほどの火力ばかりだから残骸回収出来なくなるでしょうが！」

ムツ

「このバランスがいまだ慣れないのだが……」

ルル

「それは承知の上。私みたいに頻繁に異世界行き来してないからね」



説教（？）を始めてから2時間経過。

ようやく正座からは解放された。やはり全員足の痺れでしばらく立てなかった。

ルル

「次の任務。7分以内に東部艦船ドッグに」

四人

「ええー！！？」

そう言つて部屋を出た。地獄はまだ続く。

気が付けば日は既に水平線に沈み、空は薄明く一番星が輝いていた。

東部艦船ドッグ。簡潔に言えば巨大戦艦一隻、駆逐艦三隻、潜水艦三隻。R型戦闘機区分の「コロンビア・F」五隻が収容されている。

洞窟を格納庫改造した為、艦の誘導用に薄明るいライトがいくつか点在するだけ。なので懐中電灯は必須だ。

足の痺れを堪えながら説教された四人は2秒残してドッグに到着した。

ムツ

「た、只今到着しました…ひゃあ!？」

まだ完全に痺れが取れてなかったか、足を縛れさせ転ぶムツ。

スミス

「足首捻ったね」

サクヤ

「……今のは確実に捻った……捻挫には……なっていないようね……」

ムツ

「私の足に懐中電灯を照らして冷静に分析してるなら助けて下さいよ!」

オオツツ

「仕方ないなあ。てゆうか、なんでムツだけまだ痺れ取れてないわけ?」

ムツ

「知りませんよ!将軍に聞いてください!」

オオツツがムツを抱えてドッグに収容されている巨大戦艦に乗り込む四人。

管制室内にはルルとラミデスが待機していた。

ルル

「集まったところで次の任務説明を……」

スミス

「待つてください。その盾は何ですか?」

ルルの手には警察機動隊が持つ防護用の盾を持っている。だが、こ

の盾は身体を覆いつくす程大きく、覗き窓がある。そして盾自体は鏡のように管制室を映している。

ルル

「あんた達だけじゃあ、また通常兵器の被害が増えるから私が前線で指揮を執る」

スミス

「そうでしたか。ありがとうございます」

ルル

「ただし！実戦には参加しない。鋼の乙女装備もしない。自分達で進撃しなさい」

スミス

「ですよね……ハハ……」

そりゃあ当たり前だ、と全員が思う。

引き続き話しを進める。

ルル

「で、夜の内にこの戦艦と駆逐艦一隻、コロンビア・F三隻を率いてミッドウェー島に向かう。夜明けと共に艦砲射撃、その後陸上兵器で島の主要基地を制圧。そこを新しく拠点にしようと考えている訳だが」

ムツ

「大きく動きますね。ですがなぜ新しく拠点を？」

ルル

「ミッドウェー島が取られれば必ず奪還に来る。その兵力を全て撃破すれば余計な犠牲を避けるため、暫くは手を出せなくなる。その間に拠点防衛機能を作り上げれば一カ所を警戒せざるを得なくなる。そうなれば資源回収が効率良くできる……と」

オオツツ

「警戒つて言っても数を増やされたら変わらないと思いますが？」  
ルル

「でも航続距離とか分配する燃料とか、コストは増えるから警戒は多少和らぐと考えている」

スミス

「……何だろうか……この不安感……」

サクヤ

「……右に同じく」

ムツ

「左に激しく同意」

オオツツ

「……（コクツ）」

ルル

「ちょ！？不満なの！？私が指揮執るから大丈夫よ！」

しかし何とも言えない不安感はいまだ心に残ったまま戦艦は出航した。

しかし、この不安感が杞憂に終わったのはミッドウェー島へ攻撃開始した時だった。

### 第3章7話 技術革新 project (前書き)

まず、一週間延期させて申し訳ありません。

忙しい+新しい書き方で時間が掛かりました。

改めてですが、今回から書き方を変えましたがはつきり言えば『読みづらい+堅苦しい』です。

#### 変更点

- ・会話文前のキャラ名は省く。
- ・擬音語使用を止める。

訳分からなくなると思います。

「読みづらいから元の表記に戻してほしい」「もう少し工夫してほしい」「誤字・脱字またはおかしい言葉や表現、意味を間違えている言葉がある」という指摘だけの感想もお願いします。

本当にそうしてほしいと思った方は感想に書いてください。

### 第3章7話 技術革新 project

要塞島軍がミッドウェー島攻撃を始める半月前から世界は大きく動き出した。

まず大きな変化として、鋼の乙女用ジェット機の開発が完成した。ムツがイギリスで使ったタイプと違い、全体的なバランスをとりやすくする為に背中に付けるタイプとなった。

航空機タイプ専用なのは当然、また装備もジェット戦闘に慣れるようにと、機銃だけでなく小型の携帯型追尾ミサイルも開発された。戦車タイプは索敵レーダーの開発で、より遠い敵を感知できるようになった。また、見た目は変わらないが耐久力を飛躍的に高める「マキシマムスーツ - S2 -」も開発。より第一線で戦えるようなチューンナップをされた。

艦船タイプは基本武装面はそのままにされるが、そのかわり陸対空を海対空に改造した手持ち式の細長い遠距離弾頭迎撃ミサイル「PACK」の携行を許可された。

とはいえ航空機タイプと戦車タイプに比べればその恩恵を十分に受けたとはいえなかった。

余談だが、これらの技術は既に各国の鋼の乙女司令官を通してそれぞれに伝えてある。敵対状態のソ連も例外ではなかった。もっとも、ソ連はその技術を応用してより強力な装備を開発している。

日本鋼の乙女駐屯基地では、司令官に呼び出された元海軍の航空機タイプ五人に司令官が説明していた。

「 というわけで我が日本の鋼の乙女にもそのジェット機を使ってもらおうとアメリカから通達が来たわけだが」

「 ジェット機ねえ……」

説明を終えてまず口を開いたのはナナ。続いてレイ。

「でも、ジェット戦闘機と対等に戦えるのなら装備するに越したことはないな」

他の鋼の乙女もジェット機の導入はプラスになると思い頷く。

「とにかく、ジェット機の装備は用意してある。分かっていると思うが、最大速度は音速を越えるものが多数だ。だが安心してほしい。鋼の乙女用のジェット機は速度調整が可能だ。訓練ではまず速さに慣れるように心して臨んでくれたまえ」

「はいっ！」

全員が応えると司令室を出て訓練場に向かう。

訓練場には整備士が用意したジェット機がある。背中に取り付けるとは言ったが、実際はリュックサックみたいに背負ってベルトで締めるだけだ。

「これがジェット機ですかあゝ。後ろに噴射口が二基ありますね」

「ま、見た目通りの設計って感じ？」

てんざんとふがくがジェット機の見た目の感想を述べる。

「ハッイ、皆元気にしてた？」

「あかぎか？」

レイが気づき、他の乙女も振り向くとあかぎがこちらに歩いてきた。あかぎの手には彼女達の前にあるジェット機と同じものを持つ

ていた。

「あかぎ？ それを持って何をする気だ？」

「レイちゃん……、私ね、副官に復帰したんだから分かってよね。説明よ。せ・つ・め・い」

「あ、ああ、分かった。すまない……」

「それでいいのよ」

レイは何がいいのかまでは理解していないようだが、お構いなく説明を始める。

「私からは簡単に説明するだけで、後は自主訓練だからジェット機は付けといてね」

そう言うつや否や、すぐにジェット機を取り付けた。

「皆速いわね、流石よね、いちご」

「そうですね、皆ちゃんと成長している証です」

「とか言ういちごが一番速かったんだけど……」

「細かい事は気にしない事よ、ナナちゃん」

ツッコんだけどさりげなくスルーされたナナは少しふてくされた。

「まあまあ、ナナちゃんは正しいことを言ったんだから気にしないでいいのよ」

「ああ……うん、ゴメン」

「フフツ、じゃあ説明を始めるわよ」

一時間後



「以上。後は自分達で適度なスピードを見つけて訓練してね。」  
あかぎが去ってしばらくしてから、

「ナナ……これさ、説明でこんなに時間掛かると思うか？」

「うん……ボクもちょっとおかしいと思ってたけど……」

「というより、あかぎお姉さまの説明が何度も脱線したのが……」

実際には10分程度にまとめられる内容だったが、三回は脱線した。

その中で三人が本気で引いたのは、先の朝鮮戦争の第三軍であったサクヤをお持ち帰りしたいという欲望を語りはじめたことだろう。ふがくといちこは現場にいなかったので逆に興味を引いたようだった。

ちなみに三人とも、いくらなんでも無謀だろ……としつかり心の中でツツコんだ。しかし、『かわいい女の子なら敵味方関係なし』  
なあかぎだから仕方ないと結局腹を括った。平和になってからより一層ひどくなつたような気がした。

「ん？ あんたらそこで何こそこそしてんの？」

ふがくがジェット機を触りながら横目で三人を見て話しかけた。  
小声で話していたからそう見えたのだろう。

「ふがくか。いや、別にたいしたことない話だ」

「あつそ。ま、どうせ訓練の相談してたんでしょうけど、実際試しに飛んでからした方がいいんじゃないの？」

「まあ、それもそうだな。よし、ナナ！ てんざん！ 早速訓練開始だ

「！」

「ええ！？ちよつと待つてよ！」

「いくらなんでもいきなりは飛べませんよ!？」

しかし二人を振り切りそのまま空へ飛ぶレイ。航空機タイプで戦闘機の彼女にとってジェット機に慣れるのは造作もなかった。

説明しか受けてないのにいとも簡単にジェット機を使いこなすレイを口をぽかーんと開けながら見ていたナナ、てんざん、ふがく。

「レイつて、すげえ……」

それしか言えなかった。

レイに触発されて次々とジェット機を付けて飛ぶナナ達だが、レイと違い、出力がどの程度なのか見極められなかった。それに攻撃機タイプ、爆撃機タイプとでは鋼の乙女同士差が出る。

「ぐっ！うっ……！」

「うっ！な、ナナお姉さま……！」

「うん……分かってるんだけど……！　かなり……きつい……」

ナナとてんざんは艦上攻撃機タイプ。爆弾も携行する分、速度をレイと同じように出しても身体への負担は全く違う。いちこ、ふがくも同様に苦しそうな表情を浮かべる。

開始二十分、レイ以外は一度着地して休憩を取る。

「うん……………」

「ナナお姉さま、やはり速度をもう少し落とすべきでしょうか……………」  
「でも実戦的に考えるなら今の速度を変えない方がいいと思うんだ  
けどねえ……………」

先程の飛行状態を確認し合って考えている二人。そこにレイが着地し、二人に話しかける。

「どうした？」

「レイ？ あのさ、やっぱり訓練といえども実戦を見据えた方がいいのかなあ……………って思ってたんだけど」

「何を言ってる？ 基本中の基本だぞ？」

「それで、実戦を見据えて多少痛みも我慢すべきでしょうか？」

「それって……………つまり、速度が早過ぎるって事か？ なら速度を下げれば済む話だ」

「でもこのくらいやりこなせないと訓練の意味が無いかな……………」

ナナとてんざんは真剣に考えていた。一方レイはその二人の変化に心底驚いていた。

二人は戦後、訓練に真面目に取り組む様子がなかったからだ。いや、訓練は行っていたがさほど真剣ではなかった。訓練一筋のレイは一発で見抜いたが、強要することもなくただ観察しただけだった。しかし、同時に疑問も湧く。なぜ今更訓練に真剣になったのか？ 聞かすにはいられなかった。

「ナナ、てんざん」

「ってどうしたの？ その意外な言動に驚いているっていう表情して」

「いつからだ？」

「は？」

意味が分からないナナは聞き返し、もう一度レイの顔を見る。表情はさつきと違い真剣だ。

「いつから訓練を真剣に取り組む気になったかと聞いている」

「れ、レイお姉さま？ それを聞いてどうするつもりですか？」

「どうもしないさ。でもなぜ急に真面目にするようになったのか聞きたい」

意図が掴めずお互い顔を合わせる二人。

「レイ？ 君はレイだよな？ 何かあったの？」

「はぐらかすな。私はただ聞いてるだけだ」

「……」

再び顔を合わす。レイから見れば、何か心当たりがあるのか？

と思うだろう。

ナナとてんざんは何度も顔を合わせた。相談でもしているかのよう。  
うに。

この調子で時間が過ぎ、ようやくナナが口を開いた。が、レイも予想だにしない言葉だった。

「……ごめん……」

本人としてはただ訓練に取り組むようになったきっかけを聞くつもりだった。しかし、一言目は謝罪。普通なら、何かいけないことを言ってしまったのだらうか……と思う。

「な、なぜ謝る？」

「じ……実は……レイ……君なんだよ……」

「えっ？ わ、私？ 何がだ？」

「訓練を真面目にしようって決めたきっかけは……レイなんだ……」  
「……？」

ナナの言った意味がさっぱり分からないのは多分レイだけではないだろう。

「どういっ……意味だ……？」

「……聞いちゃったんだよ……レイとあかぎが二人の時……海岸で……」

「っ！……！？」

あかぎと二人きり……海岸……間違いない……。

レイの中で自分がきつかけになった理由がわかった。

自責の念に駆られ、自ら命を捨ててまで助けようと考えた時、あかぎが諭してくれて目が覚めたあの時。

あれを聞いていたのか……。

「正直悪いとは思ってたんだけど……、あの時のレイの……司令官にまで突っ掛かってたから……あかぎと出た後、こっそりついて来

「……」  
「……」  
「それで、私達決めたんです。レイお姉さまだけじゃない、私達で皆を守っていいこうって」  
「……」

ナナとてんさんの目は本気だった。その目は決意を決めた瞳。

（そうだ……私だけでない……皆がいるんだ……自己犠牲で満足したところで、周りが悲しむだけ。あかぎに教わったばかりではないか。私は……）

急に恥ずかしく感じ、身体を反転させるレイ。勿論それに戸惑う二人。

「れ、レイ……？」  
「怒って……ますか……？」

振り向いていてレイの顔を見れなかった。

確かにあの時の考えを聞かれたのは恥ずかしかった。でも二人はレイの思いに応えようと今、懸命に頑張ろうとしている。姉妹ゆえの純粹さだろうか分からないが、レイはいつの間にか一筋、また一筋涙を流していた。

「ありがとう」

涙を拭い、再び振り向いて感謝の意を伝えた。

「えっ!?!」

「ナナとてんざんのおかげであかぎの言っただことを思い出した。ナナ、てんざん、私が訓練を見てやる」

「えっ？あ、いや、別に見てもらいたい訳じゃ「心配するな。お前達にちゃんと合わせる」あっ…そう？　じゃあ……」

この一件にてより姉妹としての絆は深まった。もし誰か一人でも欠けたなら、決して起こりえない奇跡なのだから……。

「ふん、いい雰囲気出してるとじゃん」

「ああ、見ているだけでも癒される。しかも話が話だけに……もう我慢できないのです」

「だあー、あんたやめなさいって何度も言ってるじゃん！空気読めって！」

遠くからふがくといちこが観察していたが、途中いちこの暴走を止めるべくふがくが奮闘していた。

姉に対する口調はいまだ変わらないが、最近常識的なことは学んだ。

それにあかぎから姉妹について何度も教えられているので、姉に対する敬意を持って自然といちこを抑える役に回った。

司令官室。例の如く司令官と副官あかぎが今後の方針を語ってい

た時、連絡が来た。

「あー、私だ。……何！？イギリスが！？して被害は！？……うむ、そうか。分かった」

会話からしてかなり切羽詰まっていたようだ。即座にあかぎが質問する。

「どうしたんですか？」

「あかぎ君、朝鮮戦争で報告された鋼の乙女を覚えているかね？」

「第三軍の……確か要塞島軍と言ったものですよね？」

朝鮮戦争で報告された鋼の乙女は航空機タイプのサクヤと戦車タイプのオオツツ。要塞島軍と名乗り両軍を攻撃してきたが目的の分からない武装集団……という認識しかなかった。

「そうだ。その要塞島軍がイギリス、ロンドンを襲撃したそうだ」

「ええ！？襲撃！？」

「しかも、朝鮮戦争で確認した鋼の乙女とは全く違う鋼の乙女が襲撃したそうだ」

「違う……ってことは新手ですか！？」

「そうだ！しかも一人がレイ君に酷似しているともあった」

「な、なんですって！！？」

あかぎも悠長に言ってもらえない。事態は最悪である。遠い国でも平和を誓い合った国。決して他人事でない。ましてや、例の軍が攻めてきたならなお危険だ。

朝鮮戦争時も鋼の乙女でも同等、通常兵器は手も足も出なかったと聞いている。

しかし、司令官の怒りは別の意味で予想通りだった。



「レイ君の姿に化けて悪事とは……絶対に許さん！レイ君は私のもの……ゴホンッ、我が日本軍の誇りだ！奴らめ……私の用いる権力を総動員して滅ぼしてくれる……！！」

少し思考回路がアウトしました。

「そんなことより司令官、被害のほうは？」

「私のレイ君を真似して悪事を働くなど言語道断ッ！海軍陸軍その他を含めたレイ君ファンのイメージダウンを防ぐだけでなく、私のレイ君の……」

「司令！今はそんなこと言ってる場合じゃありません！」

若干トリップ気味の司令官をとりあえず近くの棒で殴る。

「ぐあつ、痛い！な、何を「今すぐ被害の状況を教えてください！」う、うむ……、悪かった……」

古参の鋼の乙女で副官だけある。ようやく司令官は落ち着き、資料を引き寄せた。

「報告によれば、イギリス帝国戦争博物館が襲撃に遭い、ほぼ全壊、現地の鋼の乙女も重軽傷を負っている」

「そうですか……ですけど、なぜイギリスを？」

「……あかぎ君、DFを知っているかい？」

DF。鋼の乙女の基本性能を最大限に引き出す引き換えに感情欠落、残虐性、精神不安定になる忌み嫌われた両刃の技術……とされていたが、連合軍の解析により再生・復活技術に利用できるようになった。

「知ってるもなにも、私はそれのおかげで帰ってこれたんですから」  
「そうだったな。報告ではそのDFが狙われたようだ。資料を奪われてはいないが、写真に収められたそうだ」

「……一体何のために……」

だが司令官は答えなかった。

それで十分だ。世界の危機が近づいていることを直感した。

「じゃあ、私は皆に伝えますね」

「うむ、頼んだぞ（ばあさん）」

「何か言いましたか？」

「いや、何も「言いましたよね……？」ハイ、イイマシタ。スベテワタクシガワルイデス」

笑顔で20mm機関砲を構えられたら降参するしかない。意外と迫力がある。

「もうやめてくださいよ。私だって泣いちゃいますよ？」

「……ばあさんに泣かれてもな……」

この日、司令官室から響きの良い機関砲の発砲音が聞こえたそう  
だ。

それとは裏腹に世界の危機は半月後、現実となった。

**第3章8話 第三次ミッドウエー海戦（前書き）**

なぜ第三次なのかは分かる人は分かる。

分からなくても支障はありませんので、安心を。

### 第3章8話 第三次ミッドウエー海戦

要塞島軍が誇る巨大戦艦「不滅」は、戦時中の戦艦をベースとし、R型区分の「ラーン級水上攻撃艦」の技術に「イージス・システム」を搭載した戦艦。

さらに喫水線下対策に軽微の防御結界を船底全体に張っている。発生装置は動力室とボイラー室の間。いずれにしても中核をなす位置な為、そう簡単には辿り着けない。

その戦艦が今まさにミッドウエー島に向かっている……。

「ま、ボク達がずっと監視してたおかげで気づけたんだけどね」

「そうよねえ。姉さんや私がいなければミッドウエー島は今頃火の海だったかもね。クスッ」

「ま、それはそれで面白くなりそうだけどね。アツハハッ」

「てめえらは余計な事は言わなくていいんだよ！ マジでうぜえ！」

アメリカ・ハワイのオアフ島海軍基地に緊急召集されたアメリカの鋼の乙女はライトニング姉妹から状況を聞いた。

「クレア、双子相手に何度も無駄ですわ」

双子の発言にいちいち反応するクレアを制するルリ。

「そつだよ。いつまでも同じこと繰り返すもんね、この筋肉馬鹿」

「クスツ　　ホントよね。学習能力がないのかしらねえ、おバカさん」

「て、てめえーらああー!!!」

「クレア！落ち着きなさい！双子もクレアをおちよくらない！」

クレア渾身の右ストレートをルリに片手で止められる。

「ニャ〜ア、いつまでこのくだり続けるのニャ〜」

「さあ……解りませんね」

いつものやり取りに飽き飽きなのかネコがつまらなそうに言い、答えるハイネ。

「それより、戦力はどうなのよ？　早く言わないとルリさんが作戦を立てられないわ」

時間も無いので痺れを切らしたフランシスが双子に尋ねる。

「多分だけど、鋼の乙女全員はいるんじゃないかな？」

「朝鮮戦争に参加した鋼の乙女と、イギリスに襲撃した鋼の乙女も確認できたわ」

「あ、そうそう言い忘れてたけど、総大将は戦艦の甲板にいたから、多分指揮を執るつもりだね」

「大きさから考えて、あれが旗艦だわ」

双子は偵察で見たもの全てを全員に話した。しかし、話が終わる頃には全員顔から血の気が引く表情をした。

「そんな……でもっ、いやっ……」

「ま、現実だからね。もうこんなところにいる暇なんてないよね」

「早くしないとー、ミッドウェー島の海兵隊が全滅しちゃうかもよ？」

聞かされたのはミッドウェー島に在留する軍の報告書だが、ライトニング姉妹がオアフ島基地で説明を始めた時点で敵戦艦の艦砲射撃を受け、砲弾の嵐が襲っていた。

既に陸軍・海兵隊の被害は甚大、基地も全壊、もはや基地として機能しなくなった。だが、まだ悲劇は続くことは容易に想像できた。ミッドウェー島の在留軍はまだ敵戦艦の姿すら捉えていない。

「ふむ……諸君！直ちにミッドウェー島に向かい、全力で防衛せよ！私から各国を通して援軍を要請しておく！」

「了解っ！」

司令官が全員にスクランブル出撃を命令、一斉にミッドウェー島へ軍が向けられた。

それぞれが出撃準備に取り掛かる中、エイミーは不思議に思っていた。

「（うーん、あの双子のことだからなあ……。でも何かおかしい……。他の偵察部隊だって双子並の距離で観測しているのに、その人達からは一切報告が無い。なんで双子だけ詳細を知ってるの？ 鋼の乙女だからというのも理由には入るけど……）」

「お姉ちゃん、準備できた？」

「……えっ？ ああ、エミリーね」

呼びかけに反応して考えるのを止めたのとエミリーが部屋に入っただけだった。しかし、

「あの……。お姉ちゃん……」

「どっしたのよ？」

めずらしくエミリーが何か俯いて不安な表情をしていた。エミリーはエイミーとほぼ反対の性格（天真爛漫に近く、少しおどおどしている）で、ただチハと違つのは明るくてムードメーカーな存在となつた事だ。だから戦後、このような表情を見た事は無かつた。

朝鮮戦争の時も、むしろ皆の為に頑張ろうという思いが強く、連合軍をエイミーと共に支えた。

「ミッドウエー島に攻めてきた敵って……。強いんだよね……」

「まあ、あれだけを聞けば確かにそうかもしれないけど」

「……勝てるかなあ……」

エミリーにとって初めて感じた感情が今のエミリーにした。

それは恐怖。

なぜ恐怖なのか？ エミリーは今まで自分が足手まといにならないようにと、ただその思いだけで敵と戦っていた。朝鮮戦争では戦闘場所が関係あり、自軍が有利であったのも関係ある。

絶対に勝てるという自信と仲間が無事であることでの安心感に前述の思い。その結果が朝鮮戦争において敵戦車三十七台、一個小队八チームの撃破だ。

だが今は状況は真逆。敵に自分達の領土を攻撃され、短時間では破壊状態。そして何より経験不足。エミリーは戦時中早々に亡くなり、敵が徐々に攻めて来るという恐怖を体験していない。

だからこそ「今」に恐怖している。

それを理解してか、エイミーはエミリーの頭にそつと頭をのせて撫でる。

「心配しなくていいわよ。あんただって私の特訓に耐えたんだし、朝鮮戦争でしっかり経験を積んだ。絶対勝てるわ！」

「で、でも……」

「相変わらずチハと同じ弱虫ねえ。いい？ 相手が強かったって諦めなければきつと何とかなるわ。チハにだって出来たんだから、あんたに出来ないはずはないでしょ。」



「……分かった。お姉ちゃんがそこまで言うなら、私も頑張ってみる！」

「そうよ！その調子！」

「エヘヘッ、やっぱりお姉ちゃん優しいね」

姉の言葉で気落ちしていた気分も戻り、笑顔を見せた。その無邪気な笑顔が一瞬チハと重なって見えた。

「と、当然じゃない！私の妹なんだし、あんたが足引っ張ったら私の責任にもなるんだし！」

「分かってるよ」

その後、エミリーが部屋を出てから再び警報がなった。

「っと、急いで準備しないと」

5分後、オアフ島基地から鋼の乙女と最新鋭戦闘機「F4ファントム」を載せた空母が発艦した。

ミッドウェー島沖合に要塞島軍の戦艦は停止していた。ここから

戦艦の役割は護衛となり、上陸するのは駆逐艦一隻に載せた機甲師団と二人。

ここまでは順調だし、後から援軍が来るのは計算通りだ。

戦艦の甲板から操縦室に移動し、ミッドウェー島に向かう駆逐艦を見ながらルルは椅子にゆったり座っていた。傍には例の盾も。

一方で駆逐艦内は警戒状態が続いていた。しかし、これは敵への警戒ではなく内部の警戒だ。

というのも、原因は二人の鋼の乙女であるオオツツとスミスだ。同じ戦車タイプだが兵器の種類が違うので、多少仲が悪い。

ごく稀に喧嘩に発展するが、喧嘩のレベルを越えているのが容易に想像できるだろう。ごく稀でも可能性があるから常に警戒状態なのだ。

で、今も二人はお互い毒づいていた。

「朝鮮戦争で散々に終わったのね、オオツツさん」

「あなたこそ……、イギリスで壊れれば良かったのに」

「フンッ、あれは正面から戦ったからよ。あなたはどうか？ ずっと逃げ回ってたんでしょ？」

「あれは相性の問題。でも、あなたはベローチェ達に翻弄されていたんでしょ？」

「数で押ししてくれば誰でも効くわよ。塵も積もれば何とやら……っ

「ね」

「そうやって御託を並べて反省しないのかしら？」

「あら、私はしっかりと反省してるわ。むしろあなたじゃないの？」

「あなたには言われたくないわね」

「私もよ。でも今は任務だから……」

「足引っ張らないでよ」

「後ろで援護する人の邪魔なんてできるのかしらねえ……」

「そうやって」

駆逐艦内の警戒は到着するまで解除されることはない。ごく少数の兵士にとっては有難迷惑なのだが。

日本もアメリカからの要請を受け、鋼の乙女を載せたヨルムンガンド級輸送艦が発艦した。

同伴したR型戦闘機は「エクリプス強化仕様型」五機編成の三チームと「POWアーマー」。

敵の数からしてこのくらいが妥当と考えていたし、鋼の乙女も新

たな技術で強化されている。今なら負ける気はしない。その決意を持って出撃した。

が、日本の鋼の乙女の出撃が後ほど戦場を混乱に導く。

ミッドウェー島は再び地獄を見ることになった。

駆逐艦は無理矢理乗り上げて上陸、スミスが先陣を切って守備隊の重戦車を撃破。当時最強の戦車と言われた「M1エイブラムス」もたった二発で破壊された。オオツツは駆逐艦甲板から背中 of 自走砲で守備隊を攻撃する。海岸沿いの守備隊が壊滅すると、駆逐艦から「第三級高機動軽戦車」と「第二級双砲塔重戦車」が出撃し、先の戦艦で壊滅した基地を占拠。アメリカ軍の被害は200人以上が死亡、500人以上が重軽傷を負った。

ミッドウェー島は南部のサンド島とイースタン島、北部のサンド小島からなる。アメリカ軍はサンド島に航空基地を建てて太平洋横断の中継地とした。

しかし、ミッドウェー島は小さく、航空基地もたった一箇所。そこを占拠された今、事実上ミッドウェー島は陥落した。

「將軍、基地を占拠しました」

「分かった。今から艦を動かす。守備隊の兵器の残骸は回収しといて」

操縦室から報告を受けて、艦を動かす。

「随分呆気ないですね」

ルルの後ろからラミデスが話しかける。

「うんにゃ、これからよ」

元々ミッドウエー島の早期陥落は目に見えていた。むしろ、後からの援軍対策を既に考えて放った一言。

それを承知してか無言で操縦室を出るラミデス。操縦室は計器がカタカタ動いている以外に音は無かった。

「ミッドウエー島陥落っ！！」

「そんなっ！？ 早過ぎますわ！？」

空母内でミッドウエー島の報告を受けたルリは声を荒げた。

「どうしましたか！？」

「る、ルリ！？ 一体どうした！？」

「ど、どうしたんだニャー！？」

声を聞き付けて直ぐさま三人が寄ってきた。

「ミッドウェー島は陥落しました……」

誰もが啞然とした。試験的として「M1エイブラムス」も配置していたはずだが簡単に撃破されてしまったのか？ いずれにしても分かる事は一つ。戦況は最悪だ。

「全員が集まっている……からですか？」

「分かりません……。しかし、我々は諦めてはなりません」

「そ、そうだ！ 俺達は新たな技術でパワーアップしたんだ！」

「そうだニヤ！ 皆で敵を蹂躪するニヤ……！」

ミッドウェー島陥落にもめげずに士気が高いのはたして勝利の確信があるからだろうか。

ここで、アメリカ軍のミッドウェー島奪還作戦のプランを述べておく。

アメリカ軍は空母の発艦前に輸送機と爆撃機を飛ばして守備隊の援軍を先行させた。爆撃機が先に敵を攻撃し、戦力を分散させる。輸送機には特殊重火器隊とエイミー、エミリーを載せている。基地は使えないので緊急着陸をせざるを得ないが、上手く着陸出来れば基地の奪還に進む。

空母が到着しだいネコ、ハイネ、フランシスが敵旗艦へ突撃し、ルリ、クレアで守備隊の援護にまわる。

日本軍に関しては向こうの指揮で任せるつもりだ。

スチユアートはサボリ。ライトニング姉妹も不参加。

それでも戦力は十分だ。

ミッドウエー島の航空基地にある奇妙な物質が見つかった。

オオツツが倒壊した基地で、地下に続く階段を見つけ、その奥に保存されていた。

防衛セキュリティが発動したが、オオツツの装甲なら意味が無かった。

すぐに報告を行う。

「将軍、聞こえますかー？ 地下だから少し雑音が交じりますけど。

はい。で、見つけたのはカプセルみたいなので。そ

うです。どうやら中身はデータの一種のようですが。色です

か？ 色は……薄い緑……ですかね？ えっ？ 放っておけ

！？ い、いいんですか！？ はあ、分かりました……。じ

ゃあ戻ります」

通信を切って、来た道に戻ろうとしたが、一瞬振り返ってそのカプセルをもう一度見た。裸電球で照らされた小さい部屋の中に薄い緑で、両手で抱えられる大きさのカプセル。中がデータと分かったのはつつすら電子文字が見えたからだ。

なぜ放っておくのか分からないが、命令なら仕方ない。オオツツはこの場を後にした。

第3章9話 例えそれが運命だとしても（前書き）

お待たせしました。

今回は導入みたいな話です。



### 第3章9話 例えそれが運命だとしても

要塞島軍の戦艦「不滅」がアメリカ軍爆撃機を感知したのはミッドウェー島陥落後から30分後。

現時点で最新鋭の爆撃機「B-52ストラトフォートレス」を筆頭に三十機編隊でミッドウェー島の敵を駆逐する予定だ。

アメリカ軍上層部は素早く作戦を実行させたと思っていただろう。占拠してから30分では何もできやしないというのが上層部の考え。でも所詮は机上の空論。

上層部は敵の力量を知らない。いや、知ったか振りをしていた。

だから出撃前、現場を見たアメリカ軍鋼の乙女代表としてルリは反対していた。ルリは様子を見るべきと慎重論を唱えた。

しかし、それは叶わなかった。ルリを支持した高官もいたが少数。ほとんどは自身の持つ常識を当て嵌めて賛成に挙げた。

作戦は決行された。

「今の上層部なら聡明な方が多数いらっしやると思っていましたか……」

ミッドウェー島に向かう空母の待機室で一人ルリは臍を噛んでい

た。

あの時全てを話しておけば理解してくれる高官も出てきたはずだった。

だが話さなかった。既に伝わってると思っていた。

でもいくら嘆いたところで時は進む。立ちすくんで過去を振り返っても意味は無い。進むしかない。

自分にそう言い聞かせてミッドウェー島奪還に集中しようとした。

戦艦「不滅」の操縦室にあるレーダーがアメリカ軍爆撃機を感知してからルルはすぐに指示を出した。

「南東上空より爆撃機『B-52ストラトフォートレス』を含む三十機編隊を確認。サクヤ、ムツは上空にて待機。オオツツ、スミスは対空装備に切替。波動砲も用意。ラミデスは対空装備で迎撃用意。戦艦の高角砲全二十門を開放。駆逐艦に収容している『第三級八連対空戦車』を基地周辺に配備」

ただ機械のように淡々と命令を下すルル。そして命令通りの配置に陣取り、敵を待つ。『迅速かつ冷静な対応力』。これも要塞島軍の強みの一つだ。後は爆撃機を待つだけ。

のはずだった。

敵爆撃機が近づいてくるにつれてルルの表情が険しくなる。そして一言。

「やられた……」

それから5分後、ミッドウェー島に配備された対空ミサイル、高角砲が一齐に火を噴いた。

ミッドウェー島に集結した全兵器による攻撃は寸分狂わずアメリカ軍爆撃機に届いた。

「……………あれ？」

異変に気づいたのは望遠鏡を持っているオオツツ。標的に当たっているかを確認するために見ていた。

「どうしたのよ？」

オオツツの動揺にスミスが尋ねるが、耳に入らなかったのか一人取り乱していた。

「えっ？ 待つて。そんな……………！ 将軍から聞いてないわ！」

すぐに通信機が鳴る。オオツツは慌てて取り出し、大声で叫んだ。  
「將軍！ どういうことですか!？」

『ツツ、あなたの見たとおりよ。アメリカ軍の情報操作が私達より一枚上手だったようね』

ミッドウェー島上空にて、三十機の爆撃機は一機たりとも撃墜されなかった。

それもそのはず。

「ハッ、あいつらの驚いてる顔が浮かび上がるぜ」

「ニヤニヤニヤー アメリカの情報操作技術は最強なんだニヤー」

「しかし、いきなり激しい攻撃でした。さすがはミッドウェー島を早期に陥落させただけではありませんね」

爆撃機編隊に紛れていたのは鋼の乙女。しかも今回はアメリカ軍だけでない。

「本当に激しい攻撃だった。我々がいなければ守りきれなかったな」

「もう、早く終わらせてご飯食べさせてよ。ここまで来るのにお腹空きすぎて死にそうなんだけど」

「エリちゃん、ここはまだ我慢しないと。お姉さんとしては、新たな女の子を見つけたから満足なんだけどね」

「敵も本気やね。ベロちゃん達もイギリスでよう頑張ったわ」

「相変わらず個性が強い方々といいますが……」

「数年前はお互い争っていましたがからねえ」

「敵の敵は味方。尤も我々鋼の乙女は邂逅したのですから協力しない理由などありません」

ドイツ軍のレント、エーリヒ、ルーデル。イタリア軍のクラウデア。イギリス軍のマーリン、フェアリー、ムスタング。

アメリカ軍を含むヨーロッパ勢の航空機タイプの鋼の乙女計10人が爆撃機の陰に紛れていた。重なって飛行すれば衛星レーダーも感知出来ない。

本気でミッドウエー島を取り返すためにルリが考案した布陣だ。この布陣はどんぴしゃだった。

「ポイントに到着です。アメリカ軍の強さを見せ付けるのであります！」

ハイネの合図に爆撃機三十機は積んである爆弾を投下した。

「き、来たぁー！！！」

「何取り乱してんのよ、使えないわね！ 戦車隊は早急に基地の陰に隠れてやり過ぎす！ 私達で降ってくる爆弾を迎撃するのよ！」

オオツツから先程の情報を聞いて、慌てふためくオオツツをよそにスミスが素早く指示を出すも一歩遅く、爆弾の雨が降り注ぐ。

「重戦車大破っ！ 駄目です！ 防ぎきれん…ぎゃあぁぁぁー！！！」

「スミス殿！ 数が多すぎ…！！！」

「わっ、わっ、わあぁぁあっ！！！」

もともと崩れかけたミッドウエー島基地周辺は大量の爆弾でさらに壊滅。兵士はもとより、出撃した軽戦車も全滅。重戦車も半分は大破。無事な戦車など一つもない。着弾地点は大地を根こそぎえぐり取り、穴を開ける。たった一回の絨毯爆撃で実に300tもの爆弾、焼夷弾が投下された。

わずかながら落ちてくる爆弾を迎撃するも戦力をだいぶ削られて足りない。

「くっ、これでは……！！！」

「スミスさん危ないっ！」

スミスの上3mにまで迫っていた爆弾にいち早く気づき、体当たりで突き飛ばすオオツツ。直撃は免れたが爆風が二人を襲う。

「うぐっ！」

吹き飛ばされた二人はそのまま地面に俯せに重なって激突した。その瞬間、爆撃が止んだ。

「痛たたっ……」

「っ、ツツ？ 大丈夫？ というか下りて。重い……」

「あ、すみません！」

俯せに激突した際スミスをクッション代わりにしていたオオツツは、すぐ立ち上がってからスミスを立てさせる。

するといきなりスミスが胸元に掴み掛かる。突然の行動に少し驚いていたオオツツだが構わず言い出す。

「なんで庇ったのよ？」

「え……？ なんでって……、味方だから……」

誰がどう聞こうとも正論のはずだ。

「分かってないわね。私の装甲ならあの爆弾くらいなんともないわ。もし一歩遅かったらあんに直撃して確実に損傷したわよ。私より装甲が薄いんだし」

「……そのくらい分かってる……でもさっきのは咄嗟で……」

「まあいいわ。言い合いは後よ。まだ輸送機が来るから」

改めてスミスは周りを見る。被害はかなり大きい。今だ炎上して微かに爆発している戦車が多数。黒く焦げた地面。原形すら留めず瓦礫の山となった基地。

再び通信が入る。

「ツツ？ 二人とも大丈夫かしら？」

「当たる寸前が三回ありましたよ！」

「今回は私の過失。何が言いたいか分かる？」

「……分かりました」

「ミッドウェー島はしっかり盗る。死なない程度で頑張ってね」

「緊迫した現場でサラっと言われても……」

天然なのか真面目なのか疑うほど軽い口調。ただひとつ言える事は、死ぬことはまずない人だという事だ。



「さすがルリさんの考案した作戦ですね。一気に戦車が倒せてます」

「エミリー、油断しちゃ駄目よ。鋼の乙女は二人基地で確認したわ」

アメリカからミッドウエー島へ向かう航空輸送機の中、先程の爆撃の戦果が伝えられた。

「でも……あれだけの爆撃で鋼の乙女は健在だからやっぱり強いのかな……？」

「まあ……確かにそうよね……」

「へえ、敵はそんなに強いのか。おっもしれえ！」

「うひゃあ!？」

突然背後から聞こえたものだからおもいつきり驚いたエミリー。

声の主はドイツ軍のミハエル。

「おっと、悪かったな。でも、こんくらいで驚いてちゃ生き延びれねえぞ」

「うう……でもミハエルさんがそう言うならそうかも……」

「ちょっと！ 私の妹を怖がらせないでよね！」

「アツハハハ、本当にチハそっくりだな。気にすることあねえぜ」

実際、エミリーはチハのように人差し指でつつんしてシュンとしていた。

「ミハエル……お前は何をやっている……」

「おう、フエイか」

様子を見かねたフエイが呆れ顔のまま話の輪に入る。

「すまない。戦闘前だと興奮気味になってな……」

「いいえ、何度も戦闘したことがありますし、性格もどんなのが分かってます」

「そうか」

無礼を詫びてか二人に軽く一礼するフエイ。

「いや、なにもそこまでしなくても」

「気にするな。私も戦後からずいぶん丸くなったようだ」

余談ではあるが、フエイとミハエルは戦時中では「最凶コンビ」と言われ、当時の連合軍も畏怖していた程強い。

「あー、早く着かねえかなあ？ 久し振りの戦闘だからな。思う存分暴れまくってやるぜ！」

「まったく、品の無い方達ですわ。もう少し大人しく出来ないかしら？」

「まあ、あれだけ元気なら頼もしいですけどねえ」

「シスターさん、さすがにそれは無いと思いますけど……」

ミハエルの振る舞いにいろいろ不平を言うイギリス軍鋼の乙女。

「へっ、そういうマチルダ達もやる気満々じゃないか」

「それはそうですね。祖国イギリスでの屈辱のお礼をしっかりと返し  
ておきますわ！ おーっほっほっほっ！」

「おお、これだけ鋼の乙女がいれば、よーさいとう軍なんて一握り  
だあ」

「それを言うなら一捻りだ、ヴィル」

ヴィルの誤字をしつかり訂正するフェイ。ちなみに最新の技術に  
よってヴィルの愛用する大砲ランドセルの全長が半分になりながら威力の維持  
に成功しているので同伴が可能になった。

「とにかく、私達はもう敵同士ではないわ。だから、私達の敵を倒  
して再び平和な世を取り戻すのよ！」

エイミーの鼓舞で搭乗している鋼の乙女全員の顔が引き締まる。

それから5分後に事態は急激に変わる。突然機体が強く揺れた。

「なっ、何！？ 今の揺れ!？」

「敵のミサイルです！ 右翼に被弾！」

「た、大変っ！」

「ミッドウェー島は目の前です！ 緊急着陸をします！ 掴まって下さい！」

「おいおい、マジかよっ!?!」

「ミハエル！」

「わかってるって!」

全員が機体の一部を掴んだ後に、さらに強い衝撃が内部に伝わる。無事とは言えないが着陸したようだ。車輪の摩擦音が耳に届く。しかし、スピードはなかなか落ちない。

途中から機体に何かぶつかる音が聞こえてきた。爆撃で破壊された敵の戦車の残骸だろうか？ そのたびに機体が軋む音も大きくなる。

(これじゃ機体がもたない!?!)

このままだと機体が大きく壊れて投げだされる。もし敵の目の前だったら命は無い。焦りと不安がエイミーの中で増えるなか輸送機は地上を滑る。

少しずつスピードが緩やかに感じ、機体の軋む音も収まり始めた。それから1分後、完全に機体は停止した。

「た……助かった……？」

エイミーが身体を起こして他の鋼の乙女を確認する。

「あゝ、皆さん大丈夫ですか？」

「おう、俺達は大丈夫だ」

「イギリス軍も全員いますわ」

大丈夫なのを確認して一息つく。しかし、そんな余裕もないことを思い出す。

「そうだ、外は既に敵の陣地内。外に出るときは気をつけていかな  
いと…」

するといきなりミハエルが扉を開け放つ。

「ようやく着いたか。さてと、突撃するか！」

「やはりな……仕方がないが、我々は先に突撃する！」

開け放った扉からミハエルが出ると間髪入れずにフェイが出る。

「ちょ、行くの早っ！」

「まあ、あれはあれですから……、エイミー、私達も出ますわよ」

「はい、分かりました。ほらエイミー、ボサツとしてないで！」

「ああ、ちょっと待ってよ」

開け放った扉から次々と出ていく乙女達。目の前に例の鋼の乙女がいるなんて誰が予想出来ただろうか。

「輸送機に戦艦のミサイルが命中しました」

「あんだ絶対偵察が似合うと思うわ。望遠鏡持ちだし」

「また馬鹿にしてえ。私は遠距離支援です！」

「ミッドウエー島基地で輸送機命中を確認するオオツツをおちよくるスミス。」

「……あら？ あの輸送機、こっちに来てるわ……」

「緊急着陸ですね。でもこの線だと残骸にぶつかって大破しますよ」

しかし、輸送機は着陸後も勢いづいたまま近づいてくる。

「……結構近いような……途中で車輪取れて胴体着陸状態なんだけどな……」

輸送機は残骸ゾーンに入ってもなお勢いづいたままだ。

「……ねえ、スミスさん。これまじくない？」

「ハア……、あんたは後ろに下がってなさい。うるさいから」

途中文句を言っていたが、結局言う通り後ろに下がった。

輸送機はとうとう15mあるだろう場所で止まった。

「……ホッ」

安堵のため息をつくスミス。実はスミスも内心焦っていた。輸送機といえども大きさは一目瞭然。まともなぶつかったらスミスといえども無事には済まなかったはずだ。

だが、安心するもつかの間、突如輸送機の扉が開き鋼の乙女が二人出てきた。

「ああ、やっぱりね。でも負けるわけにはいかないわ。将軍が一人で三十機を誘導させて戦っている」

「あつ、どおりで第二波が来ない訳か」

間髪入れずに機銃をオオツツに撃つ。

「つとお!? いきなり何をす……分かりましたから主砲向けないで……!」

「将軍にちゃんと感謝なさいよ?」

ミッドウェー島基地に残ったたった二人の鋼の乙女は目の前の敵の排除を決意する。





### 第3章10話 ミッドウエー三つ巴の戦争

ミッドウエー島の経済水域ぎりぎりの海上に要塞島軍戦艦と三人の鋼の乙女が爆撃機30機と鋼の乙女10人の欧米連合軍と戦っている。

先の絨毯爆撃から10分後、欧米連合軍が押され始めた。

30機という爆撃機大編隊は今や六分の一。鋼の乙女は一部軽傷だが全員いる。一方の要塞島軍は何一つ変わっていない。

戦艦にはいまだ二発しか爆弾が直撃しておらず、全てが船尾なため戦艦の搭載兵器の数は減らされていない。

戦艦は経済水域の端に到着してからずっと旋回を続けている。普通なら直進する魚雷を避けるために行う回避行動だがその為に行動してはではなく、ただ旋回し続けているのだ。

つまり、同じパターンを繰り返しているだけ。なのに欧米連合軍は近づくことすら叶わない。

理由は勿論敵の鋼の乙女と戦艦からの攻撃。鋼の乙女の攻撃は固有されているため、見極めれば避けに徹し隙を見て反撃できる。

それを不可能にさせるのが戦艦からの攻撃。戦艦からは大戦中で使用された機関銃や高角砲から最新のミサイル攻撃と多彩かつ数が多い。

敵の鋼の乙女も強い。サクヤは既に右腕に銃口を集中させ四段式機関銃で応戦し、ムツも断罪刀不知火を抜いて応戦する。二人だけで12機の爆撃機が落とされた。

更に初参戦の艦船タイプの鋼の乙女ラミデスは対空ミサイル、弾道弾迎撃ミサイル、12.6cm主砲を駆使して戦艦に降り注ぐ攻撃を防いでいる。彼女は爆撃機3機落とした。

そして鋼の乙女装備をしていない要塞島軍総大将ルルは戦艦の管

制室で事の成り行きを見ていた。

数で見れば欧米連合軍が上だが、力の差はほぼ等しいか下手すれば要塞島軍が上だ。誰もが欧米連合軍に臆せず戦い続ける。この世界では当たり前ではあるが。

「これだけの数を恐れる事なく我々の戦力だけを削ぎ落としていく……日本語で言う『敵ながらあっぱれ』だ」

「レンちゃん、冷静に評価する暇があるなら手伝ってよ。お腹ペコペコなんだけど」

そう評価するのは間違っていない。全員がそう思っただろう。

だが、この程度で欧米連合軍が退くはずがない。彼女達も一つの意志で戦い続けている。

「俺達は…大戦で戦い、お互いに傷付けあった」

「国を守る。それが正義だと信じて長い戦争をずっと経験したのであります」

「でもニャー達はお互い傷付けあいながら気づいたんだニャー！」

「人類同士が傷付けあうのは止められない運命…」

「だからこそ、私達鋼の乙女が立ち上がるべきだと気付きました」

「人々を心の底から安心させる絶対的な方法こそ、平和」

「大戦が終わり、我々は自分達の存在意義について考える時間が出て来た」

「そしてうちらが思い付いた答えの一つが、平和を自分達で創っていく事なんやって」

「平和でなければ私のお腹も皆の心も満たされない」

「だからこそ私達がここで戦う意味があるのよ」

彼女達なりに考えた一つの考え。

「『『全ては平和を未来に繋げる為にッ！』』」

「そう……」

管制室で一人呟くルル。サクヤとムツに付けてある盗聴器を介して今の決意を聞いていた。

ルルは手を口元に当てて漏れ出る笑い声を堪えていた。

（フフッ、フフフッ、確かにその考えは間違っていないわ。でも…

…残念ながら本当の意味での平和は未来には繋げられない。答えは簡単。一つは平和も戦争も事物の結果ではなく過程である事。留まり続けるのは無理。もう一つが個人の意識。何が平和でどこまでが平和か。人間一人一人がそれぞれ思う平和の境界が有る限りね……)

ルルは椅子から立ち上がり、身体前面を防げる例の盾を持って管制室を出て、甲板に向かう。

「ッ！ おいッ！ あれ！」

最初に気づいたのは積極的に攻めていたクレア。ムツの銃撃を避けて旋回した時にちらつと戦艦を見た時、忘れもしないリベンジを誓った相手が甲板に現れた。

だが、クレアは冷静だった。以前なら有無を言わず突撃していたが、まず目の前の敵に集中した。

「あの女性は…？」

アメリカ軍以外は初対面である為、クレアの近くに来たマーリンが尋ねた。

「ああ、あいつが要塞島軍の総大将だ。気をつける。何をしでかすか分からないからな」

「そうですね。ありがとうございます」

クレアの傍から離れるマーリン。ほとんど乱戦に近いこの場において情報の共有は大切な役割を持つ。お互いが情報を知れば動揺も少なく冷静に対処できる。

「でも、こんな奴らに時間掛けてちゃ日が暮れる。とつととぶつ飛ばして一気に潰してやる！」

戦後でも強い奴と戦いたいという気持ちは変わっていないようだ。

クレア同様、リベンジに燃えているのはムスタング。先のイギリス軍敗退は屈辱だった。実力的には同等だが相手の技術が上回った。だがムスタングの場合、リベンジだけでここにいるのではない。

それは責任感。DF技術を撮られた揚げ句に同じ仲間を守れなかった。可能はビルマ戦線から本国に帰還してもリーダーシップを發揮しイギリス軍を支えた。前途有望の彼女は誰よりも強く優しく騎士道を貫き通した。

しかし、逆に見れば彼女は期待を背負うプレッシャーと責任感が常に付き纏うことになる。

そして責任感を支える柱　すなわち一つの意志が先の戦いで崩され、直に彼女へのしかかった。

それでもイギリス軍の鋼の乙女は彼女を責めず慰めてくれた。決して一人で抱え込むのではないと教えてくれた。

（本来なら私が責任を取らねばならない事態であったのに、皆許してくれた。だから、この厚意を無下にせず必ずや敵を滅ぼしてみせます！　フェアリー先生、マーリンお姉さま、ありがとございませす！）

決意を新たに、必死で爆撃機の守りを続けた。

「ハア……ハア……墜とせない……」

「のようです。……ハア……ハア……流石本家と言ったところか」

今だ戦力の変わらない要塞島軍だが、やはり疲労という厄介者は消えない。

まして本家は全員新たにジェット機関を取り付け、対応に回らざるを得ず防戦一方で隙を見て反撃という状態であった。

戦艦やラミデスからの援護もあるが10対2はやはりきつい。

「ハア……戦力配分を間違えたのではないんですか……?」

「戦力以前……航空機は……私達だけ……」

「そこを突かれると反論しかねますが……」

その時、ムツに向かって三方向から銃弾が迫る。ムツは一次的にロケットブースターの出力を上げて避ける。緊急とはいえ身体に掛かる負担は時間と共に重くなる。

「そのようにしてお互い話をする余裕があるのでしょつか?」

ムツと同じ高度にまで上昇し、ムスタングは尋ねる。

「二人しかいないから、そのつど確認しあう方が私達はやりやすいからな」

冷静に答えるが身体は臨戦状態。いかなる奇襲でも避けられる自信がある体勢をする。

「そうですか。なら、それも出来なくなるぐらい激しくいきますわっ！」

「いいだろう。ロンドンでの決着を付けようか、ムスタング！」

同時に二人はブースターを最大に上げて亜音速でぶつかり合う。

「……正義感からか熱血バカからか……すぐ熱くなる……」

軽くムツに愚痴ってから欧米連合軍に向き直る。多分ムツとムスタングには手出し出来ないから自然と戦力はサクヤに傾く。そうなると戦艦に接近される恐れがある。

「……やるしかない……」

そう言い聞かせて自分を奮い立たせる。

「シューティングスター！」

マーリンがサクヤに向けてエネルギー弾を放つ。だが距離がある為軌道から逸れてやり過ぎしたが、

「キャットザテンペスト！」

「ブラストチャージ！」

直ぐさまクレアが正面、ネコが背後から必殺技を繰り出す。

だが焦らず、背後から迫ったネコに牽制として銃撃し、ネコ型爆弾を破壊する。後は近づくクレアを迎撃すれば終わりだが予想外の出来事が起きた。

「いつけええつ！！」

クレアは近づく事なくジェット機関で加速された足で爆弾を蹴った。普段やる時よりも距離が数倍離れている。本来至近距離で蹴り出す技だからジェット機関を使用しても変わらないと一瞬予想したが違った。

普通に蹴るのとジェット機関を使用した蹴りの速度は天と地の差。蹴られた爆弾は圧倒的な速度を持ってサクヤとの距離を埋めた。

「ぐうッ！」

避けられないと理解はしたが視認出来ない速さであった。ならば即座に銃撃して爆破できたはずだができなかった。爆弾はサクヤの腹部に減り込んだ。内燃機関がメキメキと音を立てているのが感じられた。

そして爆発。この間、約0.5秒。

「よしっ！ これで…」



しかし、クレアの目論み通りにはならない。煙が引いていくと、サクヤは健在していた。ただ、服の左半分の四割が破れていた。そして苦痛の表情を浮かべていた。

あの時、身体を斜めにして爆弾を受けた。それでできた隙間から左手を差し込んで爆弾を押し出したのだ。

「ちったあ効いたようだな」

今の今までまともに攻撃を当てていないアメリカ軍にとって初の有効打であった。

「ぐっ……、よくも……」

サクヤは構わずクレアに単機突撃する。だがクレアはこれを楽しんでいた。

「私達の存在も」  
「忘れちゃ困るんだけど」

クレアの事だけしか考えてなかったのか周りが見えてなかった。横から接近してきたマーリンとエーリヒに気づいた時は二人とも既に射撃寸前だった。頭では反応出来なかったが、身体が反応したのかブースターの出力を0にして急停止した。

だが二人はそれすら予想してたかのように機銃で狙い撃つ。二人とも戦闘機のエース。自然とサクヤの行動に対応できた。

右腕、左足、両翼に数発ずつ被弾。被弾場所から鮮血が吹き出す。すぐ後方に向けてブースターを起動させる。急激な停止から急激な

後方移動は身体の小さいサクヤにはかなり堪えた。被弾場所からの出血が被弾直後より酷くなっていた。

逆に欧米連合軍は勝機が見えた。一旦負傷すればジェット機関の使用を控えると読んだ。先程のサクヤの回避行動が証拠である。

しかし、欧米連合軍の思惑通りにはならなかった。サクヤは肩に掛けていた黒い直方体のバズーカ砲に手を掛けた。

「スピードを捨てて遠距離に出るかっ！」

すぐクレアが突撃しようとした瞬間、ネコに止められた。

「だ、駄目だニヤ！ 近づいちゃ駄目だニヤア！」

なぜ止められたか分からずせつかくできたチャンスを突く為にネコを振り切ろうとしたが、サクヤを見て止めた理由が分かった。そして反射的に近くの仲間に叫んだ。

「お前らア！ すぐにあいつから離れるお！！！」

サクヤが構えた直方体のバズーカ砲の先端に赤く白い光が収束し始めた。クレア達は同じのを見たことがあった。朝鮮戦争で見たR型戦闘機が放ったあの攻撃を。

「巡航艦級波動砲『ヴァーン砲』」

放たれた膨大な熱エネルギーは巨大な柱の如く欧米連合軍へ向かう。

「むっ、使ったか」

戦艦の甲板から観察していたルルは戦艦からの攻撃停止命令を出した。

近くで迎撃していたラミデスも戦艦からの攻撃が止むと攻撃を中止し、戦艦へ近づく。

「今のサクヤの攻撃で爆撃機の消滅を確認した」

「じゃあ後は鋼の乙女だけ……」

「潮時かしら……そろそろ帰還命令でも」

言いかけた時、背後からジェット機関の音が聞こえた。振り向いた時には上空に大きい爆弾　裕に6mぐらい　が落ちてきて……。

「すみませんけど、容赦しません！　グランドスラム！」

イギリス軍爆撃機の鋼の乙女、ラン。そういえばあの中になかったのはこの奇襲の為だろうか。

「し、將軍ッ！！」

ラムデスが危険性を感知して叫んだが、ルルはことあるうか例の盾を翳した。

そして有り得ない事実がランの目の前で起こった。

盾にほんの僅か触れた巨大爆弾は爆発せずに水平投射されたように真横に跳ね返り、後に海へ着弾する。

ほんの一瞬の出来事。辺りは何も起こらなかったかのように静寂に包まれた。いや、上空から銃撃が聞こえる程度だった。

「……えーっとお……？ 何が起きたんでしょうか……？」

全く分からず混乱状態のラン。当然の反応だ。  
必殺技でもある爆弾が跳ね返って海に落とされたのだから。

「まあ……、簡単に言えば、爆弾が直角に落ちてきたから盾を地面から大体45度に調整して当てたから水平投射したわけ」

「へえ、そうでしたか……」

どうでもいい解説に相槌を打つラン。

(……精神的ショックで頭がやられたのかな？)

そう思わざるを得ないラミデスだった。

場所は変わり、ミッドウエー島基地前。輸送機の無謀な着陸が功を奏し、眼前には敵が二人いた。

二人とも鋼の乙女で、一人は朝鮮戦争で出会いロジーナに追いかけられたオオツツ。もう一人は報告だとイギリス軍を一蹴したというスミス。

先の爆撃で生きていたので生半可な実力じゃ勝てないことをエイミーは理解している。

しかし、戦力なら欧米連合軍が多い。8対2であろうか。

「ゲツ、將軍達が戦ってる人数と同じくらいじゃん」

「よく見なさい。二人足りないわ」

やはり大人数で来たのは正解だ。敵の反応からしてかなり有利に倒せそうだ。

と、ここでミハエルとフェイが前に出る。

「よお。お前、イギリス軍に一人で戦ったんだってな。やるじゃねえか」

「ドイツ軍の最凶コンビか。わざわざ私に挑みに来たわけ？」

「本来はミッドウエー島奪還が任務だが、ミハエルがどうしても戦いたいとな」

「そういう事だ。久し振りの強敵にワクワクしてんだ。俺達は二人だし、お前らも二人でこいよ」

スミスはちらつとオオツツを見遣る。当の本人は多分近距離に自信が無い。すぐ視線を戻す。

「その必要は無い。私一人で十分。いや、8人とも私が相手するわ」

「はあ！？」

全員が耳を疑う発言だ。いくら強いからと言って8人の鋼の乙女に挑むのは無謀だろうと思った。だが欧米連合軍側からすれば一点集中で倒せば基地も簡単に奪還できる。

しかし、誰も簡単な事でないのは分かってる。これだけ自信があるのは裏に何かあるからではないか？ かつての最強の鋼の乙女のように。

「クツクツクツ、おもしれえ。それくらい言えなきゃ楽しくねえもんな！ 気に入ったぜ！」

「どうも」

ミハエルも待ちきれないようだから早く攻撃した方が良さそうだ。

「私達も参加するわよ！ いいわね？」

「お好きに、欧米連合軍さん」

ちょうど向こうの海上で（戦艦の後尾に爆弾が命中した）爆発音が聞こえたのが合図となった。

「オラア！ 全部まとめて吹き飛ばしてやるよッ！！」

身振り構わずミハエルが突撃、続いてフェイ。さらにイギリス軍とエイミー姉妹と続く。

ミハエルが機銃と主砲で攻撃してきたのを回避して反撃。しかし、いくら強かろうと普通の砲弾。普通に避けられる。再びミハエルの攻撃を回避する瞬間にフェイが後ろに回り込み主砲を放つ。それをすかさず機銃で相殺する。

「ほう、私の主砲を機銃で相殺するとは。確かに強いな」

「評価してる暇があるならさっさとやられろ、つと」

スミスは主砲だけをフェイに向け発射する。勿論フェイも避ける。

「さすが最凶コンビ」

「へっ、まだまだ温いな」

ミハエルの主砲とスミスの主砲が同時に撃たれ、ちょうど中間で爆発。瞬間、スミスはバックステップする。するとその場所に砲弾が三発着弾する。撃つたのはイギリス軍の三人。

「私達の存在をお忘れで？」

「むう……」

やはり一人ではきつい。ドイツ軍の最凶コンビが前に出て、イギリス軍が遠距離から精密砲撃。これでは分が悪いのは見え見えだ。精密砲撃で撃たれた砲弾を近くの瓦礫を拾って防ぐ。防いだ瓦礫をイギリス軍に投げるがフェイが砲撃で撃ち落とす。

すかさずミハエルとイギリス軍が集中砲撃。それらも避けられる。

「なかなかすばしっこい奴だな」

「この程度で」

スミスは距離を取る為後ずさった時、決定的な不可抗力が働いた。瓦礫に足を取られ一瞬体勢を崩した。すぐ立て直すも遅く、マチルダの精密砲撃が左腕に被弾したが、それだけでない。

「しまっ、煙幕弾ッ！」

被弾箇所から黒い煙幕が発生し、スミスの視界を奪う。

「おしっ！ よくやった」、マチルダ！

「我々イギリス軍をナメないで下さる？ 前回の雪辱を晴らしますわ！ おーっほっほっほっ！」

マチルダの煙幕弾が発生した煙幕にミハエルが突っ込み、

「行くぜ！ フリューゲルホルン！」



上空へジャンプし、エネルギーを纏わせてスミス目掛けて一直線に飛び蹴りをする。視界の晴れないままだがスミスの真正面に命中し、背中から地面に叩き付けた。

「ガッ…ハッ！」

地面に叩き付けられ口から吐血しながらも反射的に機銃をミハエルに向けたがすぐに後退して避けられる。

立ち上がってすぐ主砲を放つが別方向からの攻撃で体勢を崩される。

（ま、まずい！）

そう思つのもつかの間、フェイが主砲を構えて背後にいた。

「エアオーベルング」

スミスに主砲を三連射。至近距離であるのがさらに効いた。が、倒れず後ずさり煙幕から出る。

「おっ？ そんなボロボロで出るとは格好の的だぜ。ブリッツッシュ  
ラーク！」

今度は遠距離からスミスを狙い撃とうとしたミハエル。だが、スミスも主砲を構えていた。

「照準セット、終わりだ！」

主砲に溜めたエネルギーを纏った砲弾がスミスに向かったが、

「デス・スロウズ 鮮血」

スミスは超高速回転弾を放ち、ミハエルの必殺技を破った。

「な、何イ!？」

「ミハエル! 避ける!」

自分の必殺技を破られて一瞬戸惑うもフェイの檄で砲弾を避けたが、

「うおっ!?!？」

避けたはずなのに服の一部が擦り切れて軽く赤い液体が流れた。途中まであった煙幕も一瞬で消し飛ばした。

「な、い、今の…!」

後方支援していたマチルダとシンの背筋が凍った。一度あれにやられたからだ。しかし、シスターはすぐに大声でドイツ軍二人に言った。

「その必殺技には予備動作があります! 主砲を狙って下さい! それで阻止出来ます!」

「よしっ、分かった!」

応えたのはフェイ。得意の高速移動で距離を縮め攻撃しようとした。

「ッ！！！」

一瞬だけ、本当に一瞬だけ本能が離れると警告した。フエイは瞬間的に離れた。僅か0.7秒後に自分のいた場所に金属の突起が現れた。

もし本能に従わなかったら今頃あれに突き刺さっていた。

金属の突起はスミスの右腕の主砲から現れた。

「な、何だ！？ 今の突起は！？」

「チツ、反応の早い……」

金属の突起は主砲に収められ、再び砲弾を放つ。フエイは主砲で相殺する。

「教えてあげようか？」

フエイはスミスの表情を見た。  
笑顔。作り笑顔だ。

「今のはパイルバンカー。特殊合金で作られた杭を主砲の発射の反動で圧縮された空気を解放して放つ近距離最強の一撃。今の時点なら」

「今の時点なら？」

「そこまで答える義理は無い」

言い終わると足元に砲撃し、フェイを転ばせる。

「ッ!!? しまっ…グッ!？」

すぐ起き上がろうとしたが馬乗りになれ主砲を向けられる。

「これならもう逃げられないよね……」

左腕も押さえられて主砲も構えられない。万事休すだ。

「じゃあ………」

砲撃音が響く。しかし向こうがどうなっているのか分からない。

それより三人の鋼の乙女をどうするかが今解決すべき問題だ。

向こうが戦闘を開始した時に気づかれずに移動したつもりだが…  
…まあ、当然と言っべき配分だろう。

「ほんと参るなあ………」

ミッドウエー島基地後方でオッツの前にエイミー姉妹とヴィルヘルム。こちらにも近距離と遠距離の配分である。

「この人ってあの時の……勝てるかな？」

「いまだ不安を隠せないエミリーに、

「相変わらずね。大丈夫よ！……多分」

だが実際に戦うのは初めてであり実力も不明。姉妹が唯一見た実力と言えば朝鮮戦争で立ち上る黒煙を纏う強力な砲弾。

「いや、ここはドイツ軍年長(?)のヴィルがいるんだ！ 絶対勝てるぞ！」

「ほら、見習いなさい」

「凄い自信。子供なのに」

「じ、こら！ ヴィルは子供じゃない！ 大人だ！！」  
いつものツッコミをするヴィルヘルム。

「…あつ！ ちょっと待って！」

会話している間に離れようとしたオオツツを呼び止めたエミリー。

「うっ…、やっぱり戦わないと駄目かな…」

敵は何故か逃げ腰だ。

と、ここでエイミーは敵が逃げ腰なのかピンと来た。朝鮮戦争でもそう、先程のスミスの発言から彼女は遠距離でしか攻撃出来ないのかもしれない。ならば相性はバッチリだ。

「そうよ！ あんたもミッドウエー島基地を占拠した主力なら、ここで倒さしてもらおうわー！」

エイミーが主砲を構え、エミリーも做って主砲を構える。ヴィルヘルムもランドセルから砲台を用意する。

「むうー……」

よく分からないが不機嫌だ。どうやら本当に近距離攻撃が苦手なようだ。

「じゃあチャツチャと終わらせ…ッ！！！！？」

今エイミーが掛け声をやめたのは目の前で爆発　砲弾が着弾したから。

オオツツを見た時、誰もが驚いた。オオツツの背負うリュックのサイド側から伸びたバズーカ砲が彼女の右手にあったから。

「あなた達の思う通り、私は近距離は苦手だけど……近距離装備が無いなんて言っていないけど？」

油断していた。近距離は苦手なのは、遠距離しかないからと思っていた。そうでなかった。対策はされていたのだ。

「はあ……全くさっきの奴といいあんたといい……」

「お、お姉ちゃん？」

「本当に常識が通用しない相手ばかりねッ……」

叫ぶのに近い声を出して一発放った。

「はにゃ！？ うわっと！」

不意打ちだが辛うじて避けたオオツツ。

「やっぱり速度が速い……でも負けるわけにはいかない！」

「エミリー、ヴィル、行くわよ！ 一点攻撃！」

意気込む三人による一斉砲撃。オオツツは副砲で一部相殺して避ける戦法を取った。

オオツツの砲弾は副砲も特殊で、どれも放物線を描くため仰角をプラスして相手に命中させる。今のような混戦では感覚で調整するしかないが、逆に足元を狙って体勢を崩すのもできる。

「うわっ！？ 何なのよ！ 足元ばかり！」

エイミー姉妹に対してもこうせざるを得なかった。それも距離をとるために過ぎない。

「……………よしっ！ 自走砲発射ッ！」

距離がとれ、背中 of 自走砲を撃つ。砲弾は黒煙を纏いながら上空に上げられた。

「お姉ちゃん、あれ！」

「やっぱりね。あんたが連合軍も中朝軍も攻撃したのね！」

「てゆうか過去にこだわらないでよッ！（と言つよりあの時のレーダーが欠陥だったんだよ！）」

すかさず二発目の自走砲を放つ。近づいてくる姉妹は副砲で牽制する。やがて最初に撃った砲弾が着弾すると、凄まじい爆発が起きた。その衝撃で基地の残骸で残っていた鉄柱が崩れる。

「やっぱり威力は凄い……けどね」

エイミーが主砲でオオツツの副砲を相殺する。

「あなた達の弱点も分かったわ」

「はっ？ 弱点？ 近距離での戦闘のこと？ それがどうしたって言うの！」

「違う」

エイミーの意味深な言葉に一瞬副砲を下げた。

「違う…？ ……あっそ、ただのはったりね！」

すかさず下げた副砲を上げてエイミーに放とうとした時だった。

「カノーネトロンベ！」



遠くからヴィルヘルムが無数の砲弾を放ち、最後に威力が高い砲弾が放たれる。スピードが速く避ける間もなくオオツツに砲弾が着弾し、最後の砲弾が命中し大爆発を起こした。

「キヤアツ!!!」

衝撃で後方に吹き飛ばされるオオツツ。

「これよ。あんた達は途中で一点に集中して周りが見えなくなる。戦場じゃ致命的な弱点ね」

「痛ツ……今のは効いた……ゴホツ」

俯せて倒れたオオツツは腹部を抱えながら立ち上がる。

「いける！ エミリー！ 合体技よ！」

「ふえっ！？ いきなり本番なのぉ〜!!!?」

「チャンスなんだからいくよ！ フルシンクロアタック！」

「ふ、フルシンクロアタック！」

同時に跳び上がり、数発主砲を浴びせる。着地するとその場でフリと一回転。そして傍に寄り、主砲を重ねて強力なエネルギー弾を放った。今回チハと違うのはエイミーとエミリーは双子であり、主砲の規格も全て同一。そして敵を倒すという強い思いも同一。思いを載せた弾は一直線に、オオツツへと進む。

「ひっ、ひいつ!!!」

泣き叫ぶ声で回避しようにももう遅い。

「キヤアアアアアア………！！！！！！！！！！」

命中と同時にオオツツの断末魔が響き渡る。

「た、倒した？」

攻撃を終えて近づく三人。オオツツは仰向けに倒れていた。息はあるが所々服が破れていて重傷。副砲も使えない。もはや戦闘不能だ。

「なあなあ、こいつはどうするんだ？」

ヴィルヘルムがエイミーに尋ねる。

「そうね。とりあえず縛って本国の諜報部に……いや、本国に持ち帰るだけでいいわ」

慈悲なのか分からないが、諜報部送りはしたくなかった。諜報部に連れていかれば無事には済まない。ライトニング姉妹の事だから肢体切断とかしそうだ。

残骸から残っていたロープで縛ってから、

「エイミー、もうすぐルリさん達を載せた空母が来るからこいつを

引っ張ってでも海岸に連れていきなさい」

「お姉ちゃんは？」

「マチルダさん達の加勢に行くわ。向こうは正真正銘の重戦車だから」

「ヴ、ヴィルも行くぞ！ 皆を助けないと！」

「じゃ頼んだわよ」

そう言っただけでエイミーとヴィルヘルムは基地の入口方向に走り出す。一人残されたエミリーは気絶しているオオツツに向かってボソツと呟いた。

「あ、あの、引っ張って行きますので……いい、痛くしないようにいきますから……」

字の如く引きずって移動する。

### 第3章 1 1話 R型戦闘機強襲！ ミッドウェー島決着

#### 海上の戦闘

この過去の地球に滞在して長い月日が流れた。その間も外宇宙を経由して我々の故郷と連絡を取り合い、太陽系解放同盟軍の足跡やバイドの動きを逐一知らされている。昔の地球とはいえ我々の艦隊の技術力は少なくとも二世紀分先である。

すると、報告された情報の中に太陽系解放同盟軍残党の艦隊が再びこの地球に接近するとあった。我々に見してみれば追撃のチャンスであるが、彼女達との約束を破る訳にはいかない。

我々が検知したR型戦闘機は彼女達曰く要塞島軍と呼ばれる軍に所属されているらしい。我々も聞いたことのない軍であり、少なくともこの世には存在しない軍であろう。

この地球に滞在してからR型戦闘機の駐屯基地である要塞島を分析したところ、「アングルボダ級」宇宙空母の存在を確認し、外宇宙からやってきたのは分かったが何故ここにいるのかは分からない。

これだけならば、我々はこれ以上長く滞在する必要はない。彼女達も我が軍を使わず単機でR型戦闘機を撃墜できる能力がある。だが、分析結果で要塞島は我々が予想だにしない事態となっていたことが判明した。

例の要塞島からバイド反応が検出された。ごく微量で危険度にすら区分されない程小さな係数だ。しかし、我々を含めて衝撃を受けたのは言うまでもない。そして、この事だけは彼女達に黙秘している。

しかし、いくらなんでも19XX年にまでバイドが進出するというのは考えられず、我々はこう考えた。

要塞島でバイド実験をしている可能性がある。かつて我々人類がバイドに対抗するために開発したフォースのように……。となればますます不可解である。もし我々がいた22世紀からバイドを連れてきたなら分かる。太陽系解放同盟も、不完全ながらもバイドを支配する装置「BBS」（バイド・バインド・システム）を作り上げた程だ。太陽系解放同盟と同等の技術力があれば可能になる。だが連れてきたなら何故この地球で研究をする必要があるのか？ 今の我々では知る術は無い。

それから月日が経ち、要塞島に近づくチャンスが発生した。要塞島軍がミッドウェー島へ遠征を行い、欧米連合軍と日本軍が防衛する事態となった。遠征ならばかなりの戦力を傾けていると思った私は要塞島への航路を指示した。彼女達も同伴している。

だがこれも予想されたのか我々の進路上に敵戦闘機の反応を確認した。

今回は彼女達もR型戦闘機に搭乗し、戦闘を行う。R型戦闘機なら各個撃破より効率的かつまとめて撃破が可能だからだ。

敵は「マーナガルム級」巡航艦を筆頭に編成されている。

私はこれから作戦室に入り、全軍の指揮を執る。過去の地球で初めての艦隊戦闘だ。

地球軍特別遠征艦隊指揮官アレン・F・ソフトの航海日誌より

日本軍は鋼の乙女とR型戦闘機の混成軍であるのは要塞島軍も承知している。だからこそ自軍のR型戦闘機をぶつけた。而してその名目は単なる時間稼ぎ。日本軍の足止めしつつミッドウェー島を陥落させるのが要塞島軍の作戦だが、やはり上手くいかなかった。

「進路上に敵R型戦闘機を確認！」

特別遠征艦隊の司令官アレン・F・ソフトが搭乗する「テュール級」宇宙戦艦から日本の鋼の乙女が搭乗する「ヨルムンガンド級」輸送艦に伝えられたのは日本の鋼の乙女駐屯基地から発艦して2時間後だった。太平洋上空で。

「むう…やはり敵は我々の存在を知っているか……」

戦艦の艦橋で顔をしかめるアレン。朝鮮戦争で援軍を出したのが裏目に出たかと考えた。

「敵は多くありませんがどれも我々の所有するR型戦闘機と同等です」

「ならばパイロットの腕前で勝敗を分けるか……」

「どうしますか？ 彼女達は二ヶ月足らずの訓練しかしていませんが……」

アレン達は日本の鋼の乙女駐屯基地で滞在していたので、乙女達をR型戦闘機に搭乗させて訓練を行わせていた。短期間であるが理解が早いのか動きから攻撃まで一連の動作は可能になっていた。

「構わない。彼女達なら大丈夫。仮に戦闘機が壊されても緊急脱出できる装置を即席だがつけてあるし、単体で戦闘を続けられる」

「了解。これより戦闘体勢に入ります。提督、艦隊の指揮をお願いします」

「ヨルムンガンド級」輸送艦は二隻同伴し、両方に鋼の乙女が搭乗している。片側は旧海軍。もう片側は旧陸軍。出撃命令が下され、収容されているR型戦闘機に乗り込んだのは海軍ではレイとナナ。陸軍ははやぶさとひえん。

「レイちゃん、ナナちゃん、気をつけてね」

出撃前にあかぎは二人に声を交わす。

「心配無い。他のR型戦闘機が支援すると言っていたから」

「レイとぼくだったら楽勝だよ」

レイは冷静に、ナナは自信満々で出撃した。レイは可変戦闘機「エクリップス強化仕様型」、ナナは中距離支援機「モーニング・スター」。

陸軍勢もほぼ同時に出撃したようだ。はやぶさは高機動機「ピースメーカー」、ひえんは火炎武装機「ドミニオンズ」。戦艦からも幾つかR型戦闘機が出撃し、敵を捉えた。

敵は「マーナガラム級」巡航艦と「フレースヴェルグ級」駆逐艦に複数のR型戦闘機。

レイ達より先に出撃した日本側のR型戦闘機は敵の「レディ・ラブ」と「エクリップス実戦配備型」と既に戦い、幾つか光線が入り交じる。

「行くぞナナ！」

「よしてきたレイ！」

レイは加速を行って敵との距離を埋め、「XPSレーザー」を照射。レディ・ラブの一機が小さな爆発に転じる。敵のエクリップスが追尾ミサイルを放つが、レイは隙間を縫うように避け、自らも追尾ミサイルを放つ。敵のエクリップス二機が爆発。味方も数機撃破し、新たな敵が近づく。爆撃機「ステイヤー」と「スレイプニル」。

「あの爆撃機は強力なミサイルを放つと聞く……早めに倒すか！」



レイは再び接近し、味方もそれに準ずる。追尾ミサイルを放つがバリア弾に阻まれる。

「あれがバリア弾と言うのか……ならば波動砲でっ！」

しかし、ステイヤーの追尾ミサイルがレイのエクリプスに被弾した。

「なっ！？ しまっ…！？」

波動砲発射に必要なエネルギーがゼロとなり、すぐ後退しようとしたが、スレイプニルが例のミサイルの発射準備をしていた。味方は敵増援のエクリプス実戦配備型に抵抗している。

「レイ！ 今すぐ上昇して！」

突如通信機からナナの声が聞こえた。それと同時に反射的に機体を上昇させた。すぐ下でナナのモーニング・スターの圧縮波動砲が通り過ぎ、「バルムンク」を放つ寸前のスレイプニルを包み、爆発四散した。

「ナイスだ、ナナ！」

「へっへっくん、支援だったら任せてよ！」

レイがナナを賞賛するとすぐに敵にXPSレーザーを放ち味方機を援護した。

「全機！ フレーズヴェルグ級駆逐艦が接近！」

戦艦のアレンから通信が入る。

「来たか……」

敵を撃破したレイは補給を受け、気を引き締めて発進させる。やがてフリースヴェルグ級駆逐艦が姿を現し、追尾ミサイルと光子魚雷で味方機を撃墜する。レイは追尾ミサイルを迎撃して攻撃をするが、敵エクリプスとレディ・ラブが立ちはだかる。レイはXPSレーザーで薙ぎ払い、再び攻撃を試みる。しかし、その途中ふと横を見た。視界に移ったのは味方機が撃墜された瞬間だった。

「ッ！！！」

すぐに顔を背け、目の前に集中した。この数秒、敵にチャンスを与えてしまった。一機の敵エクリプスが衝撃波動砲をレイに向けて放った。それが目に映った瞬間、後退していた。一瞬の判断力で波動砲は回避出来たがさらなる追い撃ちがレイに襲い掛かった。

「……機体が動かない。燃料切れ!？」

エクリプス系の利点は加速。その代わり燃料消費が1.5倍になる。途中味方の「POWERアーマー」で補給したがもう無くなっていた。

勿論敵エクリプスがレイに接近して撃墜せんとしていた。

「ミサイルはあと一発……」

敵がミサイルを放ち、迎撃したがミサイルはゼロ。もはや手の打

ちよつ  
が無くなった。

すると、レイの目の前に速い速度で何かが止まると何かは光子魚雷を放ち、レイに向かってきた敵を撃破した。

「レイ。頑張るのはいいけど自分の状態も見ないと」

通信機から聞こえた声ははやぶさ。

「味方の補給機を誘導したからもう大丈夫だよ。ここでやられちゃ駄目よ、私のライバルなんだから！ ……それに、まだ胸の決着付けてないから！」

最後のは今は関係無いが九死に一生を得た気分だった。

「すまない」

「また昔みたいに戻ってない？ 一人で頑張らないで、皆で頑張るのよ。それが『家族』なんだから！」

そう言うつや否や、はやぶさは圧縮炸裂波動砲を駆逐艦に放つ。波動砲は命中し、艦全体が大きく傾く。レイも気持ちを切り替え、補給が終わると駆逐艦に接近してXPSレーザーを放つ。

これが決定打となり、フリースヴェルグ級駆逐艦は爆発四散した。

「さすが私のライバル、やるう」

上機嫌なのか軽い感じでレイを褒める。だが、はやぶさのちょうど背後から敵のステイヤーが近づいていた。

「はやぶさ、うS…！」

レイが忠告する前にナナの圧縮波動砲が敵を撃破した。と、レイの視界が突然炎に変わり、背後で爆発音が聞こえた。視界が晴れるとさっきと変わらない景色だった。

そこに通信が入る。

「もう、二人とも駆逐艦撃破してから気い抜きすぎだよ！」

「やれやれ、僕らがいなければかわいい小鳥ちゃん達がどうなっていたことやら……」

若干ふて腐れたようなナナの声と困ったようなひえんの声だった。

「ひえん、ナナ、ごめん。私もレイの背後の敵を知らせようとした時で……」

レイは驚いた。自分の背後に敵がいたのに全然気づけなかった。

……だがレイ自身もはやぶさの背後の敵を知らせようとした。ならばはやぶさも自分の背後の敵に気づいてなかったのか？

その時、マーナガラム級巡航艦が接近していたことに気づいたひえんが叫ぶ。

「皆！ 敵の旗艦だ！ 早く離れないと！」

「敵の旗艦が！？ でも攻撃しなければ」

レイだけその場に留まる発言をしたが、その時アレンからの通信が入った。

「全機！ テュール級宇宙戦艦より後方へ！ 巡航艦は我々で討つ」

仕方なく命令通りに後方へ後退するレイ達。戦艦はギャラルホルン砲から16門大型誘導ミサイルをマーナガルム級艦首に当て、ヴァーン砲を使えなくし、グレイプニル砲から陽電子砲を放ち、マーナガルム級巡航艦を貫いた。

「……………」

「凄すぎる……………」

「なんて威力……………」

「なんと美しい……………」

初めて見る戦艦の性能に乙女全員が息を飲んだ。

まだ形状を保っている巡航艦に追尾ビームHを照射し、機関部に命中させて爆発に転じた。旗艦が撃破されたことで味方機と交戦していた敵R型戦闘機は戦闘を停止。

「この作戦は我々の勝利だ」

その一言で戦艦内で歓喜の声が上がり、乙女達も安堵の息をつく。すると再びアレンから通信が入る。

「鋼の乙女の諸君、よくやった。初戦闘だったがどうだったかね？」

「十分な程の戦果でした」

「少し危なかつしいけどまあ、良かったかな？」

「機体一つで性能が違うのでかなり便利でした」

「僕にとって美しい光に見えたよ」

感想はそれぞれだがR型戦闘機に対しては高評価らしい。

「何よりだ。しかし我々も君達の適応力と上達の速さに驚いている」

「私達は元々兵器から作られたから、兵器同士相性が良かったのか  
もありません」

応えたのははやぶさ。だが、乗組員にとっては正直今の言葉には  
複雑な気持ちだろう。

「それも一因かもしれない……。とにかく、君達に影響が無ければ  
我々も心配しない。そろそろ輸送艦に帰還して、他の仲間を安心さ  
せておいとくように」

「了解っ！」「」

レイ達は命令通りヨルムンガンド級輸送艦に帰還した。

レイとナナはあかぎ達のいる輸送艦へ帰還。着陸後、キャノピー  
を開き顔を出す。

「ただいま、無事に帰ってきたよ」

ナナの声が響き渡る。それを聞いたあかぎ達が集まる。レイもキ  
ャノピーを開けて降りる。

「レイちゃん、ナナちゃん、大丈夫だった？」

心配そうに声をかけるあかぎ。でも二人の無事な姿を見て一安心したようだ。

「レイお姉さま、ナナお姉さま、お帰りなさい」

「帰ってきたな。敵に大和魂を一撃加えてやったか？」

「それはやまとさんがする事だと思いますが……無事で良かったです」

「ゆきかぜちゃんは二人の事を一番心配していたのよね」

「い、いちこさん!？」

「あら、ゆきかぜちゃんいい子じゃない。お姉さんが後でぎゅゅってしてあげる」

「えっ? ええっ!？」

いつものたわいない会話が輸送艦内で続けられる。

ほんの5分過ぎた頃だろう。徐々に盛り上がり薄れ、会話が弾まなくなってきた。それと同時にあかぎ達から暗い雰囲気が出てきた。何か変だと思い、レイが尋ねる。

「あかぎ? 何かあったのか? 暗い雰囲気出して、あかぎらしくないぞ」

「……………」

無言だった。ナナも不思議がる。再度レイは尋ねる。

「……………あかぎ?」

ようやく口を開いたあかぎだが声が小さい。

「?、なんて言ったんだ?」

レイは聞き取れる距離まであかぎに近づいた。

「あかぎ……」

「じ……実は……ミッドウェー島を奪還する欧米連合軍が……負けちゃったの……」

「えっ?」

「それで、私達に撤退命令が出されたわ……残念だけど……」

日本軍と要塞島軍のR型艦隊が戦っていた時、ミッドウェー島では急激に展開が変わった。

ミッドウェー島海域ではサクヤの携帯式巡航艦波動砲により負傷者が多数。掠っただけでも損傷度合はかなり深刻だった。また、連合軍側がジリ貧に陥り、攻撃続行不可となりやむを得ず撤退。これを機に戦艦「不滅」はミッドウェー島へ向かう。

島内ではスミスがフェイを押さえ付けるもミハエルの「ブリッツシュラク」で難を逃れ再び正面衝突。しかし、戦艦の艦砲援護により被害が上昇。長期戦の末に連合軍が撤退。

ミッドウェー島に到着したアメリカ軍空母で脱出。事実上欧米連合軍は敗北を喫した。



このような結果を一体誰が落ち着いて受け取れるだろうか。

「くっそあーっ!! あと一歩だったのに艦砲で邪魔しやがって!!」

「もしジリ貧にならなきゃ絶対勝てたのによお!!」

「ニヤー!! ニヤーはとっても悔しいニヤー!!」

「イギリスのみならずここでも負けるなんて……絶対に許しませんわ!! 要塞島軍!!」

乙女達は各々文句や愚痴を言ったり自分の部屋でひっそり反省してる者、逆に悲観的になる者など様々だ。

「ルリさん、どうしますか?」

フランススが空母内の状況を見て尋ねる。

「とは言っても私達は遅れてしまったし、彼女達を諭す権利など……」

アメリカ軍兼欧米連合軍鋼の乙女指揮官としても責任を感じている。しかし、ルリの頭の中には既に次の作戦案が完成していた。

(ミッドウェー島は完全に取られましたけどまだ迎撃準備は不完全。ならばミッドウェー島に散発的に奇襲を行い、要塞島から兵器を多く引つ張り出し、手薄になった頃合いを見計らって再び全軍を要塞島攻略にあてる。被害は大きくなりますが決定的な勝利に繋がるはず……)

理想の作戦ではあるがミッドウェー島への奇襲部隊が生き残れるか分からない。ある意味自ら自殺志願者をとれる。そうとわかって

誰が協力するのだろうか。

一方、戦闘が終了し、戦艦がミッドウェー島に（砂浜であるが）着港し、降りてきたルルとラミデスは基地に向かった。倒壊した基地の片隅、大きく曲がった鉄柱のもとに座り込むスミスを見つける。

「スミっ！ 大丈夫か！？」

目を閉じて眠るように座り込んでいたスミスは声に反応して顔を上げた。意識はあるようだ。

「あっ……… 將軍……… 無事でしたか………」

「随分酷いやられっぷり……。ラミ、スミをお願い」

「はいっ！」

ラミデスは背中の武装を外し、スミスをおんぶして運ぶ。

「もう……… どうして無茶を………」

スミスを背負うラミデスに歩調を合わせ、溜め息をつきながら話すルル。

「無茶を……… した覚えは………」

ルルは手に持っていた計器をスミスに見せた。

「損傷度合93%。あと一発喰らったら戦闘不能……悪くて死亡」

「そう……でしたか……」

しかし、スミスの目はどこか虚ろいである。内燃機関の重要部位でも損傷したのだろうか。

「あの……将軍……回復……するまで……寝て……いい……ですか……?」

「回復するまでよ」

「ありがとうございます……」

それからスミスは一定のリズムで静かに寝息を立て始めた。ルルはスミスの黒髪の長髪をそつと撫で下ろした。

「ラミ、あなたは先に艦に戻って。私は少し基地に用がある」

「分かりました。早めをお願いします」

ラミデスはスミスを背負いながら戦艦に向かい、ルルは基地跡地へ向かった。オオツツが見つけた奇妙なカプセルのもとに。

**第3章 1 1話 R型戦闘機強襲！ ミッドウェー島決着（後書き）**

R-TYPEの描写はSTGではなくシミュレーションだから単調になってしまう……。

第3章最終話 中国奮闘？ 燕と双子の要塞島接近（前書き）

いわゆるおまけ的な話。

### 第3章最終話

#### 中国奮闘？

#### 燕と双子の要塞島接近

アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリアの鋼の乙女と最新通常兵器からなる欧米連合軍。そして日本の鋼の乙女とR型戦闘機からなる特別遠征艦隊との連合軍。

それらに対するは突如として現れ、ミッドウェー島を武力占拠した総大将ルル率いる要塞島軍。

後に第三次ミッドウェー海戦と呼ばれる戦争は欧米連合軍の撤退による要塞島軍の勝利で終わった。

お互いの被害は甚大な上、ミッドウェー島は要塞島軍が占拠したままだが、欧米連合軍は要塞島軍の鋼の乙女オッツの捕縛に成功し、現在アメリカ軍鋼の乙女研究所に軟禁されている。

実は戦争はミッドウェー島だけではなかった。

欧米連合軍と要塞島軍がミッドウェー島で激突している間、ひそかに要塞島へ直接攻撃しようとする企み、実行した鋼の乙女がいた。

彼女の名は……燕。中国の鋼の乙女にしてソ連のおさがりと馬鹿にされ、中途半端な実力を持つ。そしてようやくこの物語で出番が回ってきた。

まず彼女が要塞島攻略を企んだ経緯から説明しよう。

その日は中国が今だ内部対立が解決せず、しかしながら中国共産党が徐々に優位になってきた時期であった。

燕に思わぬ来訪者が現れたことがきっかけとなった。

「やあ、燕。まだ生きてたんだね」

「もう役立たずのレッテル貼られて廃棄されてたと思ってたのに、残念」

「ゲッ、アメリカの双子アルか。いい加減その言い方やめないと後ろから刺されるアルよ！」

燕のもとに来たのはアメリカ軍のライティング姉妹。

「あんたら何の用アルか。アメリカ軍ならどこかと戦争してるって聞いてたアルけど」

「へえ。ちゃんと知ってるんだ。中国に引きこもってるから知らないかと思ってたよ」

「まっ、知ってるだけでしょうけど、クススッ」

「むっ？ 何の話アルよ？」

双子は相変わらず薄気味悪い笑みを浮かべながら話を続ける。

「ねえ、もつと世界中の人達から知られる程有名になりたいと思わない？」

「はっ？ いきなり訳の分からないことを……」

「じ・つ・は、簡単に有名になれる方法を私達は知ってるのよ」

「フンッ、双子の考える方法なんてろくなものしかないアルよ！」

燕は先の大戦で双子と何度も対面しているがこの性格はやはり受け入れられない。

当然と言えば当然だろう。バックアップに安心して前に出た者がいきなり後ろの味方から撃たれるならなおさら。

「残念ねえ。もし成功したら世界中のヒーローなのに勿体ない」

「アハハッ、それは言えるねえ。でも燕は所詮旧式だから無理だと思っけどね」

「そういつあんた達も旧式アル！」

しかし、燕の反論にも意に介しないのかクスクス笑い出す。

「僕達が旧式だって？ やっぱり世間知らずだね、アリス」

「そうね、姉さん。気づかないかしら？ 私達を見ても」



燕から見ても双子に変わった様子は無いし結局は自分と同じ……  
と思っただが、

「そういえば背中に何か付けてるし、機銃だけでなくミサイルがぶら下がってるアル……」

「やっと気づいたね。僕達は旧式じゃない。技術は日々進歩するのさ」

「でも中国は鋼の乙女にあまり関心が無いから燕だけ知らないのも当然ね」

「ぐっ……、また人を馬鹿にするアルか?!」

「事実だし、私達は嘘なんか言っていないわ」

さすがにこれには反論できない。確かに中国では鋼の乙女を重要視せず、物量と人海戦術のほうが悪果は上がると考えている。

「……私は……どうすればいいアルか……?」

双子から何かを聞くという行為自体が屈辱だが現実には勝てない。

「別にどうしろとかは言わないし、君に教えることなんか無いよ」

「まっ、私達の考えに乗るか乗らないかよね」

有名になれる簡単な方法のことか……。

（あまり双子の考えは乗りたくないアルが……もしそれに成功して一躍有名になれば、もう誰からも馬鹿にされなくなるかもしれないアル。……そして我が祖国でも私の存在がいかに大切かを知り、私は王族のような接待を受け、世界中からは『中国に英雄、燕あり！』という言葉とともに私を奉るようになるアル！そして中国の偉大さを知り、世界各地でチャイナタウンが形成され、そして）

独自のポジティブ思考で一人有名になった後の展開とシチュエーションを妄想し始め、ついに

「分かったアル！ 不本意ながらその考えに乗ったアル！」

「交渉成立ね」

「じゃ、行こうか」

と、双子は燕の右腕と左腕をしっかりと掴む。華奢な身体なのにその握力はとても外見で判断できないほどの力であった。もちろんその行為に戸惑う燕。

「な……、何をする気アル!？」

「決まってるじゃん。現場に行くんだよ」

「せいぜい腕が途中でちぎれないようにね」

言うや否やジェット機関を最大にして無理矢理現場に連れていった。



確かに怖じけついている。自身に眠る一種の生存本能だろうか分らないが、侵入すれば無事でいられないのは容易に想像できた。

それを知ってか双子は付け足して言う。

「そうそう、本隊はミッドウェー島だからこの防衛網を越えれば楽かもよ」

「それにセキユリティはさほどいいとは言えないから、研究所の侵入は簡単だしね」

「まあ……言われて見ればコンクリート以外に兵器は見られないし、研究所も開放的アル……」

だが決心はつかない。それから3分が過ぎた頃だ。

突如双子は装備していた対地ミサイルを放ち、コンクリート上にある対空機関砲台を破壊した。

「な、ななっ、何をしてるアルかぁ?!」

突然の行動に驚き、怒りが込み上げてくる。完全な奇襲な上に自分達の場所を敵にばらした。

返り討ちを恐れて燕は逃げようとしたがすぐ双子に両腕を掴まれ、要塞島の様子を観察した。

（この悪魔の双子めエ!!!もし死んだら一生呪ってやるアルねッ!  
!）

しかし、一向に反撃されない。それどころか来た時と同じ　まるで何もなかったような　状態だった。破壊された砲台は黒煙を上げているがやはり反撃されなかった。

「もしかしたらセキュリティが働いてないのかもっ」

「あらあら、これってチャンスじゃない、燕？」

双子は再び燕を催促する。燕自身もそう考えていた。

「うむ、まさに千載一遇アルね！　この燕が来たからには好きにさせないアルよっ！　覚悟アルう！！」

遂に燕は単機で要塞島へ突入した。

「やっと行ったね、姉さん」

「ホント馬鹿というか操り安いというかねえ」

「じゃあさ、”賭け”てみない？」

「いいねえ　面白そうじゃん」

「じゃあ、私は10分」

「ボクは7分。ま、それ以上いれば報告書作成が楽になるんだけどねっ」

「賭け」が当たっても外れても結局利用されたことに気付かないんですものねえ」

双子はお互いクスクス笑いながら上空で燕を観察した。

双子の目論み通り、コンクリートの兵器はウンともスンとも言わず、要塞島へ容易に侵入できた。コンクリートの内側の砂浜を抜けると生い茂る森に入るが、数分で森は抜けた。草原だけで、森にぽっかり開いた広場ともとれた。

「まさかここまで上手くいくなんで……これで私の天下はもう目の前アルね！」

自信満々にもう一度森に入ろうとした時だった。

突然燕の近くの木がボンツと爆発し、さらに周りの一部の木々も爆発した。急だったので先程の広場に後ずさる燕。

「やっぱり戦うアルか……」

燕は機銃と愛用の青龍刀を構えて森に向かって叫ぶ。

「やいやい！ 森に隠れてないで正々堂々と戦うアル！ この伝説の鋼の乙女、燕が相手するアルよっ！！」

「伝説？ 旧式でソ連のおさがりがまだ活躍してるのなら確かに伝説と言えますね」

燕を嘲笑して森から姿を現したのは白と黒を基調としたロングスカートのメイド服、髪が金髪のボブカットの女性。その手には旧式ロケットランチャーのM9A1バズーカ。

「人間……じゃないアル？ 何者アルか！？」

普通に見ればメイド。しかし、耳の辺りにある三角錐の機械的突起にスカートから覗く機械的な足が人間でないことを象徴している。

「お初にお目にかかります。私はこの要塞島全域の”兵器”とセキュリティを管轄するメイドロイドのセキュリティ・コントロール・システム、通称SCSと申します」

丁寧に自己紹介するが、その目は燕を確実に捉えている。

(むっ、こいつは隙が無いアル。かなりの手練アルね)

燕も一応中国出身なので、相手の気質を読めるようだ。最近身につけたのだが。

「現在、私の主人であるルル様がミッドウェー島へ三個大隊を率いて遠征に参りましたので私がお相手致します。

本当は対空機関砲台の破壊時に気づいていたのですが、あえて招き入れさせました」

「なるほど。あえて自分の得意なフィールドで戦うアルか」

「早速ですが……侵入者を排除します」

宣言するとともに再びバズーカを放つ。燕は咄嗟の判断ですぐ上空に逃げる。

「うっ……ロケットランチャーにしては弾速が速いアル……」

「見抜きましたか。ミサイルを扱うだけありますね」

SCSは即座にバズーカを捨て、背中に掛けていた機関銃を構える。

「な？　なんでそっちに変えたアルか？」

燕からすれば自分から不利な武器に変えたと思っていた。

「その場凌ぎです。バズーカは直線。敵が上空に飛ばされては命中率は極低」

「だからその機関銃で対抗アルか。ナメられたものアルね！　そんな機関銃じゃ燕には効かないアルよっ！」

燕は上空でミサイルを構えてSCSに放つ。横ステップで回避し、機関銃を燕に撃つ。が、燕の言う通り、ダメージにはなっていない。

「……本当のようですね」



「当たり前アル！ 中国4000年の歴史をナメ」

言い終わる前に再び機関銃で攻撃。

「だから効かないアル！」

お返しとばかりにミサイルで攻撃。だが横に飛び込んで避けられる。燕のミサイルも直線上。戦車や輸送車には有効だが素早い標的には当たらない。

「チツ、ちよろちよろと動き回るアル」

こうなれば急接近して青龍刀で切り刻むほうがいいと考えていた矢先だった。

「ツ！？」

燕の僅か数cm右に砲弾が掠った。かと思えば背後で爆発。爆風で燕は錐揉みしながら落下した。

「なっ！？ 何アルか！？ 何が起きたアルか！？」

地面に激突は避けたが横たわり、右翼が損傷。飛べなくはないが痛みが伝わる。SCSは機関銃と先程捨てたはずのロケットランチャーを持っていた。

燕の攻撃で横に飛び込んだのはこれを拾った為だ。

「ぐっ…飛び込んで避けたのはそれを拾った為アルか…しかしおかしいアル。避けたのに爆発するなんて……」

「フフツ、貴女には分からないでしょう。このバズーカの砲弾はV  
T信管。意図的に爆発させることが可能」

「んなっ!?! それめっちゃめっちゃ卑怯アルよ!」

するとSCSは燕に近づきながら口に手をあてて静かに笑う。

「本当に知らないようですね。これはアメリカの技術。先の大戦で既に実用化されて旧ドイツ・日本軍に多大な被害を与えたことで有名です」

「ぐっ……………」

燕は近づいてくるSCSに機銃を向けたが既に遅く、即座に機銃を蹴り飛ばされた。

「呆気ないですね。旧作が要塞島に挑むこと自体自殺志願に等しいと言っのじ」

SCSは燕の頭に機関銃を構える。もはや風前の灯。

「さようなら、利用された不運の鋼の乙女さん」

「へっ?! 利用って何アルか?!」

「……………」

「やっぱり使えなかったね」

「ホント、燕って弱い」

「アメリカ軍のライトニング姉妹……やはり貴女達が裏で引いていましたか」

上空から爆弾を投下して奇襲した双子だが、すぐに気付かれて避けられた。

「よりによって主人が不在の時に……」

SCSはため息を付く動作をして、双子を見上げて再び機関銃とロケットランチャーを構えようとした。

「隙有りアルっ！」

双子の奇襲で難を逃れた燕は青龍刀で襲った。すぐ反応して避けたが、青龍刀はSCSの右腕を切断した。

「しまっ！！！」

直ぐさま燕を蹴り飛ばし左腕のロケットランチャーを向けたが、双子が先に機関砲を放ちバックステップで回避する。

「はっ！ 速く逃げるアルよっ！」

と、燕は即座に全力で逃げ出した。

「あっ、逃げた」

「残念ねえ」

ところが、SCSは燕が逃げたのを確認すると双子への攻撃を止めた。

「あれ？ どうしたのかな？」

「プログラムでは、一人でも逃げられた時点で追撃をしないことにしています。素直に引いた方が身のためですよ」

「へえ、言ってくれるねえ」

「むしろ攻めるチャンスに誰が引くのかしらねえ」

「ならば迎え撃つだけです」

左腕だけを上げて応戦しようとしたが、

「残念だねえ。ボク達も戻らなきゃいけない時間だから」

「というわけで、バイバーイ」

と、双子はジェット機関で一気にその場を離れた。一人草原の広場に残されたSCS。

「ですが、撃退は成功といったところですね」

と言うと、ロケットランチャーを捨て、左腕を事もあろうか自分の身体のコア目掛けて突き刺した。

機械なので痛みはないが、存続に関わる。まさに自殺に思えるだろう。

やがて突き刺した左腕を引き抜くと、左手の先に生物とも言い難い生命体がうねうね動いていた。

「死ぬかと思ったアル……一瞬花畑が見えたアルよおー……」

太平洋上空、中国への帰路の途中に燕がいた。ちなみに要塞島滞在時間は8分30秒。双子の予想時間のちょうど中間だったのは知る由もない。

「やっぱり考え無しに双子に乗ったのが駄目だったアル！ 私の馬鹿アル！」

愚痴をこぼしながら飛んでいると、ガガガツと奇妙な音が聞こえた。

「えっ？ まさかエンジンも！？ ま、待ったアル！ 止まるな！ 止まったら落ち……！！」

悲痛の叫び虚しく、エンジンは停止。真っ逆さまに落ちる。

「アイヤアアアアアアルよおー……！！……」

ドッポーン！！

大きな水しぶきを上げて墜落した燕。

その後、アメリカの定期輸送船に発見されてなんとか帰国した。フラグを立てるのはほどほどにしましょう。

第4章0話 二人の想い（前書き）

心の表現が難しいと感じた。

うまく書ける人が羨ましいです。

## 第4章0話 二人の想い

第三次ミッドウエー海戦後、要塞島軍の軍事力が徐々に削られてきた。

原因は散発的にミッドウエー島へアメリカ軍が奇襲してくるからだ。

ルリが考えた作戦は本人でさえ拍子抜けしたほど簡単に上層部に通り、可決された。

「ちょ、ちょっと待って下さいっ！ 可決って?! パイロットとかどうするんですか!? それに安全でない上に多大な被害が……!」

すぐ上層部に抗議するのは当然だ。しかし、上層部からの答えはルリの頭脳ですら想像できないほど斜め上を行った。

### 通常兵器自動操縦技術。

全ての通常兵器をコンピュータによる遠隔操作もしくは自動操作で目標に攻撃を加える。

さらにこれを考案し、実用化にまで至らせた人物こそ、

先の大戦、最強の鋼の乙女アインとツヴァイを作り出し、完全なDF技術を目論んだドイツの狂気の科学者その人だった。

科学者は自らアメリカ軍の兵器技術機関に志願し、未知の軍隊に對抗できる発明をしていた。罪滅ぼしなのか、いまだDF技術を諦めていないのかは不明だが、この技術は本物だった。

最新戦闘機「F-15イーグル」に搭載し、試験も良好、実用化に至っていた。

第三次ミッドウエー海戦には間に合わなかったが、ルリの作戦は実戦としてまさに絶好のチャンスであった。

これまでに自動操縦技術で飛び立った戦闘機は新旧合わせて1000機を越え、たったの100機前後が帰還した。

アメリカ軍によるミッドウエー島奇襲に対抗しうる為、要塞島軍も急ピッチで基地再建を謀るが、爆弾を積んだ戦闘機が神風特攻隊よろしく単機で突っ込んで基地を破壊する。

高射砲や対空砲の配備がままならない状態なので、遂にミッドウエー島に戦艦「不滅」を駐留させて迎撃を行った。

この日を境に帰還機が少なくなつたが、まさにルリの思惑通りの展開となつた。

「……まさかここまで技術が進んでいたなんて……脱帽します……」

戸惑いを隠せないも、頭は既に次の作戦を考えていた。

アメリカ軍は昔のように物量で攻めていた。ヨーロッパが兵器を



提供し、アメリカから飛ばすことで戦力増強、さらに新旧問わずなので物量で押すのはちょうど良かった。

「今日は4回に渡る奇襲、計670機が攻撃。490機を撃墜、150機は戦艦が撃墜。ミッドウェー島に30機の攻撃を許しました。内、自軍の被害は総計37機。陸上10機、空中27機……」

要塞島中央研究所通信室にて、メイドロイドのSCSが送られた情報を読み上げ、傍らで聞いていたルルは机に置かれている設計図を眺めながら考え込んでいた。

「ここ数日の被害は甚大。ミッドウェー島の防御網も戦艦以外は既に無に等しい。……以て三日……でしょうか」

「……ハア……、参ったな、これは……。要塞島からこれ以上戦力を分けるわけにいかないし……」

手元でペンを動かしながら、しかしその表情は何処か途方に暮れているように見える。本人ですら予測出来なかったアメリカ軍の技術の底力により、ミッドウェー島の決断に迫られていた。

「それに、オオツツさんがアメリカ軍に捕まったのも要因でありますね？」

「そうね。でも今動くわけにいかない。ツツだったら多分死ぬことは無いと思いたいけど……」

やがて机の設計図を纏めて手に持ち、机から離れて部屋を出ようとした。

「どちらに？」

「第2研究所よ。新しく出来たオリジナルのR型戦闘機を見に行く」  
ゆつくり扉を閉め、電気もない暗い廊下を窓から差し込む日の光を頼りに歩いて行く。

第2研究所（そう呼んではいるが、実質どの番号も同じ兵器を研究している）に着くと、シートに覆われた何かが置かれていた。それを外すと、R型戦闘機が姿を現す。外見からして電子戦機「アンチエイド・サイレンス」そのもの。

「まだ試験は終わってないが仕方あるまい。これも無人で動かすことに変わらないが……アメリカに対抗するなら間違いなく最強ね」

部屋の電気を点け、R型戦闘機とコードで繋がっているパソコンを立ち上げると、画面にR型戦闘機とそれに関連する情報が映った。

その機体の名称は、電子戦機「エレクトリック・サイレンス」。  
コードは「REAW-X」。

要塞島北部にスミスが配置された。北は巨大パラボラアンテナによる情報収集を行う施設があり、奇襲に備えてだそうだ。

しかし、本人は少し離れた海岸沿いのコンクリートの上で綺麗に体育座りして海を眺めていた。第三次ミッドウェー海戦後に修理されてから数日経つが、何処か焦点が合ってなく、ぼーっとすることがあった。修理が不十分だというわけではない。

「……………」

無言で海を眺め続けるスミス。黒い長髪が風で時々軽くなびく。海が打ち寄せては砕ける音が聞こえる。しかし、顔は悲哀を称えた例えるなら彼氏に振られ、一人海岸で悲しみに明け暮れる女性のような表情で、一見すれば絵になるような光景である。

「……………どうして……………」

ボソツと呟いたかと思うと体育座りのまま顔を埋める。

こうなったのはオオツツが原因だった。回復したその日の夜、直ぐさまルルに突っ掛かった。

「將軍ッ！ あいつはアメリカ軍に捕まったんですよね！ 今すぐ……………今すぐあいつを助けてやって下さい！」

「スミ……それは無理よ」

「なっ！？ 何故ですかっ！ 普段なら仲間を最優先に助け出すじやないですかっ！」

「ちよつと落ち着きなさいよ。私が言ったのは『今は』ってことで「なら私だけでも派兵して下さい！ そうすれば」あのねえ、落ち着きなさいって」

興奮気味のスミスを宥めるように話すルルだが、スミスは落ち着いていられなかった。

「で…、でもっ！ 早く行かないとあいつが！！」

「心配しないで。第一、アメリカ軍の捕虜として捕まってるし、私達の軍の鋼の乙女だから実験対象にはなるが、すぐ殺されるわけじゃない」

「でも……」

「いい？ 今すぐ助けたいのもわかるけど、時期を見計らう必要があるのよ。ミッドウエー島奪還に再び軍を投与してくる今は迎撃に集中させる。今助けるために戦力を割れば本部崩壊に成り兼ねる。それこそ本末転倒。あなたも重要な戦力だから、あなた一人派兵するわけにはいかない。それから……」

だが、言い終わる前に部屋に突如パチンツと音が響いた。

スミスはルルに平手打ちをした。叩かれたルルの頬が赤く染まる。スミスは呼吸が荒く、肩が見てわかる程上下に動いていた。

「ハア……ハア……この……分ならず屋ア!!」

そう叫んで部屋を出て駆け出す。

「あつ、待つ……!!」

すぐに追い掛けようとしたが、部屋を出た時は既に外に駆け出していた。

この日は下弦の月。駆け出したスミスはひたすら走り、気づけば北の情報収集施設に来ていた。迷うことなく中に入る。一瞬、見張りの警備機械が警戒をしたが、味方と分かるとすぐに警戒を解いた。施設は中央研究所ほど広くなく、人の出入りも少ないので最小限の電力しか働いてない。だから中は暗く、窓から差し込む月明かりだけが唯一の光源だった。

ちょうど光が差し込む場所が壁の近くだったので、そばの壁にもたれ掛かるように座り込んだ。

「私のせいで……」

オオツツは遠距離タイプであり、本来ならスミスが守る立場でなければならぬ。それが叶わなかった事を自責の念として自分を責めていた。だが理由はそれだけでない。

存在こそ理由だった。

私は……あいつがいてくれたから……戦場でもしっかり活躍出

来た……。罵りあってたけど……。楽しかった……。私を導いてくれた大切な仲間……。でも……。あいつがいないと私……。私は……。寂しい……。助けたい……。会いたい……。なのに……。どうして……。会いたいよ……。ツツ……

気が付けば目から大粒の涙がこぼれ落ちていた。

「うっ、うっ……」

流れ出る涙を拭うことなく、一晚中啜り泣いた。側には誰もいない。ここにいるのはただ職務に忠実な警備機械だけ。

同じ日、アメリカ軍の某基地の一室に、オオツツは椅子に縛り付けられていた。オオツツならいつでも壊せるが今は状況を見てひっそりと従っていた。

「うっ、私を調べてるようけど、意味無いんだよなあ。私自身どういう素材とか構造とか知らないし……」

アメリカ軍は現在揉めに揉めていた。オオツツを捕獲したはいいが、いざ解析すると全く分からない。使われている技術や素材まで鋼の乙女研究員だけでなく、兵器研究員ですら首を傾げる程不明であった。

もともと彼女は別世界から来たわけだから当然だが、そんな事を知らない彼らは手当たり次第に実験を繰り返した。かつてチ八が受

けた実験も行った。

実験データは出るものの、内容は全く分からない。実験はオオツツにとつてはさほど苦痛ではなかった。

遂にアメリカ軍研究部は白旗を上げた。しかし上層部は解析続行を命じる。

そして内部で意見は二つに割れた。

解析続行orそのまま戦わせる。

研究部は後者を取ったが、上層部は前者推進が数多い。『これだけ不明な技術でも、解析出来ないものはアメリカ合衆国にはない。もし解析出来れば合衆国をさらに発展させられるだろう』が上層部の意見だ。

その最高峰が諦めてるから上層部も諦めるよ　と思うオオツツだった。

ふと、窓から差し込む下弦の月を見た。

（綺麗だなあ……そういえばこうしてゆっくり月を見るの久しぶりかも……皆で夜桜した時が最後だったもんな……。  
そういえばスミスさん大丈夫かなあ？　でも私を厄介扱いしてたし、むしろ喜んでそうな……）

でも捕まってる今、不思議とスミスさんと罵りあってたのが懐かしく感じる……なんでだろう……？　寂しく……感じる……？  
仲間に会えなくて寂しく感じるなんて初めてだ……。私ってこんなロマンチストだっけ？　それとも何処が悪い？　将軍に聞いてみようかな。……でも……これはこれで……悪くないかも……

不思議な感情にほんの少しだけ笑顔を浮かべたオオツツは月の淡い光に照らされた中、ゆっくり静かに眠り込む。

数日が経ち、いよいよ物語は最終局面へ突入する……はず。



## 第4章1話 終焉への軌跡（前書き）

第4章の話数はかなり短いです。最後の戦いなのに？ というツッコミは無いです。

## 第4章1話 終焉への軌跡

絶望の名の元に残るものはあるのだろうか？

遂にアメリカ軍によりXデイとYデイが確立された。直ぐさまXデイの概要が全世界の鋼の乙女基地に通達された。今回はかりはソ連も例外ではなかった。

Xデイの「ダウンフォール作戦」は要塞島集中攻撃。世界連合軍を形成し、ミッドウエー島に陽動部隊を配置してから総攻撃に移行する。

Yデイの「ラストV作戦」は要塞島の徹底破壊、則ちNBC(A BC)の投与。島ごと消滅させる魂胆だ。

Xデイの「ダウンフォール作戦」発案者はルリ。Yデイの「ラストV作戦」発案者はドイツの狂気の科学者。

容赦など一切無い最初で最後の戦い。Xデイが近づくまで、各国に軍備増強許可が与えられる。

日本では資源が乏しいのでいきなり軍備増強が出来る訳ではなかった。鋼の乙女を主軸に部隊を送るつもりだった。

作戦を聞いた日本の鋼の乙女は……

「遂に総攻撃が決定したか……」

「でもあんな小さい島にここまでするの？」

「その小さい島がミッドウェー島を奪い、欧州連合軍を退けたんだろ？」

「でも、私も多いと思いますよ」

「第一部隊に空母やフリゲートを含めた22隻を始め、戦艦14隻、200隻以上の駆逐艦やイージス艦。陸上部隊10個師団の参加……こんなに……」

「第二部隊に長距離爆撃機編隊140機、原子力空母7隻。陸上部隊18個師団の参加……世界中からっていくらなんでも……」

「そしてこの規模が全部で十部隊まで……」

「鋼の乙女はどの部隊から出てもいいって……これだけやるならむしろお役御免じゃない？」

「これだけの兵力……だからソ連にも通達したんだね」

旧海・陸軍ともにそれぞれ驚愕の反応を示す。今まで見たことも聞いたことも考えたことも無い規模の作戦。

「まあ、これがアメリカからの通達よ。私としてはこんなことにならなければよかったんだけど……」

「ミッドウエー島陥落がほど癪に触ったのか、早急にとのことだ。私もあかぎ君同様、このような戦闘には参加したくなかった」

副官のあかぎと司令官がそれぞれの思いを交えて語る。

「だが決まってしまった以上後戻りは出来ない。各自、訓練を怠らず、その日に備えてくれ」

「……了解しました」「」「」

一旦解散し、それぞれ司令室から出て行く乙女達。

やがて副官のあかぎと司令官だけが部屋に残った。

「あかぎ君」

唐突に司令官があかぎに話し掛ける。

「司令官から話し掛けるなんて珍しいですね。どうかしましたか？」

司令官はいつものような雰囲気から脱し、眼差しは真剣だった。

「私はこの戦いは日本にとって……いや、世界にとって変わり目となる戦いと思っている」

「時代が変わる……と言いたいのですか？」

「君達、鋼の乙女は第二次世界大戦からかなりの年数が経った今でも輝いている。いや、今の方がより輝いている。人々に希望を与えてくれる。人々に平和をもたらそうと奮起してくれる。たが……もしかしたらこの戦いが君達の最後ではないかと思ってしまうんだ」

「……」

「確かにこれほどの戦力を前に死ぬ確率は少ない。だが……なぜかそんな気がするのだよ……」

司令官の真剣な眼差しとは対称的に哀愁漂う寂寥感を感じた。

あかぎは少し黙り込み、やがてこう言った。

「大丈夫ですよ。私達は皆で帰ってきます。約束します」

「……そうか……」

やがて少し真剣さを緩め、椅子に深く座り込む司令官。

「ま、私としては三人（やまと、あかぎ、いちこ）以外が無事に帰ってくれば良いがな」

「はあ、またそれですかあ。せつかくの雰囲気なしじゃないですか」

「ババアの言い分は聞かない主義でな」

「素直に好きですって言えば言いのに」

「なっ！！ ばっ、ババアがいきなり何を言い出すんだっ！！ うっ、吐き気が……」

「はいはい、じゃあ私は退出します。後の書類は任せますね」

「えっ？ あっ、いや、あかぎ君、ちょ」

ボタン。

扉を閉めて、あかぎはゆっくりレイ達のいるところ歩いて行った。

どの国家も似たようなやり取りが行われ、それぞれ自国のもちうる最先端技術の粋を集めた兵器に着手し始めた。

同じ頃、アメリカ軍鋼の乙女基地の訓練所。

全鋼の乙女がXデイに備え、更なる強化を図っていた。

射撃場にて……

ガガガガガッ

的にこれでもかと撃ち込むクレア。三度目の正直。絶対勝利で収まらず、完全勝利に向け、総合的に強化を図っていた。

ガガガガガッ

再び的が穴だらけになる。それを見たネコは、

「ニヤアー、クレアちゃん、最近命中率が格段に上がったニヤー」

「ん？ おう、ネコか。そりゃ当然だぜ。あのアマに全弾ぶち込みたいからよお」

「ニヤーもクレアちゃんの敵を取るニヤー！」

「嬉しいけど、今回は俺一人で敵を取るさ。よしっ、次は筋トレだっ！」

射撃場を後にし、基地に入るクレア。入れ代わりにハイネが入ってきた。

「あつ、ネコさん。ネコさんも今から射撃訓練ですか？」

「あつ、ハイネちゃん。ニヤーもクレアちゃんに負けられないニヤー。一緒に頑張るニヤー！」

「了解です！ さあ、始めましょう！」

逆に、基地のベンチの上で寝転ぶ鋼の乙女も……。

「ゼエ……ゼエ……ハア……フウ……」

休んでいたのはエミリー。どうしてこうなったのかは想像にお任せする。

「あつ、エミリー！ そんなところにいたの！」

ちょうど鬼教官ことエイミーがベンチで休むエミリーを発見。エミリーは頭だけ動かして確認。

「お、お姉……ちゃん……。後5分だけ……」

「何言ってるのよ！ まだスペシャル特訓メニューの半分もこなしてないじゃない！」

「ゼエ……普通の……メニューでもきついのに……、その三倍を一日でやるなんて……無茶だよお……」

「あーもう、情けないわねえ。ほら、行くわよ」

「ま……、待ってよお……」

ベンチに寝転ぶエミリーを無理矢理引き戻そうとする。ところが意外な人物が現れた。

「Xデイまでに鍛えるのは良いことですが、やり過ぎて身体を壊しては本末転倒ですよ、エイミー」

「あつ、ルリさん」





基地の作戦会議ではルリが提示した作戦概要を聞くアメリカ軍高官や大統領専属秘書、鋼の乙女研究チーム所長。

「このように、各国と連携を取り、要塞島へ集中攻撃を行います。無論、敵側からの激しい抵抗が予想され、我が連合軍も相当な被害が出るものと思われます」

「それでは我が合衆国への信頼度が落ちてしまふのでは？」

一人のアメリカ軍高官が質問する。

「心配に及びません。本部隊の前に例の自動操縦技術を搭載した無人戦闘機を先に飛ばして敵兵器の配置などを確認し、本部へ映像を送って対策を練ります」

「では、なぜソ連にも要請を？ 敵対している今、我々に好意で協力することはないはずだ。もしかしたら不意を突く可能性もあるはずだ」

「そうですね。ですが、苦肉の策でしたが、作戦終了後に鹵獲できた要塞島の最新兵器を譲渡することで解決しました」

これには全員が抗議した。

「敵の最新兵器をだど！？ ソ連に更なる戦力を与えるつもりか！」

「自ら合衆国を危険に曝す気が!？」

「そうならば我々だけでは抑えられなくなるぞ! 今すぐソ連との協力要請を撤廃しろ!」

だが、ルリにとって想定内の反論だった。

「そうではありません。それに、ソ連に兵器を譲渡しても我が合衆国が有利になるのは変わりありません」

ルリの一言で静まる会議室。誰も理解できていない。

「以前、ライトニング姉妹が偵察した時、ほぼ八割が先の大戦で使われてる兵器で、我々の知らない兵器はほんの数種類です。ですが、旧式兵器には強化技術が使われ、今でも我が連合軍に有効打です。つまり、ソ連には兵器を譲渡しますがほんの数種類。対して我々はその高い技術を手に入れることでソ連との差を広げます」

これに鋼の乙女研究チーム所長が反論。

「仮にそうしたとしてもどう技術を解析する? 例の鹵獲した鋼の乙女でさえわかった技術はほんのわずかだが?」

「それはあの鋼の乙女が最新兵器に入るからでしょう。旧式兵器なら設計図も押収してますし、強化技術ならさほど難しい技術ではないと思われまます」

「素晴らしい……完璧ではないか」

「さすがは我が合衆国を代表する勝利の女神だ！」

ルリの説明に全員が称賛し、涙を流したとか流さなかったとか。ともあれ、Xデイの概要は会議に出席した全員が納得し、可決し、作戦遂行を許可した。

「ありがとうございます。では、次に『我が合衆国にしか知られてない』Yデイについてですが」

会議終了後、部屋の外ではフランシスが待っていた。

「ルリさん！ 会議はいかがでしたか？」

「全員が納得してくれました。これで上層部も大丈夫でしょう」

「そうですね、良かったですね！ きっとルリさんの完璧な説明のおかげでもありますよ！」

「ありがとうございます、フランシス」

「いえいえ、当然ですよ」

「まあ、いいですね。私達も行きましょうか」

「はい！ ルリさんの為ならどんな敵も討ち滅ぼします！」

「訓練ですから大袈裟ですけど、期待しますわ」

「！、あ、ありがたきお言葉を……ありがとうございます！」

（少し……扱いづらいですが良しとしましょう。さて、要塞島軍はXデイにて完全に駆逐しますわ。我が合衆国に刃向かった罪、その日に全霊を持って償いなさい）

心でそう覚悟を決意し、訓練に向かうルリ。

日本に滞在する22世紀から来た特別遠征艦隊。彼らにも鋼の乙女を通じてXデイの作戦を知った。

だが、内心は迷いが生じていた。

確かに敵はR戦闘機が残存するなら艦隊は作戦に参加すべきだが、実はリーダーに太陽系解放同盟軍と思しきR戦闘機を木星と火星の間で確認し、地球に接近中だと報告が来た。ここに滞在しているが太陽系解放同盟軍の残党討伐令はまだ生きている為、こちらにも専念したい。

いまだ決断が決まらず、アレン・F・ソフト指揮官は自室に籠ってこの葛藤の改善を考え続けた。

Xデーの情報は無論、要塞島北部の情報収集施設に探知され、中央研究所に送られた。

総大将のルルは早急に中央研究所へ残存兵を全員集めた。といっても五人だけだが。

「遂に要塞島に大規模な攻撃が始まるわ。差し詰め要塞島VS世界と言ったところかしらねえ」

「それ、悠長に話す事項ですか……」

軽くムツがツッコむ。

「まあ、全員ご存知の通り、兵力はほとんど削られて残存兵力は要塞島の兵器のみとなったが……」

勝ち目がないと言いたいのが分かり、全員不安になる。

「それにしても作戦名がダウンフォール 絶望だなんて……私達を本気で潰す気満々なわけなんだ」

スミスが一言。

「アメリカ軍つてたまにユーモア効かせた作戦名とか考えるからね  
ルルは答える。

「私達も……人の事言えないじゃない……」

サクヤの一言に全員頷く。

「ま、まあ、それは置いといて……、Xデイまでにもうひとつの試作R戦闘機を完成させるから全員手伝うこと」

「でもどん詰まりじゃないですか。再現した『R-99 ラスト・ダンサー』をベースに波動砲を出力強化に他三機のデータを融合して……それより例の『エレクトリック・サイレンス』を増産しては？」

ラムデスが新型R戦闘機について言及する。だが答えは勿論。

「それ無理。五機創ったら資源なくなった」

「異世界も含めて資源が枯渇してる軍って私達以外絶対いないよね……」

「と、に、か、く！ 手伝えっ！」

こうして会議は終了。全員渋々研究施設に移動。だがSCSだけは違う。

「SCS、あなたは壊された850mm列車砲に電磁投射砲を付けなさい」

「畏まりました」

実は第三次ミッドウェー海戦中に来たライトニング姉妹は帰り際に850mm列車砲を発見し、ついでだからと破壊して帰ったのだ。その時はSCSが自分の胸に腕を突き刺したところだったので気づかなかったのだ。

ルル達の帰還後に発覚したが、

「仕方ないなあ……列車砲の土台の損傷は深くないから、これに開発中の電磁投射砲を付けて解決ということだ」

と、SCSの過失を見送った。

しかし、ルル自身SCSに対して違和感を感じた。帰還した時にSCSは迎えに来たがその時点で腕は再生していた。ルルは敵に腕を斬られたことを知らないが、その腕に何かしら違和感を感じた。

SCSだけ違う任務を与えたのは、SCSの観察を兼ねていた為であった。

（疑う気はないけど万が一を考えて……）

心中でそう考えて、自分もR戦闘機を完成させるべく研究所へ向かった。



## 第4章1話 終焉への軌跡（後書き）

どうでもいい戦争雑学

### 劣化ウラン弾

劣化ウラン弾は簡単に言えば、再利用された砲弾である。劣化ウランは天然ウランを濃縮する過程で排出される放射性廃棄物である。

劣化ウラン弾は核兵器ではなく通常兵器に分類されていたので、実戦で普通に使われた。

劣化ウランの比重は鉄の2.5倍、鉛の1.7倍であり、合金化して弾芯に利用すれば運動エネルギーが大きいため重装甲を貫通できた。

主な使用暦は湾岸戦争から始まり、米軍は戦車の120mm砲（M829など）や105mm砲（M735A1）に装填し、四日間で一萬発を撃ち込み、戦闘機にも25mm砲（XM919）や30mm砲（PGU-14/B）にも装填され、94万発撃ち込んだ。

しかし、戦車などに命中した衝撃で酸化ウランの微粒子が大気中に飛散し、多くの米兵が被爆した。

劣化ウラン弾は装弾筒付翼安定徹甲弾（射撃後に筒が割れ、内部の弾芯が飛ぶ）の一種で、先端に劣化ウラン貫通体が使われている。

現時点ではアメリカ以外にイギリス、フランス、ロシア、スウェーデン、ギリシャ、トルコ、イスラエル、サウジアラビア、ヨルダ

ン、バーレーン、エジプト、クウェート、パキスタン、カナダ、中  
国、韓国、台湾が装備しているらしい。

**第4章2話 特別遠征艦隊の決断（前書き）**

ちよつとした伏線となるのか？

## 第4章2話 特別遠征艦隊の決断

決戦の日はやって来た。

Xデイ 198X年7月4日。

アメリカ合衆国独立という記念すべき日に発令された「ダウンフオール作戦」。この日に作戦を発令したのは、アメリカ合衆国があらゆる敵を退けた唯一無二の国家であると世界に証明する為。

「ダウンフオール作戦」とはもとも太平洋戦争時に考えられた作戦であり、日本での本土決戦を画策した作戦である。簡潔に纏めれば、海上封鎖で補給を絶たせ、九州を攻撃して航空基地を奪取、首都圏に中距離爆撃機などで空襲、各地にNBCの無差別使用をすすめる予定だった。名前通り「絶望」を与える作戦だった。

使いまわしと言えば仕方ないが、敵を「絶望」においやる大隊は用意出来ている。

まず始めに艦隊による海上封鎖を行い、要塞島とミッドウェー島との進路を絶たせた。

「まず陽動部隊がミッドウェー島へ攻撃をします。敵の戦艦は今なおミッドウェー島に駐在しているので時間稼ぎにしかありませんが、

その間に海上封鎖を行い、要塞島を確実に孤立させるのです。戦艦さえなければ要塞島の守備は激減します」

これがルリの考えだ。

作戦は順調に進み、第一段階が終了した。かなり大きい円となったが安全性を確保するため。第三部隊から第六部隊での封鎖。これだけで空母12隻、戦艦25隻、駆逐艦など合わせて151隻である。

次に自動操縦技術を搭載した戦闘機による大規模攻撃を行う。各国から集めた新旧戦闘機は実に三万機を越えた。奇襲に使った戦闘機の30倍である。勿論正確に情報を得るため有人機もある。有人機は危険を感じたら無人機を盾にして早急に帰還するよう命じられていた。

「皆さん、準備が整いましたね。我がアメリカ合衆国を、世界を敵に回したことを後悔させますわ！ 全機、出動ッ！ 敵勢力を可能な限り削りなさい！！」

ルリの力強い号令が通信を通して全軍に伝えられ、空母から、近くの基地から戦闘機が機関砲を、爆弾を、ミサイルを装備して出撃した。

しかし、これが思わぬ方向へ作戦を進めていった。

要塞島では警備全般をSCSに任せ、連合軍の戦闘機が出撃した今も全員研究所に籠っていた。研究所では敵襲を知らせる警報が鳴りっぱなしである。

「まだ……まだですかっ!？」

「最後の出力調整だ！ 完了次第戦線に投入する！」

「三万機ですよっ!! 間に合いますか!？」

「九割が無人機なら問題無い！ それに『エレクトリック・サイレンス』五機全てを既に配置した！」

焦る部下を宥めながら唯一無二のR戦闘機を作り出そうとするルル。自身も時間が無いのは分かっていた。

「REAW-X エレクトリック・サイレンス」には従来のジャミングに加え、改造ECMを搭載した。

ECMとは本来、電磁スペクトラムを能動的もしくは受動的に妨害、減殺するための妨害活動で、対象は敵の電子機器を利用している指揮、統制、情報収集機能や兵器体システムである。

改造点はEA 電子攻撃を加えたこと。しかも電子を上書きし、システム侵食も可能。事実上最強の無人機鹵獲兵器となった。

三万機の九割、則ち二万七千機が知らず知らず連合軍に牙を向けはじめのだった。

日本駐在中の特別遠征艦隊に出向いた鋼の乙女が一人いた。

レイだった。

アレンは連絡を聞いて戦艦から出た。

「レイか」

「アレン指揮官？ 顔色が悪いですよ？」

見ると薄い隈が浮いている。寝不足だろうか？

「ああ、大丈夫だ。ただ、二者択一に迷っただけだ」

「二者択一……ですか？」

「実はな……」

アレンはレイに伝えた。太陽系解放同盟軍の残党が地球に近づき、本部から討伐命令が下った。しかし、敵にR戦闘機がある以上現在の作戦にも艦隊は必要である。

その葛藤に迷っていたことも。

「でも……アレン指揮官はもともと外から来たのですから……」

しかし、アレンの顔色は晴れない。

「君ならそう言うと思った……だが、もしそうすると我々は……もう戻ってこれない」

「えっ……？　ど、どういう意味で？」

意外な発言に戸惑うレイを尻目に、アレンは身体ごとレイから背け、太陽を見た。そして代わりに、こう質問した。

「君は……故郷を大切にするかね？」

突然の質問にさらに戸惑ったが、レイははっきり答えた。

「はい！　自分を生み出してくれた皇国ですし、私達の存在意義を認めて……って」

話している間に気づいた。質問の意図が分かった気がした。同時にその意図が恐ろしく思えた。

「まさか……」

「実は本部から残党討伐後に早急に帰還せよと命令が出た。私の故郷……地球に未曾有の危機が訪れている」

「それって……、例の太陽系解放同盟軍ですか？」

「違う。……そうだな……人類共通の敵とだけ言っておこう。我々の故郷、22世紀の地球に大量接近している」



レイは衝撃を受けた。未来で人類以外の敵が地球を襲撃しているなんて全く考えてなかったし、思いつきもしなかった。

今ですら人類同士で争っているのに、人類共通の敵だなんて今の鋼の乙女には絶対に思い付かないと思った。

だが、アレン達は世界観が違い未来から来た部隊だ。未来にはあらゆる可能性があるとかあきから聞いた。アレン達のように人類の外敵が襲来する未来も否定出来ない。アレンは話し続けた。

「実を言えば、この艦隊も人類同士ではなく、その敵に対抗する為に生み出された人類の英知なんだ」

だからこれほど強力だったのか……。作戦が実行されている今にして知った真実はレイの思考を容易に壊した。

「さて、全て話したつもりだ。我々では判断しがたい重要なことだ。レイ、君は……。我々が必要と思うかい？」

アレンから見てもレイはまだ整理がついていないのは分かっていた。しかし、もう時間が無いのは両者共に理解していた。

アレン自身レイ一人に判断を任せるのは酷だと思っている。だが、アレンにとって最も信頼できる鋼の乙女はレイしかいない。レイだけと言えば語弊ではあるが今現場に来たのもレイ一人だけ。だからレイに判断を委ねた。

レイはしばらく目を閉じ、十秒ぐらい経ってから目を開けて、ゆっくりとはつきり答えた。

「アレン指揮官、あなたの故郷はあなたにしか守れません。私達の故郷も私達じゃなければ守れません。……。あなたを待っている故郷

へ行ってください。あなたは帰るべき故郷を守るべきです。私達はもともと兵器です。一兵器の判断で未来を見捨ててなんて言えませんし。あなた方のおかげで敵の戦い方も分かりました。この戦い、我々だけで絶対に勝利を収めます！」

「我々がいなくてもいいと言うことか……分かった。君みたいな素晴らしい女性に会えて良かった。これで最期だ。君達の勝利と平和を未来から祈ろう」

レイがアレンと交わした最期の言葉だった。アレンが戦艦に戻ると、艦隊は上昇を始め、やがて空に消えていった。見上げながら無言で見送ったレイ。

(もう後戻りは出来ない。後は我々で……故郷を守る！)

心にそう強く誓い、仲間のもとに向かった。

決戦の火蓋は切って落とされた。

第4章3話 全面戦争〈ダウンフォール作戦（前書き）

二週間振りです。遅れて申し訳ないです……。

#### 第4章3話 全面戦争〜ダウンフォール作戦

要塞島研究所にて、遂に新型のR戦闘機が開発された。しかし時既に遅く、要塞島は連合軍の艦隊により包囲され、三万機の戦闘機が飛来していた。

「というわけで、サクヤとムツは今すぐ上空迎撃、スミとラミは東側の造船ドックの警備」

「遅すぎですよ……」

スミスが愚痴をこぼす。

「仕方ないじゃないっ！ 波動砲の範囲内で威力と形状を維持するのに一から波動砲造ったんだからあー！」

実のところ、こちらの世界に来てすぐに開発に着手していたのだが、実質三年以上はかかっていた。

「で、これを飛ばせば私達はすぐに守備に向かうのですか？」

ムツが言う。

「いや、どうせ一機しか造れてないし、私が乗り込むでしょう」

「「「「！！！？」」「」」

全員が驚くも無理はない。たいてい自動操縦技術でホイホイ兵器を動かしているし、彼女自身鋼の乙女装備で直接戦うスタイルだから

ら、誰も本人が乗り込む事は想像出来なかった。

キャノピーが開き、ルルは颯爽と内部に搭乗する。

「じゃあ、全員所定の位置にて敵の迎撃に当たれ！ 前衛に『グラ  
ンビア・F』及び『エレクトリック・サイレンス』を配置済み！  
決して自分から飛び込まず近づく部隊から各個撃破しろ！」

「了解！」「」「」

命令が下され、研究所を出る要塞島軍の鋼の乙女達。

ルルはキャノピーを閉じ、研究所の屋根を開放し、離陸準備を行  
う。

「おっと、完成したてだからまだ名前を決めてなかったな。名前を  
つけておけば勢いづくし。さて…… R W f - 99 をベースに N - M  
C I 001 と E X - B S O 1 - F の波動砲機構を掛け合わせたか  
らな……。アメリカがダウンフォールなら……」

と、あれこれ機体の名前を考え、やがてこういう名前になった。

「よし、じゃあ……『R W f - 99 X ジェノサイド』……とかど  
うだろうか。圧倒的な力で敵を全滅させる……うん、うってつけだ。  
我ながらいい名前だ。さてと、名前も決まったし、出撃しますかっ  
！」

そして、一機の新型R戦闘機が上空へ飛び立った。

連合軍のアメリカ勢の旗艦を務める原子力空母に、指揮官のルリが作戦の状況を観察していた。

「敵の情報は何？」

「今だ敵の動きはありません……動きました！」

衛星レーダーの監視員が叫ぶと艦内は緊張に包まれた。

「敵は四人確認！ いづれも鋼の乙女！ 二人が上空へ、もう二人は東海岸に移動！」

「上空へ行ったのはムツとサクヤという鋼の乙女。残りはスミスとラミデスという鋼の乙女。東側にはドックらしき施設があると双子が言っていましたから、恐らくは守備……。どちらも無人戦闘機への対処及び迎撃と思われます」

ルリの考えは寸分の狂い無く敵の動きから行動を予想した。

「しかし、それ以外の通常兵器に動きがない……。いくら自信があるといえ、四人で三万機を相手にするのは不可能なはず……。何か

裏がありそうね」

と、冷静に分析していると後ろからやる気のない声が聞こえた。

「ニヤーア、ルリちゃん、ニヤー達はまだ出撃しないのかニヤー？」

じっと待てずにルリに聞くネコ。

「はあ、作戦が成功するまで我慢しなさい」

「ニヤーア、た〜い〜く〜つ〜ニヤ〜」

と、甲板に出るところごろ回り始めた。

他の鋼の乙女も待機中だが、アメリカ勢は多分ネコと同じ心情の者がいるだろう。

726

一方、イギリス勢は空母の上でパラソルを立ててティータイムを満喫中だった。

「ふふっ、やっぱりこうして待つのが私達らしいわ」

「もうすぐ戦争が始まりますし、作戦の成否がわかるまで重苦しい空気で待つよりかは楽になります」

テーブルに置かれたティーカップに手を伸ばし、一口啜る。こうにいるのはフェアリーとマーリン。

「ああ、やっぱりフェアリーさんの淹れた紅茶は美味しいです」

「ありがとうね。でも、始めればこうゆったり出来なくなるからねえ」

「これだけの艦隊に戦闘機がありますから、負けることはありませんよ」

「そうねえ、本国での屈辱を晴らすって事でマチルダさん達も本気でしたし」

ここからは見えないが、要塞島があるう方向に顔を向けるフェアリー。

しばらくして視線を戻し、

「あつ、バスケットにサンドイッチがあるわ。マーリンちゃんも食べるっ」

「では遠慮なく戴きます」

心の中では、つかの間の平和であっても、ティータイムを欠かせない故に長く続いてほしいと願うフェアリー。その願いが通じるかは今は分からない。

日本勢は連合軍の包囲から少し外側の位置に待機していた。艦の甲板に一人レイが海を眺めていた。



と、不意に後ろから抱き着かれた。

「うひゃあ!!!??」

「しゅいゅちゃん かわいい声ね」

抱き着いたのはあかぎ。

「あ、あかぎ！」

「もう、捜したのよ？ 一人だけでどっか行っちゃうんだから」

「!、す、すまない……」

「……」

「……」

「……レイちゃん、まだ気にしてる？」

「……」

レイが一人甲板に来たのは理由があった。特別遠征艦隊と別れたことを皆に告げた。

彼はもともと外から来た部外者。彼の故郷が危ういなら彼にも故郷を守る権利がある。わざわざ故郷を捨てて過去の地球で戦うわけにはいかない。

全員納得はしてくれたが、レイ自身独断で決めたことに責任を感じていた。

「でもね、レイちゃんは正しいことをしたんだよ。レイちゃんは何にも悪くない」

「……」

「レイちゃんの言う通り、これは私達の世界の問題。アレン指揮官にまで苦勞を患わせなくてもいい」

「で、でも……、敵のR戦闘機に抵抗する手段を失ったし……」

あかぎはレイからすつと離れ、レイの横に座る。レイも倣って座った。

「レイちゃんは……いえ、皆この期間で強くなったわ。朝鮮戦争を思い出して。レイちゃん達は自分達だけで敵を倒せたじゃない」

「あ……」

頭の片隅にしか残っていなかった。確かに初遭遇の時、愛刀で敵を撃破した。

「だから、私達だけで十分だと思ったの、ね」

「……」

「だから、私達で頑張っていこうね」

レイに笑顔を見せて言ったあかぎ。それを見ているとレイも心が晴れてきた。

「ああ、ありがとくな、あかぎ」

「当然よ。私達は姉妹なんだから」

「でも、おかげで心が晴れた。よし、今から訓練スペースに行く！」

「適度にね。いってらっしゃい」

レイは立ち上がると艦内に入っていた。自分達では気づきにくい、敵と渡り合える実力は既に備わっている。そう感じたレイは一直線に訓練スペースへ向かった。

アメリカ力勢空母。敵の確認を取れてから約一時間。異変が起きた。

「る、ルリ委員長！何か変です！」

「どうしました！？って、委員長って呼ばないで下さい！」

「すみません！慌てたもので」

「で、どうしましたの？」

衛星レーダー監視員はレーダーに映る点が空母に向かっているの

を説明した。

「待って。これ、無人戦闘機の……」

窓から見ると、上空に無人戦闘機が数機こちらに飛来しているのが見えた。

「どういう事？」

「さあ……わかりません」

しかし、観察しているうちに重大な事に気づく。

「高度を落として……、まさかっ!？」

動づいたルリは直ぐさまレーダー監視員に命令を下す。

「今すぐあの機体を遠隔操作に変えなさい! 空母に突っ込んできます!」

「ほ、本当ですか!?! 分かりました! しばしお待ちを……」

監視員はすぐにパソコンに無人戦闘機の画面を映し出し、遠隔操作をしようとしたが、

「だ、駄目です! システムに異常! 操作不可能!」

「そんなはずはっ!?!」

監視員の言う通り遠隔操作を一切受け付けなかった。ルリは臍を

噛む気持ちで決断した。

「搭乗員は対空砲を用意！ 無人戦闘機を落とします」

一言で艦内がざわめく。

「いいから急ぎなさい！ 爆弾を抱えていますから、残骸に気をつけて落としなさい！」

空母から対空砲が放たれ、計六機の無人戦闘機が海に落ちた。

「システムは完璧なのに、何故……？」

対応した兵士全員もそう思ったはずだ。

「味方から通信！」

『こちら第15航空隊！ 無人戦闘機が突如我々に攻撃してきました！ 友が落とされましたが、私だけ生き残りました！ 損傷が激しいので空母への帰投の許可を！』

「これは……つまり……」

ルリは最悪の展開を予想した。

「通信兵、各国の有人戦闘機に撤退を要請しなさい！ 無人戦闘機の迎撃許可も！」

「急げ！ 各国に繋げろお！ 異変を知らせろ！」

一気に艦内が慌ただしく動き始めた。

「やっつけてくれますね、要塞島軍……」

ルリの予想通り、包囲していた艦隊に次から次へと無人戦闘機が戻り、艦に体当たりしようとしてきた。幸い、アメリカ力勢の対応の素早さで有人戦闘機の被害は抑えられたが、残り二万六千九百九十機の暴走した無人戦闘機が連合軍に襲い掛かった。

「ゆけゆけ」 無人戦闘機「 空母に突っ込め」

鼻歌混じりで歌っていたのはラミデス。

「日本の暗い鋼の乙女をモデルにした割には……、意外と残忍」

東海岸の造船ドック外、コンクリートの上にて、スミスが一言。

「まあ、将軍がプログラミングしてくれましたし、潜水艦の指揮権をくれましたから」

「ふーん、気分がいいから歌って……って指揮権！？ ってことは」

「スミスさんはお一人で警備をお願いしますね」

と言うや否やコンクリートから海へ飛び降り、着水。そのまま前進した。

「ちょ！？ 一人って……」

だが、もう既にラミデスは行ってしまふ。

「報告！ 第五部隊の戦艦及び駆逐艦が沈められています！」

「まさか、無人戦闘機が突っ込んで!?」

「敵を確認出来ない模様！ ミサイル系の攻撃と思われます！」

アメリカ力勢空母の艦内では次々と無人戦闘機による被害報告が入ったが、今の報告は違う。

(相手は無人戦闘機に紛れて攻撃を仕掛けましたか……)

事態は最悪。次々と艦隊が損傷し、沈められる。

「こうなれば切り札です！ 全鋼の乙女に出動要請！」

「ニヤ!? 遂に出動ニヤ!?」

「ええ、私も後で行きます。あなたは近づいてくる無人戦闘機を落とさない。クレア達にも伝えて」

「了解だニヤー！」

ネコは部屋を出ると滑走路に向かい、飛び立った。他の艦にいた

クレアやハイネも確認し、ルリも外に出た。

外ではフランススが待っていた。

「ルリさん、出撃ですね」

「ええ、敵は無人戦闘機以外でも攻撃を加えてきます。くれぐれも注意なさい」

「分かりました！ ルリさんには銃弾一発も触れさせません！」

同様にイギリス、ソ連、日本、ドイツ、イタリアの鋼の乙女も出撃した。

無人戦闘機は主に包囲した艦隊を狙っている為、艦隊からの迎撃は楽だが、落とした後が問題だ。爆弾を抱えたまま残骸が落下し、運悪く命中した艦も少なくない。

鋼の乙女達は必然的に包囲網より前に前進せざるをえなかった。

ドイツ勢には約三千機の無人戦闘機が飛来したが、新型兵器で一網打尽にされた。

「だが、今だ二万五千機以上残っている。その上要塞島軍もいる。かなり難易度が上がってしまったな」

呟くのはレント。今さっき五機落としたところだ。



「しかし、冗談としか言いようがないあの艦がここまで活躍するのは……侮れんな」

「でも、おかげこっちは楽よ」

「そうそう、私のお腹に優しいし」

ルーデルとエーリヒが口を揃えて言う。確かに役に立っているが、どうだろうか。と、思っていた時だった。

ゴバアーン！

「！？、艦が沈められたぞ！？」

「えっ！？ うっそ！？ 無人戦闘機はいないのに！？」

轟音と同時に艦に穴が空き、傾きながら沈んでいった。

「わ、分かったぞ！ 潜水艦だ！ 潜水艦なら気づかれずに攻撃できろ！」

レントの憶測はドイツの艦に伝わり、瞬く間に連合軍へ駆け巡る。

早速各国は対潜哨戒機を出し、潜水艦を搜索。五機の黄色い潜水艦を確認した。直ぐさま伝わるが、同時に第六部隊の艦隊 インド、オーストラリアからなる艦隊が全滅したとの報告も入った。

ルリが出撃した後はアメリカの鋼の乙女司令官が指揮を執った。

「総員、潜水艦を用意し、駆逐に当たれ！」

攻撃型潜水艦を出撃させ、黄色い潜水艦への攻撃を行った。

が、黄色い潜水艦の機動力は潜水艦搭乗員の予想を遥かに越え、逆に返り討ちにされた。

第七部隊の艦隊にも一隻近づいていた。

「あれは報告の黄色い潜水艦！」

「へりを出せ！ 艦隊からハーブーンを撃たせろ」

顔に傷を負った将校が命令を下す。

その時、潜水艦の前方が横に割れ、ミサイルらしき物体が顔を覗かせた。

「な、なんだあれは？」

だが、考える暇もなく艦隊に向けてミサイルを放った。艦内はざわめき始めたが、将校は冷静に分析した。

「いや、待て。ミサイルは直進。しかも船底よりさらに下を通る。チャンスだ！」

そして再び攻撃命令を下したのと艦が傾いたのは同時だった。

「ホワッツ!? 何が起きた!?!」

「船底をねこそぎえぐられ、大量に浸水! 艦は持ちません!」

「な、なににー!?!?!? 外れたはずだ! なぜだ!?!」

「分かりません!」

「ぐっ、わしはこんなところで終わるのか……」

艦は三分も経たない内に海に沈んだ。

「第七部隊の旗艦が沈没! 指揮系統分断!」

「ぐっ、何一つ好転せんか……!!」

アメリカの鋼の乙女司令官は悔しい表情で聞いていた。

「……………やはり彼女達に任せるしかないか……………我々は信じている。  
あの大戦に起きた奇跡が再び訪れるのを!」

その時、通信が鳴る。

「司令官殿! 通信です! 仲間の周波数ではない……………まさか……………  
無理矢理繋げ……………」

「通信兵、繋ぎたまえ」

「よ、よろしいので？」

「私が直接出る。マイクを」

司令官がマイクを受け取ると通信を繋げる。

『あ、ああ……聞こえますか？』

聞こえたのは若い女性の声。

「ああ、聞こえている」

『あら、ルリさんが指揮をしていると思ったのだが……、あなた、司令官ね』

「その通りだ。君は何者かね？」

『鋼の乙女達には会ってはいるが、司令官とは初めて交わすわ。私は要塞島軍総大将のルル』

艦内がどよめくが、司令官は続けた。

「そうか。総大将がわざわざ通信するとは……余裕の頭れかね？」

『あゝ、なるほどね。でも、これだけの艦隊に包囲されているのに余裕なんて出るはずありませんよ』

「そうか。なら私達には好都合。さて、何か用件があるのだろうか？」

少しだけ沈黙し、先程と少し低い声が聞こえた。

『用件というより警告ね。ご存知の通り、私達の正規軍はかなり削られたから、あなた達の戦闘機をちょいと借りてるわけだが』

「我々の用意した二万七千機を操るとはたいした技術を持っていると私は思うがね」

『まあ、あれは……どうせ何も出来ないから教えとこう。簡単だ。ECMを使っただけだ』

「ECMだと？ 妨害にしか使えないはずだが？」

『ただのECMじゃないわ。ちょっといじってシステムに電波ジャックできるようにしただけ。ECMの効果範囲に触れた時点で書き換えられる。素晴らしい技術でしょ』

司令官は内心、この戦いに勝てるのかという疑問を抱いた。始める前までは絶対的自信があったが、もはや何処かに消え失せたのは当然かもしれない。だが、司令官はあくまで冷静に対応する。

「つまり、戦いに勝つには君の技術力を越えねばならないと言いたいのかね？」

『確かにそれも一理あるが、越えなくても勝てるわ。それはあなた達が……』

言いかけて再び沈黙。司令官は次の言葉が聞こえるまで待った。  
そして放たれた一言。

『…………彼女達を信じるなら』

通信はここで切れた。

「司令官殿……………」

搭乗員達が司令官に注目する。司令官は小さく、はっきり言った。

「彼女達……………我々の鋼の乙女達を信じよう」

### 第4章3話 全面戦争／ダウンフォール作戦（後書き）

Rwf - 99X 補足

N - M C 1 0 0 1

「ミヒヤエル」

屈折式レーザーでことごとくR戦闘機を破壊した暴走採掘機。格蘭ゼーラ選択時には泣きました。

EX - B S O 1 - F

「兆京級合体戦艦」

バイド編にて謎の文明軍最強の戦艦。合体の割にでかいだけで攻撃箇所が少なかった。むしろ戦闘機が厄介だった。

Rwf - 99

「ラストダンサー」

知る人ぞ知る究極互換機。この小説ではフォースが存在しないので一から波動砲を作るという設定です。

これをベースにしたのはR戦闘機最高の運動性能（自己解釈）とかを採用したためです。

**第4章4話 明かされる兵器、首都核爆撃始動（前書き）**

一週間ぶりに。またペースが遅くなってきた……。受験生だから  
で済まされるのか？



#### 第4章4話 明かされる兵器、首都核爆撃始動

要塞島軍と世界連合軍との全面戦争。

序盤は連合軍の作戦通り海上封鎖に成功し、要塞島は艦隊に包囲された。さらに偵察兼奇襲機として各国から集められた二万七千機の自動操縦技術搭載の無人戦闘機と三千機の有人戦闘機を出撃させる。

しかし、要塞島軍独自に開発したR戦闘機「エレクトリック・サイレンス」のEAによって、無人戦闘機の操作中枢に侵入、一瞬にして連合軍に反転させた。

幸い対応の速さで有人戦闘機の被害は最小限だが、今だ無人戦闘機は艦隊へ攻撃を続ける。

さらにR戦闘機から派生した潜水艦「グランビア・F」により戦艦や空母を沈められ、制空権、制海権は一気に要塞島軍が牛耳る。

事態を重く見たアメリカの鋼の乙女司令官は全鋼の乙女に出動要請。

その時には既に第七部隊の艦隊は壊滅。包囲網の四分の一が失くなった。

鋼の乙女が出動してからは無人戦闘機との攻防が続き、膠着状態となる。

そして今に至る。

鋼の乙女にとって無人戦闘機はもはや的でないほど簡単に撃ち落とせるが、その圧倒的な物量は彼女達の想像を遥かに超えている。

元日本海軍の三人も前線で片っ端から無人戦闘機を落としていた。

「ハア……ハア……くそっ、これでは前に進めぬ」

「ハア……くっつ、こんなの卑怯じゃんか！」

「でも、私達が…頑張らないとお……」

レイ、ナナ、てんざんの三人は要塞島から北西の海上で戦闘をしていた。

進軍途中に一隻のグランビア・Fが連合軍の駆逐艦を一掃する場面に出くわした。ここで活躍したのがナナとてんざんの魚雷攻撃。レイが潜水艦の大型の弾道迎撃ミサイルを斬った後に、大量の八九式魚雷をばらまいた。

敵の機動力は確かに強いが、やはり数に敵わず、一発命中すると続けざまに魚雷が命中。原形から掛け離れた姿はそのまま海中へ沈んでいった。

しばらく進軍すると再び遠方から無人戦闘機の群れが向かってきた。それを確認するや否や応戦体制に入る。ところが、

「むっ？」

「へっ？」

「ふえ？」

三人は向かってくる機体の変化を捉えた。向かってきた無人戦闘機の二機が突然消えた。かと思えば再び姿を現した。

三人はそれを見て直感した。

「今のつて要塞島軍の……」

「間違いない。R戦闘機だ」

「しかもジャミングが展開されています」

先の朝鮮戦争で見たジャミング機能。あのあたりにR戦闘機がある。

そうと分かった三人はまず無人戦闘機を機関砲、ミサイルで撃墜する。ミサイルは熱源反応のパッシブ・ホーミングによりECMの影響を受けずに追尾できる。無人戦闘機なら避ける技術はないと報告され、急遽変更されたが思いの外大活躍した。

無人戦闘機をあらかじめ撃ち落とすと、機体の消えたポイントに向かう。

遠くから見てた分曖昧な上に見えないから困難を極めると思われたが、

ゴンッ

「痛ッ！」

ナナが何も無い空中で何かにぶつかると空間に変化が起き、やがてエレクトリック・サイレンスが姿を現した。

「でかした、ナナ！」

姿を現し、逃げようとするエレクトリック・サイレンスにレイは近づいて主翼斬で斬る。機体は文字通り縦に真っ二つに割れ、爆発四散した。

主翼斬を刀に納めた時、通信が鳴る。直ぐさま通信機を取り出し、応える。

「はい、こちら零戦、レイ」

「あら…、先に撃墜したのは日本の鋼の乙女か」

聞き慣れない女性の声。身内や自軍以外に通信兵で女性は少ない。ましてや鋼の乙女に直接通信するなど考えられない。

「……誰…ですか？」

警戒しながら恐る恐る話す。

「ああ、日本軍は初めてか。要塞島軍総大将のルルという者です」

「なっ！？ 総大将だっ！？」

全く予想できなかったレイは面食らった表情をしていた。それに気づいたナナとてんさんは、

「れ、レイ。誰からの…？ 総大将って？」

「大丈夫ですか？」

と、心配そうに呼び掛ける。

「……………敵の総大将からだ」

レイははつきり答えると、二人とも驚いた。

「えええーっ！？ 敵の総大将！？ ちょ、やばいよ！」

「あわわわっ！！ レイお姉さま、危ないですよ！」

「二人とも落ち着け！」

レイが一喝するとぴたりと止んだ。

「もしかしたらチャンスかもしれない。二人とも少し黙ってくれ」

二人を宥め、通信機に語る。

「すまない。だが、何の用件で繋いだ？」

「むうー、随分優秀な鋼の乙女となったものねえ。何、我が新型R戦闘機を見破るなんて思わなかったから、強いて言えば称賛かな？」

「新型……?」

「日本の鋼の乙女が、未来の特別遠征艦隊に出会っていたのはこちらも承知している。だから我々はこの地にて艦隊の知らないR戦闘機の開発を急いだ。……まあ、艦隊は披露前に帰ってしまったけど」

静かに耳を傾けるレイ。しかし、疑問も同時に湧く。なぜ自分達の状況をばらすのか?

「ふふつ、レイは賢いから、なぜ敵が自分達に情報をばらしているのかと考えていただろう?」

「!?!?」

「ま、冗談はこのくらいに。今私達はもうまともな戦力は指で数えられる程度しかない。あなたたちの被害も無視出来ないが、我々が降伏するのは時間の問題」

「降伏だ?!?!? つまり、降伏の意思を伝達しろと言つのか?」

すると、通信機から笑い声が聞こえた。

「アハハッ、それは無いわよ。私達このまま引き下がる気なんてないし、せつかくの試験飛行を辞退する理由なんてないわ」

「まあ当たり前か……。で、試験飛行とは?」

「ふふつ、あなた達の実力を見て新作R戦闘機を一機完成させたわ。私はそれに乗り込んでいるから、捜したければ捜してみなさい。その時には手遅れだけど」

含みのある小さい笑い声が聞こえたと同時にレイは背筋が凍った。

「手遅れ……だと……」

「最後の悪あがきとも言えるかな。今からそれを伝えよう。全てを守れるなら守って貰おうか」

一呼吸おいて、通信機からある作戦が伝えられた。

聞いていく内に表情が青ざめ、通信機を持つ手が震えてきた。あまりにも表情の違いが表れたので、ナナとてんざんも通信機に耳を傾けようとした。

が、傾げる前にレイに制された。

「ちょ、レイ！ 説明してよ！」

「レイお姉さま！ 顔色が真っ青です！」

「……二人とも……落ち着いて……聞いてくれ……」

レイの声はレイが話す声とは全く異質な低く暗い声だった。

「敵は……市民を人質にしている」

レイ達は直ぐさま本部へ連絡すると、艦隊は大混乱に陥った。さらに内部で意見の衝突が発生した。攻撃を続ける強硬派とすぐに祖国を守る守国派。

ルルが伝えた最後の悪あがき。

それは首都攻撃。要塞島地下から地上にミサイルサイロが現れ、核と水素爆弾を融合させた戦術核搭載の大陸間弾道ミサイルが放たれる。

しかも破壊しようとする衝撃を加えようなら即座に爆発を起こし、大量の放射線を放射する。

それを防ぐには、中枢、すなわち要塞島中央研究所から地下に潜り、ミサイル発射を停止させる。

その時間、実にして1時間後。

要塞島は目と鼻の先であるが、今だ一万機以上ある無人戦闘機、上陸を拒む迎撃兵器群に敵の鋼の乙女。何処かに潜むエレクトリック・サイレンスと総大将ルルが乗る新型R戦闘機。

たった1時間でこの戦力を越えるのは至難の業だ。

「……行くぞ」

それでも進むしか道は無い。全てを、大切な何かを守る為の勇気が試されている。

ならばそれをただ証明するだけ。



そう決意したレイ達は再び進軍する。

エレクトリック・サイレンスの破壊により、要塞島の北西海上でのE Aが消失し、無人戦闘機がこの区間のみ使用可能になった。直ぐさまそのエリアの無人戦闘機の遠隔操作を再開し、再び要塞島へ向かわした。

要塞島上空で待機している要塞島軍鋼の乙女サクヤとムツは北西からの無人戦闘機を確認した。

「あれは連合軍の戦闘機！ こちらに来てる!？」

無人戦闘機が反転してからすっかり気を抜いていたのか、突然の出現に驚くムツ。その時サクヤの通信機が鳴り、それに応じる。

「今、將軍から通信…… REAW-Xが一機撃破された」

「なっ!？ ど、どうやって!？」

「撃破したのは……日本軍鋼の乙女」

二人ともまさか撃破されるとは微塵も考えなかったらしく、サクヤも内心焦っていた。

「いい？ 無人戦闘機は……本来敵の戦闘機。容赦無く落とす……。上空は私達だけ……」

それでも慌てているムツに指令を伝達する。身体は小さくとも要塞島軍戦力N0・2である。

「それは承知してますが……あの戦闘機は出さないんですか？ 滑走路に一機あつた」

ムツが東にある空港の方向を向いて問い掛ける。

「さあ……。とにかくあの戦闘機よりこちらに」

「ええ、ですがあと一つだけ。あれの名前は何ですか？」

「機体の名前？ えっと……、確か……コードがSM・36で、……名前……」

名前を思い出そうと思考を巡らせ、

「名前は……ストラム」

鋼の乙女出勤から2時間が経とうとした。ルルが伝えたミサイル発射まで後45分。

当の本人はエレクトリック・サイレンスと補給機「POWアーマ

「を同伴させ、要塞島の南西、第五部隊の艦隊に接近していた。海上スレスレを飛行していたルルは海上で横一列に並ぶ艦隊に脱帽していた。

「んー、まさに壮観。でもこれで包囲したつもりなのねえ。ところせましと並ぶ光景……例えるなら……三国志の赤壁の戦いで曹操の水軍かしら？」

一人呟きながらじっくり艦隊の配置を観察する。

到着から僅か二分後、ルルの戦闘機「ジェノサイド」はあろうことかジャミング領域から出た。すると一気に警報が鳴りはじめ、艦隊は突如現れた謎の戦闘機へ攻撃を開始した。しかし、突然のことなのか、指揮系統が届かず、各自で勝手に攻撃を開始したように見えた。

「あははっ、そんな纏まらずに攻撃したって弾一つ掠りやしないよ」

余裕の笑みを見せながら軽々と避ける。ベースが「Rwf-99」なのでその運動性能は艦隊の兵士の想像を遥かに超えた。

「つままないなあ。じゃ、波動砲の試験体になってもらおうと」

そう言うつと高度を低くし、海面スレスレに着くと機体の先端部に鮮やかな淡い赤色の光が収束し、

「では……、決戦波動砲、発射ア！」

放たれた波動砲は極太レーザーのように直進したかと思えば途中で幅が狭くなりながら三本、五本と枝別れし、艦隊の船底部分に命

中、さらに波動砲は90度に曲がり、隣り合わせの艦隊に次々と貫通してゆく。貫通した艦は間もなく船底が爆発し、連鎖反応の如く次々と艦は爆発する。

そのまま沈没する巡洋艦や、大きく傾いて機能を停止した戦艦、滑走路が海に着水する空母、転覆する駆逐艦など、波動砲に貫かれた艦隊はどれも戦闘不能。次々と乗組員が海に投げ落とされ、救命ボートにぎゅうぎゅうに乗ったり、浮かぶ破片を片手に助けを請う乗組員達。第五部隊の艦隊はたった一発の波動砲で壊滅した。

この戦果に一番本人が驚いていた。

「上出来上出来っと。……まさかここまでとは思わなかったけど、いい仕事したな。まさに最高傑作！ 通常戦闘機のストラマに劣らずの高性能、威力の強さ！」

ルルは乗組員への追撃はせずに後退し、ジャミング領域に入り、この場を離れた。

ルルはどちらかと言えば余り人命は奪いたくないのが本心。あくまで敵の兵器破壊に特化させたのだ。

第五部隊の壊滅は直ぐさま旗艦に報告され、震撼した。第五部隊は主に東南アジアやオセアニアの連合である（位置が近いから南西の海上を任されたのも一理だが）。とはいえ、艦隊は実に25隻である。それをたった一度の攻撃で壊滅させられたとなればたまったものじゃない。

圧倒的物量差で勝てるはずの戦いに少しずつ陰りが差し込んできた。中には勝てるのか？ と疑問をする乗組員も数名。しかも高官

達だ。

そして今だ止まぬ意見の対立。無人戦闘機の奇襲。まともな戦力は旗艦を含む第三部隊のみであり、第七、五部隊は壊滅、他も半数やられたりしていた。

それでも鋼の乙女司令官は信じていた。必ず乗り越えられると。

そこにある報告が入ってきた。

「司令官殿、諜報部より報告です。敵戦力が把握出来ました」

「うむ、モニターに映せ」

すぐに大型スクリーンに要塞島の地図が映し出される。敵のEAと思われるが範囲が緑の円を表示し、敵潜水艦は赤点を表示していた。

「報告によれば、EAの発信源は特定出来なかったものの、反応は残り三つであることが判明。さらに敵潜水艦の位置も把握。敵のドックは東部と判明」

「全鋼の乙女に今の情報を伝える」

「了解。それと、連合軍の被害状況ですが、兵器の損害は激しいですが、人的被害は余りないそうです。壊滅した部隊もほとんどが生き残っているようで、救助船が回収に向かっています」

「そうか。また新しく入れれば報告を」

そう言つと椅子に深く座り、考え事を始めた。

なぜ人的被害が少ないのか？

戦場では死傷者は付き物だ。自分達が生き残る為に相手を殺さなければならぬ。今回が海上だからというのも一理だろうが、その割に犠牲者が少ない。どの艦も大破、沈没しているのに関わらずだ。そう考えると、敵は本気で攻撃をしているのかと疑問が沸いて来る。突然本部への通信もしかり、何かと腑に落ちない。鋼の乙女への直接通信にも、作戦には確かな殺意があるが、時間猶予を与え、降伏の意思をほのめかす。

敵の本当の目的は別なのだろうか？

いくら考えても纏まらず、司令官は一度考えを振り切り、目の前の指揮に再び面向かう。

ミサイル発射まで後30分。

遂に北西より艦隊が要塞島の領海に入る。戦艦と空母と揚陸艦だけだが、上陸は時間の問題だった。

EAの脅威が無くなったことで航空戦力が復活し、要塞島沿岸の対空兵器へ攻撃を開始した。数もそれほどでもなかったので安全確保は容易だった。

「行くぞ！ 全速前進ッ！ コンクリートを打ち破れエエ！」

揚陸艦は最高速度で海岸に体当たり。コンクリートは呆気なく決壊し、しかし揚陸艦は削れて低くなったコンクリートに乗り上げってしまった。

だが、上陸できた事で歓声が上がリ、士気も上がった。揚陸艦から七四式戦車や小型駆逐車などを出撃させ、兵士もジャングルに進軍する。

しかし、そう簡単には行かなかった。

ピュン

上空から一筋の光が見えたかと思えば、

ドドドドーッッ！

突如揚陸艦が爆発した。兵士も謎の攻撃に慌てふためく。

要塞島東部の飛行場に列車砲が置かれているのを覚えているだろうか。全面戦争の前に、セキュリテイコピローイドSCSによつて850mm列車砲から電磁投射砲に換装されたのを。

電磁投射砲は波動砲の擬似再現としてルルは扱っているが、実際イギリスが大戦前に「無弾薬の火砲」と宣伝し、ドイツが大戦中に本気で造ろうとしていたものだ。結局は電力不足で実現には至らなかった。

電磁投射砲の射程範囲は要塞島全域な為、地上部隊は常にその脅威に晒されるのである。

電磁投射砲に使われる電力の供給源は地下に専用発電所があるように、それで可動させている。

そんな中、レイ、ナナ、てんざんも乗り上げた揚陸艦を視認出来る場所まで来たが、揚陸艦が黒く燻っているのを見て驚いた。

「これ……ただの砲弾じゃないぞ」

「何て言うか……高温で溶かされた…みたい？」

「で、でも先程爆発しましたし……」

三人は辺りを見回すが、揚陸艦と同じような状況の残骸が残っていた。

すると、近くの自走砲が突然爆発を起こし、側面に穴が開いた。しかも周りが揚陸艦同様燻っている。

「砲弾音すら聞こえなかったぞ……」

レイの一言に二人とも頷き、呆然とそれを見ていた。

「敵を貫く光の矢は、あらゆる場所においても逃げられない」

ジャングル側から声が聞こえ、三人が振り向くと、メイド姿の女性が見えた。

「一種の光学兵器。射程範囲は要塞島全域。逃げ場は存在しない」

颯爽と歩くその姿に、左手に機関砲、右手にバズーカ。かつて燕と戦ったあのスタイルだ。



「だ、誰……?」

ナナが問い掛ける。

「お初にお目にかかります。私はセキュリティコントロールシステム、通称SCS。將軍に造られたコピーロイド。あなたたちと同じ系統に入る者」

「僕たちと同じ……? じゃあ鋼の乙女?」

「いえ、厳密に言えばサイボーグ いわばロボットに近いほうです」

「あー、なるほど……」

「……」

「……」

「……」

何故か四人とも押し黙ってしまった。

**第4章5話 決着！最後の一撃（前書き）**

終盤です。

## 第4章5話 決着！最後の一撃

一方、単機で連合軍第五部隊を殲滅したルルは要塞島北西に揚陸艦が上陸したとの知らせを受け、そこに向かっている途中である。

北西はE Aが及ばない地域の為、何機か無人戦闘機を発見し、ことごとく落しながら現場に向かう。

だが、通信でさらに衝撃の事実を聞かされた。

『報告！ 北東のエレクトリック・サイレンスが破壊！ 残り三機』

「北東が！？ …… 北東は確か第三部隊… アメリカ中心の部隊か…

…」

『撃破した機体はアメリカ軍戦闘機「F - 15 イーグル」の模様』

これ聞いてルルは通信を別に合わせ、命令を出す。

「ラミ、聞こえる？ 潜水艦を率いて第三部隊の航空戦力を落とさない」

『了解』

通信を切り、一旦機体を停止させ、深呼吸をする。落ち着いたところで進路を上陸した揚陸艦へ向け、発進した。

要塞島北西のジャングル手前で四人は拮抗状態でどちらも動いていない。否、動けない。

どちらも機銃を向け、動いたら撃たれるという状況だ。しかし、敵にとっては時間稼ぎに過ぎない。このままいけば核ミサイルを黙って見届けることになる。つまり、敗北だ。

レイは状況を打開しようと頭をフル回転させて打開策を模索する。

だが、沈黙の均衡を破ったのは連合軍の艦砲射撃だった。連合軍のイージス艦・コルベットによるミサイル攻撃で背後の対空兵器を破壊したのだ。

SCSはその爆発と艦隊がここまで来た事に対する動揺で一瞬銃口がぶれる。

レイはその一瞬の間を見逃さずに抜刀。SCSの機関砲の先端から数cmを斬った。ナナとてんざんは全く見えなかった。

SCSは反応はしたが、回避が間に合わず機関砲を斬られた。直後にはバックステップで距離を開けると機関砲を棄て、バズーカを構える。

「さすが日本軍のエース……」

「賞賛はあとにしてくれ。時間が無いからな」

レイは強行突入してSCSの横を通ろうとした。高空に行けば対空兵器が作動するため、あえて低飛行で行く。

SCSも反応し、左足で回し蹴りを繰り返す。レイはあえて頭の前に腕を組んで受け止めた。自らの加速に敵の蹴りは確実に腕に響いた。

「っ!!」

衝撃で腕に激痛が走るが、レイは加速をやめなかった。それを察知したSCSも左足に力を加える。戦闘用に強化されただけあり、押し戻されそうになるがさらに加速して凌ぐ。ほんの数秒だけ拮抗したが、徐々にレイが押し返してきた。

(くっ!! これでは……突破される!)

さらに力を加えるが、左足だけでは支えきれず遂に押され、レイは一気に奥地へ疾風の如く一瞬で姿を消した。

「突破されたか……將軍になんて言えば……」

だが今は侵入者を倒すことを優先し、正面を向いた時だった。

「あ……」

既にナナとてんざんはいない。数秒の隙にこっそり内陸へ行ったようだ。

「……」

一瞬、追撃するかを考えたが、内陸は將軍が何とかするだろうと腹を括り、むしろ今から接近する艦隊の迎撃が先と判断し、バズーカだけを持って揚陸艦が打ち上げられている海岸へ向かう。

戦闘が長期化するにつれて徐々に連合軍が優勢になりつつあった。敵鋼の乙女はまだ健在だが、操られた無人戦闘機も残り千機を切り、潜水艦グランビア・Fも東部ドックにある一隻だけ。第五、六部隊、後方の第七部隊は壊滅、第四部隊は旗艦を合わせて僅か五隻。第三部隊だけ無傷ではないが十分な戦力を残している。

敵潜水艦グランビア・Fは連合軍の常識を覆す兵器があった。魚雷や弾道ミサイルなら実現はしている。潜水艦の先端から発射された直進する「超音波魚雷」。こればかりは全く分からなかった。分かっているのは直進した魚雷は超音波の振動波を発生させ、広範囲に攻撃できることだけだ。

しかもこれ自身潜水技術が高くレーダーになかなか引掛からず、衛星レーダーと連携してやっと捕捉できたという感じだった。

もし、レントが憶測とはいえ潜水艦に気づかなければ被害はこれ以上であつただろう。

各艦隊の兵士達も徐々に落ち着きを取り戻して進軍していく。要塞島軍の戦力も僅か、要塞島へ鋼の乙女が侵入でき、勝利へ近づくのが実感出来ているからだろう。

が、まだ危機は乗り越えていない。例の核ミサイルを阻止しない限り例え敵を殲滅しても勝利と言えない。

関係無い一般人が狙われている状況で、彼らを守る者こそ自分達だと上層部を説得し内部対立も治まり全員が要塞島へ向かっていた。ようやく纏まりを見せはじめた連合軍だが、時間はもう目前に迫っていた。

要塞島中央研究所の前に付いたレイは無人機銃などの警備機械を破壊する。

「ここに核が……あと一歩だ」

内部は狭い上に戦力もどれだけあるか分からないが、鋼の乙女である利点を生かし、早急に核ミサイルを停止させる。そう心で誓い、いざ潜入しようとした時だった。

「……!!」

上空からミサイルが降ってきた。すぐ回避して見上げたが何もない。

「……まさか」

レイは確信を得て上空に飛んだ。そして予想通り、上空の一部で空間の歪みが発生した。

現れたのはR戦闘機三機。一機は北西の海上で斬ったエレクトリック・サイレンス。丸っこい機体は前に特別遠征艦隊のアレンから聞いた補給機POWアーマー。そして黒くコーティングされた謎のR戦闘機。そのキャノピーの中にパイロットがいた。

「……」

レイは無言で愛刀主翼斬に手を掛けて、臨戦状態をとる。すると、目の前のR戦闘機から声が聞こえた。

「流石だ。SCSを突破してここまで来たか」

先程通信で聞いた声と同じ。パイロットは要塞島軍総大将のルルに間違いない。レイなら一瞬で間合いを詰めて斬ることは出来るが、敵の機体の出方を伺うため逆に待機した。敵の機体は得体が知れないからというのも一理だが、総大将が乗ってるだけに単純に効くはずがないと考えていた。

「……賢明な判断だ」

機体からそう聞こえ、同時に同伴したエレクトリック・サイレンスとPOWアーマーはその場を離れた。

「一騎打ちか？」

レイは敵の機体に問い掛けた。

「一騎打ち……。そう言えばそうかもしれない。現に連合軍で君だけがここに居るからな」

淡々と返す機体からの声。レイは聞いた。

「なぜ私達の世界に来た？」

「っ!？」

機体から動揺したような声が漏れ出た。しばらくしてから、

「……私達の目的は戦争の地で残された兵器残骸の回収。そしてD



F、核の技術情報。拠点を造る為にこの島がまだ何処にも所属していない時期を狙ったからこの世界の年代に来た。私達は元の世界では軍から独立した……って、ここは関係無いな。とりあえず来た理由はそれだけだ。納得して貰えたかな？」

レイは内容に驚くことも無く、ただ臨戦状態で聞いていた、が内心は怒りで溢れていた。

「なら……、なぜ戦争を起こした!!」

レイが最も聞きたいのはここだ。目的の為に戦争を勃発させ、多くの死者を出したこの軍が憎かった。大戦を経ても変わらぬ一般人への被害。何度か心が折れそうになった。それでも戦闘を続けてきた鋼の乙女。

平和を守ろうとしているのに、なぜ戦争を起こすのだろうか？その心情を聞いてみたかった。

しばらくの沈黙が続き、やがて機体からはこう答えた。

「私も戦争自体は好まない。だが、人間には欲望がある。自分の理想を築きたいと願う。国のトップにいる者も、だ。中には手段を選ばない馬鹿もいる。そういう奴らが自分達の都合で国家を動かして戦争を始める。戦争の大半なんてそんなくだらない野望なんかで起こされている」

「……」

「私達とてただ作業が終わればすぐ撤退するつもりだった。仕掛けたのは向こうからだ。こちらにも非はあるだろうが、放っておけば

何もしないと忠告したが、無視して戦力を投下してきた。やむを得ず応戦するしか無かった」

「……そうか。でも私は……お前達を許せない！」

「……そうだろうな。仕方ない、どうせ最後だ」

もう言葉はいらない。お互い臨戦状態に入り、衝突した。

レイの速度とRwf-99Xの速度はほぼ同等だった。レイが機関砲を撃ち、それを避けると光子バルカンで反撃。回避行動をとりながら機体に接近し、主翼斬で斬ろうとするも従来のR戦闘機とは違い、かわされる。追尾ミサイル？に誘導ミサイルを発射するもレイはすぐ反応して斬ったり機関砲で撃ち落とす。攻防戦が続くが、どちらも有効打は無かった。

（これでは消費するばかりか！ 早く決着を着けねば……！）

核ミサイルの発射時刻に近づくにつれて焦燥感に駆られるレイ。しかし、必殺技を出すタイミングが掴めず、機関砲と主翼斬で応戦するしかなかった。が、敵が突如レイから離れた。その不可解な行動に一瞬動揺したが、その真意が分かるとすぐさま追いかけた。

（まずい！ 逃がしてはいけない！）

しかし、レイの考えに反して機体は反転してレイに向けた。いや、機体をレイに向けながら離れていた。その先端から赤く淡い光が収束していた。

それに気づいたレイは素早く高度を上げた。しかし、放たれた波動砲は追尾性。それを知らないレイは驚いた。

（なっ！？ 追尾性！？ しかも分裂しているっ！？ まずい、囲まれる！）

分裂した波動砲は時間差であるが四方を囲みながら上昇してきたが、レイは波動砲のど真ん中の僅かな隙間に突っ込んで行った。

「抜刀・主翼一閃っ！！！」

必殺技とジェット機関で最高速度に達したレイを感知して90度に曲がる波動砲。僅か数cmの差でレイが通り抜ける。続く波動砲も曲がるが、波動砲は一度曲がればあとは直進するだけ。全ての波動砲を抜けたレイはRwf-99Xに真っ直ぐ突っ込んだ。

波動砲を避けられると予測していたのか既に光子バルカンと追尾ミサイルが放たれていた。最高速度であるレイは避けることなく正面から突っ込む。

光子バルカンに最高速度で突っ込む行為はまさに無謀だった。光子バルカンはレイの身体を、主翼を貫き、ミサイルが命中し、そのたび全身が激痛に襲われる。最高速度での負担はレイの身体や内燃機関にほぼ8Gの負担を掛けて主翼ももたず表面から次々剥がれ落ちる。服も光子バルカンでボロボロ。

はつきり言えば限界を超えていた。

だが、レイは止まらなかつた。心に刻まれた二つの想い。平和を築くという想いと世界を護るという想い。それだけでレイを動かしていた。そして、

「ハアアアアアッ！！！」

目前に捉えた R w f - 9 9 X に向けて渾身の一撃を加えた。抜刀した主翼斬は R w f - 9 9 X ですら反応出来ない程速く、そして芯を捉えた。

ほんの一瞬だった。R w f - 9 9 X は縦に斬られ、ボンツと爆発した。小規模の爆発だが、その爆発は全てが終わったことを証明したように響いた。

気づけば海上の上だった。

パイロットのルルはそのまま海に着水した。

「ハア……ハア……」

レイ自身もはや立っていられるだけでも奇跡だと言わんばかりの重傷だった。

そして糸が切れたように海へ落ちていく。

レイは着水しなかった。誰かがレイを受け止めた。

「レイちゃん……」

あかぎだった。傍には日本軍の空母。レイに意識はなかった。すぐにやまとゆきかぜが近づき、あかぎはレイを二人に預けた。二

人はすぐに空母へ運ぶ。

あかぎは20mm機関砲を構えて破片に掴んでいるルルに近づいた。

「要塞島軍総大将のルルさんですね」

相手を威圧する言い方でルルに話しかける。

「言いたいことは分かる。降参だ」

もはや戦闘の意思が無いと見ると、あかぎはルルを捕まえ、空母に旗艦した。

#### 第4章最終話 要塞島崩壊

ルルのR戦闘機Rwf-99Xが撃墜されてから突如、要塞島軍は攻撃を停止した。

敵の罨かと警戒した第三部隊だが、後に日本軍から総大将の捕縛の報告を受け、艦内は一気に歓喜の声が上がった。

要塞島南東上空で戦闘していたイギリス空軍と要塞島軍の鋼の乙女。突如攻撃を中止したサクヤとムツに動きを止めたムスタングとマーリン。

「……なぜ攻撃を止めました？」

ムスタングが二人に問い掛ける。

「戦闘停止の命令だ」

そう言うや否や中央研究所へ引き返した二人。

「あつ、待ちなさい！」

と、マーリンが追おうとしたが、ムスタングが止めた。

「ムスタングさんっ!？」

「マーリンお姉さま、罨かもしれません」

しばらくその場に待機したが、通信で要塞島軍総大将捕縛を聞き、一旦イギリス軍空母に帰還した。

どこも同じように突如要塞島へ踵を返すように撤退する要塞島軍。通信を聞いて、遂に戦争が終わったことにどの部隊も一斉に歓喜した。

要塞島軍鋼の乙女はSCSを含め全員中央研究所に撤退した。誰もガルの敗北など予想してなかった。沈黙の中、スミスが口を開いた。

「私達、これからどうするの？」

答えたのはサクヤ。

「それは……将軍が決めること……交渉次第……」

再び沈黙する。敗北したら中央研究所に集まるよう言われたがそれ以上は何も聞いていない。途方が暮れたまま、誰一人動かず研究所で待機した。

日本軍は第三部隊の旗艦に合流し、アメリカ軍にルルを引き渡し、ルルは艦の営倉へ連行された。そこではルリと司令官がいた。

ルルは一切無言で従い、縛られたまま用意された椅子に座らされ

た。

扉を閉め、部屋は三人だけとなった。

「さて、君が要塞島軍総大将のルルかね？」

「……はい」

司令官の問い掛けに素直に答える。

「君が捕縛された時、要塞島軍は撤退したが、もう動かないのかな？」

「はい。私が乗る戦闘機が破壊された時点で自動的に攻撃停止命令が通信で伝えられる……そう設定してありましたから」

今度はルリが尋ねる。

「では、貴女達の目的は何ですか？」

ルルはレイに言ったのと同じ内容を語った。が、戦争を起こした動機は語らなかつた。通用しないのは見えてるし、敗者に聞く耳など持たないと思っっているからだ。

「おおよそ分かりました。ですが、貴女達に許される道理はありません」

「分かっている。あの島とミッドウェー島は返還する。しかし、一つだけお願いしたいことがある」



「貴女達の願いなど聞き入れる気なんてありませんわ!」

当然と言えば当然である。ところが、

「いや、構わん」

「し、司令官ッ!? 何故です!?!」

司令官が認めたことに驚愕し、抗議するルリ。

「彼女の話からだと言争を起す気など元から無いように思える。  
先の戦争で人的被害が少ないのもそうであろう?」

「で、ですが…」

「責任は私が全部とる」

「……」

ルリは全く理解出来ないが、司令官の言うことでもあり、渋々食  
い下がる。

「ありがとうございます」

「いや、構わない」

「では申し上げますが、仲間には手を出さないで貰いたい。そちら  
で捕縛している鋼の乙女もです。一応この世界への撤退の用意は出  
来ています。島の返還は私達が去ってからでも遅くはないと思いま  
すが」

「そ、そんなの自分勝手過ぎますわ！ 多くの被害を出しておきながら逃げるつもり!?!」

さすがにルリも黙ってられない。

「司令!! やはりこの女は厳正に処罰すべきです!」

「……」

「司令ツ!!」

「分かった。だが、審議する必要がある。それまでここで待機して貰う」

そう言うと司令官は扉を開け、外に出た。ルリも不服そうに出る。

外に出てルリはすぐに突っ掛かる。

「司令ツ!! どういうことなのです! 敵の言い分を聞くななんてどうかしてますわ!」

だが、それでも司令官は冷静に話す。

「ルリ君、君ほどの優秀な鋼の乙女が感情で物事を判断してはならない」

「ですが、司令官のした行為は利敵行為に等しいのですよ!!」

「落ち着きたまえ。彼女にはある情報価値がある」

そこでルリの動きはピタッと止まる。

「情報価値……ですか？」

「それに、彼女の命令がない限り要塞島軍は動かない」

確かにそれは核心を突いてはいるが、ある情報とは何のことだろうか？

「ルリ君、イギリス本土襲撃を覚えているかな？」

「え、ええ。要塞島軍が博物館を襲った」

「あの時、彼女の部下である鋼の乙女がDFを完全に完成させられるとイギリス軍に言っていた」

「！」

そう、スミスが博物館奥のDF研究所を探した際にシスターに言ったことである。

「DFの完全解明、それも正しい方向へ進めれば大躍進と思わないかね？ 処罰する前にまだ利用価値がある」

確かにDFは現在再生技術としての応用はイギリスで実証済みである。が、禁忌の技術故になかなか研究が進まず、再生技術以外への応用が判明していない。

「ですが、素直に聞くでしょうか？」

ルリからすれば簡単に聞きそうな相手ではないように見える。

「だから聞いたのだよ。彼女の願いを」

「えっ？ ま、まさか」

ここでようやくルリも司令官の不可解な行動を理解出来た。

「直に彼女の部下も捕縛される。それらを盾にすれば聞かざるを得ないはずだ」

「……分かりました」

「うむ、それでいい」

やはり司令官の奇抜な策略は全てがパーフェクトなルリも認めるほど完璧と言えた。

それから数日後、要塞島へ上陸した部隊は中央研究所にて全員を捕縛、艦に連行した。が、研究所内はほぼ空っぽであり、資料と叫ぶようなものは無かった。さらに、核ミサイルも全く発見できなかった。

ルリからの話だと、核ミサイルは元から存在しなかった。嘘を付いたのには連合軍の本気を引き出す為だそうだ。Rwf-99Xの試運転として鋼の乙女を本気にさせて、その実力を試そうとしたのだ。尤もルリ自身短期間で破壊されるとは思っていなかった。いわば要塞島軍の切り札が破壊されたから攻撃停止命令を設定したとのこと。

「まさか空母『信濃』と同じ運命を辿るとはね……」

と最後に付け加えた。

要塞島に収容されていた潜水艦グランビア・F、戦闘機ストラムなどを確保し、それぞれ輸送艦に収容した。アメリカ軍の調査団や兵器研究員も順次要塞島に到着し、使われた技術、兵器の調査を開始する。

一方、日本軍の旧海軍の鋼の乙女は重傷を負ったレイの看護に回った。看護と言っても実質やることはなく、ただ傍で見守るだけだった。

戦闘後、直ぐさま整備班が治療に取り掛かったが、かなり危険な状態だったらしい。

DFの再生技術がなければ死亡してもおかしくなかった。今回は重傷だが意識はまだかすかにあり、復活技術は使わずに済んだのが幸いだった。

今は安静にベッドで寝ているが、まだ目を覚まさない。

特にナナとてんざんは決して傍を離れなかった。一緒にいながらレイをサポートできなかったことに責任を感じているのだろう。

「ナナちゃん、てんちゃん、あなたたちに責任なんて無いわ。私達だってどうする事もできなかったし、ね」

とあかぎが言い聞かせたが、それでも傍に居続けた。

「分かってる。でも傍にいさせて」

「私からもお願いします、あかぎお姉さま」

「……分かったわ。でも無理しないで、いつでも帰って来なさいね。私達も交代で毎日来るから」

そう言うにあかぎは部屋から退出し、その日はそれだけで終わった。それからやまと、ゆきかぜ、いちこが交代でレイの様子を見、旧陸軍の四人も時々見舞いに来たが、ナナとてんざんは一日たりとも傍を離れなかった。

それでもレイは目を覚まさなかった。

要塞島での戦いから一週間が経過した。

ナナとてんざんは相変わらずベッドの傍でレイを見守る。今日はあかぎが来た。

「ナナちゃん、てんちゃん、どうっ？」

「あ、あかぎ。……まだ目を覚まさないんだ」

「整備士さんはもう心配は無い状態だと言ったのですが……」

二人とも浮かない顔で答える。それに毎日来ているので疲れが顔に出ている。

「ねえ、二人とも今日は私に任せて一旦基地で休んだら？ もう毎日来てて疲れてるでしょ？」

「……まだいるよ」

「私もです」

「でもほら、もし目を覚ました時に疲れた顔を見せたらレイちゃんはきつと申し訳ないと思うわ」

「……」

あかぎの提案に答える事なくただ黙っている二人。あかぎの言い分は正しいが、やはりレイからは離れたくない想いが強い。

そんな時、部屋のドアがノックされた。

「はい、どつぞ〜」

あかぎが応えるとドアが開き、誰かが中に入る。その誰かを見た瞬間、あかぎは目を丸くした。

何故なら本来ここにいない人物がここにいるからだ。

「ど、どうして貴女が？」

あかぎの異変に二人もその人物を見る。が、二人はあかぎほど驚くことは無かった。それもそのはず、二人は誰か分からないからだ。

「ねえ、あかぎ。この人、誰？」

「ナナちゃん、この人はね……」

と、紹介しようとするとその誰かに制された。

「いや、自分で言いますよ。私は要塞島軍総大将のルル。以後お見知りお気を」

しばしの沈黙が続き、やがて二人の口から静寂が破られる。

「「ええええええええええー……っつ！……！！？」」

「ちょ、ベッドではお静かに」

二人の絶叫に軽く注意するルル。

「………って静かにしてる場合かつ！」

「あわわわっ、あ、アメリカ軍に捕まっていたのに何故ここにー！  
！？」

「ど、どういふことですか？」

三者三様にルルの存在を否定する。

「うーん、まあ当然と言えば当然の反応だが………」



困惑した表情で自分の立ち位置を捜すルル。とりあえずここにいう説明を始める。

捕縛から三日後、アメリカ軍からある取引が持ち掛けられた。アメリカ軍鋼の乙女司令官の思惑通りDFの研究に協力することに合意した。渋々というよりむしろ好意的に合意した。もともとDF技術の取得を目的にしていたからだ。

それからDF技術は大躍進した。それぞれ再生・復活技術は元より、攻撃特化技術、防御特化技術など鋼の乙女に対する強化スペックが最高レベルで再現された。勿論精神的異常の反応も検出されず、まさに研究は成功だった。

また、要塞島沿岸に配置された通常兵器の強化技術をアメリカ軍に伝達した。

そして、レイに重傷を負わせた事に謝罪の意を込めてDFの回復技術をレイに施すためにここに来たのだ。証拠に廊下に二人の米兵が同伴している。

「　　というわけだ。ま、部下が全員揃うまで帰れないから、お見知りお気を。……って二回目か」

「……納得できない」

一週間前にあれだけ激闘した敵が平然と居座るのは納得できないのは当たり前だ。

「ちよっと待って。なんでレイちゃんに？」

「先に言ったように重傷を負わせたから、その償いだ。正直私だっ

て戦争は好まない。……こうなってしまったことに申し訳なく思っている……」

「そう……分かったわ。私は貴女を信じます」

「えっ……？」

あかぎの発言にルルだけでなくナナとてんざんまで目を丸くする。

「何となくだけど、この人は根がしっかりしてるし、きつと約束を破らないと思うわ」

そう言つとベッドから少し離れ、ルルを先導するように道を開ける。

「どうぞ」

あかぎは笑顔で一言言つとルルは無言でベッドの傍に近寄る。

「な、何をする気……？」

不安に駆られるナナが恐る恐る聞く。するとルルは懐から小瓶と注射器を取り出す。

「これをレイに注射すれば数分後には目が覚める」

ルルは小瓶の蓋を開け、中身を注射器で吸引し、レイの右腕に注射した。中の透明な液体がレイに注がれると注射器を抜き、懐に小瓶としまつ。

「数分後には目が覚める。私はこれで」

と部屋から退出しようとするど、

「待って。もし本当に目が覚めたらお礼も言いたいから残って下さる??」

とあかぎが呼び止めるが、

「いや、レイはまだ私を敵だと思っている。それに姉妹同士で喜びを分かち合うのに部外者は邪魔だからな。お礼が言いたいなら手紙の一つでも書くといい」

と断り、部屋を出る。

去ってから数分後経った時だった。

「う…………ん…………」

「レイッ!!--」

「レイお姉さまっ!!--」

「レイちゃん!!--」

目を覚ましたレイの傍に駆け寄る三人。

「…ナナ……てんざん……あかぎ…」

「良かった……本当に良かった…グスッ」

「ウワァーン！　ね、レイお姉さまあつ！……本当に…！」

二人はベッド越しにレイに抱き着いて泣き出す。レイは優しく二人の頭を撫でる。

「ナナ、てんざん、心配を掛けて済まなかったな」

「そ、そんな事ないよっ！　レイが……レイが起きてくれて……それだけで……」

「わ、私もそうなんです…ヒグッ…」

「ハハッ、二人とも嘘が下手だぞ」

泣き止まない二人を宥めながら、それでも笑顔のレイ。

「レイちゃん」

「あ、あかぎ」

レイはあかぎが何か言っしてほしいような表情を読み取り、一言言っただ。

「ただいま」

「おかえり、レイちゃん」

レイが目を覚ました事は瞬く間に日本軍に伝わり、次々と日本の鋼の乙女が集結し、レイの無事を祝福した。

実のところ真つ先に来たのは意外にも司令官だったとか。しかし、後から来た鋼の乙女に押される形で退出させられ、結局面会はたった三分だけだった。

それから二日後、レイは完全に回復し、訓練に復帰した。病み上がりを心配したナナとてんざんだが、そんな状態を見せ付けない程完璧に訓練をこなし、やがて基地はまたいつもと変わらぬ日常へと戻り、一時の平和を享受する。

要塞島での決戦から約一ヶ月が過ぎた頃、世界は目覚ましく発展した。ルルから伝達された技術は軍事から民間へと転換を経て、先進国を筆頭に大いに発展した。

しかし、ルルの持つ全ての技術を伝達したわけではない。世界のバランスを考えれば当然であるし、この地球に存在しない資源も当然使われてる。現にR戦闘機などは全て自爆させている。世界に合わない技術は必要無い。尤も、この世界に持ってきたR戦闘機はもともと22世紀で鹵獲したものが大半だった。勿論バイドに侵食されてない壊れた機体のみ。資源を集めて一から造るのにはやはり資源が足りなかった。

ルルの貢献を認められ、後日もとの世界への帰還許可を与えられた。

これで全ての異変が終わり、世界はもとあるべき世界へと戻っていく。無論、今なお続く紛争や内戦の鎮圧や平和交渉に鋼の乙女が遣われる事態があるかもしれない。それでも彼女達は恒久の平和を目指して日々奮闘するのだった。

が、帰還直前にて事件が発生した。

ルルが米兵から聞いた話から始まった。

「えっ！？ 軟禁してたツツが消えた！？」

「はい、しかも我々の警備兵も全員眠らされていて監視カメラも停止していて全く気づかれなかったと諜報部から報告が」

世界の動乱はまだ続くようだ。

#### 第4章最終話 要塞島崩壊（後書き）

どうも、作者の鍾馗です。本来ならここで終わろうと思っていたのですが、新しく思い付いてどうしても入れてみたいということので延長します。

本当ならおまけで長編のifストーリーでもと思ってましたが、どう考えても本編との話数バランスが合わなくて……。

そこにとある設定を見て本編ストーリーの続きを思い付いたので続行を決めました。

萌え2次ファンは少ない上に、稚拙で拙い文章力ですが、今後も宜しく願います。

第5章1話 イラン軍とNSDAP（前書き）

テロリストです。それはほんの少し。



## 第5章1話 イラン軍とNSDAP

要塞島決戦から一ヶ月後。ルルが率いる要塞島軍がもとの世界へ撤退する直前に事件が起きた。

要塞島軍鋼の乙女、オオツツの消息が絶えたのだ。アメリカ軍基地に軟禁されていたが、誰一人気づくことなく忽然と姿を消した。監視カメラまで停止してあり、証拠は皆無であった。

アメリカ軍は早急に会議を開き、事に当たる。無論ルルも参加している。

まずルリが現状報告を行う。

「では状況検証ですが、まず監視カメラが作動していない時間帯は夜11時から12時の一時間。この間に姿を消したと思われます。次に、警備兵は全員眠らされ、目撃者は無しです」

「眠らされたとは言うが、外傷は無いのか？」

高官の一人が尋ねる。

「はい。医療チームから警備兵は麻酔薬を投入されたとありますので、外傷は無いです」

「例の鋼の乙女は独房に入れられていたが、独房は破壊されたのか？」

別の高官が尋ねる。

「いえ。多分監視室の鍵で独房を開けたと思われます。破壊された形跡は一切ありません」

このような調子で会議は続くが、証拠が無い分憶測でしか議論出来ず、時間だけが過ぎて行く。

その間、ルルは終始無言で聞いていた。

会議が終わり、高官は全員退室したがルルだけは椅子に座ったまま黙りつづける。

ただシヨックで何も話せないのか、何かを考えているか。どちらかは本人でないと分からない。

見かねたルリは傍に寄って話し掛ける。

「あの…大丈夫ですか？ 会議が始まってから終始無言でしたが…」

「む？ あ、ああ、少し考えてて…」

身体の向きを変えて答えたが、またすぐに机と向き合う。が、間もなくして、ルリに問い掛ける。

「あの、ルリさんはこの件をどう思います？」

突然であり、しかも意図の掴みづらい質問で一瞬戸惑うも、冷静に答える。

「そうですね……、侵入者となれば全面協力は惜しみませんが、い  
かんせん情報が足りないのではどうこう言える考えは無いのですが…  
…」

「そうですね」

少し憂いを交えた口調で言う。そして椅子から立ち上がり、ルリ  
と顔を合わせる。

「ルリさんにははっきり言うておきますが、私にはどうも話がつま  
すぎるように思えます」

「？、それは犯人にとって話がつますぎるという意味でしょうか？」

「少し違うかな。そうですね……はっきり言います。これは内  
部の犯行です」

「！！？」

全く予想だにしない事を聞いて、身体全体が硬直したように驚く  
ルリ。しかし、ルリは続けた。

「内部とは言っても多分上層部の誰かと思えます」

「ちょ、ちょっと待って！ な、何を根拠に我が軍を疑うというの  
ですか！？」

思いつきりルリに突っ掛かり、襟を掴む。ルリはそれを払うこと  
なくさらに続ける。

「考えられませんか？　まず犯人は我々の存在を以前から知ってる。時期としてミッドウエー戦前でしょう。それにツツを鹵獲し、軟禁場所を知ってるのはアメリカ軍の一部。勿論上層部も含まれるはず。そして現場では警備兵が一人残らず眠らされている。つまり、警備兵の人数、ルートを熟知した内部の者にしか出来ない」

ルリはその言葉を信じる事が出来なかった。彼女にとって内部の犯行とは微塵も考えていない。それもそのはず、アメリカ完全正義主義である彼女にとって自国を疑うことなどナンセンスである。

「くっ…」

だが、言い分としては正しい。内部の者なら危険を冒さずに簡単に犯行は可能だ。だがやはり彼女のプライドからか受け入れたくない思いが強い。ルリは掴んだ手を離してから言う。

「私は…認めませんわ！」

「……まあ、貴女の性格からしてそう言うのは予想通りです。しかし、事實は時に残酷な運命に導く時もあります。それをお忘れなく」と、当たり前のように平然と言いのけてから再び椅子を引き寄せて座る。

ルリは依然立ち尽くしたままだった。肩が上下するほど呼吸が荒い。さすがに言い過ぎたかと思いい、

「あくまでこれもまだ憶測ですから」

と付け加えた。

それから十分が経過。いまだ部屋を出ようとしないうる。整理がつかないルリは気をまぎわらす為にそちらを聞いてみる。

「一つ聞きますが、どうしてまだ部屋に？」

「あ、そうでしたね。実は報告を待ってるんです」

机に載せてあるのは先程の会議で配布された資料。それを眺めながら答える。

ルリにはよく分からなかったが、その五秒後に分かった。

「將軍ッ！ 信号を捉えました！」

勢いよく扉を開けて部屋に来たのは要塞島軍鋼の乙女のスマイスだ。つた。

「どうだった？」

とルリは別にそちらを見る事なく尋ねる。

「いや、こっち向いて下さいよ」

「大丈夫。ちゃんと聞いているから」

「はあ……、えっと、まずオオツツの居場所ですが、所属不明の輸

送艦で運ばれてます」

「輸送艦か。進路は？」

「現在太平洋を南下しており、間もなくシンガポール港に到着します。予想経路だとペルシャ湾へ向かうかと」

「最終目的地は中東か。分かった」

報告を聞き終わると、先程より表情がやわらかくなったように思えた。

「あの、それって本当ですか！？」

置いてけぼりな状態のルリがさかさ割り込む。

「ええ、ほぼ確実」

答えたのはルル。

「向こうも多分連れ去られた事に気づいたら何かしら信号を送るだろうと思って回線を開けて収集していたからな」

「ずっと通信機前に張り付いて作業してましたからスツゴク疲れました」

「そ、ご苦労様」

とスミスに軽くねぎらいの言葉を述べる。

「じゃあ今からでも助けに行くのですか？」

ルリが聞く。スミスもルルに注目する。要塞島での戦争は終結したのだし、早期に解決するならそうするだろう。だが、

「そう思っただけど……、まだ助けるのには早い。まだツツには頑張ってもらおうか」

「「！！！！？」」

またしても予想外の発言。だが何より驚いていたのはスミスだった。

「將軍ッ！ もう戦いは終わったのですからもういいじゃないですか！ どうして……どうしてまだあの子に苦痛を与えるのですかッ！」

ルリと打って変わり、感情を露にしてルルに抗議する。それでも冷静にこう返す。

「スミ、落ち着いて。私とてまだ犯人を特定出来ていない。それに目的地が分かったなら後は犯人を上手く表舞台に立たせることが優先だ。それに」

「それは前にも聞きました！ 同じ事は聞きたくありません！」

話を遮ってまで訴えるスミス。全面戦争前に要塞島で同じやり取りをしたがスミスは全然納得せずに話の途中で部屋を出た。

今回も同じようにならないように注意して言ったがやはり無理だと思うと、ルルは立ち上がり先にスミスの両腕を掴む。

「なっ!?!」

「スミ、あなたの気持ちは十分に分かっている。だから待つてほしい。私だつて今すぐ行きたいが、それでは犯人に逃げられる。不安要素を残したまま帰還するにも後味が悪いからな、せめてこれを解決しておきたい」

「……」

「目的地は分かっている。だからもう少し待つて」

そう言うつてから両腕を解放する。スミスも納得はできないものの、幾分かは落ち着いたようだ。

(ああ、この人達も日本の鋼の乙女同様の気持ちを持っている。仲間意識の高さから見ても申し分ないほど。彼女達ならきつと……)

二人のやり取りを見て、仲間意識の高さを痛感させられたルリはそう思った。

「しかし、中東とは厄介だな」

ルリは思い出すように呟く。

現在、中東ではイラン・イラク戦争が勃発。



この戦争は、数次に渡る中東戦争、湾岸戦争などと並んで中東地域の不安定さを示す材料であるとされる。中東における不安定要因は、ユダヤ教のイスラエルとイスラム諸国の対立という図式で考えられることも多いが、この戦争はイスラム教内のシーア派とスンナ派の歴史的対立や、アラブとペルシアの歴史的な対立の構図を現代に復活させたことに於いて、非常に興味深い事件であるといえる。また、イスラム革命に対する周辺国と欧米の干渉戦争と捉えることもできる。

イラク軍が全面攻撃を仕掛け、イランの十箇所の空軍基地を爆撃、イラン軍がそれを迎撃するという形で戦争は始まった。

イランのイスラム革命に介入しようと、米国や欧州、ソ連などはイラクを積極的に支援した。革命後のイラン国内では反米運動が盛り上がり、またイランのイスラム革命精神の拡大を恐れた事も関係した。

アラブ諸国はスンニ派や世俗的な王政・独裁制が多い為、イランの十二イマーム派の革命の輸出を恐れてイラクを支援した。特にクウェートはペルシア湾の対岸にイランを臨むことから、積極的にイラクを支援し、資金援助のほか、軍港を提供するなどした。

ソ連はかねてから親ソ政権であったイラクにあらゆる面で協力しており、また国内へのイスラム革命の飛び火も恐れて、192億ドルの武器を輸出するなどイラク最大の援助国であった。

一方、完全に孤立したように見えたイランであったが、アラブ全てを敵に回しているイスラエルが援助を始める。米国製の部品をイスラエルが代わりに調達するなどしてイランを支えた。加えて、イスラーム重視政策を採ったシリアとリビアがイランに味方した。また、北朝鮮が秘密裏に武器と兵員を送っている。兵力は1000人

規模で戦死者が共同墓地に埋葬されており、このときからイランと北朝鮮の親密関係が構築された。

しかし、東西諸国共に対しイラン制裁処置を発動した為、物資、兵器の補給などが滞り、また革命による混乱も重なってイラン軍は人海戦術などで応じるしかなかったため、大量の犠牲者を出した。

史実ならばイラク優勢のまま停戦するはずだが、何故かイラン軍の徹底抗戦が続いている。

アメリカ軍諜報部はスパイを送り込み、原因を調査している。

オオツツに関する会議があつた日から一週間後、再び同じ部屋に諜報部からの報告を聞いた。

勿論説明役はライトニング姉妹。

「NSDAPP?」

「そ、つまりナチスの残党が中東で集結してらってわけ」

「と言ってもあくまでサポートに徹してるみたい。現役兵もほとんどいないからね」

さすがに他の高官もどよめきを隠せない。ましてやイラン軍が壊滅したはずのナチスと関わっているなど誰が想像できようか。

「おい、それって本当なんだろうな?」

会議に合わないぶつきらぼうな口調で言ったのはクレアだ。

今回はルリの他にアメリカの鋼の乙女のクレア、フランシス、エイミーが参加している。

「クスクスツ　相変わらずねえ、クレアは」

「ぼく達にかかれば偵察ぐらい朝飯前だよ。そ・れ・に、誰かさんと違ってちゃんと働いてるんだよ」

いつものように臆するどころか挑発する双子。軽蔑の視線を送りながら。

「て、テメエらぁー!!」

「やめなさいっ！　クレアも双子も！」

挑発に乗り双子に殴り掛かろうとするクレアの肩を掴んで制するルリとフランシス。

「は、離せっ！　一発殴らせろ！　我慢できねえ!!」

「挑発に乗らないって約束したばかりじゃないですか！」

「そうよ！　ルリさんの約束破ったあげくにルリさんにまで手を煩わせるなんて！」

「……………ハア」

このやり取りを見てため息をつくるルリ。無視してライティング姉妹に振り返る。

「あれは放っておくとして、そのNSDAPはどこまで分かったの？」

「そうだね、NSDAPは技術者や科学者の混成軍。いわゆる化学技術部隊で成り立ってる。そいつらがイラン軍に兵器を渡してるのは間違いないね」

「しかもその兵器がどれも強力かつ最新なものだからイラク軍が押されてるわけ」

「イラク軍は各国からの援助で賄ってるからね。つまり、今は膠着状態ってこと」

双子はからかう様子もなく平然と答える。

「あ、ちなみにその兵器を写真に収めてあるよ。見てみるかい？」

「お願いします」

アリスはプロジェクタを用意し、クラレンスがデジカメのデータをプロジェクタに投映させる。

クレアはルリとフランシスに抑えられてようやくおとなしく所定の位置に戻る。

やがてスクリーンに映されたのは、砂漠上に点々と煉瓦作りの家が建ち、その上空を飛ぶ戦闘機が映された。

「この戦闘機はたった一機で十四機も落としたりしいよ」

この発言に会議室全体が動揺した。

「た、たった一機で!? 鋼の乙女でもないのに!?!」

「どんだけ腕の立つパイロットだよ…!!」

「じゃあ凄く強いんじゃない?」

ルリ達も相当驚いている。だがルリは問題を鋼の乙女でない人間パイロットが乗る戦闘機にあると思った。

「確かにパイロットの腕だけなら相当だが、問題はこの機体だ」

と説明しても今の時点でこれを理解できた者は鋼の乙女を含めていない。彼女達はこの戦闘機を知らない。

「この機体が何か凄いつてこと?」

エイミーが尋ね、一同がルリに視線を集める。

「ええ。確かアメリカ軍の戦闘機だったはず。名称は……『F-22 ラプター』。最強のステルス戦闘機ね。まさかNSDAPにこれほどの技術があるとは……」

会議室は今、静寂に包まれた。誰も言えないのではない。何を言えればいいのか分からないのだ。

ようやく口を開いたのはルリだ。

「じゃあ私達にどうしろと」

対してルルは簡潔に答える。

「簡単なことです。NSDAPを潰しましょう。彼らが私の思う不安要素、世界の敵ですから」

ここはイラン国内のとある駐屯キャンプ地。その場に似合わぬ旧ドイツ軍服を着た男が現地の高官と話をしていた。

「まさかあなた方が我々を支援して下さるとは考えもありませんでしたなあ！」

「当然でしょう。我々はいわば先の戦争の敗者ですから。ですが、このまま終わるわけにはいかないのだ」

「いいでしょう！ パキスタンや北朝鮮など微力な支援よりあなた方ならイラク軍をひっくり返せるかもしれませんから！ あなた方の野望に我々の利害も一致する。ぜひ協力致しましょう！」

「ええ、こちらこそ期待してますよ。我々はあくまでサポートですから」

しばらくして高官が離れるのを見届けると男はジープに引き返す。

（我が祖国の敗北は薄々感じてましたが、早めに中東に逃れたのは正解でした。クッククック、我々ナチスドイツ軍改めNSDAPが

イランから世界を圧倒致しましょう。我々は最強の技術力があるのですから！)

やがてジープはキャンプ地から動き出し、砂漠の中へ姿を消した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2740o/>

---

2次戦鋼の乙女その後の軌跡

2011年10月8日02時37分発行